

# 青島(チンタオ)をめぐるドイツと日本(4)

## 独軍俘虜概要

瀬戸 武彦

(人文学部人間文化学科)

### Tsingtau in Schantung im Zusammenhang mit Deutschland und Japan (4)

Von den deutschen und österreichisch-ungarischen  
Kriegsgefangenen

SETO Takehiko

(Seminar für deutsche Philologie der philosophischen Fakultät)

#### はじめに

本稿は第1次世界大戦時に、当時ドイツの租借地であった中国山東半島の青島(チンタオ)攻防をめぐる戦闘、いわゆる日独戦争での独軍俘虜の事績・足跡等を紹介する資料である。これまでも数多くの文献の中で独軍俘虜についての記述ないしは紹介が行われている。俘虜となる以前の青島等各地での生活、日独戦争時の行動、日本各地の収容所での活動、さらに大戦が終結してからの足跡等、俘虜となった人物の紹介は多岐にわたっている。それらを一覧の形にして纏めることが出来れば、青島独軍の実体や青島におけるドイツ人の生活の一端、さらには日本との関わり、また日本の時代状況の一面をも多少なりとも浮かび上がらせることが出来るのではないだろうか。それが本資料作成のそもそもの動機である。また従来、俘虜名のカタカナ表記において判断しがたい読み方があったことも、本稿を作成する一つの動機であった。日独戦争に関する公文書や新聞報道等の記事での人名表記には、絶望的とまで言えるところがある。俘虜名を英語風に表記したことも一因ではあるが、俘虜の中にはハンガリーや東欧スラヴ系等様々な人々がいたことも、判断し難い読み方・表記を招いたと考えられる。本資料では原則として、ドイツ語発音による表記を用いた。諸資料を参考にしても特定出来ない俘虜の数も多い。しかし、関連上やむを得ず取り上げた人名・地名の場合は疑問符を付けた。なお慣用表記に従った場合もある。例えば Juchheim (ユッフハイム) の場合は、(ユーハイム) とした。

本稿では「独軍俘虜」という言葉を用いた。日独戦争における俘虜に対しては従来、「ドイツ人俘虜」や「ドイツ俘虜」の言葉が用いられてきた。ここには悩ましい一面がある。日本軍の戦闘相手はドイツ軍及びその同盟国のオーストリア軍であったからである。そのドイツ青島守備軍には当時のドイツ領土の関係から、ポーランド、デンマーク、ベルギー及びフランス系の軍人・兵士がいた。さらに事柄をややこしくしているのは、当時のオーストリア帝国とは正しくは、オーストリア＝ハンガリー帝国と呼ばれる多民族国家であったからだ。従ってゲルマン民族であるオーストリア人以外にハンガリー人、ポーランド人、チェコ人、スロヴァキア人、クロアチア人、セルビア人等実に多様な人々がいて、領域内にはイタリア人やロシア人すら住んでいた。日本軍の俘虜となったオー

ストリア軍艦カイゼリン・エリーザベトの乗員には、そうした多様な軍人・兵士が含まれていたのである。本稿が依拠する最も重要な資料である当時の日本帝国俘虜情報局による俘虜名簿も、『獨逸及奥匈國俘虜名簿』となっている。

しかし本稿で「独軍俘虜」の語を選んだのは、第一に日本が最後通牒を発して戦闘国としたのはドイツであったことによる。オーストリア=ハンガリー帝国の艦船には退去・武装解除を通告し、当初軍艦カイゼリン・エリーザベトもその警告に従った。結局は戦闘に参加したものの、終始独軍の指揮下にあった。第二に青島を含む膠州湾租借地はドイツの保護領であり、そしてなによりも青島をめぐる戦争は、「日独戦争」の語をもって表記されることが通例であることによる。

本稿では以下の方針に基づいて俘虜概要の名簿を作成した。

- 1) 日本帝国俘虜情報局作成の『獨逸及奥匈國俘虜名簿』(大正6年6月改訂)一以下本稿では単に『俘虜名簿』と略す一に掲載された俘虜を取り上げた。この際の『俘虜名簿』は、防衛庁防衛研究所図書館所蔵と外務省外交資料館所蔵の二点の同名資料を用いた。後者では1920年初頭に、その後に追加されるべき俘虜や死亡した俘虜の死亡年月日が手書きで付け加えられ、新たな宣誓解放、移送先收容所がゴム印で追加押印されている。また俘虜番号の変更もなされていることから、後者を主たる『俘虜名簿』とした。
- 2) 收容所内ないしは、日本国内及び国外で何らかの活動・行為、または足跡が判明している場合。
- 3) 青島における戦闘での任務、守備位置が判明している場合。
- 4) 青島での職業が判明している場合。
- 5) 家族の消息が判明している場合。
- 6) 青島あるいはその周辺で死亡して青島歐人墓地等に埋葬されたが、俘虜番号を付された場合。

『俘虜名簿』(外務省外交資料館所蔵版)には4715名が記載されているが、本稿で取り上げた俘虜数は906名で、全体の19.2%ほどでしかない。俘虜全員となると膨大な紙幅を要することから、事績・足跡等の判明している俘虜に限定した。なお、資料によっては姓のみしか記されず、同姓者が複数存在していて判別が付かなかつたり、カタカナによる表記のみで特定出来なかつた場合も少なくなかつた。

名簿の作成方法は『俘虜名簿』に準拠しているが、本稿での記載方法にはいくつか違いがある。以下の要領で俘虜概要名簿を作成した。

- 1) 『俘虜名簿』では将校と下士卒に分けられているが、本稿では区別することなくドイツ語のアルファベット順に掲載し、本稿での通し番号を設けた。
- 2) 諸事項の配列順は、通し番号、姓(カタカナによるその読み方)、名前等、生没年、所属部隊・階級、任務・守備位置、前職、事績・足跡等、俘虜番号・收容所名とした。
- 3) 将校の階級名では、『俘虜名簿』あるいはドイツ側の資料で「海軍」と規定されている場合のみ海軍将校とした。その他の将校は、海軍歩兵大隊等に属して、形式上は海軍将校であってもその実体が陸軍将校である場合は陸軍の階級とした。例えば、海軍歩兵第3大隊長のケッシンガー大佐は海軍歩兵大佐であるが、実態に合わせて陸軍歩兵大佐とした。なお所属部隊名は、当時の陸軍参謀本部や俘虜情報局等の公的機関を始めとして、多くの関連文献でも実にまちまちの名称で記載されている。「海軍歩兵第3大隊」は『俘虜名簿』の〈III. Seebataillon〉に該当するものである。これにはドイツの文献にも〈Marine Infanterie〉、即ち「海軍歩兵」の語を当てているものもある。本稿では「海軍歩兵」の語を採用した。歩兵堡壘を守備する陸兵が主力で、実体に合うと考えたからである。

- 4) 階級は日独戦争終結時点でのものとし、下士卒の階級には海軍及び陸軍の呼称を省いた。階級名は、参考文献に掲げた諸官階表におおむね依拠した。
- 5) 概要の当該俘虜の事項に記載されていることではあるが、日独戦争における戦時編成及び守備位置・部隊指揮官を、概要の末尾に掲げた。武装を解除され俘虜とはなったが、欧州ではまだ戦争が続いていて、収容所内においても軍隊組織が存在していた。つまり、俘虜にとっては依然として軍隊勤務の中にあり、それに応じた俸給が日本側から支給されていたのである。
- 6) 俘虜の多くは収容所の整理・統合等で、収容所替えを経験している。その場合は矢印→で移送先を示した。

なお、当初収容された収容所を俘虜番号順別に示すと、以下のようになる。

- 1 (Agethen,H.) ~ 315 (Zilosko,H.) … 東京（但し、108の1名は青島で死亡）  
 316 (Anders,E.) ~ 852 (Zoepke,G.) … 久留米  
 853 (Adler,N.) ~ 1702 (Zschockner,W.) … 福岡  
 1703 (Ahe,E.v.d.) ~ 1809 (Zimmermann,W.) … 静岡  
 1810 (Adamczewski,B.) ~ 2133 (Zimmermann,E.) … 丸亀  
 2134 (Allenstein,O.) ~ 2456 (Zecha,J.) … 姫路  
 2457 (Ahlers,L.) ~ 2765 (Zimmermann,H.) … 名古屋  
 2766 (Abelein,G.) ~ 3180 (Zimmermann,K.) … 松山  
 3181 (Alinge,K.) ~ 3831 (Zielaskiwitz,K.) … 熊本  
 3832 (Artelt,M.) ~ 4117 (Ziolkowski,W.) … 大阪  
 4118 (Auer,A.A.) ~ 4323 (Wieser,R.) … (大阪※) 徳島  
 4324 (Altenbach,Th.) ~ 4464 (Zahn,H.) … (熊本※) 大分  
 4465 (Anstoltz,Chr.) ~ 4709 (Walter,Hugo) … 大阪（但し、4627の1名は青島収容所から逃走、4659から4664までの6名は青島およびその周辺で死亡、4665から4673までの9名は西カロリン群島のヤップ島で俘虜となったが宣誓解放され、4687の1名は大戦終結まで青島収容所に収容されたままであった）  
 その他上記に含まれないケース  
 4710 (Strepel,Walter) … 久留米  
 4711 (Morawek,Rudolf Edler v.) … 大阪  
 4712 (Keining,Ernst) … 大阪  
 4713 (Ivanoff,Valentin D.) … 大阪  
 4714 (Wegner,Ferdinand) … 青野原  
 4715 (Günther,Otto v.) … 板東  
 ※（2週間前後のごく短期間）

- 7) 年号は原則として西暦を用いた。なお、青島における日独戦争関連の出来事で年月日を示す際は、1914年の西暦を省略した。
- 8) 注で触れている人名・事項等は太字とした。さらに注の各項目末尾には、当該個所が判りやすいように矢印→で通し番号を示した。なお、注における人物紹介にあたっては、当時の状況等との関連及び理解のために、かなりの字数を用いた場合がある。
- 9) 出典、参考文献を記した場合、及び関連参考事項等は【 】で示した。俘虜の事績・足跡等の記述に当たって参考とした文献は本稿末尾に記したが、概要の中で該当文献及びその個所を、必ずしも全てに亘って明示しているものではない。一つの文献だけに依拠した訳ではなく、場

合によっては相当数の文献からの抽出であり、また煩雑さを避けることも考慮した。しかし、明らかなる引用(その場合は「」で括ってある)の場合は明示した。

10) 概要の中には、地名が多く出てくることもあり、論文末尾に関連図を5葉掲げた。

### 独軍俘虜概要

通し番号) 姓(フリガナ) 名前等 (生没年): 所属部隊・階級 [日独戦争での任務・守備位置] [前職] 事績・足跡等 (俘虜番号: 収容所)

- 1) Abelein (アーベライン), Georg: 海軍歩兵第3大隊第5中隊・2等歩兵。松山時代、山越の収容所講習会でフランス語の講師を務めた。【富田『板東俘虜収容所 日独戦争と在日ドイツ俘虜』235頁より】板東では劇場委員会に属した。(2766: 松山→板東)
- 2) Ackerhausen (アッカーハウゼン), Wilhelm: 国民軍・軍曹。[巡查]。妻と娘は大戦終結まで上海で暮らした。(4469: 大阪→似島)
- 3) Ackermann (アッカーマン), Eduard: 国民軍・上等兵。[植字工]。妻は大戦終結まで上海で暮らした。(2135: 姫路→青野原)
- 4) Adamzek (アダムツェク), Franz: オーストリア=ハンガリー帝国2等巡洋艦カイゼリン・エリーザベト (Kaiserin Elisabeth) 乗員・2等水兵。久留米時代は演劇活動で、ハウプトマン作の喜劇『同僚クランプトン』に出演した。【津村『久留米俘虜収容所における演劇活動(1)』37-43頁より】(3193: 熊本→久留米→習志野)
- 5) Adler (アードラー), August: 海軍歩兵第3大隊第7中隊・上等歩兵。[建築家]。板東時代、1918年3月8日から19日にかけて公会堂で開催された工芸品展に、ジュレ (Syre) と共同で縮尺25分の1の橋を制作・出品した。【『ディ・バラック』第1巻335頁より】また、グリル (Grill) によって製作・印刷された収容所紙幣の原型を作った。(1818: 丸亀→板東)
- 6) Agethen (アゲーテン), Heinrich (-1919): 海軍東亜分遣隊第1中隊・上等歩兵。1919年2月1日、スペイン風邪により習志野で死亡。(1: 東京→習志野)
- 7) Ahl (アール), Heinrich: 海軍歩兵第3大隊第5中隊・上等歩兵。9月23日、流亭で俘虜となり久留米収容所に送られたが、負傷のため当初は久留米衛戍病院に収容された。1915年10月2日、ルント (Lund)、ジン (Sinn)、ツェルナー (Zoellner) の4名で脱走したが3名は同日捕まり、ジンも5日に捕まった。(323: 久留米)
- 8) Ahlers (アーラース), Leonhard: 海軍歩兵第3大隊参謀本部前任参謀・退役陸軍大尉。[クルップ鉄鋼会社北京支社長]。(2457: 名古屋)
- 9) Ahrens (アーレンス), Heinrich: 海軍歩兵第3大隊第7中隊・上等歩兵。[建設業]。板東時代の1919年8月31日、収容所の北外れに落成した「ドイツ兵墓碑」の施工を担当した。大戦終結後は青島に戻り建設会社を再興した。(1815: 丸亀→板東)
- 10) Albers (アルバース), Carl: 海軍歩兵第3大隊第7中隊・上等歩兵。板東時代、ゴルトシュミット (Goldschmidt) とともに収容所健康保険組合の幹事役を務めた。1918年9月には、同上保険組合の第7中隊代表理事に選ばれた。(1817: 丸亀→板東)
- 11) Albrecht (アルブレヒト), Fritz: 海軍歩兵第3大隊第7中隊・予備伍長。板東時代、収容所通訳の高木繁大尉事務室の書記を務め、面会人がある時は高木大尉とともに立ち会った。(1814: 丸亀→板東)
- 12) Alinge (アーリング), Kurt: 海軍歩兵第3大隊第6中隊・2等歩兵。久留米時代は演劇活



- 動で、クライスト作の喜劇『壊れ甕』等8演目に出演した。(3181:熊本→久留米)
- 13) Anders (アンデルス), Ernst: 海軍歩兵第3大隊参謀本部・陸軍歩兵少佐。〔外方陣地部隊右翼陣地指揮官〕。日独戦争では独軍の主力部隊であるアンデルス支隊を率いて、日本軍の前線部隊と激しい戦闘を繰り広げた。11月19日、久留米から青島の堀内文次郎少将に宛てて、青島での配慮に対する感謝の言葉とともに、久留米収容所での厳しい監視・管理に耐えなければならないことを記した書簡を送った。文面最後の発信地としては、久留米の「海兵第3大隊本部にて」と記されている。【堀内『青島攻囲陣中記』155頁】久留米収容所の俘虜代表を務めた。1915年11月15日に起こった真崎甚三郎所長によるベーゼ(Boese)、フローリアン(Florian)両中尉殴打事件では、俘虜の虐待を禁じたハーグ条約を根拠に真崎所長の行為に激しく抗議し、米国大使館員の派遣を要求した。会談にはスクリーバ(Scriba)予備少尉とフォークト(Vogt)予備少尉が、日本の事情通として同席した。1917年2月3日、俘虜将校を代表して情報局へ信書の発送を願い出た。支給される俸給と自己貯蓄の取り崩しでは、特に中尉、少尉の生活に困窮を来たしてきたためであった。本国からの補填を申請するため、青島陥落前に上海に逃れたクルーゼン青島高等判事に信書を出したいと願い出たが却下された。(316:久留米)
- 14) Andrea (アンドレーア), Willy: 海軍砲兵中隊・2等水兵。久留米時代の1917年1月28日、横領によりカロルチャク(Karolczak)等の18人から袋叩きにあつて負傷した。2月9日横領罪で懲役4月に処せられて、福岡監獄に収監された。なお、18人の内5人が傷害罪で懲役2月、13人が重営倉1月の処罰を受けた。【『久留米俘虜収容所』(久留米市教育委員会)28頁より】(3191:熊本→久留米)
- 15) Andreas (アンドレーアス), Wilhelm: 海軍歩兵第3大隊第6中隊・2等歩兵。松山時代、大林寺の収容所講習会で日本語の講師を務めた。(2771:松山→板東)
- 16) Angerstein (アンゲルシュタイン), Max: 国民軍・後備伍長。〔数学教師〕。妻と二人の子は大戦終結まで上海で暮らした。(2775:松山→板東)
- 17) Anteschwitz (アンテシュヴィッツ), Theodor: 所属部隊不明・伍長。〔巡查〕。妻は大戦終結まで青島に留まった。(4623:大阪→似島)
- 18) Apitz (アーピッツ), Emil: 海軍第1水兵団第9中隊測量船第3号・1等測量手。10月19日、東カロリン群島のトラック島で俘虜となり、久留米収容所に送られた。【『欧受大日記』(大正4年11月上)より】(324:久留米)
- 19) Arps (アルプス), Ernst: 海軍歩兵第3大隊第6中隊・予備伍長〔教師〕。〔湛山堡壘(第1歩兵堡壘)〕。〔教師〕。松山時代、公会堂の日曜講演会で「ピン・シアン」と題して二度講演した。板東時代は、板東テニス協会の記録係を務めた。(2767:松山→板東)
- 20) Arps (アルプス), Wilhelm: 海軍歩兵第3大隊第6中隊・後備伍長〔教師〕。板東時代、板東ホッケー協会のコート係を務めた。【二人のアルプスを区別するために、前者はアルプスⅠ、後者はアルプスⅡと通称された】(2768:松山→板東)
- 21) Artelt (アルテルト), Max: 海軍膠州派遣砲兵大隊・海軍大主計(大尉相当)。〔総督府参謀本部〕。当時44歳。青島からの俘虜輸送船大通丸乗っ取りを計画したが断念した。大阪収容所時代の1915年9月4日、調達した和服を纏って人力車で大阪駅に向かい、電車で神戸に行き旅館で一泊、翌5日下関から釜山行きの連絡船に乗船する際に逮捕され、禁固4ヶ月の処罰を受けた。後に再び、エステル(Estere)、モーラヴェク(Morawek)及びシャウムブルク(Schaumburg)と共謀して脱走を企て頓挫し、彼を除く三人は1ヶ月の処罰を受けた。更に似島収容所に移ってからこの4人は脱走を企てたが、露見・逮捕され、アルテルトとエステ

- ラーは3年、モーラヴェックとシャウムブルクは2年半の刑を受けた。日独講和を受けての特赦で釈放された1920年1月15日まで、広島吉島刑務所に服役した。ドイツの資料で彼は「脱走王」の異名を付けられた。(3832:大阪→似島)
- 22) Aspeck (アスベック), Rupert: カイゼリン・エリーザベト乗員・伍長。久留米時代は収容所の音楽活動で、ベートーヴェンのヴァイオリン協奏曲、弦楽四重奏曲等でヴァイオリンを弾いた。【『久留米俘虜収容所 1914~1920』44頁等より】習志野時代の1919年3月30日と4月1日の収容所楽団第4回コンサートでは、モーツァルトの「魔笛」等を指揮し、また同年10月5日、マルフケ (Marufke) のために開催された「謝恩の夕べ」では、二部構成の第一部でドヴォルザークの「ユモレスク」等をピアノ演奏した。(3192:熊本→久留米→習志野)
- 23) Baacke (バーケ), Wilhelm: 海軍東亞分遣隊第1中隊・陸軍歩兵中尉。10月2日夜から3日未明の台東鎮北方海泊河橋附近での戦闘では、戦死した第1中隊長ヘルツベルク大尉に代わり先任小隊長として中隊の指揮を執った。一時期、チェンチャー (Tschentscher) 中尉がその指揮官を務めた。(9:東京→習志野)
- 24) Bachstein (バッハシュタイン), Albert: 海軍膠州派遣砲兵大隊第5中隊・予備1等砲兵。久留米の演劇活動では、カーン作の1幕物『ダイナミック』等11演目に出演した。(887:福岡→久留米)
- 25) Bahr (バル), Alwin: 海軍膠州派遣砲兵大隊第4中隊・1等機関砲兵補。徳島時代の1916年10月、ベーマー (Boehmer)、フィッシャー (P.Fischer)、グレックナー (Glöckner)、ヘフト (Hoeft)、ライポルト (Leipold)、マイエ (Maye) の7名で、徳島市の円藤鉄工所に鑄造等の労役で派遣された。1日8時間、賃金・期間は不明。(4123:大阪→徳島→板東)
- 26) Bahr (バル), August: 海軍膠州派遣砲兵大隊第5中隊・2等水兵。久留米時代は演劇活動で、ハウプトマン作の『御者ヘンシェル』等5演目に出演した。(896:福岡→久留米)
- 27) Baehr (ベア), Karl: 海軍歩兵第3大隊第6中隊・2等歩兵。[商社員]。ウラジオストックの商社クンスト・ウント・アルバース (Kunst & Albers) に勤めていた時に、応召して青島に来た。板東時代の1917年12月、『ディ・バラック』募集の懸賞作文に「グスタフ叔父」で一等賞を受賞して、賞金5円を獲得した。また板東俘虜収容所詩画集『鉄条網の中の四年半』(4½ Jahre hinter'm Stacheldraht) の短詩を書き、『第6中隊の過去の影絵もしくは不滅なる鉄条網病患者のひらめき』という演劇シナリオも書いた。(2793:松山→板東)
- 28) Baierle (バイエルレ), J.Maria: カイゼリン・エリーザベト乗員・海軍中尉。[第15砲台指揮官]。第15砲台はカイゼリン・エリーザベトの陸揚砲によるもので、偽装充分と思われた。しかし10月31日、陸正面から日本軍の猛烈な砲撃を受け、砲員5名が死亡し、バイエルレも重傷を負った。(4481:大阪→似島)
- 29) Baist (バリスト), Heinrich: 海軍歩兵第3大隊第6中隊・2等歩兵。板東時代、1918年3月8日から19日にかけて公会堂で開催された絵画・工芸品展の水彩画風景部門に、「冬」(二等賞)、「老木」、「森の神社」、「コスモス」(三等賞)等を出品した。(2792:松山→板東)
- 30) Barghoorn (バルクホルン), Adolf: 海軍歩兵第3大隊第6中隊・予備副曹長。板東時代、徳島演劇グループを結成し、1917年7月10日シラー作の戯曲『群盗』を上演した。1919年には、カイスナー (Keyssner)、ラーン (Laan)、ルードルフ (Rudolf) 及びジーモンズ (Simons) と共に、日本語文献からの翻訳『国民年中行事』(Das Jahr im Erleben des Volkes) の出版に関わった。(2790:松山→板東)
- 31) Barth (バルト), Johannes (1891-1981): 海軍歩兵第3大隊第7中隊・2等歩兵。[湛山堡壘]。[商社員]。1912年6月、ベルリンに本社を置く貿易商社アルンホルト・カルベルク商

会（Arnhold, Kalberg und Co.）の広東支店に応募して採用され、8月13日広東に着任した。珠川の中州の沙面島（英仏共同の租界）ではオスカー・マイ（May）と中国人街を好んで散策した。2年間の広東暮らしの後、大戦の勃発により1914年8月初め青島に向かい、7日到着した。板東時代、収容所病院の一室でA.ヴェルナー（Werner）と同室で過ごした。大戦が終結して1920年1月、歯科医師前田氏の紹介で神戸の内外貿易に勤めた。プレーメンに一時帰郷の後東京で貿易商となり、千代夫人と結婚する。1941年、商用のためシベリア鉄道でドイツへ向かう途中独ソ戦が勃発して一時捕虜となるが、釈放されてドイツに帰還した。しかし日本には戻れず4年間家族と離れ、映画会社に勤務した。1945年特殊任務を帯びて、日独間を往復していた潜水艦イ29号でシンガポールに到着、軍用機で日本に戻った。終戦後アメリカ進駐軍により財産没収、ドイツへ強制帰国させられた。5年後再び日本に戻り、以後終生鎌倉に住んだ。『鎌倉時代の歴史と文化』、『日本演劇の歴史』等及び『青島日記』（Tsingtau Tagebuch）、『極東のドイツ人商人』（Als deutscher Kaufmann in Fernost. OAG Tokyo）の著書がある。ドイツ東洋文化研究協会（OAG）の副会長を務めた。（1853：丸龜→板東）

- 32) Baerwald（ベアヴァルト），Ernst：海軍歩兵第3大隊第6中隊・2等歩兵。祖国からの送金や義捐金等による200円でピアノを購入して、神戸からドイツに送らせた。（2802：松山→板東）
- 33) Bauch（バオホ），Johann（-1919）：海軍膠州派遣砲兵大隊・2等砲兵。1919年2月11日、スペイン風邪により習志野で死亡。（914：福岡→習志野）
- 34) Bauer（バウアー），Josef（-1919）：海軍歩兵第3大隊第6中隊・補充後備兵。1919年11月7日久留米で死亡。（3212：熊本→久留米）
- 35) Bauer（バウアー），Wilhelm Otto（-1915）：海軍歩兵第3大隊第6中隊・予備2等歩兵。1915年1月23日青島で死亡、青島欧人墓地に埋葬された。（4663：なし）
- 36) Baum（バウム），Wilhelm：海軍歩兵第3大隊第2中隊・2等歩兵。9月28日、浮山（ドイツ名はプリンツ・ハインリヒ山で、標高330m）近くの巫山で日本軍に投降して俘虜となり、久留米収容所に送られた。（357：久留米）
- 37) Baumgarten（バウムガルテン），Kurt：海軍膠州派遣砲兵大隊第5中隊・2等砲兵。板東時代、収容所内の商店街区タバタオで魚料理の店を営んだ。近くの市場から魚を仕入れ、新鮮な鯉料理等を出した。（4131：大阪→徳島→板東）
- 38) Bäumlé（ボイムレ），Eugen：海軍東亜分遣隊第2中隊・2等歩兵。久留米時代は演劇活動で、ハウプトマン作の『御者ヘンシェル』他1演目に出演した。（945：福岡→久留米）
- 39) Becher（ベッヒャー），Albert：所属部隊不明・2等歩兵。[巡查]。板東時代、公会堂での絵画と工芸品展覧会に「男達の顔」を出品して好評を得た。妻と二人の子は大戦終結まで上海で暮らした。（2816：松山→板東）
- 40) Becker（ベッカー），Hermann（-1919）：海軍砲兵中隊・2等焚火兵。1919年1月26日、スペイン風邪により習志野で死亡。（34：東京→習志野）
- 41) Beckers（ベッカーズ），Leonhard：海軍歩兵第3大隊第5中隊・2等歩兵。板東時代、スポーツクラブではレスリングをした。（2786：松山→板東）
- 42) Beermann（ベールマン），Laurentius：海軍東亜分遣隊第3中隊・2等歩兵。習志野時代の1919年8月12日、習志野演劇協会によるベネディクス作の喜劇『親戚の情愛』及び同年10月5日、マルフケ（Marufke）のために開催された「謝恩の夕べ」で、二部構成の第二部の演劇でハラースュタイン作の1幕物茶番劇『射撃手と空クジ』の舞台背景を制作した。（1710：静岡→習志野）

- 43) Behagel (ベハーゲル), Fritz : 海軍膠州派遣砲兵大隊第5中隊・2等砲兵。習志野時代の1919年10月5日、マルフケのために開催された「謝恩の夕べ」では、二部構成の第二部の演劇でハラージュタイン作の1幕物茶番劇『射撃手と空クジ』の助手を務めた。(889 : 福岡→習志野)
- 44) Behrens (ベーレンス), August (-1915) : 海軍膠州派遣砲兵大隊・1等水雷砲兵。1915年1月7日青島で死亡、青島欧人墓地に埋葬された。(4662 : なし)
- 45) Behrens (ベーレンス), Eduard : 測量艦プラネット (Planet ; 660トン) 乗員・1等機関兵曹。1914年10月19日、西カロリン群島のヤップ島で俘虜となったが11月1日、ブライトハルト (Breithard)、エーバーライン (Eberlein)、ガウエルケ (Gauerke)、ハルトヴィヒ (Hartwig)、ハッセ (Hasse)、リールシュ (Liersch)、ライエケ (Reieke) 及びシヨルツ (Schortz) の8名とともに宣誓解放された。【大正4年10月調『俘虜名簿』より】(4666 : なし)
- 46) Belling (ベリング), Carl : 海軍膠州派遣砲兵大隊第5中隊・2等砲兵。久留米時代は演劇活動で、ラウフス作の茶番劇『ペンション・シェラー』に女役で出演した。(890 : 福岡→久留米)
- 47) Below (ベロウ), Hans : 海軍東亜分遣隊第1中隊・予備陸軍少尉。9月19日、柳樹台 (別荘地で療養所も在った) で日本軍と激戦を交わした際の独軍指揮官。独軍の陣容は、上記1中隊下士卒14名、海軍歩兵第3大隊第5中隊の将校フリース少尉以下19名、同大隊第4中隊の下士卒5名の計39名であった。1915年12月25日の習志野収容所でのクリスマスコンサートでは、シューベルトの「ロザムンデ間奏曲」をクーロ (Kuhlo) 中佐のピアノに合わせてチェロ演奏し、またメンデルスゾーンの「ピアノ三重奏曲第一番」からのアレグロとアンダンテをクーロ中佐のピアノとヴォストマン (Wostmann) 軍楽兵曹のヴァイオリンと一緒にチェロ演奏した。(10 : 東京→習志野)
- 48) Bergemann (ベルゲマン), Richard : 海軍膠州派遣砲兵大隊第3中隊・海軍中尉。1934年、ハンブルクの東亜協会発行の『東亜評論』(Ostasiatische Rundschau) に、大阪、似島の両収容所で一緒だったオートマー (Othmer) のことを、『日本で俘虜となったオートマー博士について』(Mit Dr. Othmer in japanischer Kriegsgefangenschaft) と題して寄稿した。(3839 : 大阪→似島)
- 49) Bergwein (ベルクヴァイン), Wilhelm : 海軍膠州派遣砲兵大隊・上等掌砲兵曹。〔イルチス (Iltis) 山上部砲台指揮官〕。(902 : 福岡→習志野)
- 50) Berliner (ベルリーナー), Dr. Siegfried (1884-1961) : 海軍歩兵第3大隊第7中隊・予備副曹長。〔東京帝国大学法科大学教師〕。1884年2月15日ハノーファーに生まれた。1902年ハノーファーの実科学校を卒業し、同年から1906年までライプチヒ大学およびゲッチンゲン大学で数学、経済学、物理学を学んだ。1905年ゲッチンゲン大学から経済学博士の学位を授与された。1906年にプロシア高等教員試験に合格した後、翌年まで兵役に就き、除隊後アメリカを旅行した。帰国後ライプチヒの公立商業学校で教務事務の仕事に就いた。1908年ライプチヒ大学講師、1909年ライプチヒ高等商業学校で保険数学、統計学および商業経営学の講義を担当した。1913年4月に東京帝国大学法科大学教師として来日したが、第1次大戦勃発により1914年8月応召して青島に赴いた。1914年10月8日、山川健次郎東京帝国大学総長から俘虜情報局に、ベルリーナー安否の問い合わせが文書で寄せられた。丸亀収容所時代の1915年1月25日、夫人より東京収容所への収容所替えの申請が俘虜情報局に出されたが不許可となった。板東時代、郡役所で郡長以下の職員及び小・中学校長に講演、徳島商工会議所では「大戦と世界経済の展望」と題して講演を行った。1917年5月23日、「株式会社資金調達」という題目で講演を開始する。

1923年2月1日から3ヶ年契約で東京帝国大学に再雇用された。1925年帰国して、38年までライプチヒのドイツ＝ロイド生命保険会社に重役として勤めた。また1927年からはライプチヒ商業大学教授を兼任した。1938年アメリカに亡命し、翌1939年にはワシントン特別区のハーワード大学教授となり、シカゴなどの保険会社の重役も兼務した。1952年に名誉教授となり、1961年にオレゴン州で没した。著書に『日本の輸入貿易の組織と経営』（Organisation und Betrieb des japanischen Importhandels, Hannover, 1920）等がある。【『欧受大日記』、『来日西洋人名事典』、松尾『来日したザクセン関係者』等より】（1841：丸亀→板東）

- 51) Berndt (ベルント), Alfons (-1919) : 海軍膠州派遣砲兵大隊第4中隊・2等砲兵。1919年1月31日、スペイン風邪により習志野で死亡。(876 : 福岡→大分→習志野)
- 52) Berndt (ベルント), Emil : 海軍歩兵第3大隊工兵中隊・陸軍工兵大尉。〔参謀本部幕僚・工兵将校〕。(956 : 福岡→習志野)
- 53) Bernhardi (ベルンハルディ), Friedrich von : 海軍東亜分遣隊・陸軍少尉。習志野時代の1919年10月5日、マルフケ (Marufke) のために開催された「謝恩の夕べ」では、二部構成の第二部の演劇で、ハラージュタイン作の1幕物茶番劇『射撃手と空クジ』の舞台監督を務めた。(932 : 福岡→習志野)
- 54) Beutner (ボイトナー), Erwin : 海軍膠州派遣砲兵大隊・海軍少尉。〔第3砲台指揮官〕。(4119 : 大阪→徳島→板東)
- 55) Bieber (ビーバー), Arthur : 海軍野戦砲兵隊・予備陸軍少尉。〔第2中間地掃射砲台指揮官〕。1916年3月7日、久留米収容所の「謝肉祭コンサート」では指揮者を務めた。1917年3月、米国シンシナチー市の「ファースト・ナショナルバンク」からジューメンズ社の東京支社代表ドレンクハーンを通じて小切手1110ドルが送金され、日本貨幣に換算されて、2176円47銭が渡された。【『久留米俘虜収容所』29頁】演劇活動としては、ハウプトマン作の喜劇『ビーバーの毛皮』等19演目の演出を担当し、また21演目に出演するなど、久留米の演劇活動では最も活躍した一人である。(3215 : 熊本→久留米)
- 56) Biedermann (ビーダーマン), Paul : 海軍歩兵第3大隊第1中隊・予備2等歩兵。久留米時代は演劇活動で、レスラー及びレラー作の喜劇『クラブチェアに座って』に出演した。(355 : 久留米→板東)
- 57) Bieger (ビーガー), Albert : 海軍歩兵第3大隊第1中隊・上等歩兵。久留米時代は演劇活動で、1幕物『インディアン達』の演出をするとともに、6演目に女役で出演した。宣誓解放された。(333 : 久留米→青野原)
- 58) Bier (ビーア), Eduard : 海軍歩兵第3大隊第3中隊・陸軍歩兵少尉。9月26日から27日にかけての一大決戦では、小隊を率いて李村高地に陣を敷いた。(326 : 久留米)
- 59) Blaschke (ブラシュケ), Friedrich : 海軍歩兵第3大隊工兵中隊・伍長。板東時代、無料水泳教室の教官を務めた。また『我らがチンタオ』(Unser Tsingtau) の詩を書いた。(2804 : 松山→板東)
- 60) Bleistein (ブライシュタイン), Georg : 海軍歩兵第3大隊第4中隊・予備上等歩兵。久留米時代は演劇活動で、トランディース作の笑劇『彼は夢遊病』他1演目に出演した。宣誓解放された。(3204 : 熊本→久留米)
- 61) Bleyhoeffler (ブライヘッファー), Bruno : 海軍歩兵第3大隊参謀本部・退役陸軍大尉。〔幕僚砲兵部長〕。〔北京中国学堂教官〕。日独戦争前、中国軍部隊で教官を勤めていた。(2466 : 名古屋)
- 62) Blomberg (ブロムベルク), Wilhelm : 海軍歩兵第3大隊第6中隊・2等歩兵。松山の展覧

- 会での最初の受賞者であり、板東時代には公会堂での絵画と工芸品の展覧会でも、水彩画部門に「雪」を出品して一等賞を受賞した。プロムベルクが描いた「10枚の収容所スケッチ」の内8枚が現存して、鳴門市ドイツ館に展示されている。(2795: 松山→板東)
- 63) Blume (ブルーメ), Heinrich: 港湾局・1等機関兵曹。[機関士]。松山時代、大林寺の収容所講習会で英語の講師を務めた。板東時代の1918年9月、「板東健康保険組合」代表理事に選ばれた。(3811: 松山→板東)
- 64) Boberg (ボーベルク), Kurt: 海軍歩兵第3大隊第3中隊・予備2等歩兵。久留米の演劇活動では、リンダウ作『もう一人の男』の演出を担当するとともに、23演目に出演した。(368: 久留米)
- 65) Bobers (ボーバース), Wilhelm W.v.: 海軍歩兵第3大隊第3中隊・予備陸軍少尉。久留米収容所の音楽活動では、ワーグナーの「ローエングリーン」等に出演し、特に1917年8月7日の「リヒャルト・ワーグナーの夕べ」では、「ニーベルングの指輪」の中の歌曲独唱で活躍した。演劇活動では、ガイベル作の喜劇『アンドレア親方』等3演目に出演した(327: 久留米)
- 66) Bocher (ベッヒャー), Karl (-1919): 海軍歩兵第3大隊第4中隊・上等歩兵。1919年2月7日、スペイン風邪により習志野で死亡。(3201: 熊本→久留米→習志野)
- 67) Bodecker (ボーデカー), Karl von: 砲艦ティーガー (Tiger) 艦長・海軍少佐。後に砲艦ヤーグアルがマティアス (Matthias) 大尉の指揮の下青島に到着すると、その艦長になった。(4484: 大阪→似島→習志野)
- 68) Boehmer (ベーマー), Alwin: 海軍膠州派遣砲兵大隊第5中隊・予備1等機関砲兵補。徳島時代の1916年10月、バル、フィッシャー、グレックナー、ヘフト、ライポルト、マイエの7名で徳島市の円藤鉄工所に鑄造等の労役に派遣された。1日8時間、賃金・期間は不明。(4130: 大阪→徳島→板東)
- 69) Böhmer (ベーマー), Wilhelm (-1919): 海軍東亜分遣隊第3中隊・後備2等歩兵。クラウス (Kraus) と喧嘩事件を起こした。1919年2月2日、スペイン風邪により習志野で死亡。(28: 東京→習志野)
- 70) Bohner (ボナー), Hermann (1884-1963): 海軍歩兵第3大隊第6中隊・2等歩兵。[宣教師]。アフリカ黄金海岸アボコビ (現ガーナ) に生まれた。父親は当地の福音教会牧師を勤めていた。シュバイエルのギムナジウム時代、〈ワンダーフォーゲル〉の指導者カール・フィッシャー (Fischer) の後についてシュヴァルツヴァルト、エールツゲビルゲ等の山歩きをした。テュービンゲン大学で神学と哲学 (1903-07)、シュトラースブルク大学でヘブライ学を学び (1911)、1914年にエルランゲン大学で哲学博士の学位取得後4月、「統合福音派海外伝道教会」(AEPM) の派遣教師として青島に赴き、長年密かに尊敬していたリヒャルト・ヴィルヘルムの下で教育活動に入った。大戦勃発とともに応召し、上記第6中隊に配属された。戦闘中、「青島最初の砲撃」や「歩哨」と題する詩を作った。やがて先輩牧師W. ゾイフェルト (Seufert) と共に俘虜として日本に送られた。板東時代、収容所印刷所から『絵画についての対話』を出した。1918年6月1日、板東収容所においてベートーヴェンの「第九交響曲」が日本国内で初演された際に、「ベートーヴェン、シラー、ゲーテ 第九交響曲に添えて」の講演を行った。また「ドイツの歴史と芸術」の連続講義を33回に亘って行うなど多種多様な数多くの講演を行った。大戦終結後青島に戻り、ヴィルヘルムの精神を継承して活動した後に再び日本に戻って、大阪外国語学校講師 (1922-1951)、教授 (1951-1963.6.24) を歴任した。『神皇正統記』、『聖徳太子』、『能作書』等数多くの著作を残した。ヴィルヘルム夫人ザロメの妹ハンナ・ブルームハルト (1883-1971) と結婚し終生日本に住んだ。第二人も来日し、ゴットロープは高知高等学

校、アルフレートは松山高等学校のドイツ語教師を勤めた。1963年6月24日永眠した。神戸再度山の墓地には教え子達が建てた墓碑がある。(2794: 松山→板東)

- 71) Bomsdorf (ボムスドルフ), Johann: 海軍歩兵第3大隊第5中隊・2等歩兵。板東時代、収容所義勇消防団の第1小隊長を務めた。(2799: 松山→板東)
- 72) Boncour (ボンクール), Peter: 海軍歩兵第3大隊第6中隊・2等歩兵。松山収容所時代、フランス大使館から健康状態についての問い合わせがあった。ロートリンゲン出身でフランス名はピエール。ヴェルサイユ講和条約後、宣誓解放された。(2784: 松山→板東→習志野)
- 73) Borcke (ボルケ), Otto von: 海軍歩兵第3大隊第3中隊・陸軍歩兵中尉。夫人は一時期東京の帝国ホテルに居住した。(325: 久留米)
- 74) Boese (ベーゼ), Robert: 海軍歩兵第3大隊重野戦榴弾砲兵隊長・予備陸軍中尉。[ホテル経営者]。9月27日午前6時、ヴァルダーゼー(Waldersee)高地北西の口子で、モッデ(Modde)予備少尉とともに日本軍への砲撃を開始する。久留米時代、1915年11月15日の大正天皇即位大典の祝いに、俘虜一人につきビール一本とりんご2個が配布された。しかしベーゼはフロリアン(Florian)中尉とともに日独両国が交戦中であることを理由に拒否すると、激怒した真崎甚三郎所長から殴打された。このことは後に大問題となった。(3218: 熊本→久留米)
- 75) Boesler (ベスラー), Ernst (-1916): 海軍歩兵第3大隊第2中隊・後備陸軍歩兵少尉。9月28日、浮山近くの巫山で日本軍に包囲され、退却を求めて協議を申し出るが武装解除され俘虜となる。グラーボウ(Grabow)中尉等の一隊を含めてこの日下士以下60名が俘虜となった。パウリー(Pauly)軍曹は11人の兵とともに逃れた。その折り俘虜を尋問したのは山田耕三大尉であった。10月9日、日本への護送可能なグラーボウ中尉等55名とともに俘虜第一陣として門司に到着し、久留米収容所に送られた。【『日獨戦史』402頁等より】1916年4月18日、肺結核兼肋膜炎により久留米で死亡、軍人墓地に埋葬された。(356: 久留米)
- 76) Boethke (ベートケ), Paul: 総督府参謀本部幕僚・海軍中佐。[要塞砲兵部長・砲銃庫兼水雷庫長]。11月9日以後の青島開城交渉におけるドイツ側の実務委員として、地雷等の危険物除去に関わった。11月20日、すでに日本に渡っていたベートケ夫人から堀内少将宛てに手紙が届いた。それ以前にもすでに数度の通信があった。【『青島攻囲陣中記』144頁等】(858: 福岡→習志野)
- 77) Bötjer (ベーチャ), Otto: 海軍膠州派遣砲兵大隊第4中隊・砲兵伍長。解放後、オランダ領バタヴィアに向かった。ザクサー(Saxer)大佐の署名入り証明書が知られている。(871: 福岡→習志野)
- 78) Boeving (ベーフィング), Richard: 海軍歩兵第3大隊第6中隊・予備伍長。板東時代、新板東テニス協会のコート係を務めた。(2791: 松山→板東)
- 79) Brandt (ブランド), Albert: 国民軍・卒。1915年9月下旬に青島収容所に収容され、1916年10月下旬青島から大阪に移送された。(4674: 青島→大阪→似島)
- 80) Brandt (ブランド), Friedrich: 海軍歩兵第3大隊参謀本部・1等水兵。板東時代、工芸品展に自動珈琲沸かし機を、またシュルツ(Schulz)と共同で楽器のチェロを制作・出品した。板東ホッケー協会のチームのメンバーだった。(2817: 松山→板東)
- 81) Braun (ブラウン), Fritz: 海軍歩兵第3大隊第7中隊・上等歩兵。板東時代の1918年5月5日、「航海生活25年」と題して講演した。(1844: 丸亀→板東)
- 82) Braeuninger (プロイニンガー), Waldemar: 経理局・1等給与掛筆記。ヴェルサイユ講和条約締結後の1919年8月26日、出身地の帰属を問う州民投票に参加の為、ヤスペルゼン(Jaspersen)、

- フライエンハンゼン (Freyenhansen)、ハンゼン (Hansen)、イエブセン (Jepsen)、カルステン (Carstens)、ニールゼン (Nielsen) の6名のシュレースヴィヒ出身者とともに一足先に帰国した。(2814: 松山→板東)
- 83) Breithard (ブライトハルト), 名前は不明: 測量艦プラーネット乗員・2等水兵。1914年10月10日、西カロリン群島のヤップ島で俘虜となったが11月1日宣誓解放された。(4667: なし)
- 84) Breternitz (ブレーターニッツ), Robert: 海軍歩兵第3大隊工兵中隊・予備陸軍工兵少尉。11月9日の青島開城交渉ではドイツ側の実務委員として、地雷等の危険物除去に関わった。(3222: 熊本→久留米)
- 85) Brillmayer (ブリルマイヤー), Joseph: 海軍膠州派遣砲兵大隊第5中隊・予備海軍少尉。〔第13砲台指揮官〕。似島で死亡(年月日不明)。(3841: 大阪→似島)
- 86) Bringmann (ブリングマン), Wilhelm: 海軍歩兵第3大隊副官・陸軍中尉。〔高等山林局長〕。11月18日、局長官舎は日本の青島守備軍旅団司令部に充てられた。(2467: 名古屋)
- 87) Buchenthaler (ブーヘンターラー), Heinz: 海軍歩兵第3大隊参謀本部・陸軍大尉。〔給養及び通信将校〕。1916年11月2日、秘密通信を行ったことで処罰を受けた。1919年11月、ドイツの利益代表を務めるスイス公使に宛てて、オランダ領バタヴィアでの就職に関して斡旋依頼方の信書を出した。(380: 久留米)
- 88) Buchmann (ブーフマン), Wilhelm: 海軍膠州派遣砲兵大隊第4中隊・予備1等砲兵。1918年3月8日から19日かけて開かれた板東公会堂での絵画と工芸品展覧会で、出品した油絵「海の光景」は最も好評を博し、写真部門の「青島」では一等賞を受賞した。(4124: 大阪→徳島→板東)
- 89) Buehrer (ビューラー), Alfred: 海軍歩兵第3大隊第1中隊・予備上等歩兵。1917年5月、横浜万国宝通銀行から情報局へ、ビューラー宛60円(郵便為替)と信書1通交付の問い合わせがあった。(336: 久留米)
- 90) Bunge (ブンゲ), Karl: 国民軍・2等歩兵。板東時代、兄マックス(Max)・ブンゲとともに展覧会で活躍した。(2813: 松山→板東)
- 91) Bunge (ブンゲ), Max: 海軍歩兵第3大隊第7中隊・曹長。〔第2歩兵堡壘〕。大胆な行動で日本軍の前線を突破して、日本軍陣地を詳細に偵察して報告した。青島陥落前夜部下達に、「我ら進まん祈りに応えて…」の歌を歌うよう励ました。【Gottberg《Die Helden von Tsingtau》108頁】ブンゲ曹長は一兵卒の時代に起こった義和団事件の折りの活躍で、青島のドイツ人社会では知らぬ人のいない人物であった。除隊後も東アジアに留まった。青島のベルリン福音教会教区監督フォスカンプの日記を基にした体験記『包囲された青島から』(《Aus dem belagerten Tsingatu》)にも、しばしばその名が登場する。1918年3月8日から19日かけて開催された板東公会堂での絵画と工芸品展覧会において、弟カール(Karl)・ブンゲとともに公会堂を美術ホール風に飾りつけた。自身は油絵「私の両親の家」という、丁寧な作品を出品して三等賞を受賞した。(1842: 丸亀→板東)
- 92) Burhop (ブーアホープ), August: 海軍膠州派遣砲兵大隊第4中隊・2等砲兵。1918年9月、「板東健康保険組合」の第4中隊代表理事に選ばれた。(4126: 大阪→徳島→板東)
- 93) Buhrmeister (ブーアマイスター), Albert (1886-): 海軍歩兵第3大隊第5中隊・軍曹。1919年8月23日付けでカルクブレンナー(Kalkbrenner)を代表者として、名古屋俘虜収容所を通じて北海道帝国大学に提出された下記「趣意書」には、次の経歴が記されている。敢えて表記等原文のままにした。「14歳ニシテロイツノ小学校ヲ卒業ス 幼少ヨリ1905年10月兵役迄農業ニ関スル全テノ實際的方法ノ研究ヲ終エタリ 入隊後ハ乗馬隊於テ養馬ノ方法ヲ實際ト学理ト



ニ就テ修得シニケ年糧秣下士タリキ 耕作、馬畜、家禽飼養ヲ特技トス、乗馬ノ練育ニ就キ特殊ノ技能ヲ有ス」【「獨逸人北海道移住ニ関スル趣意書」より。以下「北海道移住」とのみ記す】(2473:名古屋)

- 94) Busam (ブーザム), Karl: 所属部隊・階級不明。[築港倉庫監督官]。1915年1月2日に青島で俘虜となったが、ブーザムは5月22日、青島収容所を脱走して上海に逃れ、日本への移送を免れた。【なお1915年1月4日、非戦闘員と称した者で予備後備等の軍籍にあった者の一斉大検挙が行われ、92名が新たに俘虜とされた。また、軍に提供した家屋の接収も行われた】(4627:青島)
- 95) Buschow (ブショウウ), Erwin: 海軍歩兵第3大隊第3中隊・伍長。久留米の演劇活動では、レッシング作の喜劇『ミンナ・フォン・バルンヘルム』等の24演目全てに女役で出演した。(359:久留米)
- 96) Buttersack (ブッターザック), Conrad: 海軍歩兵第3大隊第6中隊長・陸軍歩兵中尉。[歩兵堡壘中間防禦右翼隊指揮官]。松山時代には、『陣営の火』に都合3回に亘って計50頁に及ぶ、海軍歩兵第3大隊の歴史と活動を紹介した文章を寄稿した。1917年6月15日、板東では「カンネーの戦いについて」の第1回講演を行う。同年9月21日、「旅順と青島について」の第1回講演を行う。(2777:松山→板東)
- 97) Büttinghaus (ビュッティングハウス), Karl (-1944): 海軍膠州派遣砲兵大隊第4中隊・2等砲兵。[食肉加工職人]。大戦終結後、千葉出身の日本女性と結婚した。1925年頃、目黒に東京で最初のソーセージ工場を作り店舗も構えたが、後に神戸に進出した。1944年暮れに死去。1945年の神戸大空襲で店舗は焼失し、戦後再建には至らなかった。(878:福岡→大分→習志野)
- 98) Büttner (ビュットナー), Hermann: 海軍歩兵第3大隊工兵中隊・後備上等工兵。板東時代、公会堂での手工芸品展に蝶の標本採集を出品した。(2807:松山→板東)
- 99) Carstens (カルステンス), Ernst: 海軍歩兵第3大隊第6中隊・2等歩兵。ヴェルサイユ講和条約締結後の1919年8月26日、出身地の帰属を問う州民投票に参加の為、ヤスペルゼン(Jaspersen)、プロイニンガー(Braeuinger)、フライエンハンゼン(Freyenhansen)、ハンゼン(Hansen)、イエプセン(Jepsen)、ニールゼン(Nielsen)の6名のシュレースヴィヒ出身者とともに一足先に帰国した。(2822:松山→板東)
- 100) Christensen (クリステンセン), Karl: 海軍砲兵中隊・1等機関兵曹補。1919年8月、上海のデンマーク公使宛に送付請求の信書を出し、検閲の上18日に情報局へ転送された。1919年6月28日に締結されたヴェルサイユ講和条約により、ドイツ領からデンマーク領に編入されたアーペンラー(ドイツ語名アーペンラーデ)出身。宣誓解放された。(3255:熊本→久留米)
- 101) Claasen (クラアゼン), Hermann: 海軍歩兵第3大隊第7中隊・後備伍長。板東時代の1918年9月、「板東健康保険組合」の第7中隊代表理事に選ばれた。また、丸亀蹴球クラブの役員も務めた。1919年3月26日、「室内楽の夕べ」が開かれてシューベルトの五重奏「鱒」が演奏された。その折りクラアゼンはピアノを担当した。編成はガルスター(Galster)海軍中尉のヴァイオリン、デュムラー(Duemmler)海軍大尉のチェロ、クラインシュミット(Kleinschmidt)予備少尉のヴィオラ、クラアゼン伍長のピアノ、ナスート(Nassuth)砲兵伍長のコントラバスであった。(1857:丸亀→板東)
- 102) Claussnitzer (クラウスニッツァー), Franz (1892-1955): 海軍歩兵第3大隊第2中隊・上等歩兵。[搾乳職人]。立派なカイゼル髭をたくわえた大男であった。板東時代、俘虜と地元の大工30人で約5ヶ月を要して完成した牧舎の運営に参画した。日本人側の責任者は船本宇太郎と松本清一の二人であった。船本は毎日収容所までクラウスニッツァーを迎えに来た。規則に

- 反することではあるが、天候の悪い時は彼を牧舎に泊めることもあった。船本と一緒に写した写真が残っている。【『第九の里』ドイツ村』145頁以下】(1855:丸亀→板東)
- 103) Coordes (コールデス), Hege: 海軍歩兵第3大隊第2中隊・2等歩兵。9月28日、浮山近くの巫山で日本軍に投降して俘虜となり、久留米収容所に送られた。(386:久留米)
- 104) Cordes (コルデス), Richad: 海軍東亜分遣隊・予備陸軍少尉。9月26日から27日にかけての激戦前、シャウムブルク(Schaumburg)大尉とともに滄口高地で、日本軍が中国人クーリーを使って重砲を据えつける様子を偵察した。習志野時代、習志野劇場によるエルンスト作の喜劇『フラックスマン先生』(上演日付不明)に教育長役で出演した。(968:福岡→習志野)
- 105) Cordua (コルドゥア), Bruno: 海軍歩兵第3大隊・予備陸軍少尉。[イルチス山下部砲台指揮官]。(964:福岡→習志野)
- 106) Coupette (クーベッテ), Karl: 総督府・海軍中尉。[要塞通信兼信号将校]。11月7日午前4時、総督の撤去命令を受けてそれまで防備していた信号所を破壊した。全戦闘員の日本送還直前に、日本兵の略奪行為に関する情報書類を携えて、総督府から日本軍司令部に派遣された。その抗議は日本軍司令部を激怒させ、結局正規の抗議書とはしなという形で決着した。大戦終結してドイツに帰国後、『1914年戦争における青島信号所並びに海岸無線電信設備』の報告書を書いた。(963:福岡→習志野)
- 107) Cravatzo (クラヴァッツォ), Peter (1893-1918): 海軍歩兵第3大隊第2中隊・2等歩兵。1918年1月2日、腸チフスにより板東で死亡。(1856:丸亀→板東)
- 108) Czogalla (チョガラ), Emil: 海軍歩兵第3大隊第2中隊・2等歩兵。9月28日、浮山近くの巫山で日本軍に投降し俘虜となり、久留米収容所に送られた。(387:久留米)
- 109) Dahle (ダーレ), Ernst: 海軍歩兵第3大隊第7中隊・2等歩兵。板東時代、板東テニス協会の会計係を務め、板東ホッケー協会ではチームのメンバーだった。(1870:丸亀→板東)
- 110) Dahm (ダーム), Hans Wilhelm: 海軍歩兵第3大隊第6中隊・予備士官候補生。板東時代、板東ホッケー協会の器具係を、板東テニス協会では競技係を務めた。(2825:松山→板東)
- 111) Dandert (ダンデルト), Arthur: 海軍歩兵第3大隊・上等歩兵。大分の遊廓「春日楼」にキュールボルン(Kühlborn)少尉及びナーゲル(Nagel)の三人で登楼し、芸者と夜を過ごした咎で、1918年2月10日禁固30日の処罰を受けた。当時30歳だった。(4344:熊本→大分→習志野)
- 112) Daniels (ダーニエルス), Kurt: 海軍歩兵第3大隊第6中隊・2等歩兵。松山時代、公会堂の日曜講演会で「犯罪補助科学」と題して講演した。(2826:松山→板東)
- 113) Demartini (デマルティーニ), Peter: カイゼリン・エリーザベト乗員・2等水兵。久留米時代は演劇活動で、『クラブチェアーに座って』に出演した。(3267:久留米→習志野)
- 114) Derlien (デルリーエン), Charles: 海軍膠州派遣砲兵大隊第4中隊・2等砲兵。習志野時代、フリッツ・ルンプ(Rumpf)のスケッチ・絵葉書等を印刷した。1919年10月5日、マルフケのために開催された「謝恩の夕べ」では、二部構成の第二部の演劇でハラーシュタイン作の1幕物茶番劇『射撃手と空クジ』のプログラム印刷を担当した。また同年11月30日の帰国前のお別れパーティーで配布したパンフレット「送別会向けビール新聞」(Bierzeitung zur Abschiedsfeier)に、マンガ風自画像を載せた。大戦終結後はドイツに帰国せず、オランダ領ジャワの官吏になった。(977:福岡→大分→習志野)
- 115) Desebrock (デーゼブロック), Hermann: 海軍歩兵第3大隊第2中隊・後備伍長。[商社員]。板東時代、1918年3月8日から19日の「展覧会」の主催者役を務めた。また9月には「板東健康保険組合」の第2中隊代表理事に選ばれた。板東ホッケー協会のチームのメンバーでもあった。大戦終結後は再び山東省済南に戻り、カルロウィッツ社(Carlowitz & Co.)の済南駐在

代表に復帰した。しかしその時すでに山東省では、ドイツに代わって日本の影響・支配が広がっていて仕事はほとんどなかった。（1859：丸亀→板東）

- 116) Deutschmann（ドイッチュマン），Adolf：築城部・陸軍工兵少尉。板東時代、スペイン風邪等で死んだ9名のための墓碑、並びに収容所近くの大麻比古神社境内の小川に架けられた「ドイツ橋」の設計をした。（2833：松山→板東）
- 117) Dieckmann（ディークマン），Dr. Paul：総督府・獣医。大戦終結後は青島居住を希望した。（4343：熊本→大分→習志野）
- 118) Dietrich（ディートリヒ），Carl：国民軍・卒。1915年9月20日、青島から大阪収容所に移送された。（4675：大阪→似島）
- 119) Dietrich（ディートリヒ），Ludwig：海軍歩兵第3大隊第3中隊・2等歩兵。久留米の演劇活動では、ザレヴスキー（Salewsky）作の笑劇『巨大児』等3演目に出演した。（403：久留米）
- 120) Dill（ディル），Josef：海軍歩兵第3大隊第1中隊・2等歩兵。1917年5月24日、情報局から各収容所への、製針業に従事していて労役希望者の照会に対して、久留米ではディル他3名を届けた。【『久留米俘虜収容所』30頁より】（288：久留米）
- 121) Disselhorst（ディッセルホルスト），Rudolf：総督府・1等機関兵曹。習志野時代の1919年10月5日、マルフケのために開催された「謝恩の夕べ」では、二部構成の第二部の演劇でハラージュタイン作の1幕物茶番劇『射撃手と空クジ』に主役のマルフケが演じる人物の妻の役で、また習志野劇場による「トーマの夕べ」では、トーマ作の1幕喜劇『ロットヒェンの誕生日』に主役のマルフケ演じる大学教授の妻の役で出演した。（998：福岡→大分→習志野）
- 122) Ditjens（ディチェンス），Hermann：海軍歩兵第3大隊第2中隊・後備上等歩兵。9月28日、浮山近くの新山で日本軍に投降して俘虜となり、久留米収容所に送られた。1915年1月22日、マリー夫人が3歳の子を連れて面会に訪れた。監視・立ち会いには山本茂中尉が当たった。（391：久留米）
- 123) Dittmann（ディットマン），Ludwig：海軍歩兵第3大隊工兵中隊・2等工兵。板東時代、「ドイツ兵墓碑」建設に際して石積み工事を担当した。（2832：松山→板東）
- 124) Dobenecker（ドーベネッカー），Theodor：海軍東亜分遣隊・陸軍中尉。福岡時代、5名の将校の逃亡事件で調べられ、ケンペ（Kempe）少尉のために上着を盗んだとして禁固3月の刑に処された。（991：福岡→習志野）
- 125) Dorn（ドルン），Anton：海軍歩兵第3大隊第2中隊・上等歩兵。腰部貫通銃創及び骨折により、当初は大阪陸軍病院に入院した。（1861：丸亀→板東）
- 126) Doerr（デル），Christian(-1919)：海軍東亜分遣隊第3中隊・2等歩兵。1919年2月7日、スペイン風邪により習志野で死亡。（50：東京→習志野）
- 127) Drachenthal（ドラッヘンタール），Georg P.W.v.：カイゼリン・エリーザベト乗員・海軍少佐。姫路及び青野原収容所の俘虜代表を務めた。1919年になって青野原の代表はドイツ人のゾイフェルト予備副曹長に替わった。（2172：姫路→青野原）
- 128) Dreyer（ドライアー），Curt：機雷保管庫・海軍水雷大尉。11月9日の青島開城交渉ではドイツ側の委員を務めた。妻と子は大战終結まで青島に留まった。（4347：熊本→大分→習志野）
- 129) Dreyfuss（ドライフス），Arthur：海軍歩兵第3大隊第6中隊・2等歩兵。松山時代、公会堂での収容所講習会でフランス語の講師を務め、板東では収容所内のタバタオに設けられたボーリング場の支配人を務めた。シュトラースブルクの出身であったことから、ヴェルサイユ講和条約締結後に宣言解放された。フランス名ドレフュス。（2829：松山→板東→習志野）

- 130) Dücke (デュッケ), Johann (-1914): カイゼリン・エリーザベト乗員・操舵水兵。11月2日ヴァルダーゼー高地で死亡、日本軍によりその地に埋葬された。(4659: なし)
- 131) Dührkopp (デュアコップ), Ferdinand: 海軍歩兵第3大隊第7中隊・2等歩兵。妻と子どもは大戦終結まで済南で暮らした。(1871: 丸亀→板東)
- 132) Duemmler (デュムラー), Richard: 海軍膠州派遣砲兵大隊第3中隊長・海軍大尉。[ビスマルク山砲台指揮官]。徳島では収容所の俘虜代表を務めた。板東時代、砲兵大隊スポーツ協会の役員を務めた。また1919年3月26日、「室内楽の夕べ」が開かれてシューベルトの五重奏「鱒」が演奏された。その折りデュムラーはチェロを担当した。他は、ガルスター海軍中尉のヴァイオリン、クラインシュミット予備少尉のヴィオラ、クラゼン伍長のピアノ、ナスト砲兵伍長のコントラバスという編成であった。ドイツに帰国後、日本軍攻城砲の効果についての詳細な記述を残した。【『青島戦史』121頁以下】(4137: 大阪→徳島→板東)
- 133) Dumproff (ドゥムプロフ), Karl: 国民軍・階級不明。[巡査]。妻は大戦終結まで上海で暮らした。(4490: 大阪→似島)
- 134) Dunkel (ドゥンケル), Walter: 海軍歩兵第3大隊第6中隊・2等歩兵。松山時代、公会堂の講習会で簿記及び証券の講義を行った。板東時代の1918年1月7日、妻(28歳)が面会に訪れた。天津から前日6日に徳島に来ていた。開戦二日前に天津に逃れ、ドイツ政府から支給された月50上海ドルで暮らし、日本にきて居住するための費用を貯めるのに3年半を要した。バルクホルン(Barghoorn)の妻ハンナからしきりに勧められたとのことである。ゲプフェルト(Goepfert)夫人とハンナが借りていた大滝山の寺に旅装を解いた。ユーハイム(Juchheim)夫人とも親しかったといわれる。【『日本人とドイツ人』136-7頁】(2827: 松山→板東)
- 135) Dupper (デュッパー), Matthias: 海軍砲兵中隊・1等焚火兵。久留米時代は演劇活動で、ミュラー作の茶番劇『放り出されて』等28演目に主として女役で出演して活躍した。(3265: 熊本→久留米)
- 136) Duerr (デュル), Karl: 海軍歩兵第3大隊第3中隊・2等歩兵。9月26日、李村で俘虜となり久留米収容所に送られたが、負傷のため当初は久留米衛戍病院に収容された。(401: 久留米)
- 137) Eberlein(エーバーライン), Fritz: 測量艦プラーネット乗員・1等機関兵曹。1914年10月7日、西カロリン群島のヤップ島で俘虜となったが11月1日宣誓解放された。(4668: なし)
- 138) Ebertz (エーベルツ), Rudolf: 海軍膠州派遣砲兵大隊第3中隊・予備砲兵伍長。徳島収容所を脱走して海岸まで行き、鳴門海峡を泳いでとある島にたどり着いた。服を干していたところ、その白い肌に気付いた漁民により通報、逮捕されて収容所に連れ戻された。(4144: 大阪→徳島→板東)
- 139) Eckhardt (エックハルト), Reinhold: 糧秣集荷部・後備副曹長。松山時代、大林寺の収容所講習会で英語の講師を務めた。板東時代は公会堂での工芸品展に食肉加工品を出品した。また松地区の大森重蔵にトマトケチャップの製造法を伝授した。(2842: 松山→板東)
- 140) Eder (エーダー), Paul: 海軍歩兵第3大隊第2中隊・2等歩兵。9月28日、浮山近くの巫山で日本軍に投降して俘虜となり、久留米収容所に送られた。(408: 久留米)
- 141) Ederer (エーデラー), Alois: 海軍歩兵第3大隊第6中隊・2等歩兵。松山時代、公会堂の講習会で電気工学を講じた。(2836: 松山→板東)
- 142) Edler (エートラー), Hans E. P.: 海軍歩兵第3大隊第6中隊・2等歩兵。1914年12月20日、ハンブルクの親から東京の海軍省に、息子の生死を問い合わせる手紙が寄せられた。(2839: 松山→板東)

- 143) Eggerss (エッガース), Herbert : 海軍歩兵第3大隊予備榴弾砲兵隊・予備伍長。久留米時代は演劇活動で、シェンタンとガーデルベルク作の喜劇『評議員殿』で女役を演じるなど8演目に出演した。(3279 : 熊本→久留米)
- 144) Ehlers (エーラーズ), Karl : 海軍歩兵第3大隊第2中隊・軍曹。板東時代は収容所で、ハイスター (Heister) と共同で風呂屋 (シャワー室) を営んだ。(1872 : 丸亀→板東)
- 145) Eissenbeiss (アイセンバイス), Lothar : 海軍歩兵第3大隊予備榴弾砲兵隊・予備伍長。久留米時代、1919年2月2日の「音楽の夕べ」に出演した。(3280 : 熊本→久留米)
- 146) Emmerling (エツマーリング), Peter : 海軍歩兵第3大隊第2中隊・伍長。板東時代、工芸品展に真鍮製のシャンデリアを出品して、俘虜仲間へ往時の生活を懐かしく偲ばせた。(1873 : 丸亀→板東)
- 147) Emoan (エーモアン), Max (1887-1915) : 海軍歩兵第3大隊第4中隊・予備副曹長。1915年7月22日久留米で死亡、軍人墓地に埋葬された。(3268 : 熊本→久留米)
- 148) Emunds (エームンツ), Hermann : 海軍歩兵第3大隊第1中隊・2等歩兵。久留米の演劇活動では、ハウプトマン作の喜劇『同僚クランプトン』等2演目に出演した。(406 : 久留米)
- 149) Engel (エンゲル), Paul : 海軍歩兵第3大隊第7中隊・2等歩兵。[上海居留地工部局音楽隊員]。ヴァイオリン奏者。隊長はハンス・ミーリエス (Milies) であった。1914年12月15日、在上海総領事から外務大臣宛に、上海租界の代表から、指揮者ミーリエスとその楽団員であるエンゲル、ガーライス (Gareis) 及びプレフェナー (Pröfener) は非戦闘員なので解放せよ、との申し入れがあるとの親書が出されたが、軍籍があることから不許可になった。丸亀時代の1915年に「エンゲル・オーケストラ」を結成した。1917年板東に移された後、松山からの俘虜を加え団員は45人になった。1番札所の霊山寺等で練習し、やがて遍路宿で地元の青年達に楽器のてほどきをした。板東では17回の演奏会、3回のシンフォニー、2回の「ベートーヴェンの夕べ」で指揮を執った。松江豊寿所長の理解もあって徳島市内で出張指導をするようになり、「エンゲル音楽教室」とも言えるものを開設した。当初場所は公会堂であったが、やがてメンバーの一人であった立木真一の自宅、立木写真館の2階に練習場を移した。エンゲルの帰国に際しては、徳島の一流料亭「越後亭」で何度も送別の宴が開かれた。『青島の戦士』や『シュテッヒャー大尉行進曲』を作曲し、またラムゼーガー (Ramseger) 【ラーン (Laan) の項を参照】作曲の『忠臣蔵』の指揮・演奏もするなど、ハンゼン軍楽曹長とともに、板東収容所での音楽活動では多大の功績を残した。(1880 : 丸亀→板東)
- 150) Engelhardt (エンゲルハルト), Paul : 海軍歩兵第3大隊第3中隊・2等歩兵。久留米の演劇活動では、ヴォッターズ作の笑劇『燕尾服のレアンダー』の演出をするともに女役で出演し、その他含めて37演目に出演する大活躍をした。(410 : 久留米)
- 151) Engler (エングラウ), Georg : 海軍歩兵第3大隊第4中隊・予備副曹長。久留米時代の1917年8月、ドレスデン市の弁護士から情報局へ、エングラウの祖母死亡による遺産処分の件で、在京スイス公使館から転送方の依頼があり、検閲の上8日に本人へ転送された。(3276 : 熊本→久留米→名古屋)
- 152) Ensslen (エンスレン), Carl : 海軍膠州派遣砲兵大隊第5中隊・後備1等機関兵曹。習志野時代の1919年5月24日、習志野合唱協会の「歌曲の夕べ」ではハイメンダール (Heimendahl) 少尉、ベヒトルスハイム (Bechtolsheim) 大尉【マウヘンハイム (Mauchenheim) 大尉の項を参照】及びヴィーダー (Wieder) 2等歩兵でシュヴァーベン民謡の「選ばれし者」を四重唱し、メンデルスゾーンの「夕べの歌」をベヒトルスハイム大尉と二重唱した。(1003 : 福岡→習志野)

- 153) Esterer (エステラー), Maximilian : 海軍膠州派遣砲兵大隊第3中隊・予備砲副曹長。[技術者]。11月7日未明、銃火を潜り抜けてビスマルク山頂砲台の自爆を成功させた。アルテルト、モーラヴェク、シャウムブルクの4人で大阪と似島の両収容所から脱走を企て、4人は1ヶ月から3年の刑を受けた。エステラーは大阪時代、脱走を企てないとの誓約書への署名を拒否して、手紙の送信・受領、所内の散歩及び所外への遠足等禁止の制約を受けていた。妻と6人の子は大戦終結まで上海で暮らした。(3886 : 大阪→似島)
- 154) Euchler (オイヒラー), Otto : 海軍歩兵第3大隊第6中隊・予備副曹長。板東時代の1917年12月、懸賞作文募集に「晩秋」で二等賞を受賞し、賞金3円を獲得した。1918年6月21日には、「農地改革 社会的困窮からの解放のための考え方」と題して講演し、板東収容所印刷所から『社会問題についての三つの講演』を出版した。1919年2月7日には、「柔道、日本の格闘技」の写真展を開いた。(2841 : 松山→板東)
- 155) Eulner (オイルナー), Ludwig : 海軍歩兵第3大隊第2中隊・2等歩兵。板東では「ドイツ兵墓碑」の建設にあたって石積み工事を担当した。また工芸品展ではオルロブ (Orlob) 及びルートヴィヒ (Ludwig) と共同で、ドイツ軍が西部戦線で捕獲した戦車の模造品を製作・出品した。(1875 : 丸亀→板東)
- 156) Evers (エーファース), Hans : 国民軍・卒。1915年9月20日、青島から大阪収容所に移送された。(4676 : 大阪→似島)
- 157) Fabel (ファーベル), Karl (1887-) : 海軍歩兵第3大隊第5中隊・1等蹄鉄工長。11月7日の降伏申し入れの際は、軍使カイザー (Kayser) 少佐の旗手として白旗を掲げて先導した。松山時代、山越の講習会では会場を大林寺に移して蹄鉄の講習を行った。「本職ハ馬蹄鉄匠及車輛匠多年同職に従事ス1907年ニ乗馬隊ニ入り1910年春鍛冶工ニ命セラレ1910年ヨリ1911年迄ハノーヴェルノ陸軍蹄鉄学舎ニ入学ス、後ベルリン陸軍蹄鉄学校ノ六ヶ月実地講習ノ蹄鉄試験ニ合格シ青島ニテ蹄鉄工長タリ 鍛冶、獣医薬、馬畜及農用諸機械修繕ヲ特技トス」【「北海道移住」より】(2848 : 松山→板東)
- 158) Fabianek (ファビアネク), Rudolf : 海軍歩兵第3大隊第5中隊・2等歩兵。板東時代、松山スポーツクラブの役員を務めた。(2847 : 松山→板東)
- 159) Falkenhagen (ファルケンハーゲン), Ernst : 海軍膠州派遣砲兵大隊・海軍中尉。[イルチス山下部砲台指揮官]。習志野時代、1919年3月5日に開催された「朗読の夕べ」で、ベヒトルスハイム (Bechtolsheim) 大尉とハイメンダール (Heimendahl) 少尉によるメンデルスゾーンの歌曲の二重唱でピアノの伴奏をした。(1016 : 福岡→習志野)
- 160) Falkenhayn (ファルケンハイン), Georg : 砲兵部隊・海軍火工大尉。フランツ (Franz) 砲兵監督と共同で原寸大の帆船、小船を制作して、公会堂の屋外の庭に展示した。(4150 : 大阪→徳島→板東)
- 161) Fammels (ファンメルス), Gerhard : 海軍歩兵第3大隊第4中隊・2等歩兵。出身地のオイペン (Eupen) がベルギー領になったために、1919年8月28日に解放された。【今日でも同地区の住民の大多数はドイツ系で、ドイツ語を母語としている】(425 : 久留米→板東)
- 162) Faul (ファウル), Ernst : 築城部・要塞構築曹長。板東時代の1917年7月15日、「要塞の歴史的発展について」の第1回講演を行う。(3066 : 松山→板東)
- 163) Felchnerowski (フェルヒネロフスキー), Clemens : 海軍歩兵第3大隊第2中隊・上等歩兵。板東時代、レスリング及びボクシングのためのスポーツクラブ協会「青年の力」の理事長を務めた。収容所内印刷所から出された活動記録に「板東における我等がスポーツ・運動」(Unser Turnen in Bando) の記事も書いた。自身はレスリングをして負傷したことがある。また劇場

委員会にも属した。(1882: 丸亀→板東)

- 164) Feuerbach (フォイエルバッハ), Karl: 海軍歩兵第3大隊第6中隊・2等歩兵。松山時代、公会堂の講習会で簿記等の講師を務めた。板東時代、松山スポーツクラブの役員をつとめた。(2853: 松山→板東)
- 165) Fiederling (フィーダーリング), Friedrich: 海軍歩兵第3大隊工兵中隊・後備伍長。松山時代、山越での収容所講習会でロシア語の講師を務めた。板東では公会堂での工芸品展に砂車小屋を制作・出品して注目を集めた。(2864: 松山→板東)
- 166) Findorf (フィンドルフ), Ernst: 海軍歩兵第3大隊第6中隊・2等歩兵。松山時代、公会堂の収容所講習会で英語及び簿記等の講師を務めた。(2851: 松山→板東)
- 167) Fink (フィンク), Walter: 海軍歩兵第3大隊機関銃隊・2等歩兵。久留米時代の1917年2月16日、神経衰弱で入院していた衛戍病院から抜け出して捕まった。(3310: 熊本→久留米)
- 168) Fischer (フィッシャー), Andreas: 海軍歩兵第3大隊第6中隊・2等歩兵。板東時代、収容所内タパオで石鹸等を売る店を出した。(2858: 松山→板東)
- 169) Fischer (フィッシャー), Bruno: 海軍歩兵第3大隊工兵中隊・予備副曹長。9月28日、浮山近くの巫山で日本軍に投降して俘虜となり、久留米収容所に送られた。久留米の演劇活動では、イプセン作の『国民の敵』等3演目に出演した。(428: 久留米)
- 170) Fischer (フィッシャー), Erich: 海軍歩兵第3大隊第4中隊・予備伍長。久留米時代の1919年9月、フィッシャーから横浜アメリカ総領事宛に、大戦終結後のアメリカ渡航に関する信書が出され、検閲の上情報局へ転送された。(3288: 熊本→久留米)
- 171) Fischer (フィッシャー), Johann: 海軍歩兵第3大隊第4中隊・後備兵。久留米時代は演劇活動で、トロイホルツ作の笑劇『ベルリンっ子』等5演目に出演した。(3300: 熊本→久留米)
- 172) Fischer (フィッシャー), Karl (1881-1941): 海軍歩兵第3大隊・予備副曹長。3月21日にベルリン郊外のシュテークリッツに生まれた。1897年始め、当時16歳のギムナジウムの生徒だったカール・フィッシャーは、ベルリン大学学生ヘルマン・ホフマンが主催する速記術のサークルに入り、同時にそのサークルが行っていたベルリン郊外の遠足に参加した。その年の6月、外交官となったホフマンの推挙でフィッシャーは遠足のグループ「シュテノグラフィア」の議長に選ばれた。1901年、そのグループは会員のヴォルフ・マイエンの提案で「ワンダーフォーゲル」(Wandervogel)と名づけられた。以後カール・フィッシャーの指導の下でワンダーフォーゲルは拡大の一途を辿った。しかし独裁的な運営からグループ内に反フィッシャー派を生んだ。1904年にグループは二つに割れ、フィッシャーは「古ワンダーフォーゲル」を結成した。1906年7月、フィッシャーは「ワンダーフォーゲル」運動から身を引き、同年10月海軍歩兵第3大隊に志願した。1年間の兵役に就いた後には、ハレ大学等で習得した中国語を活かして中国に留まる意図であった。1年後には当初の予定通り上海で新聞社に勤務したが、日独戦争勃発により応召して青島に赴いた。松山時代、公会堂で行われたシュトルツェ＝シュライム方式の速記術講習会の講師役を務めた。板東時代、『バラック』に「1919年3月29、30日のスポーツと娯楽の夕べ」の記事を寄せている(巻数、年月日は不明)。また競歩大会では、敢えて年配組ではない組に出場して、85名中の58位でゴールインした。【山田『俘虜生活とスポーツ』48頁より】大戦終結後の1920年帰国したが最早「ワンダーフォーゲル」における地位も無く、寂しい晩年を過ごした。1941年6月13日、生地シュテークリッツで没した。(2862: 松山→板東)
- 173) Fischer (フィッシャー), Michael: 海軍歩兵第3大隊第1中隊・2等歩兵。デコパージュ(切り貼り絵)の飾り器を残した。飾り器は半球体(直径21.5センチ、高さ8.5センチ)で、内側に当時の外国タバコの箱から切り取った赤や銀色のマークがびっしり張られ、底部には女

性の姿が描かれている。納めた木箱にはドイツ語と日本語で「製作者 独逸ライン州ウォーリ  
ンゲン 海軍歩兵卒ミッヘル・フィッシャー 俘虜当時久留(米)制作」と書かれている。

【「西日本新聞夕刊」(平成12年5月22日付)より】(415:久留米)

- 174) Fischer (フィッシャー), Paul: 海軍砲兵中隊・2等焚火兵。久留米時代は演劇活動で、ザ  
レヴスキー (Salewsky) の創作劇『シュタイリヒと息子』等6演目に、主として女役で出演  
した。(3317:熊本→久留米)
- 175) Fischer (フィッシャー), Paul: 海軍膠州派遣砲兵大隊第3中隊・2等砲兵。徳島時代の1916  
年10月、バル、ペーマー、グレックナー、ヘフト、ライポルト、マイエの7名で、徳島市の  
円藤鉄工所に鑄造等の労役で派遣された。1日約8時間、賃金・期間は不明。(4147:大阪→徳  
島→板東)
- 176) Fischer (フィッシャー), Richard: 海軍歩兵第3大隊機関銃隊・伍長。「14歳にてダウピッツ  
の小学校を卒業し、1909年10月の兵役迄父の農業に従事し農業の実際方面に精通す、入隊後乗  
馬隊に在りて養馬の方法を実際的及び学理的に修得せり、耕地牧草、牧場及び水道工事を特技  
とす」【「北海道移住」より】(2525:名古屋)
- 177) Fischinger (フィッシンガー), Adolf: 海軍歩兵第3大隊第7中隊・伍長。松山時代、日本  
語を少し話したので仲間達の代理でクリスマス・ツリー等の購入役を務めた。(2860:松山→  
板東)
- 178) Flögel (フレーゲル), Wilhelm K.F. (1887-1918): 海軍砲兵中隊・1等機関兵曹。1918年8  
月5日名古屋へ移送されたが、11月23日に死亡、軍人墓地に埋葬された。(3313:熊本→久留米  
→名古屋)
- 179) Florian (フローリアン), Paul: 海軍東亞分遣隊第2中隊・陸軍中尉。久留米時代、1916年11  
月15日の大正天皇即位大典の祝いに、俘虜一人につきビール一本とりんご2個が配布された。  
しかしフローリアンはベーゼ (Boese) 中尉とともに日独両国が交戦中であることを理由に拒  
否すると、激怒した真崎甚三郎所長に殴打された。このことは後に大問題に発展した。(3311:  
熊本→久留米)
- 180) Fock (フォック), Peter: 海軍歩兵第3大隊第6中隊・2等歩兵。松山時代、公会堂の収容  
所講習会で4回に亘って英語の講師を務めた。(2854:松山→板東→名古屋)
- 181) Focken (フォッケン), Charly (-1919): 海軍歩兵第3大隊第2中隊・2等歩兵。1919年1月  
29日、スペイン風邪により習志野で死亡。(4351:熊本→大分→習志野)
- 182) Foerck (フェルク), Theodor: 海軍歩兵第3大隊第2中隊・後備上等歩兵。9月28日、浮山  
近くの巫山で日本軍に投降して俘虜となり、久留米収容所に送られた。(416:久留米)
- 183) Franz (フランツ), Friedrich: 兵監及び兵站部・砲兵監督。板東時代、ファルケンハイン大  
尉と共同で原寸大の帆船、小船を制作して、公会堂の屋外の庭に展示した。(2868:松山→板  
東)
- 184) Franz (フランツ), Oskar: 海軍歩兵第3大隊第7中隊・上等歩兵。1918年12月28日付けの  
板東収容所記録によると、東京市入谷町の大橋製鋼会社に染色技師として招聘されるために習  
志野収容所に移送決定との文書が残っている。当時37歳だった。1919年9月22日、板東に再び  
移された。(1884:丸亀→板東→習志野→板東)
- 185) Franz (フランツ), Otto: 海軍膠州派遣砲兵大隊第2中隊・2等砲兵。右大腿部榴散弾弾子  
盲銃創により、大阪陸軍病院に入院した。(4631:大阪→似島)
- 186) Freese (フレーゼ), Wilhelm: 海軍歩兵第3大隊第6中隊・予備伍長。板東時代、松山スポー  
ツ協会の役員を務めた。(2849:松山→板東)



- 187) Freisewinkel (フライゼヴィンケル), Karl : 海軍歩兵第3大隊第6中隊・2等歩兵。松山時代、公会堂の講習会で製図の講師を務めた。板東時代、公会堂での絵画と工芸品展覧会に、「大麻神社の並木道」と題するペン画を、また玩具コーナーには城、木の兵隊、ノアの箱舟を出品した。(2856 : 松山→板東)
- 188) Freundlieb (フロイントリーブ), Heinrich : 海軍歩兵第3大隊第6中隊・補充予備2等歩兵。[パン職人]。大戦終結後、愛知県半田町の「敷島製パン」に技師長として招聘された。後に神戸北野に自分の店を開いた。(2520 : 名古屋)
- 189) Freyenhansen (フライエンハンゼン), Johann : 海軍膠州派遣砲兵大隊第1中隊・1等機関兵曹。ヴェルサイユ講和条約締結後の1919年8月26日、出身地の帰属を問う州民投票に参加の為、ヤスペルゼン (Jaspersen)、プロイニンガー (Braeuninger)、ハンゼン (Hansen)、イエプセン (Jepsen)、カルステンズ (Carstens)、ニールゼン (Nielsen) の6名のシュレースヴィヒ出身者とともに一足先に帰国した。(2866 : 松山→板東)
- 190) Friedrichsen (フリードリヒゼン), Jacob : 海軍砲兵中隊・後備2等掌砲兵曹。1916年1月11日、習志野で脱走未遂事件を起こした。(70 : 東京→習志野)
- 191) Frieling (フリーリング), Heinrich : 海軍歩兵第3大隊第2中隊・2等歩兵。9月28日、浮山近くの巫山で日本軍に投降して俘虜となり、久留米収容所に送られた。(417 : 久留米)
- 192) Frings (フリングス), Leopold : 海軍膠州派遣砲兵大隊第1中隊・1等焚火兵。プリュエシヨウ中尉付き下士卒で、8月3日飛行機の翼の再組み立てに従事した。(3889 : 大阪→似島)
- 193) Frisch (フリッシュ), Franz : 海軍歩兵第3大隊第6中隊・2等歩兵。板東時代の1918年6月1日、軍楽曹長ハンゼン (Hansen) によって、ベートーヴェンの「第九交響曲」が板東収容所内で本邦初演された。その折り、フリッシュ、ヴェーゲナー (Wegener) 2等歩兵、シュテッパン (Steppan) 2等歩兵、コッホ (Koch) 伍長の四人は第4楽章の「合唱」でソロを受け持った。(2852 : 松山→板東)
- 194) Fritsche (フリッチェ), Julius : 国民軍・砲兵軍曹長。妻と娘二人は大戦終結まで上海で暮らした。(4501 : 大阪→似島)
- 195) Fritzsche (フリッチェ), Arthur : 海軍膠州派遣砲兵大隊第5中隊・予備伍長。習志野時代、東京京橋の「カフェ・パウリスタ」に洋菓子の指導に出かけた。(1022 : 福岡→習志野)
- 196) Fröbel (フレーベル), Karl : 海軍歩兵第3大隊第4中隊・2等歩兵。久留米時代は収容所の音楽活動で、「山のあなた」の詩で知られる詩人カール・ブッセの「二つの喜び」等の詩に作曲したり、自ら歌曲を歌ったりもした。(3295 : 熊本→久留米)
- 197) Froehlich (フレイリヒ), Karl : 海軍歩兵第3大隊工兵中隊・2等工兵。板東時代、工芸品展に自動噴水の仕掛けによる見事な仕上がりの水槽を製作・出品し、収容所賞第2位に輝いて賞金5円を獲得した。(2865 : 松山→板東)
- 198) Froehlich (フレイリヒ), Oskar : カイゼリン・エリーザベト乗員・海軍中尉。日本軍による包囲後、歩兵堡壘中間地区の左翼側でクーネンフェルス (Kuhnenfels) 中尉とともに、カイゼリン・エリーザベト乗員の揚陸部隊指揮に当たった。(2179 : 姫路→青野原)
- 199) Fydrich (フィードリヒ), Karl : 海軍膠州派遣砲兵大隊第5中隊・砲兵軍曹長。[第8a砲台指揮官]。(4149 : 大阪→徳島→板東)
- 200) Gabel (ガーベル), Heinrich : 海軍歩兵第3大隊第7中隊・上等歩兵。[菓子職人]。板東時代、収容所内の製菓・製パン所(ゲー・バー)の製菓の中心的役割を果たした。また、製菓・製パンを市民に伝授した。教えを受けた一人藤田只之助(後、徳島市の繁華街富田橋北詰にパン屋「ドイツ軒」を、紺屋町にはパンと喫茶の「ドイツ軒出張所」を開業した)に対する、松江所

- 長が証明した修業証明書が今日残っている。(1895：丸亀→板東)
- 201) Gabriel (ガブリエル), Leo：海軍歩兵第3大隊第2中隊・2等歩兵。[商社員]。9月28日、浮山近くの巫山で日本軍に投降して俘虜となり、久留米収容所に送られた。妻と二人の子は大戦終結まで青島に留まった。(444：久留米)
- 202) Gadebusch (ガーデブッシュ), Richard：海軍歩兵第3大隊第1中隊・予備伍長。久留米の演劇活動では、シュニッツラー作『アナトール』の一部分からの脚色になる『アナトールの婚礼の朝』等3演目の演出を担当し、また21演目に出演した。(430：久留米)
- 203) Galster (ガルスター), Max：海軍砲兵中隊・海軍中尉。久留米時代、ベートーヴェンやメンデルスゾーンのパiano演奏等の音楽活動で活躍した。板東時代の1919年3月26日、「室内楽の夕べ」が開かれてシューベルトの五重奏「鱈」が演奏された。その折りガルスターはヴァイオリンを担当した。他は、デムラー海軍大尉のチェロ、クラインシュミット予備少尉のヴィオラ、クラーゼン伍長のピアノ、ナスート砲兵伍長のコントラバスという編成であった。(3343：熊本→久留米→板東)
- 204) Gareis (ガーライス), Max：海軍歩兵第3大隊第6中隊・2等歩兵。[上海居留地工部音楽隊員]。1914年12月15日、在上海総領事から外務大臣宛に、上海租界の代表から、指揮者ミーリエスとその楽団員であるエンゲル、ガーライス及びプレフェナーは非戦闘員なので解放せよとの申し入れがあったが、軍籍があることから不許可になった。(2874：松山→板東)
- 205) Gauerke (ガウエルケ), Gustav：測量艦プラーネット乗員・2等兵曹。1914年10月10日、西カロリン群島のヤップ島で俘虜となったが11月1日宣誓解放された。(4669：なし)
- 206) Gaul (ガウル), Karl：海軍歩兵第3大隊・陸軍歩兵中尉。9月26日の決戦では、機関銃隊、野戦砲兵隊を率いて滄口高原に布陣した。元来はフジール(?)第35連隊附歩兵中尉。ドイツ陸軍大学卒で、参謀本部附となり日本に留学した。奈良第53連隊附きの時に日独国交断絶となり、日本の情勢偵察のため大阪、奈良、神戸を転々として青島に赴き青島ドイツ軍に加わった。福寿丸で1914年11月15日門司港に着いた。奈良連隊見学時の連隊長岡澤大佐は少将に昇進して、熊本第11連隊長となり再会を楽しみにしている、との談話が新聞に掲載された。久留米時代、シャルロツテ(Charlotte)夫人(当時27歳)は国分村刈原に住んだ。1918年8月5日コッペ(Koppe)中尉、マイヤーマン(Meyermann)中尉等とともに板東に移送された。(3323：熊本→久留米→板東)
- 207) Gebhardt (ゲープハルト), Otto：海軍歩兵第3大隊第1中隊・2等歩兵。久留米収容所では歌曲を作曲し、演奏でも活躍した。また演劇活動では、シェーンヘル作の悲劇『信仰と故郷』に出演した。(438：久留米)
- 208) Geldmacher (ゲルトマッハー), Wilhelm：海軍歩兵第3大隊第1中隊・上等歩兵。久留米の演劇活動では、リンダウ作の『もう一人の男』に出演した。宣誓解放された。(432：久留米)
- 209) Gendarme (ジャンダーム), Julius：海軍膠州派遣砲兵大隊第5中隊・2等砲兵。フランス大使館を通して、フランス語の新聞購読希望申請が出された。1915年12月、宣誓解放された。(1064：福岡→久留米)
- 210) Georg (ゲーオルク), Jsolap：砲艦ヤーグアル(Jaguar)乗員・2等水兵。東カロリン群島のポナベ島原住民。労働者としてポナベ島から青島の造船所に送られた。日独戦争勃発とともに砲艦ヤーグアルに乗り組んだが最終的に俘虜となった。【『ドイツ兵士の見たNARASHINO』91頁より】(85：東京→習志野)
- 211) Georgi (ゲオルギ), Paul (1892-1918)：海軍歩兵第3大隊機関銃隊・上等兵。1918年11月26日名古屋で死亡、軍人墓地に埋葬された。(2542：名古屋)

- 212) Geschke (ゲシュケ), Hans : 海軍歩兵第3大隊第7中隊・2等歩兵。[商人]。板東時代、収容所内のタバコで写真屋を営んだ。(1901 : 丸亀→板東)
- 213) Glasmacher (グラスマッハー), Hans (-1919) : 海軍歩兵第3大隊第4中隊・2等砲兵。1919年2月4日、スペイン風邪により習志野で死亡。(1059 : 福岡→大分→習志野)
- 214) Gleixner (グライクスナー), Ludwig : 海軍膠州派遣砲兵大隊第4中隊・2等砲兵。1976年4月15日にウーレンフート (Uhlenhuth) に手紙を送っている。(1060 : 福岡→大分→習志野)
- 215) Glöckner (グレックナー), Adolf : 海軍膠州派遣砲兵大隊第1中隊・後備砲兵軍曹長。徳島時代の1916年10月、パール、ベーマー、フィッシャー、ヘフト、ライポルト、マイエ、の7名で徳島市の円藤鉄工所にグライバン (= 旋盤) の労役で派遣された。1日約8時間、賃金・期間は不明。(4165 : 大阪→徳島→板東)
- 216) Göbel (ゲーベル), Carl : 海軍歩兵第3大隊第5中隊・軍曹。「14歳にしてヘルスドルフの小学校を卒業し1907年10月の兵役まで父の農業を補助し農業の実際方面を修得す、農職に特別な趣味を有するを以て入隊後乗馬隊に入り養馬の方法を実際及学理的に修得す、14歳より17歳迄ヘルスドルフの工業補修学校に通学せり耕作を以て特技とす」【「北海道移住」より】(2538 : 名古屋)
- 217) Göbel (ゲーベル), Heinrich : 海軍歩兵第3大隊第3中隊・2等歩兵。久留米の演劇活動では、シュニツラー作『アナートル』の一部分を脚色した『別れの晩餐』等2演目に出演した。(446 : 久留米)
- 218) Goebel (ゲーベル), Otto : 海軍膠州派遣砲兵大隊第5中隊・1等砲兵。板東時代、板東町萩原の黒田庫之助の家できゅうりの西洋式漬物 (ピクルス) の方法を伝授した。また、隣町坂西の尾崎秋太郎にもピクルス及びトマトの栽培法を伝授した。ほぼ毎日通い、やがて婚礼にも招かれて正装の軍服で出席した。(4162 : 大阪→徳島→板東)
- 219) Gödecke (ゲーデッケ), Hermann : 海軍砲兵中隊・海軍中尉。[青島市要塞火工長]。(3905 : 大阪→似島)
- 220) Goldschmidt (ゴルトシュミット), Richard : 海軍歩兵第3大隊第5中隊・予備副曹長。松山時代の1915年12月、所持金検査で預金額5000円の松山市52銀行の通帳所持が判明した。故国の親から6000円の送金を受け、内1000円は既に使い果たしていた。マルティーン (Martin) 中尉及びゾルガー (Solger) 予備少尉とともに『陣営の火』の編集に当たった。板東では『バラック』編集部員となるが後に退任した。「板東保険組合」の幹事役をアルバース (Albers) と共に務め、1918年9月には新たに第5中隊代表理事に選ばれた。1919年6月28日には、イブセン作『社会の柱石』上演に際しては演出を担当した。(2871 : 松山→板東)
- 221) Goll (ゴル), Hermann (-1915) : 海軍歩兵第3大隊第1中隊・曹長。[巡查]。1915年9月7日大阪で死亡、軍人墓地に埋葬された。(4509 : 大阪)
- 222) Gomilie (ゴミーリエ), Paul (1889-1919) : 海軍歩兵第3大隊第2中隊・2等歩兵。1919年12月9日、スペイン風邪により板東で死亡。(1890 : 丸亀→板東)
- 223) Gomolka (ゴモルカ), Theofill (-1916) : カイゼリン・エリーザベト乗員・2等水兵。1916年6月17日青野原で死亡、姫路軍人墓地に埋葬された。(2204 : 姫路→青野原)
- 224) Goepfert (ゲプフェルト), Arthur : 海軍歩兵第3大隊工兵中隊・予備陸軍少尉。松山時代は來迎寺の将校収容所に収容された。夫人は日独戦争の1年余前から東京市麻布区新龜土町に住んでいた。1915年1月2日、夫人は5歳になる娘を連れて面会に訪れた。板東では鶏、豚を飼育し、競歩大会、水泳大会に出場した。なお、冷蔵庫を造り、モーターボートまで製作した。「バンドー会」の会員で晩年はミュンヘンに住んだ。(2880 : 松山→板東)

- 225) Grabow (グラボーウ), Hans: 海軍野戦砲兵隊・陸軍中尉。〔山東頭歩哨長〕。9月28日、浮山近くの巫山で日本軍に投降して俘虜となった。同日俘虜となったのは他にベスラー少尉、下士・兵卒等60名であった。【『日獨戦史』403頁】パオリー軍曹は11名の兵とともに逃れた。その折り俘虜の尋問に当たったのは山田耕三大尉であった。10月9日、日本への護送可能なベスラー少尉等55名とともに俘虜第一陣として門司に到着し、久留米収容所に送られた。1914年11月11日、梅林寺から日吉町に向かう途中衛兵とトラブルを起こし、重謹慎の処罰を受けた。アンネリーゼ (Anneliese) 夫人は国分村刈原にガウル中尉夫人シャルロッテと一緒に住んだ。(456: 久留米)
- 226) Gradinger (グラデーニングャー), Friedrich: 海軍歩兵第3大隊第6中隊・2等歩兵。1962年に日本語ローマ字とドイツ語なまりの日本語の混じった手紙を松山に送った。(2875: 松山→板東)
- 227) Gradl (グラドゥル), Franz: 海軍膠州派遣砲兵大隊第3中隊・1等砲兵。板東時代、収容所内のタバコで煙草屋を営んだ。(4155: 大阪→徳島→板東)
- 228) Graf (グラフ), Jacob: 海軍歩兵第3大隊・2等歩兵。久留米時代は演劇活動で、トーマ作の農民笑劇『一等車』等2演目に出演した。(3335: 熊本→久留米→板東)
- 229) Grallert (グララート), Hans (-1917): 海軍膠州派遣砲兵大隊第1中隊・1等砲兵。1917年8月12日似島で死亡。(4518: 大阪→似島)
- 230) Graenzer (グレンツァー), Walther: 海軍野戦砲兵隊・陸軍野砲兵中尉。日独戦争の初期には予備野戦砲兵隊を率いて、シュテッヒャー (Stecher) 大尉とともに外方陣地の前線に配置された。戦闘末期には測候所に移された射撃観測所で、卓越した射撃指揮を執った。【『青島戦史』52頁】(2535: 名古屋)
- 231) Graul (グラウル), Karl: 海軍歩兵第3大隊第2中隊・上等歩兵。板東時代、工芸品展に銅製の「ワーグナーの顔」を出品して、Cグループの一等賞を受賞した。(4151: 大阪→徳島→板東)
- 232) Gregorczyk (グレーゴルチック), Johann: 海軍歩兵第3大隊工兵中隊・伍長。板東時代、無料水泳教室の教官を務めた。(2881: 松山→板東)
- 233) Grevsmühl (グレーフスミュール), Hans (1888-): 国民軍・予備1等砲兵。〔発電所機械技手〕。1912年から青島発電所に勤務していた。1915年1月4日の一斉捜索で検挙・逮捕され、青島収容所に収容された。同月30日に神尾光臣司令官宛に、軍籍に就いていなかったことを理由に解放するようにとの抗議書を提出した。大阪収容所に送られてからも1915年8月30日に、解放するようにとの抗議書を提出した。(4633: 青島→大阪→似島)
- 234) Griebel (グリーベル), Gottfried: 海軍膠州派遣砲兵大隊第5中隊・海軍中尉。〔第1a 砲台指揮官〕。(3894: 大阪→似島)
- 235) Griessmeyer (グリースマイヤー), Albert: 総督府・海軍3等經理監督 (少佐相当)。大分時代の1917年7月、その論文《Die seekriegsrechtliche Bedeutung von Flottenstützpunkten》が俘虜情報局によって『海戦法規上ニ於ケル海軍根拠地ノ價值』の題名で翻訳された。習志野時代は、1919年3月5日に開催された「朗読の夕べ」でトーマ作の「ヨーゼフ・フィッシャーのある手紙」を朗読し、また同年7月3日の文化・体育祭では、第4部の演劇で上演の指揮を執った。(4369: 熊本→大分→習志野)
- 236) Grill (グリル), Max: 海軍歩兵第3大隊参謀本部・上等歩兵。〔商人〕。1919年8月頃、板東の収容所で1円の玩弄紙幣1000枚を作製し、所内で流通させた。小額紙幣不足がその理由で、5枚ないしは10枚で正規の紙幣と交換した。俘虜達から大いに重宝され、また本人は何の儲け

- も得なかったことから、善意によるものされて不問に付された。数枚が現存している。印刷、色彩、意匠の点で日本の紙幣より抜群に優れていた。表の上方に「ラーガーゲルト（収容所貨幣）」の文字、左方に鷲と鉄十字、右方に1円とあり、下方にローマ字と日本文字で板東と書かれてある。収容所内でのみ通用し、いつでも兌換と記され、マックス・グリルのサインとハンコが捺してある。裏面は透かし風に大きな二羽の鷲が描かれ、臨時紙幣とあり、下に小銭不足を補うための発行と記されている。【『日本人とドイツ人』268-269頁】（2888：松山→板東）
- 237) Grille (グリレ), Paul : 海軍歩兵第3大隊第2中隊・上等歩兵。板東時代、公会堂での工芸品展に、ハイル (Heil) と共同でドイツの古楽器リュートを制作・出品した。(1887 : 丸亀→板東)
- 238) Grosse (グロッセ), Friedrich : 海軍膠州派遣砲兵大隊第4中隊・1等砲兵。板東時代、収容所内のタバコで写真屋を営んだ。(4161 : 大阪→徳島→板東)
- 239) Grossmann (グロスマン), Heinrich : 海軍歩兵第3大隊第2中隊・2等歩兵。[商社員]。神戸北野のドイツ貿易商館イリス商会に10年勤務していた。西山リョウという内縁の妻がいて、日本語に堪能であったが、関西弁だった。リョウは1918年7月13日、板東に最初の面会に訪れた。板東時代、管理棟本部事務室の通訳を務め、またティッテル (Tittel) と共著で板東収容所印刷所から、『日本の小学校読本解説 (12巻)』を出した。1918年9月には、「板東健康保険組合」の第2中隊代表理事に選ばれた。解放まじかのある時、知友のユーハイム (Juchheim) から手紙を受け取る。その手紙には、大戦終結後にアジアに残るために似島では日本語、中国語学習が盛んであること、また習志野収容所の俘虜は、大戦終結後に北海道移住を希望するものが多いいったことが記してあった。(1889 : 丸亀→板東)
- 240) Günther (ギュンター), Otto von : 枢密参事官・総督府民政長官。父親は園丁師であった。モルトケ山の北西地区 (日本統治時代の軽藻町23番地) の自宅は2479m<sup>2</sup> (約700坪) の広大な敷地にあった。年俸は植民地加俸を含めて約1万3000マルクで、これは総督を別格として除くと、総督府官吏の中でクルーゼン高等判事に次ぐ高額であった。1914年4月末、北京で開催された独中鉄道会社の細部協議委員会に、済南駐在領事及び独亜銀行天津支店長とともに青島代表として参加した。これは済寧・開封間の開縣鉄道と芝罘・濰兗間の煙濰鉄道の新たな鉄道建設の協議で、4月24日に合意に達したが、大戦勃発で烏有に帰した。11月7日のモルトケ兵営での青島開城交渉にはドイツ側の一員として加わった。当時44歳だった。1915年11月13日、青島警察監房の独居房に収監された。青島での尋問調書が残されている。【参照：『日独戦争ノ際俘虜情報局設置並独囚関係雑纂 第11巻』】慢性気管支炎と疝通を患い、精神的にも痛手を受けていた。1918年5月20日西京丸で青島出発、24日神戸着、25日徳島着、26日板東収容所に到着した。1918年11月13日から数回、歯痛のため徳島市中通町の宮井歯科医院に看護卒同道で通院した。院長の宮井義也医師は東京歯科医専を出たばかりの25歳の若い医師であったが、ドイツ語が堪能で、俘虜達は通院を楽しみにした。同年12月6日、青島司令部からの召還命令で青島に移送された。別れに際してギュンターは、愛用の銀飾りのほどこしてあるステッキを松江所長に贈った。なおギュンター夫人ゲルトルート (Gertrud) は青島に残留した婦人達を指導して、傷病兵看護や炊事等に当たった。また青島陥落時には、衛戍病院となっていた水兵館の扉の前に立って建物の中の人々を日本兵から守った。日本軍による包囲の間、気丈な夫人はあらゆる不安を背負い込んだ人々の母親の役を務め、日本軍によって包囲された町で、ドイツ人達の要求を果敢にかつ粘り強く勝ち取ったと言われる。夫人と二人の娘は大戦終結まで青島に留まった。【右番号は俘虜番号中の最大番号である】 (4715 : 板東)
- 241) Guenther (ギュンター), Paul : 海軍歩兵第3大隊第1中隊・軍曹。久留米時代は演劇活動で、

- エルンスト作の喜劇『教育者フラックスマン』に出演した。(429: 久留米→板東)
- 242) Guse (グーゼ), Karl A.: 海軍膠州派遣砲兵大隊・掌砲兵曹長。敷設船ラウチング (Lauting) 乗員。英駆逐艦ケネット敷設の機雷に触れたラウチングの自力入港で目覚しい功績を果たし、ククス (Kux) 艦長より讃辞を受けた。(3353: 熊本→久留米)
- 243) Gutmann (グートマン), Ernst: 海軍東亜分遣隊・予備陸軍少尉。1914年10月27日、東京市京橋区築地の岸夫人 (ドイツ人) から俘虜情報局に、口頭による安否の問い合わせがあった。1917年2月、横浜正金銀行より俘虜情報局へ、グートマン宛の銀行小切手による657円86銭の交付願いがあった。(3342: 熊本→久留米)
- 244) Habersang (ハーバーザング), Friedrich: 海軍歩兵第3大隊第6中隊・2等歩兵。松山時代、公会堂での収容所講習会で中国語の講師を務めた。(2916: 松山→板東)
- 245) Hachmeister (ハッハマイスター), Paul: 国民軍・卒。1915年9月20日、青島から大阪収容所に移送された。(4677: 大阪→似島)
- 246) Hack (ハック), Dr. Friedrich: 総督府参謀本部通訳・予備陸軍中尉。法学博士。[満鉄社員]。1912年から大戦勃発まで、南満州鉄道東京支社の調査部に勤務し、総裁の後藤新平の秘書を勤めていた。当時28歳だった。福岡収容所では通訳を務めた。1916年1月8日の軍事法廷で、ケンペ (Kempe)、ザクセ (Sachse)、シュトレラー (Straeler)、モッデ (Modde) の4名の逃亡を助けたかどで懲役18ヶ月の判決を受けたが、後に13ヶ月に減刑された。日本の地理、習慣、民族性に通じていたことが、逃亡手助けに威力を発揮した。大戦終結後は一時日本に残留したが、やがてドイツに帰国して、クルップ社の駐日代表だったアードルフ・シンチンガーと「シンチンガー・ハック社」を設立し、軍需品ブローカーとして日本海軍ベルリン事務所と密接な関係を持ち、1936年の日独防共協定締結に際しては重要な役割を果たした。(1154: 福岡→習志野)
- 247) Hack (ハック), Wilhelm: 海軍歩兵第3大隊第2中隊・2等歩兵。板東時代、丸亀蹴球クラブの役員を務めた。(1908: 丸亀→板東)
- 248) Hafels (ハーフェルス), Ernst: 海軍歩兵第3大隊第2中隊・1年志願上等歩兵。9月28日、浮山近くの巫山で日本軍に投降して俘虜となり、久留米収容所に送られた。(478: 久留米→名古屋)
- 249) Hagemann (ハーゲマン), Harald (-1919): 海軍膠州派遣砲兵大隊第5中隊・2等砲兵。1915年12月24日と1916年3月7日付けの、ハンブルクの恋人に宛てた2通の手紙が知られている。1919年2月2日スペイン風邪により習志野で死亡。(1105: 福岡→習志野)
- 250) Hagemann (ハーゲマン), Wilhelm: 海軍歩兵第3大隊工兵中隊・伍長。板東時代の1917年12月、懸賞作文募集に「コルドルフへの僕の初めての旅」で三等賞を受賞し、賞金2円を獲得した。(2918: 松山→板東)
- 251) Hahn (ハーン), Mathias: 海軍歩兵第3大隊第2中隊・2等歩兵。9月28日、浮山近くの巫山で日本軍に投降し俘虜となり、久留米収容所に送られた。久留米の演劇活動では、喜劇『娘との結婚』等8演目に出演した。(480: 久留米)
- 252) Hake (ハーケ), Gustav: 海軍膠州派遣砲兵大隊・予備火工副曹長。久留米時代は演劇活動で、ハウプトマン作の喜劇『ビーバーの毛皮』等12演目に主として女役で出演した。(1109: 福岡→久留米)
- 253) Hake (ハーケ), Hermann: 海軍歩兵第3大隊第6中隊・副曹長。8月15日、前日青島に着いたばかりのラーン (Laan) が志願兵受付所で手続きをした際の係官だった。互いに東フリースラント出身の同郷人であることが判り、親交を深めた。松山時代、公会堂における収容所講

- 習会で英語の講師を務めた。板東では第2ヴァイオリンのレッスンを受けてやがてオーケストラに加わり、1919年にはベートーヴェンの「交響曲第6番〈田園〉」演奏の一員になった。  
(2900：松山→板東)
- 254) Halbritter (ハルブリッター), Robert : 国民軍・階級不明。似島で死亡（年月日不明）。  
(4527：大阪→似島)
- 255) Hallier (ハリアー), Kurt : 海軍東亜分遣隊第3中隊・予備副曹長。久留米時代は演劇活動で2演目に出演したが、シェーンヘル作の悲劇『信仰と故郷』等11演目の演出で活躍した。  
(1142：福岡→久留米)
- 256) Hamann (ハーマン), Kurt : 海軍歩兵第3大隊第3中隊・予備副曹長。11月4日、監視長として防備していた海岸堡壘北方の海泊河右岸の小堡壘を攻撃されて、23名の部下とともに俘虜となった。【『青島戦記』142頁】（1147：福岡→久留米）
- 257) Hamm (ハム), Heinrich : 海軍東亜分遣隊第3中隊・2等砲手。1912年駐独公使青木周蔵からの依頼もあって、ワイン醸造技師として山梨県北巨摩郡登美村に招聘された。習志野時代の1919年5月24日、習志野合唱協会の「歌曲の夕べ」ではマルフケ、エリヒ (Oellig) 及びシェーファー (Schafer) の4人でクローマー作の「森の泉のほとり」を四重唱した。大戦終結後、帰国した郷里で1913年に自分が製造して送ったワインに出会ったという。【『ドイツ兵士の見たNARASHINO』102頁】（93：東京→習志野）
- 258) Hannasky (ハンナスキー), Otto : 海軍膠州派遣砲兵大隊第3中隊・予備2等砲兵。板東時代は収容所内の屠獣場係を務め、また御用商人経営の牧舎に雇用された。公会堂での工芸品展には食肉加工品を出品した。(4173：大阪→徳島→板東)
- 259) Hansen (ハンゼン), Hermann R. : 海軍膠州派遣砲兵大隊第3中隊軍楽隊長・軍楽曹長。徳島時代、「徳島オーケストラ」を結成した。板東時代の1918年6月1日、板東収容所における徳島オーケストラ第2回コンサートで、日本におけるベートーヴェンの「第九交響曲」が初演されたが、その時の指揮を執った。その折りに第4楽章の「合唱」でソロを受け持ったのは、ヴェーゲナー (Wegener) 2等歩兵、シュテッパン (Steppan) 2等歩兵、フリッシュ (Frisch) 2等歩兵及びコッホ (Koch) 伍長の四人であった。弦楽オーケストラと吹奏楽団の二つの楽団を率いて、休まない活動を続け、パウル・エンゲルとともに板東収容所での音楽活動で多大の功績を果たした。月刊『バラッケ』の1919年8月号には、筆名「M」による「シュレーズヴィヒ人の出発」という記事が載せられた。その中で筆者は、特にハンゼンについて、「収容所の中でもっとも功績があり、またもっとも皆に好かれた人物の一人である」と記している。【富田『板東俘虜収容所』164-167頁より】1919年8月26日、出身地の帰属を問う州民投票のため宣誓解放され、プロイニンゲル (Braeuninger)、フライエンハンゼン (Freyenhanzen)、ヤスペルゼン (Jaspersen)、イエプセン (Jepsen)、カルステンズ (Carstens)、ニールゼン (Nielsen) の6名のシュレーズヴィヒ出身者とともに一足先に帰国した。(4185：大阪→徳島→板東)
- 260) Harasim (ハーラジム), Karl : 海軍歩兵第3大隊第4中隊・予備伍長。久留米時代の1919年12月8日、ハーラジムから在京チェコスロヴァキア代理公使宛信書（内容は中国渡航の件）が送付され、検閲の上久留米から情報局へ転送された。(3360：熊本→久留米)
- 261) Hardel (ハルデル), Hans : 海軍歩兵第3大隊第7中隊・上等歩兵。大戦終結後は青島に戻り、自動車修理工場を経営した。(1923：丸亀→板東)
- 262) Haertle (ヘルトレ), Thaddaeus (1888-1968) : 海軍歩兵第3大隊第3中隊・1年志願2等歩兵。東プロイセンのポーゼン州（今日はポーランド領）の出身。久留米時代、ドイツ人将校に

- 反抗して3ヶ月の重傷を負った。連合国寄りであったため孤立し、迫害も受けた。丸亀時代には日本人憲兵に反抗して、営倉に閉じ込められた。板東に移される際、ドイツ人と同じ列車に乗せられることに抵抗し、縛られて荷車で運ばれた。板東では連合国寄りの数名と共に、収容所から1キロ離れた成就院分置所に隔離収容された。大戦終結後ヨーロッパに帰ったが、やがて日本に戻り日本人女性と結婚して高松に住んだ。(491: 久留米→丸亀→板東)
- 263) Hartmann (ハルトマン), Hans: 青島船渠・上級造船技師。[青島船渠工廠長]。その指揮の下で、砲艦ルックス (Luchs)、イルチス、コルモラン (Cormoran) 及び駆逐艦タークー (Taku←太沽)、敷設艦ラウチングが9月28日夜から29日朝にかけて膠州湾に沈められた。更に10月29日には砲艦ティーガー、11月1日には巡洋艦カイゼリン・エリーザベトを自沈させた。妻と二人の子は大戦終結まで上海で暮らした。(1155: 福岡→習志野)
- 264) Hartwig (ハルトヴィヒ), Reinhold: 測量艦プラーネット乗員・2等焚火兵。1914年10月7日、西カロリン群島のヤップ島で俘虜となったが11月1日宣誓解放された。(4671: なし)
- 265) Hartzbusch (ハルツェンブッシュ), Josef: 海軍膠州派遣砲兵大隊第5中隊・後備2等機関兵曹。[自動車運転手]。妻と子は大战終結まで上海で暮らした。大战終結後、日本内地での契約成立のため内地解放を希望した。(1099: 福岡→習志野)
- 266) Hashagen (ハースハーゲン), Hans: 海軍膠州派遣砲兵大隊・海軍中尉。[砲台指揮官]。その砲撃によって英艦トライアンフは損傷を受け、修理のため長崎、さらには横浜に向かった。この艦は結局1915年春、ダーダネルス沖でドイツの潜水艇によって撃沈された。(4377: 熊本→大分→習志野)
- 267) Hass (ハス), Gustav: 海軍膠州派遣砲兵大隊長・海軍中佐。[海正面堡壘指揮官]。1917年1月31日、上海滞在中のクルーゼン元青島高等判事に宛てて大阪収容所から手紙を出した。その内容は、収容所での給与に関する事であった。将校は日本の将校と同額の給与、つまり少尉は40円、中尉は54円75銭を受けているが、少なくとも75円は必要というのがハスの見解であった。その内訳としては、食事代に35円、下士卒手当てに3円、肌着5円、暖房及び入浴設備代3円、靴修繕費5円、衣服10円、医療衛生費3円、新聞書籍費6円。ただ比較のために挙げると、東京の兵器廠に務める役人は1日10時間勤務で月額40円から44円である、との報告をしている。  
【Bauer, Wolfgang: Tsingtau 1914 bis 1931, 50頁】 大战終結してドイツに帰国後、『青島攻防戦における海正面堡壘の活動』の報告書を書いた。(4525: 大阪→似島)
- 268) Hasse (ハッセ), 名前は不明: 測量艦プラーネット乗員・2等水兵。1914年10月10日、西カロリン群島のヤップ島で俘虜となったが11月1日宣誓解放された。(4670: なし)
- 269) Hasselbach (ハッセルバッハ), Johann (1891-): 海軍東亜分遣隊第2中隊・2等歩兵。「14歳にしてシュインスベルヒ小学校を卒業し三ヶ年煉瓦職を学ぶ、1912年10月1日入隊迄父の農業に従事し凡ての方面を実地に修得せり、土木業(煉瓦業、建築業、パンストーブ、煉瓦製造業等)耕地羊豚畜業を特技とす」【「北海道移住」より】(1132: 福岡→名古屋)
- 270) Hauer (ハウアー), Heinrich: 海軍歩兵第3大隊第1中隊・上等歩兵。久留米収容所の音楽活動では、1919年11月19日の「メンデルスゾーンの夕べ」で、ペーベル (Poebel) と「渡り鳥の別れの歌」等を二重唱した。(462: 久留米)
- 271) Haupt (ハウプト), Wilhelm: 所属部隊・階級不明。[印刷・出版業]。似島時代、収容所内に2ヶ所あった石版印刷所の内の1ヶ所はハウプト指導の下で、特に収容所展覧会のカタログの表紙と挿入の絵を、実に粋で見事な出来栄に印刷した。(4532: 大阪→似島)
- 272) Haus (ハウス), Hermann: 海軍砲兵中隊・2等水兵。習志野時代の1919年8月12日、習志野演劇協会によるベネディクス作の喜劇『親戚の情愛』に召使役で出演した。(94: 東京→習



志野)

- 273) Hauten (ホーテン), Josef van : 海軍歩兵第3大隊第6中隊・後備伍長。[食肉加工職人]。青島時代からユーハイム (Juchheim) と知り合いだった。大戦終結後明治屋に就職した。やがて菓子職人ユーハイムを製菓主任、ヴォルシュケ (Wollschke) をソーセージ製造主任、ヴァン・ホーテンを喫茶部主任兼支配人とする「カフェー・ユーロップ」が銀座の尾張新町17番地に開店した。なお、同店は横浜に本店を持つ明治屋の経営になるものであった。(4372 : 熊本→大分→習志野)
- 274) Hayn (ハイン), Max : 海軍歩兵第3大隊第7中隊・副曹長。板東時代、公会堂での工芸品展に、パンジング (Pansing) と寄木細工の床と電気の灯る居心地のよさそうな人形部屋を製作・出品した。(1919 : 丸亀→板東)
- 275) Hebtling (ヘープティング), Georg : 海軍野戦砲兵隊・2等砲兵。松山時代、山越の収容所講習会で英語、フランス語の講師を務めた。(2925 : 松山→板東)
- 276) Heil (ハイル), Albrecht : 海軍歩兵第3大隊第7中隊・2等歩兵。板東時代、収容所内のタバコで薬局を営んだ。また公会堂での工芸品展に、グリレ (Grille) と共同でドイツの古楽器リュートを制作・出品した。(1930 : 丸亀→板東)
- 277) Heimann (ハイマン), Paul : 海軍歩兵第3大隊第6中隊・2等歩兵。松山時代、公会堂での収容所講習会でスペイン語の講師を務め、また板東では1918年4月8日の「中国のタバ」では、「東京(トンキン)と雲南」の討論会を主宰した。(2915 : 松山→板東)
- 278) Heimendahl (ハイメンダール), Hans : ヤーグアル乗員・海軍少尉。習志野時代、収容所内に自作の四阿を建てた。また1915年12月25日のクリスマスコンサートでは、シューベルトの「ロザムンデ間奏曲」をベーロウ予備少尉のチェロと一緒に、またヴェーバーの「舞踏への勧誘」及び「ジョスランの子守唄」はゼーバッハ (Seebach) 少尉とピアノ演奏した。更に1919年5月24日、習志野合唱協会の「歌曲のタバ」ではエンスレン (Ensslen)、ベヒトルスハイム (Bechtolsheim) 大尉及びヴィーダー (Wieder) でシュヴァーベン民謡の「選ばれし者」を四重唱した。(96 : 東京→習志野)
- 279) Heims (ハイムス), Karl : 海軍歩兵第3大隊第2中隊・予備伍長。9月28日、浮山近くの巫山で日本軍に投降して俘虜となり、久留米収容所に送られた。(479 : 久留米)
- 280) Heinrich (ハインリヒ), Paul Hermann : 国民軍・上等歩兵。[洋服屋]。青島のフリードリヒ街213番地で紳士服・軍服を扱う洋服店を営んでいた。【Behme and Krieger: Guide to Tsingtau and its Surroundings. 190頁の広告より】大戦終結後、再び青島に戻り紳士用品店を開いた。(2216 : 姫路→青野原)
- 281) Heinrich (ハインリヒ), Xaver : 海軍歩兵第3大隊第3中隊・2等歩兵。[仕立て職マイスター]。(1148 : 福岡→久留米)
- 282) Heintze (ハインツェ), Lothar : 海軍野戦砲兵隊・後備陸軍中尉。[タオベンクッペ (Taubenkuppe) 砲台指揮官]。(3370 : 熊本→久留米)
- 283) Heinzl (ハインツェル), Arthur Walfried : 国民軍・補充予備兵。1915年9月20日、青島から大阪収容所に移送された。(4678 : 大阪→似島)
- 284) Heister (ハイスター), Gerhard : 海軍歩兵第3大隊第2中隊・伍長。板東時代、収容所でエーラーズ (Ehlers) と共同で風呂屋 (シャワー室) を営業した。(1903 : 丸亀→板東)
- 285) Helgen (ヘルゲン), Wilhelm (-1961) : ヤーグアル乗員・2等水兵。東カロリン群島のボナベ島原住民。労働者としてボナベ島から青島の造船所に送られた。日独戦争勃発とともに砲艦ヤーグアルに乗り組んだが最終的に俘虜となった。【『ドイツ兵士の見たNARASHINO』91頁

より】(305:東京→習志野)

- 286) Hellmuth (ヘルムート), Jean(1895-1916): 海軍膠州派遣砲兵大隊第5中隊・2等砲兵。1916年9月7日、徳島の陸軍衛戍病院で肺結核のため死亡、病院裏山に埋葬された。今日、眉山中腹の徳島陸軍病院跡にシュミーデル(Schmiedel)の墓と並んでその墓がある。(4182:大阪→徳島→板東)
- 287) Helm (ヘルム), Wilhelm: 海軍歩兵第3大隊・予備伍長。久留米時代の1916年7月19日、タオディエン(Taudien)と逃亡してすぐに捕まったが、そのことが収容所と警察の対立を生むことになった。重営倉30日に処せられた。(3368:熊本→久留米→青野原)
- 288) Helmers (ヘルマス), Johann: 海軍歩兵第3大隊第3中隊・予備伍長。久留米の演劇活動では、マイアー=フェルスター作の『アルト・ハイデルベルク』等10演目に出演した。(485:久留米)
- 289) Henssler (ヘンスラー), Hermann: 国民軍・卒。1915年9月20日、青島から大阪収容所に移送された。(4679:大阪→似島)
- 290) Hentschel (ヘンツェル), Hermann: 海軍野戦砲兵隊・副曹長。習志野時代の1919年1月8日と9日、収容所で演じられたハウスライターとライマン作の3幕の茶番劇『電話の秘密』に娘役で出演した。(2923:松山→板東→習志野)
- 291) Henze (ヘンツェ), Wilhelm: 海軍歩兵第3大隊参謀本部・予備伍長。松山時代、山越の収容所講習会でフランス語の講師を務めた。板東時代は公会堂での絵画と工芸品展覧会に、「踊り子」等の水彩画を出品した。(2926:松山→板東)
- 292) Hertling (ヘルトリング), Georg Freih.von: 海軍歩兵第3大隊第1中隊・陸軍少尉(男爵)。久留米の音楽活動としては、1915年夏から1916年夏まで収容所内の「交響楽団」の指揮を執り、またフォークト(Vogt)やツァイス(Zeiss)とともに収容所の音楽教育にも携わった。交響曲や室内楽曲を作曲し、1919年2月20日には自分の作品で構成したコンサートを企画した。なお1918年12月5日、収容所最後のシンフォニー・コンサートが開かれベートーヴェンの「第九」が全曲演奏されたが、その折りの指揮者ではないかとの推測もされている。【インターネットによる『「第九」事始め(中)』より】演劇活動では、ガーデベルク作の笑劇『シメク家』の演出を担当した。(459:久留米)
- 293) Hess (ヘス), Hermann: 海軍歩兵第3大隊第7中隊・上等歩兵。板東時代の1919年、収容所内印刷所から『俘虜生活の真面目歌と戯れ歌』(Ernst und heitere Gedichte aus der Kriegsgefangenschaft)を出した。(1917:丸亀→板東)
- 294) Hildebrandt (ヒルデブランド), Alfred: 海軍歩兵第3大隊第7中隊・2等歩兵。[第2歩兵堡壘(湛山北堡壘)]。[宣教師]。ベルリン福音教会・膠州地区の若き宣教師で、第1次大戦争勃発とともに青島守備軍に志願した。(1929:丸亀→板東)
- 295) Hildebrandt (ヒルデブランド), Reinhold (1881-1920): 海軍歩兵第3大隊第6中隊・1等機関兵曹。1920年1月5日、スペイン風邪により板東で死亡。(2901:松山→板東)
- 296) Hinney (ヒンナイ), Wilhelm: 海軍歩兵第3大隊第7中隊・後備伍長。似島時代、『似島収容所新聞』の編集長を務めた。(4522:大阪→似島)
- 297) Hinz (ヒンツ), Carl: 海軍歩兵第3大隊第7中隊・上等歩兵。板東時代、工芸品展にノルウェー風を模したリュックサックを制作・出品した。(1915:丸亀→板東)
- 298) Hirsch (ヒルシュ), Albin: 海軍歩兵第3大隊第5中隊・伍長。松山時代に山越の講習会で、シュトルツェ=シュライム方式の速記の講師を務めた。「オーベルンドルフノ小学校卒業後、三ヶ年車匠業ヲ学ヒ1909年10月乗馬隊ニ入隊スル迄車匠及車輛製作者トシテ従業セリ、車匠

- （農具、農作車等ノ製造）ヲ特技トス】【「北海道移住」より】（2895：松山→板東）
- 299) Hirschberger（ヒルシュベルガー），Paul：海軍歩兵第3大隊第1中隊・軍曹。日本語が上手だった。久留米の演劇活動では、笑劇『彼は夢遊病』等14演目に出演した。1919年8月、東京市麴町の有楽町聯合商会貿易部から情報局へ、オーバーシューズ調製の技術を持つ者の問い合わせが各收容所にあり、久留米ではヒルシュベルガーを出願人として通知した。大戦終結後「大阪角一護謨」に勤めたが、1923年にゼールバッハ（Selbach）が帰国すると、その日本ゴム株式会社に後任として移った。当時は「日本ゴム」と「日華ゴム」が競い合っていた。彼は地下足袋の底を二重ゴムにする技術を考案し、これで日本ゴムは業績を伸ばした。1932年10月、日本足袋（株）を退社した。（460：久留米）
- 300) Hlavica（フラヴィツァ），Adolf：カイゼリン・エリーザベト乗員・4等橋帆下士。久留米時代には演劇活動で、ハウプトマン作の喜劇『同僚クランプトン』に出演した。（3391：熊本→久留米→青野原）
- 301) Hofe（ホーフエ），Paul v.：海軍東亜分遣隊第1中隊・2等歩兵。10月2日、四房山で俘虜となり久留米收容所に送られたが、負傷のため当初は久留米衛戍病院に收容された。（506：久留米）
- 302) Hofenfels（ホーフエンフェルス），Hermann Freih. von：海軍歩兵第3大隊参謀本部・陸軍中尉（男爵）。〔参謀本部〕。1914年12月31日、夫人が面会のため久留米を訪れ、翌年1月9日に面会が許可された。（458：久留米）
- 303) Hoffmeyer（ホフマイヤー），Karl：海軍歩兵第3大隊第5中隊・軍曹。板東時代、收容所の製菓・製パン所（ゲー・バー）では製パンの中心的役割を果たした。（2894：松山→板東）
- 304) Hoefft（ヘフト），Max：海軍膠州派遣砲兵大隊第3中隊・1等砲兵。徳島時代の1916年10月、パール、ペーマー、フィッシャー、グレックナー、ライボルト、マイエの7名で徳島市の円藤鉄工所に鋳物等の労役に派遣された。1日8時間、賃金・期間は不明。（4170：大阪→徳島→板東）
- 305) Hohn（ホーン），Eduard：海軍膠州派遣砲兵大隊第4中隊・2等砲兵。板東時代、工芸品展に計算尺およびラケット（Raket）と共同による写真の引き延ばし機を製作・出品した。またミュラー（Mueller）少尉の企画によるルンプ（Rumpf）少尉とホーンの住宅モデルが、收容所賞第3位に輝いて賞金3円を獲得した。（4178：大阪→徳島→板東）
- 306) Holstein（ホルシュタイン），Franz：海軍歩兵第3大隊第3中隊・予備上等兵。『久留米收容所俘虜文集』（Dichtungen von Kriegsgefangenen des Lagers Kurume-Japan）の印刷を担当した。（490：久留米）
- 307) Holstein（ホルシュタイン），Walter von：海軍歩兵第3大隊第6中隊・2等歩兵。板東時代、收容所内のタバタオで写真屋を営んだ。また1918年3月8日から19日の「展覧会」では主催者役を務めた。（2903：松山→板東）
- 308) Holtkamp（ホルトカンブ），Hans：海軍膠州派遣砲兵大隊第3中隊・1等砲兵。徳島時代に「徳島演劇協会」を結成し、板東では演芸会開催時にリースマン（Liessmann）と共に裏方で活躍した。（4168：大阪→徳島→板東）
- 309) Homann（ホーマン），Hugo：海軍歩兵第3大隊参謀本部・補充予備兵。松山時代、山越の日曜講演会で「マーガリン製造」と題して講演した。（2928：松山→板東）
- 310) Hoenemann（ヘーネマン），Richard：海軍野戦砲兵隊・副曹長。11月7日、降伏申し入れに向かう軍使カイザー（Kayser）少佐のラッパ手として、日本軍本部陣地のある台東鎮に赴いた。（2922：松山→板東）

- 311) Hopp (ホップ), Alfred: 海軍歩兵第3大隊工兵中隊・予備陸軍工兵少尉。[北京西門子電気廠電学工程師]。11月9日の青島開城交渉ではドイツ側の実務委員として、地雷等の危険物除去に関わった。(3377: 熊本→久留米)
- 312) Hoppe (ホッペ), Max: 海軍歩兵第3大隊第1中隊・2等歩兵。9月28日、ヴァルダーゼー高地で俘虜となり久留米収容所に送られたが、負傷のため当初は久留米衛戍病院に収容された。(469: 久留米)
- 313) Hubbe (フッベ), Fritz (1887-1918): 海軍膠州派遣砲兵大隊第5中隊・予備1等水兵。1918年7月21日、板東収容所の北東に位置する樋殿(ヒドノ)谷伐採場のすり鉢型の溜め池で沐浴中に心臓麻痺で死亡。(4179: 大阪→徳島→板東)
- 314) Huebner (ヒューブナー), Max: 海軍膠州派遣砲兵大隊第5中隊・1等砲兵。板東時代、大麻地区周辺の植物採集を行い、また板東小学校の下村一衛教諭に採集法も指導した。(4181: 大阪→徳島→板東)
- 315) Huehn (ヒューン), Gustav: 海軍歩兵第3大隊第2中隊・2等歩兵。9月28日、浮山近くの巫山で日本軍に投降して俘虜となり、久留米収容所に送られた。(481: 久留米)
- 316) Hülsenitz (ヒュルゼニッツ), Rudolf: 海軍歩兵第3大隊第7中隊・2等歩兵。板東時代、ムッテルゼー(Muttelsee)と共同で『1920年用故郷カレンダー』(Heimatkalendar 1920)を石版印刷した。(1925: 丸亀→板東)
- 317) Humpich (フムピヒ), Fritz: 海軍膠州派遣砲兵大隊第3中隊・砲兵軍曹長。板東時代、収容所炊事部2の下士官を務めた。(4166: 大阪→徳島→板東)
- 318) Hundertmark (フンデルトマルク), Carl: 国民軍・卒。[プリンツ・ハインリヒ・ホテル支配人]。1915年9月20日、青島から大阪収容所に送られた。妻と4人の子は大戦終結まで青島に留まった。(4680: 大阪→似島)
- 319) Hunzelmann (フンツェルマン), Albert (1887-): 海軍東亜分遣隊第3中隊・軍曹。「14歳ニシテノルトハイムノ小学校ヲ卒業シ後三ケ年乳精教習所ニ於テ乳精乾酪製法ヲ学ヒ1907年10月ノ兵役迄乳精技手トシテ従事シ後独立乳精場ヲ経営ス、精乳製法チーズ製法、牛畜、豚畜ヲ特技トス」【『北海道移住』より】(1143: 福岡→名古屋)
- 320) Huse (フーゼ), Hermann: 海軍歩兵第3大隊第3中隊・軍曹。9月28日、浮山近くの巫山で日本軍に投降して俘虜となり、久留米収容所に送られた。(483: 久留米)
- 321) Ibler (イブラー), Franz: 海軍東亜分遣隊第1中隊・2等歩兵。習志野時代、習志野劇場による「トーマの夕べ」で、トーマ作の1幕物田舎茶番劇『一等車』に運転手役で出演した。(106: 東京→習志野)
- 322) Imberg (イムベルク), Richard: 海軍東亜分遣隊・2等歩兵。久留米時代は演劇活動で、イブセン作の『国民の敵』に出演した。(1160: 福岡→久留米)
- 323) Ivanoff (イヴァノフ), Valentin D. (1891-): 国民軍・卒。1916年5月4日、Wladislaw Kofflerという名のオーストリア人と称して青島に流れてきた。ロシア語以外ほとんど理解しなかった。【『日独戦争ノ際俘虜情報局設置並独國俘虜関係雑纂』より】『俘虜名簿』で唯一「釈放」と記載されている人物。(4713: 大阪→似島)
- 324) Jahn (ヤーン), Josef: カイゼリン・エリーザベト乗員・4等按針下士。姫路時代の1915年2月23日、景福寺の収容所からリップスキー(Lippsky)、アレッシ(?)の三名で脱走を企てた。当時22歳だった。(2247: 姫路→青野原)
- 325) Jahn (ヤーン), Karl: 海軍砲兵中隊・1等水兵。[食肉加工職人]。習志野時代、1918年2月18日から他の4名のソーセージ職人と、千葉市に新設された農商務省畜産試験場の飯田吉英

技師の求めに応じて、ソーセージ造りの秘伝を教えた。この技術は農商務省の講習会を通じて全国の食肉加工業者に伝わり、習志野は日本におけるソーセージ製造の発祥地となった。当初彼は伝授を躊躇ったが、西郷寅太郎所長の熱心な要請に応じて公開した。大戦終結後は、日本内地での契約が成立していたため日本で解放された。（313：東京→習志野）

- 326) Jahn (ヤーン), Walter : 海軍膠州派遣砲兵大隊第1中隊・予備砲兵伍長。板東時代、砲兵大隊スポーツ協会の役員を務めた。（4188：大阪→徳島→板東）
- 327) Jaehnert (イエーネルト), Fritz : 海軍歩兵第3大隊第1中隊・予備副曹長。久留米時代は演劇活動で、マイアー＝フェルスター作の『アルト・ハイデルベルク』等6演目に出演した。（3394：熊本→久留米）
- 328) Jakob (ヤーコプ), Johann (1892-1918) : 海軍歩兵第3大隊第5中隊・2等歩兵。1918年11月14日名古屋で死亡、軍人墓地に埋葬された。（2574：名古屋）
- 329) Jakoby (ヤコービ), Johann : 国民軍・上等歩兵。[徴税台帳記録係]。板東時代、板東俘虜収容所の詳細な地図（625分の1）を作成・印刷した（1919年4月1日付け）。今日1葉（Blatt 1）のみが残されている。その地図によれば、タバタオ区域は正門に入って左手の塀沿いにあった。妻と3人の子は大戦終結まで青島に留まった。（2946：松山→板東）
- 330) Jansen (ヤンゼン), Gustav Adolf (1888-1915) : 海軍野戦砲兵隊・予備副曹長。1915年2月13日名古屋で死亡、軍人墓地に埋葬された。（2576：名古屋）
- 331) Janssen (ヤンセン), Bernhard : 海軍東亜分遣隊第1中隊・伍長。10月2日、四房山で俘虜となり、久留米収容所に送られた。当時24歳。12日、久留米に到着した時の新聞記者との談話によれば、陸軍に入る前に海軍で勤務し、長崎を訪れたことがあり、日本の風俗等にも多少通じている。俘虜虐待などないことを確信していると語った。【『大正ニュース事典』、第1巻、437頁】（517：久留米）
- 332) Janssen (ヤンセン), Peter : 海軍歩兵第3大隊第7中隊・予備伍長。板東時代、収容所合唱団の指揮者を務めた。（1935：丸亀→板東）
- 333) Jarmuske (ヤルムスケ), Volmar B. : 海軍歩兵第3大隊機関銃隊・2等歩兵。久留米時代は演劇活動で、笑劇『チャーリーの叔母』に女役で出演した。（3402：熊本→久留米）
- 334) Jaspersen (ヤスペルゼン), Julius : 海軍歩兵第3大隊第6中隊・後備陸軍少尉。[湛山堡壘]。ヴェルサイユ講和条約締結後の1919年8月26日、出身地の帰属を問う州民投票に参加の為、プロイニンゲル (Braeuningner)、フライエンハンゼン (Freyenhansen)、ハンゼン (Hansen)、イエプセン (Jepsen)、カルステン (Carstens)、ニールゼン (Nielsen) の6名のシュレースヴィヒ出身者とともに一足先に帰国した。ドイツ北部シュレースヴィヒ・ホルシュタインのハーデルスレーベン（後にデンマーク領ハーデルスレーフ）出身。『中国におけるあるドイツ人商人の仕事と冒険』(Do Mau. Arbeit und Abenteuer eines deutschen Chinakaufmanns, Leipzig, Verlag E. A. Seemann, 1936) の著書がある。（2937：松山→板東）
- 335) Jauch (ヤオッフ), Otto : 海軍東亜分遣隊第1中隊・2等歩兵。[電気技術者]。妻は大戦終結まで青島に留まった。（109：東京→習志野）
- 336) Jellocic (イエロヴチッチ), Anton : カイゼリン・エリーザベト乗員・1等水兵。青野原で死亡（年月日不明）。（2254：姫路→青野原）
- 337) Jensen (イエンゼン), Hans A. : 海軍歩兵第3大隊予備榴弾砲兵隊・後備副曹長。板東時代、収容所合唱団でテノールを担当した。（2945：松山→板東）
- 338) Jepsen (イエプセン), Julius : 海軍膠州派遣砲兵大隊第2中隊・2等砲兵。ヴェルサイユ講和条約締結後の1919年8月26日、出身地の帰属を問う州民投票に参加の為、ヤスペルゼン

- (Jaspersen)、プロイニンガー (Braeuninger)、カルステンズ (Carstens)、フライエンハンゼン (Freyenhansen)、ハンゼン (Hansen)、ニールゼン (Nielsen) の6名のシュレースヴィヒ出身者とともに一足先に帰国した。(3939: 大阪→似島→板東)
- 339) Jock (ヨック), Adolf: 海軍膠州派遣砲兵大隊第1中隊・2等砲兵。9月28日、浮山近くの巫山で日本軍に投降して俘虜となり、久留米収容所に送られた。(518: 久留米)
- 340) Johannes (ヨハネス), Hugo (-1919): 海軍膠州派遣砲兵大隊第1中隊・1等砲兵。1919年1月31日、スペイン風邪により習志野で死亡。(1164: 福岡→習志野)
- 341) Johannsen (ヨハンセン), Martin: 国民軍・卒。1915年9月20日、青島から大阪収容所に移送された。(4681: 大阪→似島)
- 342) Johannsen (ヨハンセン), Peter: 海軍砲兵中隊・2等焚火兵。久留米時代の1919年8月、在京スイス公使宛に解放に関する信書を出した。1919年6月28日に締結されたヴェルサイユ条約により、ドイツ領からデンマーク領に編入されたアーペンラー (独名アーペンラーデ) 出身。(3408: 熊本→久留米)
- 343) John (ヨーン), Hermann: 国民軍・卒。1915年9月20日、青島から大阪収容所に移送された。(4682: 大阪→似島)
- 344) Johnson (ヨーンゾン), Rolf: 海軍東亜分遣隊第2中隊・予備上等歩兵。バルト (Barth) の中国時代からの知り合いで、アスレチックの体操家だった。父親はデンマーク人であったがドイツの軍隊で働いていた。あるイギリス人娘と結婚することになって初めて自分がドイツ国籍を持たないことを知る。いずれの国籍を選ぶか悩み、最終的にはドイツ国籍を選んだ。結婚して二、三ヶ月後に大戦勃発し、青島に赴き、ドイツ軍部隊で働く。第1次大戦終了後、再び中国に出かけ、まもなくその地で没した。収容所時代から酒を飲みすぎたのが原因と言われた。  
【Barth: 《Als deutscher Kaufmann in Fernost》40頁】 (1174: 福岡→名古屋→板東)
- 345) Jserlohe (イーゼルローエ), Paul: 海軍歩兵第3大隊第2中隊・2等歩兵。9月28日、浮山近くの巫山で日本軍に投降して俘虜となり、久留米収容所に送られた。(513: 久留米)
- 346) Juchheim (ユーハイム), Carl (1889-1945): 国民軍・卒。12月25日にライン河畔の町カウプに13人兄弟の10番目として生まれた。父はビール醸造職人のマイスターだった。シュトラールズントの菓子店で修業し、1908年職業学校を卒業して菓子職人になると、その年青島で菓子店と喫茶店を営むドイツ人に招かれて赴任した。バウムクーヘンを得意とし、ここで菓子職マイスターの資格を得て青島のピスマルク街で菓子店を営んだ。1914年7月28日にニッケル (Nickel) 副曹長を証人の一人として結婚式を挙げた。妻の名はエリーゼ (Elise) と言った。青島陥落時はニッケル夫人が二人の幼子を連れてユーハイム家に身を寄せていた。そこへ日本軍兵士三人が家にどかどかと入り込んできた。しかし危害を加えることはなく、ニッケル夫人の二歳の子供に、角のある色とりどりの可愛らしい小さなお菓子を差し出した。エリーゼは機雷を連想して、毒かと思って立ちはだかると、兵士は自ら食べてみせた。兵士が去ったあとで口にするととても甘くておいしいお菓子で、それは「金平糖」であったという。1915年9月、非戦闘員であったユーハイムに召喚状が届き、俘虜として日本に送られることになり、9月20日大阪収容所に収容された。やがて11月4日に息子カール・フランツが青島の病院で生まれたことをユーハイムは収容所で知った。1917年2月18日、大阪収容所から似島収容所に移送された。広島物産陳列館 (現在の原爆ドーム) での俘虜作品展示即売会には、ヴォルシュケ (Wollschke) 及びオートマー (Othmer) の勧め・励ましを受けてバウムクーヘンを出品し、市民の好評を博した。戦争終結まじかに、板東収容所の知友グロスマン (Grossmann) に似島や習志野収容所の動静を記した手紙を送った。青島に留まったエリーゼ夫人は困り果てた

時幾度となく山田耕三大尉に訴え、その都度親切にしてもらった。大戦が終結しての1920年1月25日、エリーゼは息子カール・フランツを連れて青島から神戸に着いた。ユーハイムはやがて明治屋に就職し、銀座「カフェー・ユーロップ」の製菓主任になった。月給は350円で、当時としては破格の報酬であった。やがて独立して横浜山下町に菓子店「ユーハイム」を開業した。関東大震災で店は倒壊し、1920年神戸三宮に移って再出発した。一時健康を害してドイツに帰国したが再び来日し、第2次大戦中も日本に留まった。1945年6月5日の空襲で店は瓦解し、失意の内に8月14日六甲ホテルで死去した。息子のカール・フランツは第2次大戦に応召し、5月6日ウィーンで戦死した。戦後店は再建され、妻エリーゼ(1892-1971)の奮闘によって発展し、現在もドイツ菓子の店として広く知られている。【頼田島『カール・ユーハイム物語』等より】(4683:大阪→似島)

- 347) Kahle (カーレ), Georg: 海軍歩兵第3大隊第6中隊・2等歩兵。板東時代、収容所内のタバオでレストラン「クリスタル・パラスト」(水晶宮)をシューベルト(Schubert)と共同で経営した。(2963:松山→板東)
- 348) Kahler (カーラー), Franz: 海軍砲兵中隊・海軍中尉。[第4中間地掃射砲台並びに高角砲指揮官]。鉄道線路上の移動中間掃射砲で、湾堤防上から日本軍に対して榴弾射撃を行った。(116:東京→習志野)
- 349) Kalkbrenner (カルクブレンナー), Paul (1876-): 海軍野戦砲兵隊・予備副曹長。[商社員]。ハンブルクの貿易商社カール・ローデ商会の日本代表を務めていた。1902年12月に来日した。趣意書提出時点では、既に在日17年であった。妻は日本人女性で名前はミキ子といい、その間に三人の子があり、開戦前は横浜市海岸通り43のaに住んでいた。名古屋俘虜収容所を通じて、『獨逸人北海道移住ニ関スル趣意書』(大正8年8月23日付け)を北海道帝国大学へ提出した。日本人に科学的な欧州農業経営を実地に示すために、北海道にドイツ人俘虜よりなる農場を開設する提案であった。「9歳迄家庭教師ニ就キ学ヒ後、プロヒベツ市ノプロシヤ王国立実業科高等学校ニ入学シ大学入学資格ヲ得タリ、長男トシテ父ノ家業ヲ相続スルノ必要上三ヶ年父ノ農場ニ就キ実地農業ヲ修得セリ、後一年志願兵トシテポムメルン第二砲兵隊ニ入り試験後、予備将校昇進資格ヲ得タリ、父ノ事業繼承迄世界ヲ見ム為メハムブルヒ輸出入業会社ニ二ヶ年半就職ノ後1902年、カール・ローテ会社員トシテ神戸ニ来リ代表委任権ヲ得タリ、1908年カール・ローテ商会ニ属スル東京銀座ササガ商会ノ支配人トナリ世界大戦ニ至ル、戦争中父死シテ遺産悉ク義妹ノ夫ニ帰ス 然ルニ生涯商人タルノ志望ニ非ラス父ノ農業ヲ繼承スルノ素志ナリシヲ以テ五ヶ年間ノ俘虜生活中外国移住ノ目的ニテ農業ニ関スル諸種ノ専門ヲ研究セシ、北海道農業企業ノ計画組織者タルト共ニ主催者タル者ナリ 肥料、耕作、及農業、工業ヲ特技トス」【『北海道移住』より】(2607:名古屋)
- 350) Kalthoff (カルトホフ), Wilhelm: 海軍歩兵第3大隊機関銃隊・軍曹。久留米の演劇活動では、喜劇『お似合いの燕尾服』に出演した。(520:久留米)
- 351) Kammerer (カンメラー), Ernst: 海軍膠州派遣砲兵大隊第5中隊・予備1等無線電信技手。久留米時代の1919年8月、東京府豊多摩郡渋谷町の合資会社日本無線電信機製造所から情報局へ、無線電信技術を習得していて、解放後雇用を望む者の有無問い合わせに、久留米ではカンメラーを紹介・連絡した。(1211:福岡→久留米)
- 352) Kappel (カッペル), Willy: 海軍砲兵中隊・給与掛2等筆記。松山時代、大林寺の講習会で算数の講師を務めた。(2987:松山→板東)
- 353) Kappler (カップラー), Carl: 国民軍・卒。1915年9月20日、青島から大阪収容所に移送された。大戦終結後、山東省の省都済南で貿易商社を経営した。(4684:大阪→似島)

- 354) Kardinal (カルディナル), Hermann (1892-1918): 海軍歩兵第3大隊機関銃隊・2等兵。1918年12月1日名古屋で死亡、軍人墓地に埋葬された。(2593:名古屋)
- 355) Karius (カーリウス), Friedrich: 築城部・築城曹長。松山時代、『陣営の火』編集に加わり、数多くの見事な地図や表を作成した。(2986:松山→板東)
- 356) Karolczak (カロールチャク), Joseph: 海軍砲兵中隊・2等水兵。久留米時代の1917年1月28日、アンドレーア (Andrea) をシュルツェ (Schulze) 等仲間18人で袋叩きにして、傷害罪により1月の懲役刑に処せられた。(3463:熊本→久留米)
- 357) Kaesemann (ケーゼマン), Friedrich: 国民軍・上等歩兵。[運送業]。1915年9月20日、青島から大阪収容所に送られた。妻と子は大战終結まで青島に留まった。(4685:大阪→似島)
- 358) Kayser (カイザー), Georg von: 総督府参謀本部・陸軍少佐。[総督副官]。10月13日午前10時に東呉家村において行われた、非戦闘員及び中立国民避難のための休戦会談に独軍の軍使として臨んだ。その折り、胸の目立つ処に日本帝国の瑞宝章を付けていた。通訳としてユーバーシャル (Ueberschaar) 予備中尉が同道したが、日本語を少し話した。協議の折、山田耕三大尉からシュテツヒャー (Stecher) 大尉宛ての葉書を託された。また11月7日の降伏申し入れの際は、ヘーネマン副衛兵長をラッパ手に、ファーベル1等蹄鉄工長を白旗を掲げる旗手に、ウルリヒ軍曹を馬丁に、日本軍本部陣地のある台東鎮に総督の降伏文書を携えて軍使として赴いた。その折り、ウルリヒ軍曹は流弾を受けて死亡した。さらに11月7日午後4時からモルトケ兵営で行われた青島開城交渉でも、ドイツ側委員の一員になった。(1181:福岡→習志野)
- 359) Kempe (ケンペ), Paul: 総督府参謀本部・陸軍中尉。[暗号将校]。当時40歳だった。11月10日にモルトケ兵営で行われた神尾司令官とヴァルデック総督の会見では、総督の秘書官として列席した。1915年11月12日、大正天皇即位大典の日に逃亡したが、その際通訳のハック (Hack) が助力した。ハックは事前に「神戸新聞」により連絡船の発着等の日程日時を調べ上げていた。逃走5時間後に門司に到着。フェリーで下関に着き、「三条ホテル」にスウェーデン人を装って投宿した。翌13日午後老朽船「八幡丸」に乗りこんだ。この船を選んだのは、無線設備が無いからであった。18日上海に到着し、逃亡した4名は上海の地で落ち合った。またケンペは上海でシベリアの収容所を脱走してきた将校とも接触し、やがてシベリア鉄道でドイツに行くルートを選択し、上海を出て18日後に晴れてドイツの地にたどり着いた。【Burdick/Moessner: The German Prisoners-Of-War in Japan, 1914-1920, 26-29頁】(1182:福岡)
- 360) Kerkhof (ケルクホーフ), Hermann: 海軍砲兵中隊・後備2等兵曹。「両名ハ頗ル傲慢不遜ノ態度ニシテ写真撮影セラレ敵国ノ新聞雑誌等ノ掲載セラルルガ如キ事アラバ軍人ノ体面上恥辱ナリト主張シ如何ニ訓諭スルモ之ニ服従セズ遂ニ同人等ノ撮影ヲ中止スルノ已ムナキニ至レリ「ケルクホーフ」ハ常ニ粗暴不謹慎ノ言動アルモノ」とされて、ヴェーアハーン (Wehrhahn) とともに重倉倉25日に処せられた。【『日独戦書』】(1744:静岡→習志野)
- 361) Kern (ケルン), Ludwig: 海軍膠州派遣砲兵大隊第2中隊・2等砲兵。大阪時代の1915年12月31日の大晦日にシュトルフ (Storf) とともに脱走したが、翌元旦に堤防の上を歩いているところを発見され逮捕、大阪監獄に収監された。この事件のため、1月27日に予定されたドイツ皇帝誕生日を祝う祝賀会及び音楽会が許可されなかった。(3955:大阪→似島→習志野)
- 362) Kersten (ケルステン), Hermann: 海軍膠州派遣砲兵大隊・2等砲兵。1920年2月28日に喜福丸でヴィルヘルムスハーフェン港に帰国した光景を記した。それによると、「岸壁に集まった子供達はパンを欲しさに叫び声を上げていた。そこで腕いっぱい抱えたパンを放ると、周囲にいた大人の船員達が子供を押しつけて拾い、ががつと食べ始めた。その光景を見て愕然となり、甲板の隅に隠れて激しく泣いた」とのことである。【《The German Prisoners-Of-



War in Japan, 1914-1920》108-109頁】(1241:福岡→青野原)

- 363) Kessinger (ケッシンガー), Friedrich von: 海軍歩兵第3大隊長・陸軍歩兵中佐。[陸上戦隊指揮官]。厳しい態度・姿勢のため、部下達からはあまり好かれてはいなかった。11月10日午後2時、青島残留のドイツ兵を引き連れて台東鎮に引き揚げ、日本送還までそこで露営した。名古屋収容所の俘虜代表を務めた。妻と二人の娘は大戦終結まで上海で暮らした。大戦終結してドイツ帰国後、日独戦争前から日本の収容所の様子などを記した『出来事』(Geschichte)を残した。(2577:名古屋)
- 364) Kessler (ケスラー), Kurt: 海軍歩兵第3大隊機関銃隊・副曹長。久留米時代の1917年3月13日、ケスラーから日本赤十字社に「コパイザルサム薬」の送付方の依頼があった、との照会が日赤から俘虜情報局にあった。同薬品は軍医によって差し支えないと判断され、収容所医務室で配剤されることになった。(3441:熊本→久留米)
- 365) Ketel (ケテル), Hellmuth (1893-1961): 海軍砲兵中隊・2等信号兵。[軽巡洋艦エムデン乗員]。ハンブルク郊外に生まれた。大戦終結後、習志野の仲間といくつか事業を起こすが失敗する。その後会津の女性と結婚し、1927年銀座・並木通りに「バー・ラインゴールド(Bar Rheingold)」を開業し、1930年にはその隣にレストラン「ケテル(Ketel)」を開業した。1961年死去。【銀座並木通りの「ケテル」入り口脇の記念板には、「1916年(大正5年)来日」となっているが、俘虜情報局による大正4年10月調の『俘虜名簿』には、既にその名が収容所名とともに記載されている】(140:東京→習志野)
- 366) Kettgen (ケットゲン), Johann(-1919): 海軍歩兵第3大隊機関銃隊・上等兵。1919年3月2日、スペイン風邪により久留米で死亡。(3443:熊本→久留米)
- 367) Keyssner (カイスナー), Ernst: 海軍歩兵第3大隊第6中隊・2等歩兵。板東時代の1919年、バルクホルン、ラーン(Laan)、ルードルフ(Rudolf)及びジーモンズ(Simons)と共に、日本語文献からの翻訳『国民年中行事』(Das Jahr im Erleben des Volkes)の出版に関わった。また、板東ホッケー協会のチームのメンバーだった。(2967:松山→板東)
- 368) Kienningers (キーニンガース), Josef: 海軍野戦砲兵隊・予備陸軍少尉。[要塞車廠第2次指揮官]。大戦終結後、日本内地での契約が成立して内地解放者となった。(4385:熊本→大分→習志野)
- 369) Kierdorf (キアドルフ), Wilhelm: 海軍膠州派遣砲兵大隊第4中隊・2等砲兵。板東時代、スポーツクラブ「青年の力」でレスリングをした。(4208:大阪→徳島→板東)
- 370) Kiesewetter (キーゼヴェッター), J.Paul(-1917): 海軍歩兵第3大隊第6中隊・後備2等歩兵。1917年5月9日大分で死亡、軍人墓地に埋葬された。(4382:熊本→大分)
- 371) Kiessling (キースリング), Otto K.: 海軍歩兵第3大隊第4中隊・2等歩兵。久留米時代は演劇活動で、トーマ作の農民笑劇『一等車』等14演目に主として女役で出演した。(3435:熊本→久留米)
- 372) Kirchner (キルヒナー), Reinhold: 海軍歩兵第3大隊第2中隊・2等歩兵。9月28日、浮山近くの巫山で日本軍に投降して俘虜となり、久留米収容所に送られた。(535:久留米)
- 373) Klautke (クラウトケ), Paul: 海軍歩兵第3大隊第6中隊・2等歩兵。[青島食肉加工所検査官]。松山時代、公会堂の講習会で物理学の講師を務めた。板東では食肉の検査をした。また、工芸品展には付属品付きの養蜂箱を制作・出品した。さらに坂西農養蚕学校に出張して、植物標本の作製方法を指導した。1917年11月26日、「中国の夕べ」で講演を行う。1919年1月24日には、「米と茶の栽培及び養蚕」の写真展を開いた。大戦終結後、帰国に際して板東小学校に植物標本を寄贈した。(2971:松山→板東)

- 374) Kleemann (クレーマン), Eduard : 海軍歩兵第3大隊第5中隊長・陸軍騎兵少佐。〔外方陣地左翼陣地指揮官〕。9月16日、20名の騎兵と12名のオートバイ隊を率いて李村に赴いたが、すでに日本軍によって李村は占領されていた。その後はその率いる140の兵で、第2歩兵堡壘から第4歩兵堡壘の間の守備に当たった。松山に到着後、収容所まで徒歩で行進させられると、騎兵将校であるからと頑なに馬を要求して実現させた。板東では「板東保険組合」の監査役を務めた。松山及び板東収容所の俘虜代表を務めた。(2949 : 松山→板東)
- 375) Kleffel (クレッフエル), Julius : 海軍歩兵第3大隊第7中隊・2等歩兵。板東時代、本部事務室で金銭授受係りを務めた。(1961 : 丸亀→板東)
- 376) Klein (クライン), Richard(-1916) : 海軍歩兵第3大隊第7中隊・後備2等歩兵。1916年4月6日大分で死亡、軍人墓地に埋葬された。(4383 : 熊本→大分)
- 377) Kleinschmidt (クラインシュミット), Erich : 海軍歩兵第3大隊第6中隊・予備陸軍少尉。板東時代、講習会で中国語の新聞を読むコースを開き、中国語辞典を編んで収容所印刷所から出版した。スポーツの関連では、板東ホッケー協会の理事長を務めた。また1919年3月26日、「室内楽の夕べ」が開かれてシューベルトの五重奏「鱒」が演奏された。その折りクラインシュミットはヴィオラを担当した。他は、ガルスター海軍中尉のヴァイオリン、デュムラー海軍大尉のチェロ、クラーゼン伍長のピアノ、ナスート砲兵伍長のコントラバスという編成であった。(2958 : 松山→板東)
- 378) Kley (クライ), Paul (1894-1992) : 海軍歩兵第3大隊第2中隊・2等歩兵。〔ビスマルク砲台〕。1911年植民地勤務の海軍歩兵大隊に志願し、青島に赴いた。降伏前日に右腕を負傷、丸亀では軽傷者のための病院でしばらく過ごした。大戦終結後は警察官となったが、第2次大戦でソ連の捕虜となり9年間シベリアの収容所で過ごした。ライポルト (Leipold) 等と「バンド一会」(当初は80名余の会員があった)を結成しフランクフルトで例会を開いた。大阪万博の折りライポルトと来日し、板東を再訪した。青島ドイツ人俘虜の最後の生存者とも言われたが、1992年5月97歳で死去した。(1949 : 丸亀→板東)
- 379) Klimant (クリーマント), Gustav : 国民軍・曹長。〔山林監視員〕。板東時代は「板東収容所営林所長」とも言える役割を担った。自給自足の賄い、製パンに必要な薪を調達するためであった。1918年2月4日に初めて近隣の山に入り、伐採の手本を示した。妻と二人の子は大戦終結まで青島に留まった。(2984 : 松山→板東)
- 380) Klobucar (クロブツァー), Viktor v. : カイゼリン・エリーザベト乗員・海軍大尉。元オーストリア軍飛行将校。青島を脱出したプリュッシュウ中尉の友人であった。プリュッシュウ中尉等数名で、複葉飛行機の製作にあたったが完成に至らず、降伏前に機体を破壊した。負傷したバイエルレ (Baierle) 少尉に代わって、第15砲台指揮官になった。1918年8月4日、久留米から青野原へ移送された。(3474 : 熊本→久留米→青野原)
- 381) Klöckner (クレックナー), Fritz : 国民軍・卒。1915年9月20日、青島から大阪収容所に移送された。(4686 : 大阪→似島)
- 382) Kluge (クルーゲ), Ernst : 海軍歩兵第3大隊第2中隊・1年志願上等歩兵。9月28日、浮山近くの巫山で日本軍に投降して俘虜となり、久留米収容所に送られた。(533 : 久留米)
- 383) Knaack (クナック), John : 海軍歩兵第3大隊第6中隊・2等歩兵。板東時代、公会堂での工芸品展に2階建てのメリーゴーランドを制作・出品して注目された。(2965 : 松山→板東)
- 384) Knappe (クナッペ), Franz : 海軍膠州派遣砲兵大隊・予備砲兵伍長。習志野時代の1919年8月12日、習志野演劇協会によるベネディックス作の喜劇『親戚の情愛』では、娘役で、また同年10月5日のマルフケのために開催された「謝恩の夕べ」では、二部構成の第二部の演劇でハ

- ラーシュタイン作の1幕物茶番劇『射撃手と空クジ』に代理商の役で出演した。(4390:熊本→大分→習志野)
- 385) Knell (クネル), Friedrich (-1919): 海軍砲兵中隊・後備2等機関候補生。1918年8月5日名古屋へ移送され、1919年12月18日名古屋で死亡、軍人墓地に埋葬された。(3458:熊本→久留米→名古屋)
- 386) Knoll (クノル), Ernst: 海軍歩兵第3大隊第7中隊・上等歩兵。農畜産学士。板東時代、徳島県下各地で農業講演を行った。(1953:丸亀→板東)
- 387) Knoop (クノープ), Karl: 海軍膠州派遣砲兵大隊第3中隊・1等砲兵。板東時代の1917年12月、懸賞作文募集に「故郷」で佳作とされ、『バラック』に掲載された。(4196:大阪→徳島→板東)
- 388) Knopf (クノッフ), Kurt: 海軍歩兵第3大隊第2中隊・予備伍長。9月28日、浮山近くの巫山で日本軍に投降し俘虜となり、久留米収容所に送られた。久留米の演劇活動では、マイアー＝フェルスター作の『アルト・ハイデルベルク』等に出演した。(534:久留米)
- 389) Knüppel (クニユッペル), Karl Dr.: [総督府参謀本部]。[総督府財政長・海軍1等経理監督(大佐相当)]。高等判事、民政長官に次ぐ高額年俸を、造船所長とともに受けていた。11月14日の全戦闘員の日本送還後も、青島にしばらく留まって残務処理に当たった。(4391:熊本→大分→習志野)
- 390) Koeberlein (ケーバーライン), Wilhelm: 海軍歩兵第3大隊第6中隊・2等歩兵。[商人]。1914年、商用でウラジオストックに赴いたところで第1次大戦が勃発し、青島のドイツ守備軍に馳せ参じた。板東時代、収容所内のタバタオで写真屋を営んだ。2001年7月、出身地ヴェルツブルクのシーボルト博物館で、ケーバーラインが板東収容所等で写した写真等で構成された「極東で俘虜となって—日本の収容所におけるドイツ人」と題した展示会が開催された。(2972:松山→板東)
- 391) Koch (コッホ), Heinrich(-1914): 海軍膠州派遣砲兵大隊第1中隊・1等砲兵。9月28日ヴァルダーゼー高地で俘虜となったが、負傷していたため久留米衛戍病院に送られ、10月25日同病院で死亡、軍人墓地に埋葬された。(562:久留米)
- 392) Koch (コッホ), Heinrich: 海軍歩兵第3大隊第2中隊・上等歩兵。板東時代、丸亀蹴球クラブの役員を務めた。(1941:丸亀→板東)
- 393) Koch (コッホ), Johann: 海軍歩兵第3大隊第7中隊・後備伍長。板東時代、収容所内の商業区域タバタオの村長を務めた。また、「ドイツ兵墓碑」の建設を提唱した。1918年6月1日、軍楽曹長ハンゼン(Hansen)によってベートーヴェンの「第九交響曲」が板東収容所内で本邦初演された。その折り、コッホ、ヴェーゲナー(Wegener)2等歩兵、シュテッパン(Steppan)2等歩兵、フリッシュ(Frisch)2等歩兵の四人は第4楽章の「合唱」でソロを受け持った。(1957:丸亀→板東)
- 394) Koch (コッホ), Lambert: 海軍歩兵第3大隊第6中隊・2等歩兵。ルクセンブルク王国人。アルジェーの外人部隊、モロッコの外人部隊と渡り歩いたが、素行不良で仏印に送られた。老開の国境守備軍に配属されたが脱走し、上海等転々としてドイツ軍に義勇兵として雇われた。日本に送られると、フランス大使館に欧州戦争への従軍を願い出るが却下された。板東ではポーランド人等の反ドイツ人と一緒に分置所に隔離収容された。後宣誓解放された。【『日本人とドイツ人』94頁等】(2968:松山→板東→習志野)
- 395) Koll (コル), Wilhelm: 海軍歩兵第3大隊第6中隊・2等歩兵。松山時代、公会堂の日曜講演会で「新旧神学の違い」と題して講演した。(2964:松山→板東)

- 396) KOMBUECHEN (コムビューヒェン), Johann : 海軍東亜分遣隊第1中隊・2等歩兵。習志野時代、習志野劇場によるエルンスト作の喜劇『フラックスマン先生』に用務員役で出演した。(120 : 東京→習志野)
- 397) KÖNIG (ケーニヒ), Hermann : 国民軍・卒。[総督府・職工長]。1915年9月下旬に青島収容所に収容され、大戦終結後の1919年12月27日、青島収容所から解放された。家族6人が青島に住んでいた。【『俘虜名簿』中ただ一人、収容所が青島となっている人物】(4687 : 青島)
- 398) KÖNIG (ケーニヒ), Paul : 海軍歩兵第3大隊第7中隊・2等歩兵。板東時代、収容所内印刷所から『板東俘虜収容所漫筆』(Plauderei aus dem Kriegsgefangenenlager Bando in Japan)の本を出した。【『俘虜番号が1つ違いで、同姓同名にして所属部隊階級、収容所も同じという人物が二人いたために、下記のような記述となった。出身地のみが、ヴァイマルとドレスデンで異なっている】(1959もしくは1960 : 丸亀→板東)
- 399) KOONEN (コーネン), Alois : 海軍膠州派遣砲兵大隊第5中隊・1等砲兵。板東時代の1918年9月、「板東健康保険組合」の砲兵大隊代表理事に選ばれた。(4211 : 大阪→徳島→板東)
- 400) KOPPE (コッペ), Wilhelm : 海軍膠州派遣砲兵大隊・海軍大尉。[会前岬砲台指揮官]。俘虜として日本に向かう折、沙子口で輸送船薩摩丸に二匹のダックスフントを連れて乗船した。熊本時代の1914年12月19日、ヘレーネ夫人から同棲願いが出されたが不許可になった。久留米時代、夫人は国分村浦川原の森新別荘に住んだ。1918年3月スイス公使宛に、独亜銀行清算に伴い送金された625円は元来妻子宛のものが誤送されたとして、12日転送された。同年8月5日、ガウル中尉、マイヤーマン中尉等90名と板東収容所に配置替えになった。3名の夫人達は久留米を引揚げて、しばらく箱根で静養した。その後も皇帝から拝領したと称する犬と一緒に、板東まで連れていった。その犬は板東を描いたスケッチにも登場する。内一匹は収容所長松江大佐の息子にプレゼントされ、「太郎」の名を付けられた。【『日本人とドイツ人』64頁等】(3467 : 熊本→久留米→板東)
- 401) KÖRNER (ケルナー), Otto : 海軍膠州派遣砲兵大隊第4中隊・2等砲兵。[製靴職人]。板東時代の1918年3月11日、板東町の玉川料理店に女物小紋模様の袴の着物を着て、裏口から押し入りビールを飲ませよう強要したことで重當舖5日に処せられた。また後に、収容所から80メートル離れた農家の戸をポケットナイフで開けて入り込んだところを住民に発見され、住居侵入と脅迫を伴う逃走で3年の懲役に処せられた。【『日本人とドイツ人』159-160頁より】(4209 : 大阪→徳島→板東)
- 402) KÖRNER (ケルナー), Peter (-1919) : 海軍膠州派遣砲兵大隊第1中隊・1等焚火兵。習志野時代の1919年1月8日と9日に収容所で演じられた、ハウスライターとライマン作の3幕の茶番劇『電話の秘密』に年金生活者役で出演した。その月の1月31日習志野で死亡。(1187 : 福岡→習志野)
- 403) KOTTER (コッター), Maximilian : 海軍東亜分遣隊第1中隊・2等歩兵。習志野時代、習志野劇場による「トーマの夕べ」で、トーマ作の1幕物田舎茶番劇『一等車』に車掌役で出演した。(121 : 東京→習志野)
- 404) KOTZOLD (コツォルト), Karl : 海軍歩兵第3大隊第2中隊・2等歩兵。9月28日、浮山近くの巫山で日本軍に投降して俘虜となり、久留米収容所に送られた。(536 : 久留米)
- 405) KRABELL (クラッベル), Heinrich : 海軍歩兵第3大隊第3中隊・予備副曹長。久留米時代は演劇活動で、レッシング作の喜劇『ミシナ・フォン・バルンヘルム』等6演目に出演した。(3413 : 熊本→久留米)
- 406) KRAFT (クラフト), Diederich (-1917) : 海軍膠州派遣砲兵大隊・2等焚火兵。1917年3月1

- 日大阪衛戍病院で死亡、軍人墓地に埋葬された。(4542:大阪)
- 407) Krämer (クレーマー), Hermann(-1919): 海軍膠州派遣砲兵大隊第4中隊・2等砲兵。1919年2月11日スペイン風邪により習志野で死亡。(1194:福岡→大分→習志野)
- 408) Krampe (クランペ), Adolf: 海軍歩兵第3大隊第7中隊・曹長。板東時代、名東郡教育会代表及び同郡小学校教員に、鳥類剥製の技術指導をした。1918年8月、板東収容所の山外れに完成した「ドイツ兵墓碑」のある墓地の造園を担当した。(1954:丸亀→板東)
- 409) Krätzig (クレツツイヒ), Curt: 海軍歩兵第3大隊第7中隊・伍長。[貸家業]。板東時代、丸亀蹴球クラブの役員を務めた。妻は大戦終結まで青島に留まった。(1956:丸亀→板東)
- 410) Kraus (クラウス), Simon (-1919): 海軍砲兵中隊・後備2等焚火兵。ヴィルヘルム・バーマー(Bohmer)と喧嘩事件を起こした。1919年1月26日習志野で死亡。(139:東京→習志野)
- 411) Krause (クラウゼ), Hermann: 海軍歩兵第3大隊第2中隊・2等歩兵。9月28日、浮山近くの巫山で日本軍に投降して俘虜となり、久留米収容所に送られた。(537:久留米)
- 412) Krauss (クラウス), Adolf: 国民軍・卒。1915年9月20日、青島から大阪収容所に移送された。(4688:大阪→似島)
- 413) Krauss (クラウス), Jakob: 海軍歩兵第3大隊第5中隊・上等歩兵。板東時代、タバタオで薬局を営んだ。1918年9月には、「板東健康保険組合」の第5中隊代表理事に選ばれた。(2951:松山→板東)
- 414) Krautwurst (クラウトヴルスト), Fritz: 海軍歩兵第3大隊第6中隊・予備上等歩兵。ロシアのウラジオストックから青島に馳せ参じた。(2579:名古屋)
- 415) Kreike (クライケ), Carl: 海軍歩兵第3大隊重野戦榴弾砲兵隊・後備伍長。久留米時代は演劇活動で、マイアー＝フェルスター作の『アルト・ハイデルベルク』等3演目に出演した。(3437:熊本→久留米)
- 416) Kremer (クレーマー), Christian: 海軍歩兵第3大隊第3中隊・2等歩兵。1917年5月24日、情報局から各収容所へ伝えられた、製針業に従事したことがあつてかつ労役を希望する者の照会に対して、久留米収容所ではクレーマー他3名を届けた。(1262:福岡→久留米)
- 417) Kretschmar (クレツチュマー), Ernst: 所属部隊不明・1等水兵。1919年2月26日、スイス公使を通じて天津在住の妻を看護したいとの請願書を出した。(4546:大阪→似島)
- 418) Kretschmar (クレツチュマー), Otto: 海軍歩兵第3大隊第2中隊・2等歩兵。板東時代、公会堂での工芸品展に編み靴下を出品した。(1946:丸亀→板東)
- 419) Kreuzer (クロイツァー), Johann: 海軍歩兵第3大隊第2中隊・2等歩兵。板東時代、スポーツクラブではレスリングをした。(1950:丸亀→板東)
- 420) Krewerth (クレーヴェルト), Leonhardt: 所属部隊・階級不明。[巡查]。松山時代に山越の日曜講演会で、「刑事警察の鑑識」と題して講演した。(2988:松山→板東)
- 421) Krieger (クリーガー), Karl: 海軍歩兵第3大隊工兵中隊・上等工兵。板東時代、松山ホッケー協会の役員を務め、また無料水泳教室の教官も務めた。(2974:松山→板東)
- 422) Kropatschek (クロパチェク), Hans W.: 海軍東亞分遣隊参謀本部・陸軍少尉。[青島駐在ロシア代理領事]。8月3日に総督府から動員令が発せられると、代理領事の職を放棄して青島独軍に参加した。【《The Japanese Siege of Tsingtau》53頁】10月7日の晩、ベルリン福音教会の教区監督フォスカンプの家を訪問していた時、山東省の省都済南が日本軍によって占領されたとの知らせが届いた。山東鉄道並びにその沿線は既に日本軍の支配下にあったことから、その情報は伝書鳩によるものと居合わせたクロパチェクは推測した。兄が神学者だったことでフォスカンプとは親しかった。【Voskamp 《Aus dem belagerten Tsingtau》45-46頁】

- 妻と二人の子は大戦終結まで青島に留まった。(4637:大阪→似島)
- 423) Krueck (クリュック), Hermann: 海軍歩兵第3大隊第6中隊・予備副曹長。板東時代の1918年9月、「板東健康保険組合」の第6中隊代表理事に選ばれた。(2960:松山→板東)
- 424) Krug (クルーク), Bertram: 海軍歩兵第3大隊第7中隊・後備伍長。板東時代、「ドイツ兵墓碑」の建設に際して造園を担当した。また、工芸品展には実に1000点にも及ぶ植物並びに種子の標本採集を出品した。(1952:丸亀→板東)
- 425) Krueger (クリューガー), Wilhelm: 海軍歩兵第3大隊第2中隊・2等歩兵。9月28日、浮山近くの巫山で日本軍に投降して俘虜となり、久留米収容所に送られた。(538:久留米)
- 426) Krull (クルル), Carl: 海軍砲兵中隊・海軍中尉。〔台西鎮並びに衙門砲台守備隊指揮官・日本軍による包囲後は歩兵堡壘中間防備〕。11月6日夕刻、第2歩兵堡壘攻防の戦闘によるシャリエール中尉の戦死後、海軍歩兵第3大隊自動短銃隊指揮官を兼務し、大港埠頭付近の地雷敷設も担当した。11月9日の青島開城交渉ではドイツ側の実務委員として、地雷等の危険物除去に関わった。11月13日、日本側の開城委員である堀内少将に、日ごろ丹精していた鉢植え一鉢を贈り、翌14日堀内少将から送別に絵葉書を贈られた。(1183:福岡→習志野)
- 427) Kruse (クルーゼ), Gerhard: 海軍歩兵第3大隊第5中隊・2等歩兵。板東時代、収容所内のタバタオで洋服屋を営んだ。(2957:松山→板東)
- 428) Kühlborn (キュールボルン), Georg: 海軍歩兵第3大隊第7中隊・陸軍少尉。当時29歳。1918年2月9日、大分の遊廓「春日楼」に従卒ナーゲル及びダンデルトの三人で登楼し、芸者と夜を過ごした咎で、20日に禁固30日の処罰を受けた。見事な筆跡で「高松市本町長野正」等の日本人名で記帳した。(1938:丸亀→大分→習志野)
- 429) Kuhlo (クーロ), Paul: 海軍東亜分遣隊長・陸軍歩兵中佐。〔外方陣地部隊左翼陣地指揮官〕。〔天津守備隊司令官〕。東京及び習志野収容所の俘虜代表を務めた。1914年12月中旬、浅草の本願寺収容所に収容されていたクーロ中佐宛てに、大日本仏教青年会から慰問の書簡が届いた。それに対するクーロ中佐の返書が12月29日付けの東京朝日新聞に掲載された。それによると、クーロ中佐は久しく仏教研究に携わり、またドイツに留学して今は著名の士となっている日本人と20年来交友を結んでいるとのことであった。習志野時代の1915年12月25日、収容所のクリスマスコンサートでは「クリスマスの鐘」をピアノ演奏し、またメンデルスゾーンの「ピアノ三重奏曲第一番」からのアレグロとアンダンテを、ベーロウ予備少尉のチェロ、ヴォストマン軍楽兵曹のヴァイオリンに合わせてピアノ演奏した。ドイツ帰国後、『1914年7月31日及び8月1日の海軍東亜分遣隊の天津並び到北京からの出動報告』と、『1914年青島包囲中の海軍東亜分遣隊活動報告』(《Kurze Beschreibung der Tätigkeit des Ostasiatisches Marine-Detachements während der Belagerung von Tsingtau 1914.》)を提出した。(115:東京→習志野)
- 430) Kühne (キューネ), Karl (1892-1917): 海軍歩兵第3大隊第4中隊・2等歩兵。1917年12月4日、スペイン風邪により板東で死亡。(3424:熊本→久留米→板東)
- 431) Kuhnenfels (クーネンフェルス), Adalbert Freih. Kuhn von: カイゼリン・エリーザベト乗員・海軍中尉(男爵)。日本軍による包囲後、歩兵堡壘中間地区の左翼側でフレーリヒ(Froehlich)中尉とともに、カイゼリン・エリーザベト乗員の揚陸部隊指揮に当たった。(2265:姫路→青野原)
- 432) Kühnert (キューネルト), Wilhelm: 海軍東亜分遣隊第1中隊・上等歩兵。10月2日、四房山で俘虜となり久留米収容所に送られたが、負傷のため当初は久留米衛戍病院に収容された。(563:久留米)

- 433) Kuhr (クーア), Egon: 海軍歩兵第3大隊第1中隊・陸軍歩兵中尉。「アンデルス支隊」に属する「クーア小隊」を率いた。9月27日のヴァルターゼー高地攻防では、最前線の最右翼を防備した。妻と子は大战終結まで上海で暮らした。(519: 久留米)
- 434) Kuentzel (キュンツェル), Otto: 国民軍・後備副曹長。[総督府立ギムナジウム教師]。松山時代、大林寺の収容所講習会でフランス語及び算数の講師を務めた。妻と子は大战終結まで青島に留まった。(2985: 松山→板東)
- 435) Kuepper (キュッパー), Wilhelm: 海軍膠州派遣砲兵大隊・予備掌砲副曹長。板東時代、砲兵スポーツ協会の役員を務めた。(4217: 大阪→徳島→板東)
- 436) Kux (ククス), Herbert: 海軍膠州派遣砲兵大隊第2中隊長・海軍大尉。敷設船ラウチング艦長。機雷将校。[台西鎮砲台指揮官]。(3949: 大阪→似島)
- 437) Laan (ラーン), Heinrich van der (1894-1964): 海軍歩兵第3大隊第6中隊・2等歩兵。[湛山堡壘]。[商社員]。東フリースラントのヴェーア(Weer)に生まれた。銀行業を学んだ後の1913年、神戸で商会を経営していた叔父のラムゼーガー(Hans Ramseger)の誘いで日本に来た。1914年8月8日応召して日本を離れ、青島には日本の最後通牒が発せられた前日の14日に着いた。志願兵受付所で手続きをした際の係官ハーケ(Hake)とは、互いに東フリースラント出身の同郷人であることが判り、親交を深めた。ゾルガー(Solger)予備中尉指揮の第3小隊に属した。戦争の当初はツインマー(Zimmer)とともにビスマルク兵営で、本部警備隊に食事やコーヒーを運ぶ任務に就いたが、その後湛山堡壘に移った。11月2日の未明4時10分前に第6中隊の湛山兵営から電話で、第2小堡壘の電信状態についての調査依頼が湛山堡壘に来ると、ラーンは進んでその任務に赴いた。松山時代、『陣営の火』編集に際して、公会堂での厄介な雑事を引き受けて貢献した。板東時代は、収容所倉庫での物品の受け付けに際しての通訳を務めた。大战終結後はハンブルクの銀行の横浜支店に勤務した。1921年に松山、板東時代に一緒だったマイスナー(Meissner)が経営するライボルト(Leybold)商会に入った。1923年OAGの書記に就任したが、関東大震災の後関西に移住し、1964年4月3日に死去するまで関西で暮らした。1945年までライボルト商会と密接なシュミッツ(Schmitz)商会で、ドイツからの機械輸入に従事した。第2次大戦後、神戸と和歌山のアメリカ進駐軍石油施設で5年間働いた後、1951年から再び機械輸入の仕事に戻った。1952年に神戸総領事館が新設されるまで、プフリューガー(Pflüger)等とともに、一時的に差し押さえられていた神戸ドイツ人学校の資産管理に当たった。ラムゼーガー夫妻やボーナー(Bohner)の墓もある神戸・再度山の外国人墓地に埋葬された。『チンタオの思い出』(《Erinnerungen an Tsingtau》)の回想記を残したが、それは叔父ラムゼーガーの50歳の誕生日をきっかけに、1917年12月に板東で執筆され、自身の手で装丁されたものである。1919年、バルクホールン、カイスナー、ルードルフ(Rudolf)及びジーモンズ(Simons)と共に、日本語文献からの翻訳『国民年中行事』(Das Jahr im Erleben des Volkes)の出版に関わった。(2996: 松山→板東)
- 438) Lancelle (ランツェレ), Waldemar: 海軍歩兵第3大隊第2中隊長・陸軍歩兵大尉。[第4歩兵堡壘(台東鎮東堡壘)指揮官]。前記指揮官は後にゾーダン(Sodan)大尉に変わった。丸亀時代は収容所の俘虜代表を務めた。(1963: 丸亀→大分→習志野)
- 439) Lange (ランゲ), Hermann: 海軍歩兵第3大隊第4中隊・後備上等歩兵。左大腿部銃創及び骨折、右大腿部中央砲弾破片貫銃創により、日本移送当初は大阪陸軍病院に入院した。(4639: 大阪→似島)
- 440) Langjahr (ラングヤール), Karl: 海軍膠州派遣砲兵大隊第5中隊・予備2等歩兵。9月28日、浮山近くの巫山で日本軍に投降して俘虜となり、久留米収容所に送られた。(582: 久留米)

- 441) Laengner (レングナー), Martin : 国民軍・上等歩兵。青野原で死亡 (年月日不明)。(2297 : 姫路→青野原)
- 442) Langrock (ラングロック), Karl E. : 海軍膠州派遣砲兵大隊第4中隊・2等砲兵。板東時代、収容所内のタバコで、G. シュルツ (Schulz) と共同で銃前屋を営んだ。また工芸品展には、二人共同で鉄製のシャンデリアを出品した。(4227 : 大阪→徳島→板東)
- 443) Lassota (ラッソタ), Theofil : 海軍歩兵第3大隊工兵中隊・後備伍長。大戦終結後、日本が経営することになった山東の坊子鉱山に指導者として雇われた。(4399 : 熊本→大分→習志野)
- 444) Laetzsch (レッチュ), Curt : 海軍歩兵第3大隊第6中隊・2等歩兵。板東時代、公会堂の絵画と工芸品展覧会に「バンドーの山々」を出品して油絵部門の二等賞に、水彩画では鉄条網も描き込んだ「風景」で一等賞になった。(2999 : 松山→板東)
- 445) Lau (ラウ), Franz : 海軍歩兵第3大隊第3中隊・2等歩兵。1915年10月20日、衛兵に煉瓦を投げて負傷させた。その罪で11月8日懲役5年の刑を受け、福岡監獄に収監された。(580 : 久留米)
- 446) Lau (ラウ), Paul : 海軍歩兵第3大隊第3中隊・2等工兵。左臀部榴弾破片創により大阪陸軍病院に入院した。(4550 : 大阪→似島)
- 447) Lauenstein (ラウエンシュタイン), Arthur (1888-1916) : 海軍歩兵第3大隊第6中隊・予備2等歩兵。[貿易商]。召集前は朝鮮の仁川で貿易業を営んでいた。1916年11月6日松山衛戍病院で肺炎のため死亡、軍人墓地 (当初はロシア人墓地) に埋葬された。長兄は英領地中海マック島に、次兄は西南アフリカに英国の俘虜として収容された。(2995 : 松山)
- 448) Lehde (レーデ), Max : 海軍歩兵第3大隊第2中隊・伍長。9月28日、浮山近くの巫山で日本軍に投降して俘虜となり、久留米収容所に収容された。久留米の演劇活動では、笑劇『燕尾服のレアンダー』等2演目に女役で出演した。(573 : 久留米)
- 449) Lehmann (レーマン), Ewald : 国民軍・中尉補。[第2国民軍小隊長]。(4554 : 大阪→似島)
- 450) Lehmann (レーマン), Hugo K. A. (-1919) : 海軍膠州派遣砲兵大隊第5中隊・後備砲兵伍長。1919年7月8日習志野で死亡。(1282 : 福岡→習志野)
- 451) Lehmann (レーマン), Otto : 海軍歩兵第3大隊第1中隊・2等歩兵。元オーボエ奏者。1915年6月13日、自らが主宰する「レーマン楽団」による第一回プロムナード・コンサートが開催された。曲目は軽快で大衆的なものが多かった。『久留米行進曲』等の作曲もした。また上記楽団は収容所の「交響楽団」の常連メンバーでもあった。フォークト (Vogt) と並んで久留米の音楽活動では特に指揮で大活躍した。(571 : 久留米)
- 452) Leipold (ライポルト), Eduard : 海軍膠州派遣砲兵大隊第4中隊・1等砲兵。日本への移送当時カメラを所持していて、後に板東収容所の様子などを数多くフィルムに納め、そのアルバム帖を鳴門市ドイツ館に寄贈した。徳島時代の1916年10月、徳島市の円藤鉄工所に鑄造・ドライバンの労役に、バル、ペーマー、フィッシャー、グレックナー、ヘフト、マイエの7名で派遣された。1日約8時間、賃金・期間不明。大戦終結後は郷里ザクセンのコーブルクの機械工場に勤めた。1934年、郷里出身の戦友15人に呼びかけて、「バンドーを偲ぶ会」を結成した。この呼びかけには、バイエルン州やヘッセン州在住の元俘虜も参加し、80人を超える会に発展した。やがてパウル・クライ (Kley) やヘルマン・ヴァルター (Walter) を幹事とする「バンドー会」として、フランクフルトで毎年定期的に会合を開くまでに至った。1970年に開催された大阪万博の折り来日し、パウル・クライと一緒に板東を再訪した。1972年鳴門市にドイツ館が完成するとアルバム帖を寄贈した。当時、西ドイツのコーブルク市 (出身地) に住んだ。インタビューに応じて、俘虜時代に関する多くの談話を残した。(4226 : 大阪→徳島→板東)



- 453) Leist (ライスト), Benedikt: 海軍歩兵第3大隊第7中隊・伍長。板東時代、収容所内のタバコでアイスクリーム屋を営んだ。(1976: 丸亀→板東)
- 454) Lendrich (レントリヒ), Eduard: 海軍東亜分遣隊参謀本部・海軍少主計(少尉相当)候補。習志野時代の1919年1月8日と9日、収容所で演じられたハウスライターとライマン作の3幕の茶番劇『電話の秘密』に財産家役で出演した。また同年3月5日に開催された「朗読の夕べ」では、ガイベル作「吟遊詩人の歌」及び古い説話の「天のベット」を朗読した。さらに同年8月に上演されたイプセン作の『幽霊』の演出を担当した。(149: 東京→習志野)
- 455) Leonhardt (レオンハルト), Karl: 海軍歩兵第3大隊第6中隊・2等歩兵。松山時代、公会堂の日曜講演会で「お茶の色について」と題して講演した。(2998: 松山→板東)
- 456) Liebmann (リープマン), Ludwig: 海軍膠州派遣砲兵大隊第2中隊・2等砲兵。1916年6月初旬、ベルシュケ(Poerschke)と大阪収容所から脱走したが逮捕され、禁固2年の刑を受けて大阪監獄に収監された。同年9月仮出所したが12月に取り消された。(3975: 大阪→似島)
- 457) Liersch (リールシュ), Ritzhard: 測量艦プレーネット乗員・2等水兵。1914年10月7日、西カロリン群島のヤップ島で俘虜となったが11月1日宣誓解放された。(4672: なし)
- 458) Liessmann (リースマン), Rudolf: 海軍砲兵中隊・後備上等兵。板東時代、劇場委員会に所属した。(3003: 松山→板東)
- 459) Lindner (リントナー), Paul: 海軍歩兵第3大隊第7中隊・上等歩兵。大戦終結後は青島に戻り、輸入会社「パウル・リントナー」を経営した。(1978: 丸亀→板東)
- 460) Linel (リーネル), Leo (-1919): 海軍砲兵中隊・2等焚火兵。1919年2月4日スペイン風邪により習志野で死亡。(152: 東京→習志野)
- 461) Linke (リンケ), Otto: 国民軍・予備少尉。大戦終結後は青島に戻り、再び医薬品輸入会社「オットー・リンケ」を経営した。(4553: 大阪→似島)
- 462) Linke (リンケ), Robert: 海軍歩兵第3大隊工兵中隊・軍曹。板東時代、収容所の炊事部1の下士官を務めた。(3002: 松山→板東)
- 463) Linne (リンネ), Ernst: 海軍膠州派遣砲兵大隊第5中隊・戦時志願兵。久留米時代は演劇活動で、喜劇『教育者フラックスマン』等7演目に出演した。(1287: 福岡→久留米)
- 464) Lipinski (リピンスキー), Hans: 海軍膠州派遣砲兵大隊第2中隊・海軍中尉。〔游内山特殊砲台指揮官〕。(3969: 大阪→似島)
- 465) Lipkan (リープカン), Walter: 海軍歩兵第3大隊第6中隊・2等歩兵。松山時代、大林寺の収容所講習会で英語及びフランス語の講師を務めた。(2993: 松山→板東)
- 466) Lippsky (リップスキー), Franz: カイゼリン・エリーザベト乗員・3等下士。姫路時代の1915年2月23日、ヤーン、アレッシ(?)の三人で景福寺の収容所から脱そうを企てた。当時22歳だった。宣誓解放された。(2300: 姫路→青野原)
- 467) List (リスト), Georg: 海軍歩兵第3大隊工兵中隊・2等工兵。板東時代、収容所内のタバコでマイアー(Meyer)と共同で卵、キャンデー、きゅうり、果物を売る店を営んだ。(3005: 松山→板東)
- 468) Löffler (レッフラー), Hermann: 国民軍・卒。1915年9月20日、青島から大阪収容所に移送された。(4689: 大阪→似島)
- 469) Lohmeyer (ローマイヤー), August: 海軍膠州派遣砲兵大隊・1等水兵。〔食肉加工職人・マイスター〕。大戦終結後、ハム・ソーセージの会社「デリカテッセン」を設立して成功し、やがて銀座にレストラン「ローマイヤー」を開いた。日本女性と結婚した。「ロースハム」という言葉の考案者と言われる。(3502: 熊本→久留米)

- 470) Lorenz (ローレンツ), Fritz : 海軍膠州派遣砲兵大隊第3中隊・2等砲兵。板東時代、収容所内のタバコで靴修繕屋を営んだ。(4219 : 大阪→徳島→板東)
- 471) Luczeck (ルチェック), Franz (-1918) : 海軍膠州派遣砲兵大隊第2中隊・砲兵軍曹長。1918年5月27日、福岡衛戍病院で膿胸のために死亡。書類上は習志野に移送。(1277 : 福岡→習志野)
- 472) Ludwig (ルートヴィヒ), Max : 海軍歩兵第3大隊第5中隊・上等歩兵。板東時代、工芸品展にオイルナー (Eulner) 及びオルローブ (Orlob) と共同で、ドイツ軍が西部戦線で捕獲した戦車の模造品を制作・出品した。(2990 : 松山→板東)
- 473) Lührs (リュールス), Julius (1892-) : 軍艦グナイゼナウ (Gneisenau) 乗員・2等水兵。病気のために残留していた東カロリン群島のポナベ島で俘虜となり、ツァッハ (Zach) とともに東京収容所に送られた。(114 : 東京→習志野)
- 474) Lund (ルント), Peter E. : 海軍歩兵第3大隊・2等歩兵。久留米時代の1915年10月2日、ツェルナー、アール、ジン4名で脱走したが3名は同日捕まり、ズインも5日に捕まった。宣誓解放された。(3490 : 熊本→久留米)
- 475) Lütgens (リュトゲンス), Dr. Alfred : 海軍東亜分遣隊・予備少尉。習志野時代、1919年8月に上演されたイブセン作の『幽霊』にアルヴィング夫人役で出演した。(1301 : 福岡→習志野)
- 476) Luthmann (ルートマン), Hans : 海軍歩兵第3大隊第6中隊・予備副曹長。板東時代、1917年12月の懸賞作文に「平和な時代の戦争」を応募して佳作になった。また絵画と工芸品展覧会には写真による風景部門に「両親の家」を出品して二等賞を受賞した。(2992 : 松山→板東)
- 477) Mahnfeldt (マーンフェルト), Rudolf : 海軍歩兵第3大隊第7中隊・後備伍長。板東時代の1917年7月1日、「Uボート戦について」の講演を行った。また「ドイツ近代史」の連続講演を31回に亘って行うなど多種多様な数多くの講演を行った。『バラック』編集部員を務めた。(1993 : 丸亀→板東)
- 478) Mahnke (マーンケ), Hermann : 国民軍・卒。1915年9月20日、青島から大阪収容所に移送された。(4690 : 大阪→似島)
- 479) Majunke (マージュンケ), Karl : 海軍歩兵第3大隊第2中隊・2等歩兵。板東時代、「ドイツ兵墓碑」の建設に際して石積み工事を担当した。(1989 : 丸亀→板東)
- 480) Makowitz (マコヴィッツ), Richard : カイゼリン・エリーザベト艦長・海軍大佐。1919年12月28日喜福丸で横浜を出航して帰国の途に着いた。ドイツのヴィルヘルムスハーフェン到着からオーストリアへの帰国風景を報告書として残した。それによると、ドイツでは大歓迎であったにもかかわらず、オーストリアでは帝国が瓦解して見向きもされなかったといわれる。(1315 : 福岡→習志野)
- 481) Marr (マル), Walter : 海軍歩兵第3大隊第2中隊・後備伍長。9月28日、浮山近くの巫山で日本軍に投降して俘虜となり、久留米収容所に送られた。(597 : 久留米)
- 482) Martin (マルティーン), Hans von : 海軍膠州派遣砲兵大隊・海軍中尉。〔衙門砲台指揮官〕。1917年2月18日、大阪から似島に収容所替えて移る際、鳥籠を提げながら梅田駅まで歩いて異彩を放った。(3979 : 大阪→似島)
- 483) Martin (マルティーン), Robert : 海軍野戦砲兵隊・陸軍少尉。松山時代、ゾルガー予備少尉及びゴルトシュミット予備副曹長とともに『陣営の火』の編集に当り、また板東では『バラック』の編集に当たった。(3014 : 松山→板東)
- 484) Marufke (マルフケ), Hans R.M. : 総督府・予備伍長。習志野時代、習志野演劇協会監督を務めた。1919年1月8日と9日、収容所で演じられたハウスライターとライマン作の3幕の

茶番劇『電話の秘密』等の演出を担当した。同年3月5日に開催された「朗読の夕べ」では、ミュンヒハウゼン作の「スヴェンダラントの漁師」を朗読した。8月12日の習志野演劇協会によるベネディクス作の喜劇『親戚の情愛』及びエルンスト作の喜劇『フラックスマン先生』(上演年月日不明)の演出をするなど、習志野における演劇活動では最も活躍した。1919年10月5日には、ハンス・マルフケのための「謝恩の夕べ」が開催された。二部構成になる音楽と演劇の夕べで、第二部の演劇では、自身がハラージュタイン作の1幕の茶番劇『射撃手と空クジ』の演出をするとともに主役を演じた。(1762: 静岡→習志野)

485) Matheis (マテーイス), Gustav (-1915): 海軍膠州派遣砲兵大隊第2中隊・1等砲兵。1915年4月13日静岡で死亡、軍人墓地に埋葬された。(1753: 静岡)

486) Mathiesen (マティーゼン), Eduard: 海軍膠州派遣砲兵大隊第5中隊・2等砲兵。福岡時代、逃亡未遂を起こしたモッデ(Modde)少尉付き卒であった。取り調べを受けたが、本人はリュウマチに苦しんでいて、モッデのためにレインコートを買った事実のみ認め、逃亡の事は知らなかったと述べた。またモッデも単独による行動であったと陳述した。(1338: 福岡→青野原)

487) Matthias (マティーアス), Fritz: ヤーグアル艦長・海軍大尉。7月31日の夕刻、ヤーグアル艦長に任命されたばかりのマティーアス大尉は、上海から英仏露の艦船を避けながら翌8月1日朝青島にたどりついた。11月7日未明の2時半に、青島独軍最後の軍艦ヤーグアルを自沈させた。静岡収容所の俘虜代表を務めた。習志野時代、誕生日に元ヤーグアル乗員から砲艦ヤーグアルの模型を贈られた。(1764: 静岡→習志野)

488) Matutat (マトウタート), Paul: 海軍歩兵第3大隊第4中隊・2等砲兵。久留米時代は演劇活動で、クリーク作の笑劇『困惑の花嫁』等8演目に出演した。(1351: 福岡→久留米)

489) Matzen (マッツェン), Heinrich: 海軍歩兵第3大隊第1中隊・予備上等歩兵。久留米の演劇活動では、リンダウ作『もう一人の男』に女役で出演した。宣誓解放された。(586: 久留米)

490) Mauchenheim (マウヘンハイム), W.Frhr.v.: 総督府参謀・海軍大尉(男爵)。通称ベヒトルスハイム(Bechtolsheim)。戦死者埋葬、負傷者救出のための一時休戦を取り決める会談が10月13日に東呉家村で行われた。その折り、ドイツ人婦女子等の避難も合意された。15日に避難船が用意され、その指揮官を勤めた。胸には日本の旭日章を付けていた。かつて伊集院五郎海軍大將がキール軍港を視察した際に、案内役を果たしたことから授与されたものであった。

【『青島戦記』94頁】日本側では山田耕三大尉が避難船に乗船して塔埠頭まで行き、さらに膠州からは山東鉄道を使い済南まで同道した。「10月27日の李村ポンプ所附近での戦闘時に、山田大尉はかつての僚友シュテッヒャー(Stecher)大尉に宛てて、絵葉書を折ってドイツ側前線に投げた。深夜、ベヒトルスハイム大尉がその葉書をビスマルク兵營の参謀本部に持ち帰る。…『我々が思いもよらなかった戦闘の中より、心からの挨拶を送る。わが友に神のご加護のあらんことを! 山田大尉』と記されており、総督のテーブルの周囲でどっと笑いが生じた」

【『Die Helden von Tsingtau』140頁】習志野時代の1919年3月5日に開催された「朗読の夕べ」では、ハイメンダール少尉とメンデルスゾーンの歌曲を二重唱した。また5月24日の習志野合唱協会による「歌曲の夕べ」では、ゲーテの詩になるレーヴェ作曲の「魔王」を独唱し、またエンスレ、ハイメンダール及びヴィーダーの四人でシュヴァーベン民謡の「選ばれし者」を四重唱し、メンデルスゾーンの「夕べの歌」をエンスレと二重唱した。その他演劇にも出演した。(859: 福岡→習志野)

491) Maurer (マウラー), Werner: 海軍野戦砲兵隊・海軍中尉。[要塞車廠第1次指揮官]。松山時代の1915年12月、製菓所を設立する際に中心的役割を果たし、これが後の板東での製菓・製

- パン所 (ゲー・バー) に繋がった。また山越の講習会では軍事学を講じた。(3012: 松山→板東)
- 492) Maus (マウス), Karl: 海軍砲兵中隊・2等水兵。久留米時代の1917年1月28日、W. アンドレーアを仲間18人で殴打し、傷害罪により1月の懲役刑を受けた。(3535: 熊本→久留米)
- 493) May (マイ), Oskar: 海軍歩兵第3大隊第6中隊・2等歩兵。[商社員]。開戦前、広東近くの英仏共同租界沙面島でバルト(Barth)と一時期一緒であったが、バルトとは別の商社に勤めていた。板東収容所でもバルトとは一緒になった。板東近くの坂西農業学校で、フェルヒナロフスキー (Felchnerowski) およびルードルフ【Karl Rudorffか、あるいは Walter Rudolphか?】の三人で体操の実地指導をした。第2次大戦中にベルリンで偶然バルトに出会ったという。その兄は中国人女性と結婚して二人の娘があったが、その内の一人ヘレーネ・マイ (Helene May) は東京のドイツ人の間で有名だった。【《Als deutscher Kaufmann in Fernost》, S.41】1989年2月、娘のエーリカは夫と25歳になる息子を伴ってかつての板東収容所を訪問した。【横田『板東俘虜収容所長 松江豊寿』134頁】(3030: 松山→板東)
- 494) Maye (マイエ), Erich: 海軍膠州派遣砲兵大隊第3中隊・1等砲兵。徳島時代の1916年10月、バル、ペーマー、フィッシャー、グレックナー、ヘフト、ライポルトの7名で徳島市の円藤鉄工所に鑄造等の労役に派遣された。1日8時間、賃金・期間は不明。(4229: 大阪→徳島→板東)
- 495) Meckel (メッケル), Heinrich: 海軍歩兵第3大隊第7中隊・2等歩兵。「ドイツ兵墓碑」の建設に際して石積み工事を担当した。(2001: 丸亀→板東)
- 496) Mehlis (メーリス), Peter (-1919): 海軍東亜分遣隊第1中隊・2等歩兵。1919年1月31日習志野で死亡。(157: 東京→習志野)
- 497) Meissner (マイスナー), Kurt (1885-1976): 海軍歩兵第3大隊第6中隊・2等歩兵。[イルチス砲台]。父親はハンブルクの出版社主で、カール・マルクスの著書を初めて出版したことで知られるオットー・マイスナーであった。ハンブルク大学で学んだ後1906年、ジーモン・エーヴェルト商会の日本駐在員として来日、20歳だった。滞日8年余の時点で応召し、日本の最後通牒が発せられた8月15日に青島に到着した。日本語は堪能で、当初は松山の大林寺に収容され、そこの収容所講習会で日本語の講師を務めた。板東では本部主計事務室で松江所長の通訳をした。板東収容所内印刷所から『日本語日常語教科書』、『日本地理』、『日本日常語授業』を出した。大戦終結後も日本に滞在し、神田伯竜の講談で知られた『阿波狸合戦』等を独訳し、他に『日本におけるドイツ人の歴史』の著作もある。1920年から1945年まで25年間、OAG (ドイツ東洋文化研究協会) の指導的な地位にあった。1963年秋帰国して、郷里ハンブルクに帰った。(3025: 松山→板東)
- 498) Mengeringhausen (メンゲリングハウゼン), Heinrich (-1915): 海軍歩兵第3大隊第2中隊・伍長。1915年2月7日青島で死亡、青島欧人墓地に埋葬された。(4664: なし)
- 499) Menke (メンケ), Eduard: 総督府・海軍2等筆記。板東時代、板東クリケット協会「壮年」の主将を務めた。(3040: 松山→板東)
- 500) Merchel (メルヒェル), Friedrich: 海軍歩兵第3大隊第2中隊・2等歩兵。板東時代、公会堂での工芸品展に木製のダックスフント及び農場を制作・出品した。(1988: 丸亀→板東)
- 501) Merck (メルク), Karl: 海軍歩兵第3大隊機関銃隊・予備陸軍少尉。戦闘の初期にはシュリック (Schlick) 中尉とともに、外方の前線陣地を守った。1917年8月、ニューヨーク市のメルク商会から、メルク宛に200円の金券交付方の依頼があった。メルクには頻繁に送金があった。久留米時代は演劇活動で、イブセン作『国民の敵』等3演目全てに女役で出演した。(3526: 熊

本→久留米)

- 502) Metz (メッツ), Heinrich : 海軍膠州派遣砲兵大隊・2等砲兵。1919年11月29日付けの妹宛の絵葉書が現存している。それには「愛する妹へ 戦争が終わって、自由になれる日が近づいてきました。帰還前にもう一度美しい日本の絵葉書をおくりたい。…」等のことが書かれている。【『ドイツ兵士が見たNARASHINO』37頁】(4414:熊本→大分→習志野)
- 503) Meutzner (モイツナー), Walther : 海軍歩兵第3大隊4第中隊・予備副曹長。習志野時代、1919年3月5日に開催された「朗読の夕べ」でロイターとタルノーの詩を朗読した。(4406:熊本→大分→習志野)
- 504) Meyer (マイアー), Christoph : 海軍歩兵第3大隊第5中隊・2等歩兵。板東収容所内のタパタオではリスト(List)と共同で卵、キャンデー、果物、野菜などを売る店を営んだ。(3021:松山→板東)
- 505) Meyer (マイアー), Constantin : 海軍歩兵第3大隊予備榴弾砲兵隊・後備伍長。習志野時代、1919年3月5日に開催された「朗読の夕べ」で、ハンス・オストヴァルトの「レーバルト クルケルト ーグログの平和」を朗読した。また習志野劇場による「トーマの夕べ」では、トーマ作の1幕物田舎茶番劇『一等車』に主役の商人役で出演した。(3522:熊本→久留米→習志野)
- 506) Meyer (マイアー), Eduard : 海軍野戦砲兵隊・予備中尉。松山時代、山越の収容所講習会で中国語の講師を務めた。(3013:松山→板東)
- 507) Meyermann (マイヤーマン), Bruno : 海軍歩兵第3大隊・予備中尉。[測候所長]。熊本収容所時代の1915年3月、天津から夫人と家族の入国申請があり許可された。久留米時代、マイヤーマン夫人は国分村浦川原の森新別荘にリーデルシュタイン夫人と一緒に住んだ。子供が二人いた。1918年8月7日、マイヤーマンはコッペ中尉、ガウル中尉等71名とともに板東に移送された。その際夫人はコッペ夫人、ガウル夫人とともに避暑のため箱根で過ごした。(3507:熊本→久留米→板東)
- 508) Michelmann (ミツヒェルマン), Heinrich : 海軍歩兵第3大隊工兵中隊・2等工兵。久留米時代は演劇活動で、モーザー及びミンク作の笑劇『第六感』等11演目に、主として女役で出演した。(3527:熊本→久留米→板東)
- 509) Millies (ミーリエス), Hans (1883-1974) : 海軍膠州派遣砲兵大隊第5中隊・後備2等軍楽手。ベルリンに生まれた。ベルリンでヴァイオリンをヨーゼフ・ヨアヒムに学んだ後、上海共同租界オーケストラのコンサートマスター兼副指揮者に就いた。パウル・エンゲルはその楽団員であった。1914年12月15日、在上海総領事から外務大臣宛に、上海租界の代表から、指揮者ミーリエスとその楽団員であるエンゲル、ガーライス及びプレフェナーは非戦闘員なので解放せよとの申し入れがあったが、軍籍があることから不許可になった。習志野時代の1917年10月31日、ユーバーシャール(Ueberschaar)との共同で「宗教改革400年記念の夕べ」を主催した。二部構成の音楽会と言えるものであるが、合間に「1517年から1917年のドイツ人」の題のユーバーシャールによる講演もあった。「ミーリエス楽団」を結成し、1919年3月9日には「ハンス・ミーリエス・コンサート」を開いた。演奏曲目は、ベートーヴェン『ヴァイオリン協奏曲』(ピアノ伴奏:ハイメンダール少尉)、サン・サーンス『序奏とロンド・カプリチオーソ』(ピアノ伴奏:アルフォンス・ヴェルダール2等歩兵)、シューマン『トロイメライ』、シューベルト『アヴェ・マリア』、サラサーテ『チゴイネルヴァイゼン』(以上のピアノ伴奏:ヴェーデル(Wedel)少佐)であった。宣誓解放されての帰国後、キールやリュベックの交響楽団でコンサートマスターを務めたが、リュベックでは若き日のフルトヴェングラーの下でも活動した。1925年音楽学校を設立し、1933年には州立音楽学校の校長となった。リュベックに

- 没した。【この項は、息子のハンス・ミーリエス氏（父親と同名）から直接情報を得た坂本永氏（習志野市教育委員会）からの教示による】（1335：福岡→習志野）
- 510) Milz (ミルツ), Josef : 海軍歩兵第3大隊第7中隊・2等歩兵。板東時代、収容所で俘虜相手の風呂屋を開業した。収容所の東北隅の空き地で、間口三間、奥行四間の平屋建て。休息所、脱衣場、浴場、釜焚場に区画し、建築費は諸器具を含めて約1200円であった。シャワー一回六銭六厘で、アルサス出身の二人をマッサージ師として雇っていた。1919年5月22日、火災で全焼した。損害は約2000円に及んだといわれる。【『日本人とドイツ人』209頁】（1996：丸龜→板東）
- 511) Mittag (ミッターク), Ernst : 海軍歩兵第3大隊第5中隊・2等歩兵。9月28日、李村で日本軍に投降して俘虜となり、久留米収容所に送られた。(612：久留米)
- 512) Mladeck (ムラデク), Kurt : 海軍歩兵第3大隊第6中隊・予備伍長。板東時代の1918年6月14日、「シベリア」と題して講演した。(3023：松山→板東)
- 513) Modde (モッデ), Friedrich : 海軍膠州派遣砲兵大隊・予備海軍砲兵少尉。〔第11及び第11 a 砲台指揮官〕。当時年齢は40代前半であった。福岡時代の1915年11月20日に収容所から逃亡した。自称米国人フランク・ダヴェルミラーを装ったが、関釜連絡船上で嫌疑をかけられ拘束、22日に福岡収容所に護送された。(1316：福岡→習志野)
- 514) Mohr (モーア), Bernhard : 海軍歩兵第3大隊・予備少尉。松山時代、その所持するタイプライターは『陣営の火』の原稿打ち込みに終日活動した。ミュラー少尉と共同でビール、サイダーの空き箱、空き瓶や竹で木製ポンプを組み立てて、來迎寺収容所前の松田池から配水して噴水をこしらえた。また新案の体操18種を考案した。(3008：松山→板東)
- 515) Mohr (モーア), Dr. jur. Friedrich Wilhelm (1881-) : 海軍歩兵第3大隊・予備歩兵少尉。ライン河畔ノイヴィート (Neuwied) 郡のエンゲルス (Engers) に生まれた。1895年からノイヴィートのギムナジウムに通い、1903年から7学期間ボン、ベルリン、マールブルク大学で法律を勉強した。ベルリンでは2年間中国語を学び、修得した。1906年9月、カッセルの地方上級裁判所の1審判事補試験に合格し、その年の10月1日、ケルンのライン第5師団第65歩兵連隊に1年志願兵として応召した。1907年4月1日、ヴィルヘルムスハーフェンの海軍歩兵第3大隊本部に配属された。さらに同年4月26日膠州へ派遣され兵役義務終了後、膠州総督府の司法官試補兼通訳官となる。1911年に『膠州保護地便覧』(《Handbuch für das Schutzgebiet Kiautschou》, Tsingtau 1911) を編纂・出版した。1912年3月予備歩兵少尉に編入され、1913年6月4日財政通訳官に任じられた。同年6月6日、マールブルク大学での博士取得口述試問に合格。学位論文は『中国における諸租借地』(《Die Pachtgebiete in China》, Leipzig 1913) であった。その後総督府勤務を離れて、省都済南所在の中国山東省製塩公司監督官となった。久留米収容所時代、夫人は国分村浦川原の森新別荘に住んだ。大戦終結して帰国後、1920年から1921年まで法務省のベルリン移住局に勤務し、1922年からはハンブルク＝ブレーメン東亜協会の事務局長を務めた。(3508：熊本→久留米→習志野)
- 516) Moll (モル), Karl : 海軍歩兵第3大隊第1中隊・2等歩兵。1919年10月25日、山嘉商店からの紡績、織物、鉱山、開墾、山林等に関する技術を持つ俘虜の照会にあたって、久留米収容所ではカール・モルを紹介した。(593：久留米)
- 517) Moeller (メラー), Gustav : 海軍歩兵第3大隊・予備副曹長。〔湛山堡壘〕。〔商人〕。板東時代、ゴルトシュミットに代わって『バラック』編集部員になった。また公会堂で開催された絵画と工芸品展覧会のポスターとパンフレット部門では、縦横無尽の活躍をした。またE. ベーアの『三つの童話』(Drei Marchen) の装丁をし、ケーニヒの『板東俘虜収容所漫筆』の挿絵

- を描いた。(3035: 松山→板東)
- 518) Möller (メラー), Karl: 海軍歩兵第3大隊第7中隊・上等歩兵。板東時代、公会堂での工芸品展に楽器のツイターを制作・出品した。(1994: 丸亀→板東)
- 519) Möller (メラー), Paul: 国民軍・卒。1915年9月20日、青島から大阪収容所に移送された。(4691: 大阪→似島)
- 520) Möllers (メラース), Hermann: 海軍歩兵第3大隊第2中隊・2等歩兵。9月28日、浮山近くの巫山で日本軍に投降して俘虜となり、久留米収容所に送られた。久留米の演劇活動では、喜劇『クラブチェアに座って』に出演した。(599: 久留米)
- 521) Moltrecht (モルトレヒト), Paul: 海軍歩兵第3大隊第2中隊・軍曹。板東時代、収容所内に「モルトレヒト合唱団」(60名)を結成して指揮者を務めた。1917年5月26日、マンドリン合奏団第1回コンサートを開催した。(1982: 丸亀→板東)
- 522) Moog (モーク), Fritz: 海軍歩兵第3大隊第2中隊・上等歩兵。9月28日、浮山近くの巫山で日本軍に投降して俘虜となり、久留米収容所に送られた。(598: 久留米)
- 523) Moos (モース), Nikolaus: 海軍歩兵第3大隊第2中隊・2等歩兵。9月28日、浮山近くの巫山で日本軍に投降して俘虜となり、久留米収容所に送られた。(600: 久留米)
- 524) Morawek (モラヴェク), Rudolf Edler v. (1882-): オーストリア野砲兵第17連隊・陸軍砲兵大尉(卿)。シベリアの収容所から脱走して、中国、アメリカを経由して本国に帰ったが、やがて満州のハルビン市内を流れる松花江の鉄橋爆破の任務に就いた。資金の10万円は上海のオーストリア領事館に預けられ、横浜港に入ったところで逮捕された。1915年2月23日に行われた第2回目の尋問調書が残されている。アルテルト、エステラー、シャウムブルクの4人で大阪と似島の両収容所から二度にわたって脱走を企て、4人は1ヶ月から2年半の刑を受けた。(4711: 大阪→似島)
- 525) Mros (ムロース), Heinrich: 国民軍・卒。[ホテル経営]。1915年9月20日、青島から大阪収容所に送られた。妻は大戦終結まで上海で暮らした。(4692: 大阪→似島)
- 526) Müller (ミュラー), F.M.Eugen: 国民軍・卒。1915年9月20日、青島から大阪収容所に移送された。(4693: 大阪→似島)
- 527) Müller (ミュラー), Hermann: 海軍歩兵第3大隊第7中隊・伍長。板東時代、丸亀蹴球クラブの役員を務めた。(1991: 丸亀→板東)
- 528) Müller (ミュラー), Otto: 海軍歩兵第3大隊第3中隊・2等歩兵。久留米の演劇活動では、ガイベル作の『アンドレーア親方』他1演目出演した。(604: 久留米)
- 529) Müller (ミュラー), Otto Friedrich (-1914): 海軍歩兵第3大隊第4中隊・後備上等兵。1914年12月27日青島で死亡、青島欧人墓地に埋葬された。(4661: なし)
- 530) Mueller (ミュラー), Wilhelm: 海軍野戦砲兵隊・予備少尉。[第3a 中間地掃射砲台指揮官]。松山収容所ではシュテッヒャー(Stecher)大尉から日本語を習った。またB.モア(Mohr)予備少尉とともにビール、サイダーの空き箱、空き瓶や竹で木製ポンプを組み立てて、來迎寺収容所前の松田池から配水して噴水をこしらえた。板東では、公会堂での絵画と工芸品展覧会にモノクローム画部門に「日本の風景」、その模写の部に「ヒンデンプルクの顔」等を出品した。また同少尉の企画によるルンプ(Rumpf)少尉とホーン(Hohn)2等砲兵の住宅モデルは、収容所賞第3位に輝いて賞金3円を獲得した。1918年8月に完成した「ドイツ兵墓碑」の設計を担当した。(3015: 松山→板東)
- 531) Müllerskowski (ミュラースコフスキー), Friedrich: 海軍歩兵第3大隊飛行部隊・海軍少尉。青島独軍保有の飛行機二機の内、「E第1号(旧式ル式)」を操縦したが、8月2日墜落して重

- 傷を負う。青島陥落まで総督府衛戍病院に入院していた。(3520: 熊本→久留米)
- 532) Muendel (ミュンデル), Harry: 海軍膠州派遣砲兵大隊・海軍少佐。ボーデッカー少佐の後を受けて、砲艦ヤーグアル艦長となる。大阪及び似島収容所の俘虜代表を務めた。(3978: 大阪→似島)
- 533) Mussmann (ムスマン), Heinrich: 海軍歩兵第3大隊第2中隊・2等歩兵。板東時代、公会堂での工芸品展にマンドリンを制作・出品した。(1986: 丸亀→板東)
- 534) Muttelsee (ムッテルゼー), Wilhelm: 海軍歩兵第3大隊第4中隊・2等歩兵。9月28日、浮山近くの巫山で日本軍に投降して俘虜となり、久留米収容所に送られた。1918年8月7日板東に移送された。詩画集『鉄条網の中の四年半』のスケッチを担当し、またヒュルゼニッツ (Hülsewitz) と共同で『1920年用故郷カレンダー』を制作した。(611: 久留米→板東)
- 535) Nack (ナック), Kurt: 海軍歩兵第3大隊第3中隊・上等歩兵。久留米時代に収容所のコンサートでは、メンデルスゾーンの四重奏曲等の演奏で活躍した。また演劇活動では、『二つの条件』を創作して自ら演出した。(3542: 熊本→久留米)
- 536) Nagel (ナーゲル), Georg: 海軍砲兵中隊・2等水兵。久留米時代は演劇活動で、ガーデベルク作の笑劇『シメク家』等4演目に女役で出演した。また『久留米収容所俘虜文集』の印刷に際しては、シュルツ (W. Schulz) と共に協力した。宣誓解放された。(3552: 熊本→久留米)
- 537) Nagel (ナーゲル), Richard: 海軍歩兵第3大隊・上等歩兵。大分時代の1918年2月10日、ダンデルトおよびキュールボルンと大分の遊廓「春日楼」に登楼して、芸者と夜を過ごした咎で禁固30日に処せられた。当時26歳だった。(4416: 熊本→大分→習志野)
- 538) Naroska (ナロスカ), Gustav: 海軍歩兵第3大隊第2中隊・2等歩兵。9月28日、浮山近くの巫山で日本軍に投降して俘虜となり、久留米収容所に送られた。(628: 久留米)
- 539) Nassuth (ナスート), Georg: 海軍膠州派遣砲兵大隊第3中隊・砲兵伍長。板東時代の1919年3月26日、「室内楽の夕べ」が開かれてシューベルトの五重奏「鱒」が演奏された。その折りナスートはコントラバスを担当した。他は、ガルスター海軍中尉のヴァイオリン、デムラー海軍大尉のチェロ、クラインシュミット予備少尉のヴィオラ、クラーゼン伍長のピアノという編成であった。(4239: 大阪→徳島→板東)
- 540) Neumaier (ノイマイアー), Jacob: 海軍膠州派遣砲兵大隊第4中隊・1等砲兵。[イルチス砲台]。8月27日早朝、日本艦隊の出現を最初に目撃して報告した。1919年12月、ドイツへ帰国するために乗船した喜福丸は、青島在住の俘虜家族を乗せるために青島に寄港した。ノイマイアーは万年山と名を変えたかつてのビスマルク山や欧人墓地等変貌した青島の街を五年振りに歩き、その折りに昔からあった高橋写真館に立ち寄った。ドイツ人と親しかったことから、日本軍にあらぬ嫌疑を掛けられたりしたのではとノイマイアーは気遣った。しかし店主はばつの悪そうな顔をした。その背後に何か不誠実なものを感じ取ったノイマイアーは急ぎ店を出たという。【『The German Prisoners-Of-War in Japan, 1914-1920』107頁】(1368: 福岡→大分→習志野)
- 541) Nickel (ニッケル), Otto: 海軍歩兵第3大隊機関銃隊・副曹長。青島でカール・ユーハイムの結婚式の証人をつとめた。当時30歳で子どもが二人いた。青島陥落後、ニッケル夫人はユーハイム家に身を寄せた。日本人兵士三人がどかどかと家に入り込んできたが、危害は加えずニッケルの2歳の子供に、角のある可愛らしい、色とりどりのきれいな見知らぬお菓子を差し出した。ユーハイム夫人は機雷を連想して、毒でも入っているかもしれないと立ちはだかって拒んだ。兵士は幾つか口に入れて食べて見せ、にっこり笑ってそのお菓子を残して立ち去った。後で夫人達が食べてみると、甘いおいしいお菓子で、それは「金平糖」であった。ニッケルは久



- 留米の演劇活動で、スコヴァネク作『山番小屋で』等21演目に出演し、またビヨルソン作『新婚の二人』等6演目の演出もするなどの活躍をした。(636: 久留米)
- 542) Niederau (ニーデラウ), Peter: 海軍歩兵第3大隊第1中隊・2等歩兵。9月28日、浮山近くの巫山で日本軍に投降して俘虜となり、久留米収容所に送られた。(627: 久留米)
- 543) Nielsen (ニールゼン), Hans: 海軍歩兵第3大隊第7中隊・上等歩兵。ヴェルサイユ講和条約締結後の1919年8月26日、出身地の帰属を問う州民投票に参加の為、ヤスペルゼン(Jaspersen)、ブロイニンガー(Braeuninger)、カルステンズ(Carstens)、フライエンハンゼン(Freyenhansen)、ハンゼン(Hansen)、イエプセン(Jepsen)の6名のシュレースヴィヒ出身者とともに一足先に帰国した。(2008: 丸亀→板東)
- 544) Nitschke (ニーチュケ), Richard: 海軍歩兵第3大隊第1中隊・伍長。9月28日、浮山近くの巫山で日本軍に投降して俘虜となり、久留米収容所に送られたが、負傷のため当初は久留米衛戍病院に収容された。収容所の音楽活動では、主として室内楽の演奏で活躍した。(618: 久留米)
- 545) Nöckler (ネックラー), Gustav: 海軍膠州派遣砲兵大隊第5中隊・2等砲兵。久留米時代は演劇活動で、ハウプトマン作の喜劇『同僚クランプトン』に出演した。(1372: 福岡→久留米)
- 546) Nohl (ノール), Heinrich: ヤーグアル乗員・2等水兵。郷里ゾーリンゲンのグライフラートに住む妹に宛てた、富士山をあしらった絵葉書による1917年8月30日付けの誕生祝いの便りが残っている。(172: 東京→習志野)
- 547) Noltemeyer (ノルテマイヤー), Erich: 海軍歩兵第3大隊第2中隊・上等歩兵。板東時代、工芸品展に出品したヨット製作ではその労作が評価された。(2005: 丸亀→板東)
- 548) Noppeney (ノッペナイ), Philipp (-1919): 海軍膠州派遣砲兵大隊第4中隊・2等砲兵。1919年1月28日、スペイン風邪により習志野で死亡。(1369: 福岡→大分→習志野)
- 549) Nordmann (ノルトマン), Franz: 総督府経理部・2等筆記。松山時代、大林寺の講習会でシュトルツェ=シュライ方式の速記を講じた。(3051: 松山→板東)
- 550) Nottbusch (ノットブッシュ), Wilhelm: 海軍歩兵第3大隊第4中隊・2等歩兵。[パン職人マイスター]。(4567: 大阪→似島)
- 551) Nowak (ノーヴァク), Karl (-1917): 海軍東亜分遣隊第3中隊・2等歩兵。1917年2月10日習志野で死亡。(168: 東京→習志野)
- 552) Oberhauser (オーバーハウザー), Max: 海軍歩兵第3大隊第2中隊・2等歩兵。9月28日、浮山近くの巫山で日本軍に投降して俘虜となり、久留米収容所に送られた。(640: 久留米)
- 553) Odermann (オーダーマン), Albert: 海軍歩兵第3大隊工兵中隊・予備陸軍工兵少尉。[山東鉱山会社技師長]。青島開城後の実務協議にドイツ側委員として加わった。久留米時代の1915年10月31日、消灯後に蠟燭を灯して衛兵及び宿直将校ともめる。翌11月1日重禁固30日の処罰を受けた。(3561: 熊本→久留米)
- 554) Öhler (エーラー), Walther: 海軍砲兵中隊・海軍少尉。[モルトケ山8・8糎速射砲指揮官]。8・8糎速射砲は日本軍に長いこと探知されずにいたが、11月7日未明についに発見され、集中砲火を浴びて破壊された。(177: 東京→習志野)
- 555) Oellig (エリッヒ), Josef: 海軍東亜分遣隊第2中隊・2等歩兵。習志野時代の1919年5月24日、習志野合唱協会の「歌曲の夕べ」ではマルフケ、ハム及びシェーファーの四人でクローマー作の「森の泉のほとり」を四重唱した。(176: 東京→習志野)
- 556) Oelweiner (エールヴァイナー), Ludwig: カイゼリン・エリーザベト乗員・1等水兵。久留米時代は演劇活動で、コツェブー作の喜劇『ドイツの小都市市民』等3演目に出演した。(3564:

熊本→久留米→習志野)

- 557) Onodi (オーノデイ), Michael (-1919): カイゼリン・エリーザベト乗員・2等水兵。ハンガリー人。1919年9月19日、スペイン風邪により青野原で死亡、姫路軍人墓地に埋葬された。(2138: 姫路→青野原)
- 558) Ooppel (オッペル), Wilhelm (-1918): 海軍歩兵第3大隊第2中隊・後備2等歩兵。1918年11月23日名古屋で死亡、軍人墓地に埋葬された。(2641: 名古屋)
- 559) Orlob (オルロップ), Philipp: 海軍歩兵第3大隊第2中隊・副曹長[教師]。板東時代、工芸品展にオイルナー (Eulner) 及びルートヴィヒ (Ludwig) と共同で、ドイツ軍が西部戦線で捕獲した戦車の模造品を制作・出品した。(2010: 丸亀→板東)
- 560) Oertel (エルテル), Adolf: 海軍砲兵中隊・2等水兵。[理髪師]。(178: 東京→習志野)
- 561) Oertel (エルテル), Ferdinand: 国民軍・卒。1915年9月20日、青島から大阪収容所に移送された。(4694: 大阪→似島)
- 562) Ortlepp (オルトレップ), Theodor: 要塞構築部・築城曹長。久留米時代に演劇活動で、ケルナー作の悲劇『トニー』等3演目の演出を担当し、また14演目に出演した。(3563: 熊本→久留米)
- 563) Oster (オスター), Franz: 海軍歩兵第3大隊飛行部隊・飛行士。[工作機械工場経営・民間飛行家]。青島の小港南西で発電所の隣、食肉加工所北に飛行機工場及び格納庫を所有していた。所有する「70馬力メルツェス旧式ル式」は、日独戦争直前に総督府に買上げられた。8月27日、故障していた飛行機を修理して自ら操縦するが機体は墜落して、破損したが本人は無事であった。大分時代、命令違反・反抗で禁固20日間に処せられた(年月日は不明)。妻は大戦終結まで青島に留まった。大戦終結後、青島に戻り工作機械会社を再興した。(4421: 熊本→大分→習志野)
- 564) Othmer (オートマー), Dr. Wilhelm: 海軍歩兵第3大隊予備榴弾砲兵隊・予備陸軍少尉。[独中大学教授・中国語学者]。大阪収容所に俘虜第一陣として収容されるや、多くの俘虜がまだ途方に暮れている最中、ただちに中国語の研究を続行した。このことは多くの俘虜達に刺激を与え、やがて次々に講習会が開催されるようになり、大阪収容所はさながら「学校収容所」になったと、収容所で一緒だったベルゲマン (Bergemann) 中尉は書き記している。【《Du verstehst unsere Herzen gut》63頁より】オートマーは講習会で教えるだけではなく、自らも学習の手本を示すべく日本語の勉強に打ちこんだ。小学校の国語読本から初めて、平仮名・片仮名を覚え、中国語の素養を生かして『漢字林』から漢字を習得し、『万葉集』にまで及んだ。大阪収容所、やがて移った似島収容所は、青島を中心とした中国で商売を営んでいた俘虜が多かったが、そうした商人達は折に触れオートマーの部屋に種々の相談に訪れた。似島時代のユーハイムもその一人で、広島物産陳列館での俘虜作品展示即売会にバウムクーヘンを出品するよう勧められ、かつ励まされた。オートマー自身は講演、研究及び勉強以外では、似島でもっぱら野菜作りに励んだ。妻と二人の子は大戦終結まで青島に留まった。(4005: 大阪→似島)
- 565) Oetmann (エートマン), Arthur (1889-): 海軍東亜分遣隊第3中隊・予備上等歩兵。「15歳迄バルメンノ実業学校ニアリテ一年志願兵資格試験ニ合格シテ後三年間商業ヲ学ヒタリ、然レ共幼少ヨリ兵役ニ来ル迄親戚ノ農場ニ在リテ農業ニ精通シテ農業ニ趣味深ク俘虜生活中学理的ニ農業ノ各方面ニ就キ研究シタリ、1912年10月1日ヨリ1913年9月30日迄チルニ一年志願兵タリ、羊牧ト養蜂ヲ特技トス」【『北海道移住』より】(1387: 福岡→名古屋)
- 566) Pansing (パンジング), Paul: 海軍歩兵第3大隊第7中隊・副曹長。板東時代、公会堂での工芸品展に、ハイン (Hayn) 副曹長と寄木細工の床と電気の灯る居心地のよさそうな人形部

屋を製作・出品した。（2023：丸亀→板東）

- 567) Pape (パーペ), Otto : 所属部隊不明・後備2等機関兵曹。[鉄道機関士]。似島で死亡（年月日不明）。（4647：大阪→似島）
- 568) Patitz (パーティツ), Friedrich : 国民軍・伍長。[巡查]。元巡查や兵士の中国人スパイに日本軍の偵察をさせた。その際、情報の信憑性を確保するため、常に二人を1日ないしは2日違いでほぼ同じルートを探らせた。二人が出会って相談し、偽の報告をしないようなルートを考えた。二人の情報がほぼ合致すると、報酬として一人1ドルが与えられた。時にはプルーショウ中尉による空からの偵察も、その際の参考にされた。妻と子どもは大戦終結まで青島に留まった。（4574：大阪→似島）
- 569) Patzig (パッツィヒ), Conrad : 海軍膠州派遣砲兵大隊・海軍中尉。[第12砲台指揮官]。イルチス地区の空き別荘にプルーショウ中尉と一緒に住んだ。コック等の中国人使用人を三人雇っていた。（4008：大阪→似島）
- 570) Paulsen (パウルゼン), Arthur : 海軍歩兵第3大隊第1中隊・2等歩兵。久留米の演劇活動では、茶番劇『放り出されて』に出演した。また『久留米収容所俘虜文集』の印刷に携わった。（653：久留米）
- 571) Pauly (パオリー), Karl (-1918) : 海軍歩兵第3大隊第2中隊・軍曹。9月28日に浮山周辺で日本軍に包囲され、グラボウ中尉等60名が俘虜となったが、その折りパオリー軍曹は、11名の部下とともに逃れた。1918年3月26日久留米で死亡。（3567：熊本→久留米）
- 572) Pepperhoff (ペッパーホフ), Wilhelm : 海軍膠州派遣砲兵大隊第5中隊・2等兵曹。久留米時代の1917年11月、ペッパーホフから広東のオランダ領事館宛の信書（私物の被服取り寄せに関する内容）があり、検閲の上久留米から情報局へ転送された。（3596：熊本→久留米→名古屋）
- 573) Perschmann (ペルシュマン), Erich : 海軍歩兵第3大隊第4中隊長・陸軍大尉。[外方陣地部隊右翼陣地]。日本軍による青島包囲以前は、李村街道の守備を任せられ、李村河沿いの下流一帯の守備に当たった。熊本収容所の俘虜代表を務めた。（3569：熊本→久留米）
- 574) Peus (ポイス), Julius : 海軍歩兵第3大隊第2中隊・2等歩兵。9月28日、浮山近くの巫山で日本軍に投降して俘虜となり、久留米収容所に送られた。（659：久留米）
- 575) Pfeiffer (プファイファー), Dr. Heinrich Moritz F. : 海軍歩兵第3大隊参謀本部獣医長・1等獣医。8月1日青島を訪問した福島安正大将の騎馬（蒙古馬）がカーキ色に彩色されていると、騎兵中隊の兵士の間にその真似をすることが流行った。プファイファーは獣医の立場から、彩色は馬にとって良くないと警告したが、誰一人その言に耳を傾ける者はいなかった。【『The Japanese Siege of Tsingtau』205頁より】（3566：熊本→久留米）
- 576) Pflüger (プフリューガー), Georg : 海軍歩兵第3大隊第7中隊・上等歩兵。第2次大戦後の1952年に神戸総領事館が新設されるまで、ラーン (Laan) 等共に一時的に接收されていたドイツ人学校の資産管理に当たった。（2028：丸亀→板東）
- 577) Philippi (フィリップピ), Albert : 海軍東亜分遣隊第1中隊・2等歩兵。10月2日、四房山で俘虜となり久留米収容所に送られたが、負傷のため当初は久留米衛戍病院に収容された。（667：久留米）
- 578) Philipps (フィリップス), Lorenz (1892-1918) : 海軍歩兵第3大隊工兵中隊・2等工兵。1918年11月25日名古屋で死亡、軍人墓地に埋葬された。（2653：名古屋）
- 579) Pieck (ピーク), Werner : 海軍砲兵中隊・予備2等兵曹。久留米時代は演劇活動で、ハウプトマン作の喜劇『同僚クランプトン』他1演目出演した（3586：熊本→久留米）

- 580) Pietzcker (ピーツカー), Hans : 海軍歩兵第3大隊第6中隊・2等歩兵。松山時代、公会堂の日曜講演会で「造船について」及び「魚雷と潜水艦」と題して講演した。板東ではバルクホルン (Barghoorn) と演劇グループを結成し、1917年7月10日にシラーの戯曲『群盗』を上演し、1919年2月18日にはゲーテの『エグモント』上演の演出を担当した。(3064 : 松山→板東)
- 581) Plätschke (プレチュケ), Guido : 海軍歩兵第3大隊予備榴弾砲兵隊・後備伍長。大戦終結後、済南のある中国人大地主と雇用について協議をした。(4423 : 熊本→大分→習志野)
- 582) Pluemmen (プリュンメン), Hermann : 海軍歩兵第3大隊第2中隊・2等歩兵。9月28日、浮山近くの巫山で日本軍に投降して俘虜となり、久留米収容所に送られた。(658 : 久留米)
- 583) Poebel (ペーベル), Fritz : 海軍歩兵第3大隊第3中隊・上等歩兵。久留米時代は演劇活動で、フルダ作の喜劇『二人きりで』等11演目に主として女役で出演した。1919年10月17日の「収容所楽団と四重唱クラブの共演コンサート」で、『さまよえるオランダ人』より「舵取りの歌」等をテノール独唱した。宣誓解放された。(665 : 久留米→板東)
- 584) Pönitz (ペーニッツ), Erich (-1919) : 海軍歩兵第3大隊第4中隊・2等歩兵。1919年8月2日肺結核により久留米で死亡。(3578 : 熊本→久留米)
- 585) Poppeck (ポツペク), Gustav : 海軍歩兵第3大隊第2中隊・2等歩兵。板東時代、公会堂での工芸品展に編み靴下を出品した。(2017 : 丸亀→板東)
- 586) Porsch (ポルシュ), Hermann : 海軍東亜分遣隊第1中隊・2等歩兵。習志野時代の1919年1月8日と9日、収容所で演じられたハウスライターとライマン作の3幕の茶番劇『電話の秘密』に年金生活者の妻役で出演した。また同年10月5日、マルフケのために開催された「謝恩の夕べ」では、二部構成の第二部の演劇でハラーシュタイン作の1幕物茶番劇『射撃手と空クジ』で、料理女の役で出演した。(186 : 東京→習志野)
- 587) Poerschke (ベルシュケ), Hermann : 海軍野戦砲兵隊・2等野砲兵。1916年6月初旬にリープマン (Liebmann) と大阪収容所を脱走したが逮捕され、禁固2年の刑を受けた。同年9月に仮出所した。ポーランド人であったことから後に宣誓解放された。(4571 : 大阪→似島)
- 588) Pospich (ポスピヒ), Friedrich : 海軍膠州派遣砲兵大隊第3中隊・2等砲兵。大阪収容所時代に脱走を企てて逮捕され、1915年7月5日に禁固2年6月に処せられて大阪監獄に収監された。(4016 : 大阪→似島)
- 589) Pötter (ペッター), Karl (-1919) : 国民軍・卒。1915年10月11日付けの俘虜情報局による追加名簿では、収容所先が青島となっている。1916年11月初旬に青島から大阪収容所に送られた。1919年7月(日は不明)似島で死亡。妻のエリーザベトは大戦終結まで青島に留まった。(4695 : 青島→大阪→似島)
- 590) Prahl (プラール), Alfred : 海軍歩兵第3大隊第3中隊・2等歩兵。久留米の演劇活動では、ケルナー作の喜劇『夜番』等6演目に出演した。(662 : 久留米)
- 591) Prashma (プラシュマ), Cains Graf : 海軍野戦砲兵隊・退役陸軍少尉。[要塞車廠第3次指揮官]。[税官吏]。久留米時代、夫人は国分村浦川原の森新別荘に子供二人と住んだ。1918年3月スイス公使宛に、独亜銀行清算に伴い送金された625円は元来妻子宛のものが誤送されたとして、12日転送された。同年8月6日習志野に移送された。(3581 : 熊本→久留米→習志野)
- 592) Prediger (プレーディガー), Karl : 海軍歩兵第3大隊第7中隊・予備副曹長。板東時代、収容所周辺の山林における伐採作業では、午前のクリーマント (Klimant) の後を受けて午後の指揮を執った。(2022 : 丸亀→板東)
- 593) Preiss (プライス), Walter : 海軍砲兵中隊・2等焚火兵。習志野時代の1919年1月8日と9日に収容所で演じられた、ハウスライターとライマン作の3幕の茶番劇『電話の秘密』に女中

- 役で出演した。(194：東京→習志野)
- 594) Prinz (プリンツ), Walter：海軍膠州派遣砲兵大隊第3中隊・砲兵軍曹長。板東時代、砲兵大隊スポーツ協会の役員を務めた。(4248：大阪→徳島→板東)
- 595) Profener (プレーフェナー), Johannes：海軍歩兵第3大隊第4中隊・後備2等歩兵。[上海居留地工部音楽隊員]。1914年12月15日、在上海総領事から外務大臣宛に、上海租界の代表から、指揮者ミーリエスとその楽団員であるエンゲル、ガーライス及びプレフェナーは非戦闘員なので解放せよとの申し入れがあったが、軍籍があることから不許可になった。(4017：大阪→似島)
- 596) Puchert (プッヘルト), Wilhelm (1892-)：海軍東亜分遣隊第2中隊・2等歩兵。名古屋で死亡(年月日不明)、軍人墓地に埋葬された。(1407：福岡→名古屋)
- 597) Pügner (ピュクナー), Robert：海軍歩兵第3大隊第7中隊・後備伍長。板東時代、収容所の合唱団でバスを担当した。(2024：丸亀→板東)
- 598) Pupke (プープケ), Friedrich：海軍歩兵第3大隊第7中隊・2等歩兵。板東時代、工芸品展に自動表示装置付きの雨量測定器を製作・出品した。(2029：丸亀→板東)
- 599) Radtke (ラトケ), Heinrich：所属部隊不明・1等焚火兵。[錠前工]。妻と五人の子は大戦終結まで上海で暮らした。(4582：大阪→似島)
- 600) Rahaus (ラーハオス), Hermann：海軍膠州派遣砲兵大隊第3中隊・予備火工副曹長。徳島収容所内で発行された新聞『徳島新報』(Tokushima Anzeiger) 編集の中心的人物だったと推測されている。板東時代は『バラック』編集部員を務めた。大戦終結して帰国の際、帰国船豊福丸船内でも板東収容所から持参してきた印刷機で、船内新聞『帰国航』(Die Heimfahrt) の編集・発行に励んだ。(4271：大阪→徳島→板東)
- 601) Raket (ラーケト), Reinhold：海軍膠州派遣砲兵大隊第4中隊・掌罐兵曹長。板東時代、工芸品展にホーン(Hohn)と共同で写真の引き延ばし機を製作・出品した。(4269：大阪→徳島→板東)
- 602) Ramin (ラミン), Fritz：海軍膠州派遣砲兵大隊第4中隊・2等砲兵。右上膊部榴散弾弾子盲貫銃創により、大阪陸軍病院に入院した。(4649：大阪→似島)
- 603) Ramin (ラミン), Paul Otto：海軍歩兵第3大隊第7中隊・陸軍中尉。[第3歩兵堡壘指揮官]。11月5日、守備に就いていた堡壘が日本軍の猛攻を受けて崩壊した。(2033：丸亀→大分→習志野)
- 604) Rasenack (ラーゼナック), Wilhelm F.：海軍歩兵第3大隊・予備副曹長。板東時代、公会堂での絵画と工芸品展覧会の肖像画部門に、「水兵Zの肖像」を出品して一等賞を受賞し、また「ドイツ騎士団員」等の水彩画も多く出品した。(3083：松山→板東)
- 605) Rauh (ラオ), Hans (-1914)：海軍膠州派遣砲兵大隊第5中隊・1等砲兵。1914年12月8日青島で死亡、青島歐人墓地に埋葬された。(4660：なし)
- 606) Rawengel (ラーヴェンゲル), Bruno：海軍歩兵第3大隊・海軍中主計(中尉相当)。(671：久留米)
- 607) Raydt (ライト), Ernst：海軍東亜分遣隊参謀本部・予備副曹長。習志野時代の1919年8月12日、習志野演劇協会によるベネディクス作の喜劇『親戚の情愛』に子ども役で出演した。(201：東京→習志野)
- 608) Raydt (ライト), Felix：海軍歩兵第3大隊第2中隊・副曹長。9月28日、浮山近くの巫山で日本軍に投降して俘虜となり、久留米収容所に送られた。久留米の演劇活動では、喜劇『クラブチェアに座って』に出演した。(683：久留米)

- 609) Reieke (ライエケ), Willi: 測量艦プラーネット乗員・海軍中主計(中尉相当)。1914年10月9日、西カロリン群島のヤップ島で俘虜となったが11月1日宣誓解放された。(4665: なし)
- 610) Reiher (ライアー), Engelbert: 海軍歩兵第3大隊第1中隊・2等歩兵。1917年1月16日、居室の床板を切って私物の倉庫としたために、軍法会議で懲役3ヶ月の刑を受け、福岡監獄に収監された。(682: 久留米)
- 611) Reimer (ライマー), Balthasar: 海軍歩兵第3大隊第2中隊・2等歩兵。9月28日、浮山近くの巫山で日本軍に投降して俘虜となり、久留米収容所に送られた。(685: 久留米)
- 612) Reinhardt (ラインハルト), Josef: 国民軍・卒。1915年9月下旬に青島収容所に収容され、1916年10月下旬青島から大阪に移送された。(4696: 青島→大阪→似島)
- 613) Reinhardt (ラインハルト), Kurt: 海軍歩兵第3大隊第7中隊・副曹長。板東時代、1918年4月9日、16日及び30日の3回に分けて、「東ヨーロッパの歴史」と題して講演した。(2042: 丸亀→板東)
- 614) Reinking (ラインキング), Hans: 海軍歩兵第3大隊第3中隊・2等歩兵。板東時代、収容所内のタバタオで製本屋を営んだ。公会堂での工芸品展には、部分的に水彩画による装飾をほどこしたアルバムを出品した。(2039: 丸亀→板東)
- 615) Renkel (レンケル), Paul: 海軍膠州派遣砲兵大隊第4中隊・砲兵軍曹長。板東時代、砲兵大隊スポーツ協会の役員を務めた。(4267: 大阪→徳島→板東)
- 616) Rensing (レンジング), Heinrich: 海軍歩兵第3大隊第6中隊・2等歩兵。板東時代、板東ホッケー協会のチームのメンバーだった。(3077: 松山→板東)
- 617) Rettermeyer (レッターマイアー), Sebastian: 海軍歩兵第3大隊第2中隊・2等歩兵。板東時代、スポーツクラブでレスリングをした。(2038: 丸亀→板東)
- 618) Rettig (レッティヒ), Hans: 海軍歩兵第3大隊・副曹長。久留米時代は演劇活動で、F.及びシェンタン作の笑劇『ザビニ人の娘たちの誘拐』等13演目に出演し、内1回は女役で出た。(3621: 熊本→久留米)
- 619) Richardt (リヒャルト), Julius: 国民軍・2等兵曹。[運送業]。青島では運送業を営業し、青島郊外の労山(標高1130m)、プリンツ・ハインリヒ山等近郊へのタクシー、ハイヤーによる観光業も行っていた。(4579: 大阪→似島)
- 620) Rieckert (リーケルト), Fritz: 参謀本部幕僚。[総督府築港土木部長]。(1413: 福岡→習志野)
- 621) Riedel (リーデル), Georg Erich (1895-1917): 海軍歩兵第3大隊第6中隊・2等歩兵。[湛山堡壘]。[民間客船コック]。郷里のブラウエンでコックの修業をした後、1912年から船のコックとして世界中を回った。ロイド汽船会社の客船プリンツ・アイテル・フリードリヒのコックとして乗り込んでいた時、大戦が勃発して船は軍に徴用され、青島で志願兵として応召した。ビスマルク兵営でコックの任に就き、やがてイルチス兵営に移った。更に10月中旬から湛山堡壘の第6中隊の厨炊所に移った。松山時代は収容所の士官食堂で仕えた。【『デイ・バラック』152頁より】1917年12月6日板東で死去。『バラック』12号は彼の追悼記事を載せた。【板東関連文献では、Kurt Erich Riedelとなっている】(3072: 松山→板東)
- 622) Riedelstein (リーデルシュタイン), Herbert von: カイゼリン・エリーザベト乗員・退役中尉。1916年2月27日、鬱病で久留米衛戍病院に入院した。1917年1月20日、東京で開催された文部省主催の教育展覧会に、画家でもあるリーデルシュタインの絵が他の60点余とともに出品された。久留米時代、夫人は国分村浦川原の森新別荘に住み、1917年8月の夏はブラシュマ夫人と軽井沢で過ごした。なお、10月にブラシュマ夫人とともに家財の保険契約をしたことが対

- 敵取引禁止令違反となり、告発されたが起訴猶予となった。1918年8月6日習志野に移送された。(3640:熊本→久留米→習志野)
- 623) Riedinger (リーディングー), Gunther: 海軍歩兵第3大隊第5中隊・陸軍中尉。中間陣地守備にあっていたが、第2歩兵堡壘攻防の戦闘にも参加した。(4029:大阪→似島)
- 624) Riesener (リーゼナー), Wilhelm: 海軍歩兵第3大隊第1中隊・上等歩兵。久留米の演劇活動では、リンダウ作『もう一人の男』に出演した。宣誓解放された。(673:久留米)
- 625) Risch (リッシュ), Karl: 海軍歩兵第3大隊第7中隊・2等歩兵。板東時代の1918年9月、「板東健康保険組合」の代表理事に選ばれた。(2048:丸亀→板東)
- 626) Ritthausen (リットハウゼン), Otto: 所属部隊・階級不明。[不動産鑑定士・損害保険査定士]。大戦終結後は青島に戻り、不動産売買及び火災保険を扱う事務所を経営した。(4583:大阪→似島)
- 627) Rittmüller (リットミュラー), Fritz: 国民軍・卒。[独亜銀行行員]。1915年9月20日、青島から大阪収容所に移送された。大戦終結後は青島に戻り独亜銀行に復帰した。(4697:大阪→似島)
- 628) Robens (ローベンス), Johann: 海軍東亞分遣隊第1中隊・上等歩兵。習志野時代、将校用厨房で炊事係を務めた。フォーゲルフェンガー (Vogelfänger) と共に写った写真が残されている。【『ドイツ兵士の見たNARASHINO』47頁】(203:東京→習志野)
- 629) Rockser (ロックザー), Alexander: 国民軍・後備伍長。似島で死亡(年月日不明)。(4580:大阪→似島)
- 630) Rode (ローデ), Fritz: 海軍歩兵第3大隊第6中隊・2等歩兵。松山時代、公会堂の日曜講演会で「キニーネとコカイン」と題して講演した。板東では収容所内のタバタオで、ヴンダーリヒ (Wunderlich) と共同で薬局・薬品店を営んだ。やがて、J.ヴェーバー (Weber) とともに大阪の野村彦太郎からウイスキー、ブランデーの製造指導に請われた。(3076:松山→板東)
- 631) Rollhausen (ロールハウゼン), Walter: 海軍歩兵第3大隊機関銃隊通訳・陸軍少尉。11月2日未明の日本軍の攻撃に際しては第8塹壕で、機関銃が運び込まれるまでのいっとき、たった一人で日本軍の攻撃に耐えた。(4575:大阪→似島)
- 632) Röper (レーパー), Albert: 国民軍・卒。1915年9月20日、青島から大阪収容所に移送された。(4698:大阪→似島)
- 633) Roeper (レーパー), Wilhelm: 海軍歩兵第3大隊第2中隊・予備2等歩兵。[画家]。9月28日、浮山近くの巫山で日本軍に投降して俘虜となり、久留米収容所に送られた。(686:久留米)
- 634) Rose (ローゼ), Otto: 国民軍・卒。[書籍・文具・玩具商]。(4585:大阪→似島)
- 635) Rosenberger (ローゼンベルガー), Heinz (-1919): 海軍歩兵第3大隊予備榴弾砲兵隊・予備上等兵。1919年1月31日スペイン風邪により習志野で死亡。(1776:静岡→習志野)
- 636) Rossut (ロスルト), Karlo: カイゼリン・エリーザベト乗員・1等水兵。イタリア人。1917年5月13日縊死未遂事件を起こす。1919年6月28日のヴェルサイユ講和条約で、イタリア領に編入されたイストリアのチッタノーヴァ (Cittanova) 出身。宣誓解放された。【同地は第二次大戦後のユーゴスラヴィアを経て、今日はクロアチア共和国に属し、ノヴィグラード (Novigrad) となっている】(2379:姫路→青野原→丸亀→板東)
- 637) Roth (ロート), Heinrich: 海軍歩兵第3大隊第2中隊・上等歩兵。久留米時代は演劇活動で、笑劇『第六感』等の演出を担当するとともに、26演目出演した。宣誓解放された。(3604:熊本→久留米)
- 638) Röttgen (レットゲン), Paul: 海軍歩兵第3大隊第7中隊・後備曹長。[巡查]。妻は大戦終

結まで青島に留まった。(1775: 静岡→習志野)

- 639) Rudolf (ルードルフ), Gustav: 海軍歩兵第3大隊第6中隊・2等歩兵。板東時代の1919年に、バルクホールン、カイスナー、ラーン及びジーモンズ (Simons) と共に、日本語文献からの翻訳『国民年中行事』の出版に関わった。(3078: 松山→板東)
- 640) Rumpf (ルンプ), Dr. Fritz: 海軍野戦砲兵隊・予備陸軍少尉。[第3中間地掃射砲台指揮官]。[弁護士]。松山時代、山越の講習会で民法の講座を受け持った。また、ルンプ少尉の小屋は『陣営の火』の編集室になった。板東時代、公会堂での工芸品展では、ミュラー (Mueller) 少尉の企画によるルンプ少尉とホーン (Hohn) 2等砲兵の住宅モデルが、収容所賞第3位に輝いて賞金3円を獲得した。大戦終結後、青島で法律事務所を開業した。(3082: 松山→板東)
- 641) Rumpf (ルンプ), Fritz (1888-1949): 重野戦榴弾砲兵隊・予備伍長。少年のころ、ポツダムの陸軍士官学校に留学していた山本茂中尉から日本語を教わった。日独戦争前、「パンの会」には発足の時から出席した。【参照: 森鷗外『日記』、木下杢太郎『パンの会の回想』、北原白秋『フリッツ・ルンプのこと』、富士川英郎『西東詩話』】また東京のスクリーバ (Scriba) 邸に一時期滞在していた。1914年11月24日、「明日、俘虜として日本に行く」との手紙を青島からドイツに書き送っている。同年12月12日、一時的に収容された熊本収容所から大分収容所に移った。ルンプは大分、習志野時代に婚約者アリス・ヘラー (Alice Heller) に多くの手紙を書き送った。アリスもベルリンで山本茂中尉に紹介されていて面識があった。またアリスは1914年、大戦が始まる前に来日して、東京のルンプに会いに来たが、戦雲急を告げる情勢に成り帰国した。大分時代、「大分黄表紙」(Das Oita-Gelb-Buch) と題する収容所スケッチを書いた。そのスケッチは習志野時代にデルリエン (Derlien) によって印刷された。1918年2月1日、収容所替えて大分から習志野に向かった。習志野ではさらに、「東京湾稲毛の漁師の娘」等数多くの情緒ある絵葉書を制作した。それらは故国に便りをだす仲間のために制作されたものであった。山本茂は習志野にルンプの面会に訪れているが、その背景には鷗外からの要請もあった。1920年2月初めにドイツへ帰国し、アリス・ヘラーと結婚した。1949年5月、61歳でポツダムにて死去。妻アリスとの間にマリアンネとバルバラの二人の娘がいた。近松門左衛門、河竹黙阿弥、井原西鶴の作品を研究し、また収容所内で1500余の日本の民話を読み、やがて「日本民謡集」の翻訳を行って、鷗外に序文を求めた。『日本の演劇』(Japanisches Theater, Deutsch-Japanische Gesellschaft, 1930, Berlin.)、『日本の民話』(Japanische Volksmärchen, Eugen Diederichs Verlag, 1938.) の著作を遺した。(4430: 熊本→大分→習志野)
- 642) Runtemund (ルンテムント), Fritz: 海軍膠州派遣砲兵大隊第5中隊・1等砲兵。久留米時代は演劇活動で、シュトルム作の一幕喜劇『神童フリドリッ』等3演目に出演した。(1427: 福岡→久留米)
- 643) Runtzler (ルンツラー), Johannes: 海軍膠州派遣砲兵大隊第5中隊・2等水兵。久留米時代は演劇活動で、リンダウ作の『もう一人の男』に出演した。(1431: 福岡→久留米)
- 644) Sachse (ザクセ), Fritz: 総督府・海軍少佐。[砲艦イルチス艦長]。当時40歳。1915年11月16日、300円の所持金を懐にして福岡収容所から逃亡した。逃走ルートは下関まではケンベと同じであったが、以後は釜山→京城→瀋陽→北京→上海のルートを取った。世界漫遊旅行中のフランス人、リヨン大学政治学教授レイ・ガラールを装った。上海で4人が落ち合った後、ザクセは上海のドイツ領事館から2通のパスポートを受け取る。ともにかつて青島のドイツ人学校の教師をしていたがとくにドイツに帰国していた人物である。シュトレラー (Straeler) と二人太平洋を渡ってアメリカに行き、更にノルウェー人を装ってヨーロッパに向かった。しかし、スコットランド沖でイギリス軍艦の臨検を受けて発覚して逮捕され、大戦終結までマン



- 島の俘虜収容所に収容された。シュトレラー（Straeler）と共同執筆した「我等が逃亡記」という記事が、『シュトゥラルズント日報』の付録娯楽版（"Stralsunder Tageblatt", Unterhaltungs-Beilage, Nr. 54ff, März~Juli, 1938）に掲載された。（1459：福岡）
- 645) Sack（ザック）, Bernhard：海軍膠州派遣砲兵大隊第5中隊・1等砲兵。久留米時代の1916年1月3日に逃亡したが、翌4日に日吉町で捕まり、7日重営倉30日の処罰を受けた。（3734：熊本→久留米）
- 646) Saldern（ザルデルン）, Siegfried von（-1917）：海軍砲兵中隊長・海軍大尉。〔封鎖指揮官・繋留気球隊長〕。8月6日、軍艦エムデンが露艦リャザン（Rjasan）を捕獲して青島に入港する際、砲艦ヤーグアル搭載の汽艇で出迎えて無事入港させた。10月初旬、繋留気球に数回乗り込んで、日本軍の偵察を試みたが、周囲の山に遮られて目的を果たせなかった。1915年11月に福岡収容所で発生した脱走事件の際、子供とともに福岡に住んでいた夫人が取り調べをうけた。1917年2月のある夜、強盗が侵入して夫人を刺殺した。それを知ったザルデルンは悲痛のあまりに、3月1日収容所で自殺した。夫人は時のドイツ海軍大臣フォン・カペレ（Eduard von Capelle）の娘であった。埋葬地不明。（1461：福岡）
- 647) Salewsky（ザレヴスキー）, Gustav：海軍歩兵第3大隊第3中隊・2等歩兵。久留米の演劇活動では、13演目に出演するとともに、笑劇『巨大児』や『あゝ、何て女達！』等3演目を創作して、それを含む4演目の演出を担当した。（761：久留米）
- 648) Samuel（ザームエル）, Joseph：ヤーグアル乗員・2等水兵。東カロリン群島のポナベ島原住民で、本名はサムエル・ナンポン（Samuel Nanpon）。労働者としてポナベ島から青島の造船所に送られた。日独戦争勃発とともに砲艦ヤーグアルに乗り組んだが最終的に俘虜となった。【『ドイツ兵士の見たNARASHINO』91頁より】（265：東京→習志野）
- 649) Sander（ザンダー）, Hermann：海軍歩兵第3大隊第1中隊・予備副曹長。〔教師〕。妻と子は大戦終結まで青島に留まった。（4068：大阪→似島）
- 650) Sandhövel（ザントヘーフエル）, Franz：海軍膠州派遣砲兵大隊第5中隊・2等水兵。久留米時代は演劇活動で、笑劇『ベルリンっ子』に出演した。（1522：福岡→久留米）
- 651) Sanz（ザンツ）, Josef（-1916）：カイゼリン・エリーザベト乗員・2等水兵。1916年4月21日久留米で死亡、軍人墓地に埋葬された。（3742：熊本→久留米）
- 652) Sarnow（ザルノフ）, Georg：海軍膠州派遣砲兵大隊・予備海軍見習士官。9月28日、浮山近くの巫山で日本軍に投降して俘虜となり、久留米収容所に送られた。久留米の演劇活動では、ガibel作の喜劇『アンドレア親方』等11演目に主として女役で出演した。（768：久留米）
- 653) Sartori（ザルトリ）, Hans：海軍東亜分遣隊・上等兵。久留米時代は演劇活動で、トーマ作の農民喜劇『一等車』等3演目に出演した。宣誓解放された。（3706：熊本→久留米）
- 654) Sassin（ザッシン）, August：国民軍・卒。〔錠前師〕。1915年9月20日、青島から大阪収容所に移送された。（4699：大阪→似島）
- 655) Saternus（ザテルヌス）, Stanislaus：海軍歩兵第3大隊第3中隊・予備2等歩兵。1917年4月17日傷害罪で懲役3ヶ月に処せられ、福岡監獄に収監された。（752：久留米）
- 656) Sauerland（ザウアーラント）, Walter：国民軍・卒。1915年9月下旬に青島収容所に収容され、1916年10月下旬青島から大阪に移送された。（4700：青島→大阪→似島）
- 657) Saurbier（ザウルビーア）, Hubert：海軍歩兵第3大隊第3中隊・上等歩兵。久留米の演劇活動では、笑劇『巨大児』等11演目に出演した。（747：久留米）
- 658) Saxer（ザクサー）, Ludwig：総督府参謀長・海軍大佐。11月7日午後4時からモルトケ兵営で行われた青島開城交渉におけるドイツ側の全権委員であった。福岡時代、収容所の俘虜代表

- を務めた。習志野では最年長の俘虜だった。妻と二人の子は大戦終結まで上海で暮らした。  
(1457: 福岡→習志野)
- 659) Schad (シャート), Emil: 海軍歩兵第3大隊第7中隊・後備2等歩兵。[ホテル経営]。大戦終結後、シュタイン (Stein) と済南で経営していた「ホテル・シュタイン・ウント・シャート」の営業を再開した。大戦中はある日本人女性に形式上譲渡してあった。(4437: 熊本→大分→習志野)
- 660) Schaeffauer (シェーファウアー), Friedrich: 海軍歩兵第3大隊参謀本部・予備伍長。松山時代、山越の収容所講習会で簿記等の講師を務めた。(3133: 松山→板東)
- 661) Schäfer (シェーファー), Adolf: 海軍東亜分遣隊第3中隊・2等砲手。習志野時代の1919年5月24日、習志野合唱協会の「歌曲の夕べ」ではマルフケ (Marufke)、ハム (Hamm) 及びエリッヒ (Oellig) の4人でクローマー作の「森の泉のほとり」を四重唱した。(241: 東京→習志野)
- 662) Schäfer (シェーファー), Karl: 国民軍・卒。1915年9月下旬に青島収容所に収容され、1916年10月下旬青島から大阪に移送された。(4701: 青島→大阪→似島)
- 663) Schaller (シャラー), Leonhard: 海軍膠州派遣砲兵大隊第4中隊・2等砲兵。徳島時代の1916年10月、徳島工業学校での塗装労役に派遣された。1日約4時間、賃金1日30銭内外。(4293: 大阪→徳島→板東)
- 664) Schaumburg (シャウムブルク), Otto: 海軍東亜分遣隊第2中隊長・陸軍歩兵大尉。[外方陣地左翼陣地指揮官]。9月18日の李村郊外の戦闘で、壮絶な死を遂げたリーゼル少尉の屍から、勇敢な兵卒に砲火をくぐってその武器を取り戻させて、その夜少尉を埋葬した。大阪収容所及びその次に収容された似島収容所から、アルテルト、モーラヴェク、エステラーの4人で脱走を企て、4人は1ヶ月から2年半の刑を受けた。(4069: 大阪→似島)
- 665) Scheibe (シャイベ), Alfred: 海軍歩兵第3大隊第2中隊・2等歩兵。9月28日、浮山近くの巫山で日本軍に投降して俘虜となり、久留米収容所に送られた。久留米の演劇活動では、ビーガー (Bieger) 演出になる1幕物『インディアン達』他1演目に出演した。(742: 久留米)
- 666) Scheider (シャイダー), Kurt: 総督府経理局・海軍少主計 (少尉相当)。板東時代、新板東テニス協会の理事長を務めた。(3139: 松山→板東)
- 667) Scheithauer (シャイトハウアー), Josef: 所属部隊不明・予備伍長。[錠前マイスター]。妻と子どもは大戦終結まで青島に留まった。(4607: 大阪→似島)
- 668) Schiefer (シーファー), Peter: 海軍歩兵第3大隊工兵中隊・2等工兵。板東時代、公会堂の工芸品展に編み物のテーブルセンターを出品した。(3126: 松山→板東)
- 669) Schilling (シリング), Karl (-1915): 海軍膠州派遣砲兵大隊・1等水兵。1915年4月15日胃癌のため熊本で死亡、軍人墓地に埋葬された。(3733: 熊本)
- 670) Schindler (シントラー), Rudolf: 国民軍・卒。1915年9月20日、青島から大阪収容所に移送された。(4702: 大阪→似島)
- 671) Schlachtbauer (シュラッハトバウアー), Karl: 海軍歩兵第3大隊予備榴弾砲兵隊・後備上等兵。[馬具職人]。(2707: 名古屋)
- 672) Schlichtiger (シュリヒティガー), Hermann: 総督府・1等機関兵曹。板東時代は劇場委員会に所属した。(3137: 松山→板東)
- 673) Schlick (シュリック), Friedrich F.von: 海軍歩兵第3大隊機関銃隊・陸軍中尉。戦闘の初期にはメルク (Merck) 予備少尉とともに、外方の前線陣地を守った。(2675: 名古屋)
- 674) Schliecker (シュリーカー), Wilhelm: 海軍歩兵第3大隊第7中隊・陸軍中尉。[第2歩兵堡

- 壘指揮官]。シュルツ(Schulz)大尉に代わって前記の指揮官になった。(2050:丸亀→大分→習志野)
- 675) Schlitter(シュリッター), Bernhard:海軍歩兵第3大隊第7中隊・予備上等歩兵。下記フリードリヒの兄。弟の名古屋収容所への収容所替えを申請したが許可されなかった。(2683:名古屋)
- 676) Schlitter(シュリッター), Friedrich:海軍膠州派遣砲兵大隊第5中隊・2等砲兵。上記ベルンハルトの弟。名古屋への収容所替えを申請したが許可されなかった。(1517:久留米)
- 677) Schloegel(シュレーゲル), Ernst:海軍歩兵第3大隊第6中隊・予備伍長。板東時代、新板東テニス協会の会計係を務めた。(3100:松山→板東)
- 678) Schlotfeldt(シュロートフェルト), Hans:総督府・1等筆生。青野原で死亡(年月日不明)。(2389:姫路→青野原)
- 679) Schlund(シュルント), Alfred(-1918):海軍膠州派遣砲兵大隊第5中隊・後備1等機関兵曹。1918年3月13日久留米で死亡、陸軍墓地に埋葬された。(1489:福岡→久留米)
- 680) Schmalz(シュマルツ), Siegfried:海軍歩兵第3大隊参謀本部・陸軍中尉。[参謀本部幕僚・伝令処罰将校、後に自動車廠指揮官]。(2674:名古屋)
- 681) Schmid(シュミート), Friedrich:海軍膠州派遣砲兵大隊第3中隊・2等砲兵。板東時代、公会堂の絵画と工芸品展覧会に、芸術家らしい味わいを示した油絵「徳島収容所のホールの隅」を、また色鉛筆・チョークの部門に「裸体画」を出品した。(4283:大阪→徳島→板東)
- 682) Schmidt(シュミット), Daniel(1891-):海軍野戦砲兵隊・上等兵。「14歳にしてグーデンベルヒの小学校を卒業し17歳迄食肉加工職を学び同時にカッセルの補修学校に通学す、農家に生長し通学期を通じて農業の実際を学びたり、特に17歳より19歳迄農作牧畜を修得し1912年10月2日入隊して乗馬隊に入り養馬を実地及び学理的に修得す、牛畜、肉製品、腸詰、缶詰を特技とす」【『北海道移住』より】(2701:名古屋)
- 683) Schmidt(シュミット), Heinrich:海軍歩兵第3大隊第7中隊・伍長。農学を修めたことから板東時代、郡農会・板野郡立農蚕学校等に招かれ講演した。シュミットによる試作地での蔬菜の品目は10種に及ぶ。赤なす(トマト)、火焰菜(赤ビート)、甘藍(キャベツ)、玉葱はそれまでこの地方にはなかった。【『日本人とドイツ人』89頁より】(2086:丸亀→板東)
- 684) Schmidt(シュミット), Karl:海軍歩兵第3大隊第3中隊・2等歩兵。1917年5月24日、情報局から各収容所への製針業に従事していて、労役希望者の照会に対して、久留米ではシュミット他3名を届けた。(748:久留米)
- 685) Schmidt(シュミット), Karl Friedrich(1898-1916):海軍歩兵第3大隊第5中隊・2等歩兵。1916年5月31日名古屋で死亡、軍人墓地に埋葬された。(2713:名古屋)
- 686) Schmidt(シュミット), Richard:海軍歩兵第3大隊第3中隊・予備伍長。久留米の演劇活動では、トーマ作の喜劇『放蕩娘』に出演した。(746:久留米)
- 687) Schmidt(シュミット), Sylvester:海軍歩兵第3大隊工兵中隊・上等兵。板東時代、無料水泳教室の教官を務めた。(3124:松山→板東)
- 688) Schmidt(シュミット), Wilhelm(1891-1916):海軍歩兵第3大隊工兵中隊・伍長。1916年6月18日名古屋で死亡、軍人墓地に埋葬された。(2691:名古屋)
- 689) Schmiedel(シュミーデル), August(1893-1919):海軍野戦砲兵隊・野砲兵兵曹。1919年3月6日、徳島の陸軍衛戍病院で死亡、病院裏山に埋葬された。今日、眉山中腹の徳島陸軍病院跡にヘルムート(Hellmuth)の墓と並んでその墓がある。(3686:熊本→久留米→板東)
- 690) Schnell(シュネル), Rudolf:海軍東亜分遣隊第2中隊・海軍少主計(少尉相当)候補。習

- 志野時代、習志野劇場によるエルンスト作の喜劇『フラックスマン先生』に教師役で出演した。(1555: 福岡→習志野)
- 691) Scholl (シヨル), Maximilian: 海軍膠州派遣砲兵大隊第1中隊・1等焚火兵。プリュエーション中尉付き下士卒で、8月3日飛行機の翼の再組み立てに従事した。(4032: 大阪→似島)
- 692) Scholz (シヨルツ), Rudolf: 国民軍・卒。1915年9月20日、青島から大阪収容所に移送された。(4703: 大阪→似島)
- 693) Schortz (シヨルツ), Franz: ヤップ島住民部隊指揮官・予備2等兵曹。1914年10月7日、西カロリン群島のヤップ島で俘虜となったが11月1日宣誓解放された。(4673: なし)
- 694) Schrader (シュラーダー), Otto: 海軍歩兵第3大隊第7中隊・予備上等歩兵。板東時代の1918年9月、「板東健康保険組合」の工兵中隊代表理事に選ばれた。公会堂での絵画と工芸品展覧会には、入念な細密画の作品『橋』及び『管理棟』を、水彩画では三等賞を受賞した「カルヴェンデル鉄道」を、さらには編んだ敷物を出品した。(2087: 丸亀→板東)
- 695) Schrage (シュラーゲ), Carl: 海軍膠州派遣砲兵大隊第5中隊・2等砲兵。久留米時代は演劇活動で、笑劇『ベルリンっ子』に出演した。(1509: 福岡→久留米)
- 696) Schramm (シュラム), Richard: 海軍第2工機団測量船第3号・2等機関兵曹。1914年10月19日、東カロリン群島のトラック島で俘虜となり久留米収容所に送られた。(765: 久留米)
- 697) Schroer (シュレーアー), August: 海軍歩兵第3大隊工兵中隊・2等工兵。板東時代、工芸品展に収容所の全景を描いた象眼細工のアルバム帳を出品して特別賞を受賞し、更には収容所賞第1位に輝いて賞金10円を獲得した。また子供用のヴァイオリンも制作・出品した。(3125: 松山→板東)
- 698) Schrötter (シュレッター), Konrad: 海軍野戦砲兵隊・後備上等兵。板東時代の1918年9月、「板東健康保険組合」の野砲兵隊代表理事に選ばれた。(3684: 熊本→久留米→板東)
- 699) Schubert (シューベルト), Rudolf: 海軍歩兵第3大隊第6中隊・2等歩兵。板東時代、収容所内のタバオでカーレ (Kahle) と共同でレストラン「クリスタル・パラスト」(水晶宮)を経営した。(3120: 松山→板東)
- 700) Schubert (シューベルト), Wilhelm: 海軍膠州派遣砲兵大隊第5中隊・2等砲兵。静岡時代の1915年4月15日、収容所を脱走し、昼間は山野に潜み、夜間東海道線の線路沿を歩いて横浜を目指した。山下町の「インペリア・ホテル」に着いたところで取り押さえられた。習志野時代は収容所運動会で「棒高跳び」に出場した。(1782: 静岡→習志野)
- 701) Schultz (シュルツ), Gerhard: 海軍歩兵第3大隊第6中隊・2等歩兵。バルト (Barth) が中国時代に勤めたアルンホルト・カルベルク社の直属上司であった。板東時代、収容所内のタバオでラングロックと錠前屋を営んだ。第2次大戦後、東京・荻窪にバルトを訪ねて来たが、やがて南米チリに居を定めて貿易会社を経営した。(3103: 松山→板東)
- 702) Schulz (シュルツ), Adolf: 海軍歩兵第3大隊第5中隊・伍長。板東時代、公会堂での工芸品展に、ブランド (Brandt) と共同で楽器のチェロを制作・出品した。(3091: 松山→板東)
- 703) Schulz (シュルツ), Hans: 海軍歩兵第3大隊第7中隊長・陸軍歩兵大尉。〔第2歩兵堡壘指揮官〕。前記指揮官は後日シュリーカー中尉に替わった。(2682: 名古屋)
- 704) Schulz (シュルツ), Johannes: 海軍膠州派遣砲兵大隊・海軍中尉。〔連絡将校・第6砲台指揮官〕。(4274: 大阪→徳島→板東)
- 705) Schulz (シュルツ), Josef: 海軍歩兵第3大隊第4中隊・2等歩兵。9月28日、浮山近くの巫山で日本軍に投降し俘虜となり、久留米収容所に送られたが、負傷のため当初は久留米衛戍病院に収容された。(763: 久留米→板東)

- 706) Schulz (シュルツ), Wilhelm : 海軍歩兵第3大隊第4中隊・後備2等歩兵。久留米時代は演劇活動で、ハウプトマン作の喜劇『同僚クランプトン』に出演し、また『久留米収容所俘虜文集』の制作に協力した。(3675 : 熊本→久留米)
- 707) Schulze (シュルツェ), Gustav (-1918) : 海軍膠州派遣砲兵大隊第1中隊・砲兵伍長。1918年12月5日、スペイン風邪により習志野で死亡。(1465 : 福岡→習志野)
- 708) Schulze (シュルツェ), Helmut : 海軍歩兵第3大隊第6中隊・1年志願兵。右上膊部銃創及び骨折、右大腿部銃創により大阪陸軍病院に入院した。(4590 : 大阪→似島)
- 709) Schulze (シュルツェ), Robert (-1918) : 海軍歩兵第3大隊第5中隊・2等歩兵。1918年11月17日名古屋で死亡、軍人墓地に埋葬された。(2712 : 名古屋)
- 710) Schulze (シュルツェ), Wilhelm : 海軍砲兵中隊・1等水兵。久留米時代の1917年1月28日、アンドレーア (Andrea) をカロールチャク (Karolczak) 等仲間18人で袋叩きにして、傷害罪により1月の懲役刑に処せられた。演劇活動では、トーマ作の『放蕩娘』に出演した。(3713 : 熊本→久留米)
- 711) Schuemann (シューマン), Heinrich : 総督府・1等筆生。似島で死亡(年月日不明)。(2388 : 姫路→青野原→似島)
- 712) Schütte (シュッテ), Wilhelm : 海軍歩兵第3大隊第5中隊・2等歩兵。ドイツ本国と青島との無線電信を確保すべく、兗州府に無線電信所設備の設営に尽力した。(2720 : 名古屋)
- 713) Schütze (シュッツェ), Julius (-1919) : 海軍膠州派遣砲兵大隊第5中隊・2等砲兵。1919年1月31日、スペイン風邪により習志野で死亡。(1513 : 福岡→習志野)
- 714) Schwarm (シュヴァルム), Wilhelm : 海軍歩兵第3大隊第7中隊・2等歩兵。[第2歩兵堡壘]。[宣教師]。広東のベルリン福音教会から、ヴァナクス (Wannags) とともに青島守備軍に馳せ参じた。(2092 : 丸亀→板東)
- 715) Schwarz (シュヴァルツ), Franz (1890-) : 海軍東亞分遣隊第3中隊・伍長。「14歳にて小学校を卒業し、三ヶ年大工職を学び同時に工業補修学校に通学せり、幼少より1910年10月15日陸軍に入営する迄農業に従事し大工職の他に農業の実際に精通するに至れり、兵役中乗馬隊に入り養馬の方法を實際と学理に就いて修得せり、建築と耕作を特技とす」【「北海道移住」より】(1570 : 福岡→名古屋)
- 716) Schwerke (シュヴェルケ), Reinhold : 海軍歩兵第3大隊第6中隊・2等歩兵。松山時代、公会堂の収容所講習会でスペイン語の講師を務めた。(3114 : 松山→板東)
- 717) Scriba (スクリーバ), Emil : 海軍歩兵第3大隊・予備陸軍少尉。父はユーリウス・カール・スクリーバ博士で、E.ベルツとともに東京帝国大学医学部の基礎を築いた人物。母は富山県出身で名は神谷ヤスといい、その間に次男として生まれた。久留米時代の1915年11月5日に発生した、真崎甚三郎所長によるベーゼ、フローリアン両将校殴打事件では、日本通としてフォークト (Vogt) 予備少尉とともに真崎所長とアンデルス少佐の会談に列席した。1918年8月6日習志野に移送された。1919年12月17日、リューマチと喘息で苦しんでいた母親が軽い脳溢血を起こしたことから早期の解放を願い出た。兄は欧州大戦に従軍して負傷し、障害者となってスイスに居た。大戦終結後は日本窒素(株)に入社し、ビジネスマンとして活躍した。(3643 : 熊本→久留米→習志野)
- 718) Seebach (ゼーバッハ), Thilo von : 海軍砲兵中隊・海軍少尉。[第8砲台指揮官]。習志野では将校用厨房責任者であった。また1915年12月25日収容所のクリスマスコンサートでは、ハイメンダール少尉とヴェーバーの「舞踏への勧誘」及び「ジョスランの子守唄」をピアノで演奏した。(242 : 東京→習志野)

- 719) Seeger (ゼーガー), Hermann (-1918): 海軍歩兵第3大隊第2中隊・上等歩兵。1917年3月、丸亀収容所から脱走を図って逮捕された。1918年11月30日、スペイン風邪により板東で死亡。(2056: 丸亀→板東)
- 720) Seemuth (ゼームート), Wilhelm: 海軍第2工機団測量船第3号・2等焚火兵。10月11日、東カロリン群島のトラック島で俘虜となり久留米収容所に送られた。(766: 久留米)
- 721) Seffern (ゼッフェルン), Theodor: 海軍歩兵第3大隊第2中隊・2等歩兵。9月28日、浮山近くの巫山で日本軍に投降して俘虜となり、久留米収容所に送られた。(741: 久留米)
- 722) Segebarth (ゼーゲバルト), Danier: 海軍砲兵中隊・2等按針兵曹。松山時代、公会堂の収容所講習会でフランス語の講師を務めた。板東では、工芸品展に船のモデルを多数出品したグループの代表だった。(3135: 松山→板東)
- 723) Seidel (ザイデル), Alfred: 国民軍・階級不明。大戦終結後は青島に戻り、ジーボルト(Siebold)と共同で精練・加工を中心とする化学工業会社を経営した。(4654: 大阪→似島)
- 724) Seidel (ザイデル), Wilhelm: 海軍歩兵第3大隊第6中隊・2等歩兵。板東時代、収容所内のタバコでコーヒー店を営んだ。(3111: 松山→板東)
- 725) Seifert (ザイフェルト), Richard (1890-): 海軍歩兵第3大隊第4中隊・伍長。[園庭師]。「小学校卒業後、四年間園芸業を学び(野菜栽培、園芸美術、農作、植樹法等)同時に工業専門学校に通学せり、入隊に至るまで園芸技手として従事し1912年12月青島総督の園芸人に命ぜられ同時に総督府庭園の監督として開戦に至れり、日下久留米俘虜収容所に於いて主として植物学を研究し収容所耕地の監督たり、園芸、果実、植樹、製林及び野菜缶詰業を特技とす」【「北海道移住」より】(3651: 熊本→久留米)
- 726) Seigel (ザイゲル), Franz: 海軍膠州派遣砲兵大隊第5中隊・2等砲兵。久留米時代は演劇活動で、トーマ作の喜劇『放蕩娘』等3演目に女役で出演した。(1520: 福岡→久留米)
- 727) Seiner (ザイナー), Karl: カイゼリン・エリーザベト乗員・1等水兵。久留米時代は演劇活動で、ブルーメンタール及びガーデルベルク作の笑劇『私が戻ったとき』に出演した。(3745: 熊本→久留米→習志野)
- 728) Selbach (ゼールバッハ), Christian: 海軍砲兵中隊・2等水雷機関兵曹。大戦終結後、日本足袋(株)に入社した。(3711: 熊本→久留米)
- 729) Semmelhack (ゼンメルハック), Franz: 海軍歩兵第3大隊第4中隊・予備上等歩兵。久留米時代は演劇活動で、茶番劇『ペンション・シェラー』に出演した。宣誓解放された。(3659: 熊本→久留米)
- 730) Seng (ゼング), Karl (-1919): 海軍膠州派遣砲兵大隊第4中隊・2等砲兵。1919年2月6日、スペイン風邪により習志野で死亡。(1486: 福岡→大分→習志野)
- 731) Seufert (ゾイフェルト), Heinz: 駆逐艦タークー艦長・海軍大尉。[陸正面砲兵隊指揮官]。(1779: 静岡→習志野)
- 732) Seufert (ゾイフェルト), Wilhelm: 海軍東亜分遣隊第2中隊・予備副曹長。[宣教師]。1912年末、「統合福音派海外伝道教会」からリヒャルト・ヴィルヘルムの補佐として青島に派遣された。久留米時代の1916年1月27日、ドイツ皇帝誕生祭に当たって説教祈禱を行った。青野原時代の1919年、オーストリアのドラッヘンタール少佐に変わって俘虜代表に選出された。大戦終結後の1920年4月1日、南海丸でドイツに一時帰国したが、1921年に再び青島に戻り、1949年に伝道教会が青島での活動を閉じるまで、ヴィルヘルムの設立した学院の運営に当たった。(3701: 熊本→久留米→青野原)
- 733) Siebel (ジーベル), Karl: 総督府参謀・陸軍少佐。[総督府要塞工兵部長]。(1458: 福岡→

習志野)

- 734) Siebel (ジーベル), Robert (-1919): 海軍膠州派遣砲兵大隊第4中隊・1等砲兵。1919年2月2日、スペイン風邪により習志野で死亡。(1482: 福岡→大分→習志野)
- 735) Siebold (ジーボルト), Hugo: 海軍歩兵第3大隊予備榴弾砲兵隊・後備上等兵。大戦終結後は青島に戻り、A.ザイデル(Seidel)と共同で精練・加工を中心とする化学工業会社を経営した。(3685: 熊本→久留米→板東)
- 736) Siemssen (ジームセン), Frederick: 海軍歩兵第3大隊第5中隊・予備副曹長。板東時代、板東テニス協会のコート係を務めた。妻と子は、大戦終結まで上海で暮らした。(3090: 松山→板東)
- 737) Siemssen (ジームセン), Wilhelm: 海軍歩兵第3大隊第5中隊・戦時志願兵。板東公会堂での絵画と工芸品展覧会では、「B 1の顔」で肖像画部門の一等賞を受賞した。【なお、上記フレデリックとヴィルヘルムの二名の出身地は中国・福州となっている。青島に広大な地所を所有(個人として6個所合計13963㎡、約4200坪、商会所有として6184㎡、約1800坪)、一部を総督府に提供したため、後に日本側により土地・家屋の没収処分を受けたジームセン商会を経営していたアルフレート・ジームセン(Alfred Siemssen)の身内であろうか? (『青島経済事情』27頁以下を参照) ジームセン家はハンブルク有数の貿易商で、1851年ハンザ都市ハンブルクの広東領事に任命された】(3096: 松山→板東)
- 738) Sieweke (ジーヴェケ), Ludwig: 海軍膠州派遣砲兵大隊第3中隊・2等砲兵。板東時代、「ドイツ兵墓碑」の建設に際して石積み工事を担当した。(4291: 大阪→徳島→板東)
- 739) Simon (ジーモン), Robert (-1916): 海軍歩兵第3大隊第2中隊・伍長。1916年3月19日久留米で死亡、軍人墓地に埋葬された。(3645: 熊本→久留米)
- 740) Simon (ジーモン), Wilhelm: 海軍膠州派遣砲兵大隊・予備海軍少尉。〔第1中間地掃射砲台指揮官〕。(1463: 福岡→習志野)
- 741) Simonis (ジーモニス), Erich: 海軍歩兵第3大隊第6中隊・2等歩兵。板東時代の1919年、バルクホールン、カイスナー、ラーン及びルードルフと共に、日本語文献からの翻訳『国民年中行事』の出版に関わった。(3112: 松山→板東)
- 742) Sinn (ジン), Otto: 海軍歩兵第3大隊第3中隊・曹長。1915年10月2日、アール、ツェルナー、ルントの4名で脱走したが、他の3名は同日逮捕、ズィンも5日収容所に戻ったところを逮捕された。(743: 久留米)
- 743) Sodan (ゾーダン), Ernst A.: 海軍歩兵第3大隊工兵中隊長・陸軍工兵大尉。〔第5歩兵堡壘(海岸堡壘)指揮官〕。小柄であったが強靱な肉体と強い精神の持ち主のユニークな人物で、部下を始め多くの人から親しみを持たれていた。ヴェーデル(Wedel)少佐と替わって前記指揮官になった。11月9日の青島開城交渉ではドイツ側の実務委員として、地雷等の危険物除去に関わった。11月14日、日本側の開城交渉委員の堀内少将から絵葉書を贈られた。久留米時代、収容所内での散歩を日課として、久留米から故郷東プロイセンのケーニヒスベルクまでの距離8500キロを、1年以上の所内の散歩で達成し、収容所の仲間達から大喝采を受けた。収容所仲間からは親しみをこめて「小さな大尉」と呼ばれた。大戦終結して帰国後、11月1日の第5歩兵堡壘の砲撃についての報告書を書き残した。【『青島戦史』124頁以下等より】(3695: 熊本→久留米)
- 744) Solger (ゾルガー), Dr. Friedrich: 海軍歩兵第3大隊第6中隊第3小隊長・予備陸軍少尉。〔独中大学教授・地質学者〕。ライプチヒ大学等で学んだ。青島で所属した第6中隊は、商人や官吏等の応召兵から成る即席部隊でろくに軍事訓練も受けていなかった。そこでゾルガーは

「勤務能力無し中隊」(Die D.U. [=dienstuntaugliche] Kompagnie) の戯れ詩を作った。

【《Tsingtau Tagebuch》18頁及び《Erinnerungen an Tsingtau》73頁。但し《The Japanese Siege of Tsingtau》(204頁) ではブラシュケ (Blaschke) 等の複数による合作となっている】

また青島陥落後には、愛惜をこめた「嗚呼、チンタオ」(O, Tsingtau) の詩も作った。松山時代、マルティーン少尉及びゴルトシュミット予備副曹長とともに「陣営の火」の編集に当たった。板東では収容所内講演会で最も活躍し、所内最高の知性と謳われ、収容所印刷所から『故国の土と父祖の血』を出した。1917年5月14日、第1回「中国の夕べ」を開催し、「中国について」の連続講義を45回に亘って行うなど多種多彩な数多くの講演を行った。『バラッケ』編集に携わり、演劇の指導を行い、上演に際しての責任者にもなった。(3097: 松山→板東)

- 745) Sommerlatt (ゾンマーラット), Benedikt (1889-): 海軍東亜分遣隊第2中隊・予備伍長。「英領東印度カラチン生まれ6歳にしてハノーベル市の市立リツェーウム高等学校に入り18歳にして卒業し大学入学資格を得たり、後二ヶ年半ハムブルヒにて商業を学びハムブルヒ、香港に商人として従業す、1910年より同11年迄一年志願兵たり 企業上の営業部及び会計部及び簿記を特技とす」【『北海道移住』より】(1556: 福岡→名古屋)
- 746) Sonntag (ゾンターク), Joseph: 海軍東亜分遣隊第1中隊・2等歩兵。10月2日、四房山で俘虜となり久留米収容所に送られた。(767: 久留米)
- 747) Spann (シュパン), Dr. Alexander (1890-): 海軍歩兵第3大隊第1中隊・2等歩兵。[独中大学助手]。アルトナ市(現ハンブルク市)の生まれ。ハレの高等農林卒後、ベルリン及びハレの大学で農芸化学を学ぶ。1912年一年志願で青島に赴き軍隊に入った。同地の独中大学の助手となり、1914年日独戦争勃発とともに従軍、俘虜となり久留米収容所に収容された。1917年1月、前月上旬にアメリカ大使館三等書記官が久留米収容所を視察した際の請願に関連して、アンデルス少佐とともにアメリカ大使宛にそれぞれ信書を出した。大戦終結後は帰国せず、1920年から九州帝国大学、山口高等学校でドイツ語を教えた。『若き日本』という雑誌を刊行して武者小路実篤、菊池寛、山本有三他の日本近代文学の作品を翻訳発表した。中でも夏目漱石の『坊ちゃん』(大阪共同出版社、1925年)の翻訳が知られている。1934年九州帝国大学を退職したが、その後の消息は不明である。【『来日西洋人名辞典』等より】(732: 久留米)
- 748) Sperling (シュペルリング), Eduard: 海軍膠州派遣砲兵大隊第2中隊・後備砲兵伍長。習志野時代、習志野劇場によるエルンスト作の喜劇『フラックスマン先生』に教師役で出演した。(1473: 福岡→習志野)
- 749) Spöler (シュペラー), Heinrich (-1919): 海軍膠州派遣砲兵大隊・2等砲兵。1919年1月29日、スペイン風邪により習志野で死亡。(4445: 熊本→大分→習志野)
- 750) Stauch (シュタオホ), Karl (-1919): 海軍東亜分遣隊第1中隊・2等歩兵。1919年1月29日、スペイン風邪により習志野で死亡。(228: 東京→習志野)
- 751) Stecher (シュテッヒャー), Georg Walter (1874-): 海軍野戦砲兵隊長・海軍砲兵大尉。[外方陣地左翼陣地指揮官]。ドレスデンで生まれた。1907年9月初旬、ザクセン陸軍省に所属していたシュテッヒャーは、陸軍少佐久邇官邦彦王のプロイセン陸軍への受け入れと交換で来日、同年11月に静岡の連隊に、翌8年9月に東京世田谷第14砲兵連隊付武官となった。【『来日したザクセン関係者』、126-127頁】その時期に明治天皇の接見をも体験している。世田谷時代に猪狩少佐、山田耕三大尉と親交を結ぶ。1909年11月に帰国した。1909年の『ザクセン国政便覧』によれば、ドレスデン駐屯第4野戦砲兵連隊所属となっている。1913年にはピルナ (Pirna) 市駐屯第5野戦砲兵連隊に所属した。その年青島の守備隊に配属された。10月13日の一時休戦時に、カイザー少佐を通じて知友山田大尉からの安否を問う葉書を受け取った。山田大尉から



はその後も、シュテッヒャー大尉を気遣う葉書がドイツ側前線に送られた。【マウヘンハイム(Mauchenheim)大尉の項を参照】松山時代、猪狩少佐の弟と知り合う。また来迎寺の収容所では他の俘虜達に日本語の授業を行い、山越の日曜講演会では「日本」と題して講演した。板東では、1917年10月2日「日本側から見た青島の戦い」の第1回講演(第2回は9日)を行った。板東テニス協会の理事長を務めた。板東の鳴門市ドイツ館には、シュテッヒャーが筆で書いた「忍 耐 ステッヘル少佐」の書が額に納められて展示されている。【収容中に昇進したと思われる。フォラートウン(Vollerthun)及びヴァルデック(Waldeck)の項を参照】

(3132: 松山→板東)

752) Steffens (シュテッフェンス), Heinrich: 海軍歩兵第3大隊第6中隊・予備副曹長。松山時代、公会堂の収容所講習会で英語の講師を務め、板東では合唱団に所属してバスを担当した。

(3098: 松山→板東)

753) Stegmaier (シュテークマイアー), Alois: 海軍膠州派遣砲兵大隊第4中隊・1等砲兵。習志野時代の1919年8月12日、習志野演劇協会によるベネディクス作の喜劇『親戚の情愛』に女中頭役で出演した。(1481: 福岡→大分→習志野)

754) Steimetz (シュタイメッツ), Fritz: 海軍歩兵第3大隊幕僚・後備中尉。[地区工兵将校]。

(1578: 福岡→習志野)

755) Stein (シュタイン), Wilhelm: 海軍歩兵第3大隊第1中隊・2等歩兵。[ホテル経営]。大戦終結後、シャート(Schad)と済南で共同経営していた「ホテル・シュタイン・ウント・シャート」の営業を再開した。大戦中はある日本人女性に形式上譲渡してあった。(720: 久留米)

756) Steinbacher (シュタインバッハー), Hans: 海軍歩兵第3大隊第1中隊・2等歩兵。久留米の演劇活動では、ベネディクス作の喜劇『新婚旅行』等25演目に、主として女役で出演した。

(713: 久留米)

757) Steindecker (シュタインデッカー), Arthur: 国民軍・卒。1915年9月20日、青島から大阪収容所に移送された。(4704: 大阪→似島)

758) Steinfeld (シュタインフェルト), Heinrich: 海軍歩兵第3大隊第6中隊・2等歩兵。松山時代、公会堂の収容所講習会で日本語の講師を務めた。板東時代の1918年9月、「板東健康保険組合」の第6中隊代表理事に選ばれ、また劇場委員会にも所属した。(3107: 松山→板東)

759) Steinlein (シュタインライン), Jakob: 海軍歩兵第3大隊第2中隊・2等歩兵。板東時代、丸亀蹴球クラブの役員を務めた。(2069: 丸亀→板東)

760) Steitz (シュタイツ), Fred: 海軍歩兵第3大隊第2中隊・後備上等歩兵。9月28日、浮山近くの巫山で日本軍に投降して俘虜となり、久留米収容所に送られた。(739: 久留米)

761) Steitz (シュタイツ), Wilhelm: 海軍歩兵第3大隊第1中隊・予備陸軍少尉。久留米時代、収容所で制作された「久留米カレンダー」(1919年用)にスケッチ12枚を載せた。吉村お縫という名の内縁の妻がいた。(3644: 熊本→久留米)

762) Steppan (シュテッパン), Herbert: 海軍歩兵第3大隊第6中隊・2等歩兵。板東時代、公会堂での絵画と工芸品展覧会に日本趣味に富んだ風景画「赤い寺」を出品して奨励賞を受けた。1918年6月1日、軍楽曹長ハンゼン(Hansen)によってベートーヴェンの「第九交響曲」が板東収容所内で本邦初演された。その折り、シュテッパン、ヴェーゲナー(Wegener)2等歩兵、フリッシュ(Frisch)2等歩兵、コッホ(Koch)伍長の四人は第4楽章の「合唱」でソロを受け持った。(3115: 松山→板東)

763) Stern (シュテルン), Otto: ヤーグアル乗員・1等水兵。習志野時代、習志野劇場によるエルンスト作の喜劇『フラックスマン先生』にブロックマン役で出演した。(262: 東京→習志野)

- 764) Stertz (シュテルツ), Fritz (-1916): 海軍砲兵中隊・2等水兵。1916年6月4日習志野で死亡、軍人墓地に埋葬された。(255: 東京→習志野)
- 765) Stoll (シュトル), Hugo: 海軍東亜分遣隊第2中隊・副曹長。[第13砲台指揮官]。指揮官は後に、ブリルマイアー予備少尉に替わった。(4067: 大阪→似島)
- 766) Stolle (シュトレ), Otto: 海軍歩兵第3大隊第7中隊・予備伍長。板東時代、収容所本部事務室で電灯係りを務めた。(2080: 丸亀→板東)
- 767) Stopsack (シュトツパツク), Hermann: 海軍膠州派遣砲兵大隊第4中隊・予備2等水兵。1919年12月23日、大阪安治川鉄工場から鉄作業の技術を有して在留就職希望者の照会にあたって、久留米収容所から提出された回答書にその名があった。(3731: 熊本→久留米)
- 768) Storf (シュトルフ), Matheus: 海軍膠州派遣砲兵大隊第3中隊・2等砲兵。大阪時代の1915年12月31日の大晦日、ケルン (Kern) とともに脱走したが、翌元旦に堤防の上を歩いているところを発見され逮捕、大阪監獄に収監された。この事件のため、1月27日に予定されたドイツ皇帝誕生日を祝う祝賀会及び音楽会が許可されなかった。(4061: 大阪→似島)
- 769) Straeler (シュトレラー), Herbert: 海軍膠州派遣砲兵大隊・海軍中尉。[第7及び第7a砲台指揮官]。当時28歳だった。1915年11月福岡収容所から逃亡した。フランス語が巧みだったので、パリ・ヴォルテール街59番地に住む法律家アンリ・ヴーテル (Henry Vouters) と称した。上海で四人が落ち合ってから、ザクセと二人で太平洋を渡ってアメリカに行き、更にザクセとともにノルウェー人を装ってヨーロッパに向かったが、スコットランド沖でイギリス軍艦の臨検で発覚して逮捕され、大戦終結までマン島の俘虜収容所に収容された。ザクセ少佐と共同執筆した「我等が逃亡記」という記事が、『シュトゥラールズント日報』の付録娯楽版 ("Stralsunder Tageblatt", Unterhaltungs-Beilage, Nr. 54ff, März~Juli, 1938) に掲載された。(1462: 福岡)
- 770) Strantz (シュトランツ), Heinrich von: 海軍東亜分遣隊第3中隊長・陸軍大尉。[外方陣地左翼陣地]。(3698: 熊本→久留米→習志野)
- 771) Strasser (シュトラッサー), Karl: 総督府・後備陸軍少尉。[総督府経理官及土木監督官]。ゲーデッケ中尉の後を受けて要塞火工長に就いた。(1460: 福岡→習志野)
- 772) Strauss (シュトラウス), Moi: 海軍歩兵第3大隊第6中隊・2等歩兵。妻は日本人女性でミサオという名であった。【『日本人とドイツ人』59頁】(3117: 松山→板東)
- 773) Strauss (シュトラウス), Paul: 海軍歩兵第3大隊第4中隊・2等歩兵。久留米時代は演劇活動で、トーマ作の喜劇『放蕩娘』等に出演した。(3668: 熊本→久留米)
- 774) Streich (シュトライヒ), Otto: 海軍東亜分遣隊第3中隊・上等歩兵。[食肉加工職人]。東京時代の1915年4月4日、日本官憲の命令を聞かなかったことから重営倉2日に処せられた。(235: 東京→習志野)
- 775) Stempel (シュトレンベル), Walter: 所属部隊なし・2等掌砲兵曹。元キールの海軍水兵第1大隊所属。1912年アメリカに渡りペンキ屋となったが、1914年11月3日アメリカ歩兵大隊に志願してマニラに赴いた。1915年2月除隊してサンフランシスコに戻る途中船は長崎に寄港した。上陸して酒をしこたま飲み日本の官憲に見咎められた。たまたまドイツの新聞を持っていたため逮捕され、久留米収容所に送られた。当時24歳だった。1916年4月10日ヴィラーバッハ (Willerbach) と逃亡するが、4月17日長崎で捕まり、禁固1年6ヶ月の刑を受けて福岡監獄に収監された。久留米の演劇活動では、喜劇『クラブチェアに座って』他1演目に出演した。(4710: 久留米)
- 776) Strieder (シュトゥリーダー), Kurt W.: 海軍歩兵第3大隊工兵中隊・後備伍長。松山時代、

山越の収容所講習会でフランス語の講師を務めた。(3131: 松山→板東)

- 777) Struck (シュトルック), Heinrich: 総督府。[巡查長]。妻と子は大战終結まで青島に留まった。(4074: 大阪→似島)
- 778) Stueben (シュトゥーベン), Franz: 海軍膠州派遣砲兵大隊・1等機関兵曹。青島船渠技手のロルケ(Rolke)とともに、プリューショウ中尉の飛行機の組み立てを行った。(4308: 大阪→徳島→板東)
- 779) Sturm (シュトゥルム), Peter: 海軍歩兵第3大隊第2中隊・2等歩兵。9月28日、浮山近くの巫山で日本軍に投降して俘虜となり、久留米収容所に送られた。(740: 久留米)
- 780) Suhr (ズーア), Karsten H.: 海軍歩兵第3大隊工兵中隊・後備2等工兵。板東公会堂での絵画と工芸品展覧会に連作「日本の風景」を出品した。(3004: 松山→板東)
- 781) Suran (ズーラン), Franz (-1917): 海軍砲兵中隊・後備2等兵曹。東京時代の1914年12月、不服従の行動で重営倉3日に処せられた。更に1915年6月29日には、収容所内の酒保が閉店になってから酒の販売を強請し、空き瓶で酒保監督の軍曹を殴ろうとして重営倉10日の処罰を受けた。1917年8月29日習志野で死亡。(247: 東京→習志野)
- 782) Susemihl (ズーゼミール), Werner F.: 海軍歩兵第3大隊第6中隊・後備伍長。松山時代、公会堂の収容所講習会で英語の講師を務め、板東時代は、板東義勇消防団の団長を務めた。(3101: 松山→板東)
- 783) Syre (ジュレ), Hermann: 海軍歩兵第3大隊第7中隊・上等歩兵。[建築家]。板東時代、工芸品展にアードラー(Adler)と縮尺25分の1の橋を制作・出品した。妻と子どもは大战終結まで済南で暮らした。(2083: 丸亀→板東)
- 784) Tabbert (タッベルト), Otto: 海軍歩兵第3大隊第1中隊・予備陸軍少尉。[裁判所書記官]。妻と子は大战終結まで上海で暮らした。(769: 久留米)
- 785) Taudien (タオディエン), Hugo: 海軍砲兵中隊・2等副按針長。久留米時代の1916年7月19日、ヘルム(Helm)と逃亡するがすぐに捕まった。このことは収容所と警察の対立を生んだ。重営倉30日に処せられる。(3753: 熊本→久留米→青野原)
- 786) Teller (テラー), Herbert (-1919): 海軍膠州派遣砲兵大隊第2中隊・1等砲兵。1919年2月4日、スペイン風邪により習志野で死亡。(1790: 静岡→習志野)
- 787) Temme (テンメ), Ammandus (1893-1915): 海軍歩兵第3大隊第2中隊・2等歩兵。1915年6月6日丸亀で死亡、軍人墓地に埋葬された。(2094: 丸亀)
- 788) Thamm (タム), Eduard (-1914): 海軍東亜分遣隊第2中隊・2等歩兵。9月28日、浮山近くの巫山で日本軍に投降して俘虜となる。二日後の30日、青島郊外の東李村第2野戦病院で死亡、日本軍により埋葬された。(108: なし)
- 789) Theen (テーン), Theodor: 海軍東亜分遣隊第1中隊・後備伍長。[商人]。青島では両親と妻の四人家族で、開戦後上海に逃れた両親と妻は大战終結までそこで暮らした。1915年12月25日の習志野収容所でのクリスマスコンサートでは、P.ローデの作品10「エア・ヴァリエ」及びヘンデルの「ブーレ」をヴェルダー(Wälde)水兵のピアノに合わせてヴァイオリン演奏した。習志野収容所開設以来5年余に亘って俘虜郵便係となって、陸軍郵便検閲官の業務を助けたことによる所長山崎友造名の感謝状(1919年11月7日付け)が残っている。また同日付での妻の病状悪化を示す文書も残っている。正規の解放前に1ヶ月早く上海へ向けて習志野を發った。上海に居る妻がこの年の1月以来病にあり、危篤との理由からであった。(271: 東京→習志野)
- 790) Theile (タイレ), Friedrich: 海軍歩兵第3大隊第1中隊・上等歩兵。久留米時代の演劇活動

- では、K.Th.ケルナー作の悲劇『トニー』等に出演した。宣誓解放された。(773:久留米)
- 791) Thielsch (ティールシュ), Alfons: 海軍歩兵第3大隊第2中隊・2等歩兵。9月28日、浮山近くの巫山で日本軍に投降して俘虜となり、久留米収容所に送られた。(777:久留米)
- 792) Thies (ティース), Heinrich: 海軍歩兵第3大隊第7中隊・上等歩兵。板東時代、板東ホッケー協会の庶務係を務めた。(2096:丸亀→板東)
- 793) Thilo (ティーロー), Friedrich: 海軍歩兵第3大隊第6中隊・予備副曹長。[山林局長代理]。8月末からの豪雨で破壊された道路を、部下の憲兵曹長とともに中国人労働者を使って修復に努め、日本軍が租借地境界に進軍する前に復旧させた。【『青島戦史』76頁】(4079:大阪→似島)
- 794) Thomer (トーマー), Fritz: 海軍東亞分遣隊・2等歩兵。習志野時代の1919年1月8日と9日、収容所で演じられたハウスライターとライマン作の3幕の茶番劇『電話の秘密』に娘役で出演した。(1608:福岡→習志野)
- 795) Thönes (テーネス), Fritz (-1919): 海軍歩兵第3大隊第1中隊・予備副曹長。1919年2月2日、スペイン風邪により習志野で死亡。(4447:熊本→大分→習志野)
- 796) Tidemann (ティーデマン), Karl: 海軍歩兵第3大隊第1中隊・予備伍長。久留米の演劇活動では、リンダウ作の『もう一人の男』等3演目に出演した。(771:久留米)
- 797) Tiefenbach (ティーフェンバッハ), Josef: 海軍歩兵第3大隊第6中隊・予備伍長。[湛山堡壘]。11月2日未明の日本軍の攻撃で負傷した。(4609:大阪→似島)
- 798) Tiefensee (ティーフェンゼー), Dr. Franz: 海軍歩兵第3大隊第6中隊・2等歩兵。[独中大学講師・中国語学者]。松山時代、公会堂の収容所講習会で中国語及び数学の講師を務めた。板東収容所内印刷所から『中国礼式入門』、『商用中国語・中国事情』、『礼節指南』を出した。1917年6月21日、「中国の夕べ」で講演を行う。ドイツが戦争に負けて俘虜達が故国に帰還し始めると、ドイツで若者達の再教育をする方が中国語の勉強よりも重要だとの考えに至った。帰還船がインド洋上にさしかかった時、ティーフェンゼーは貴重な草稿類を全て海中に放り投げてしまった。ドイツ帰国後の1920年、『東亞評論』に「日本で俘虜となって」の文章を寄稿した。(3143:松山→板東)
- 799) Timm (ティム), Johannes: 海軍歩兵第3大隊第6中隊・2等歩兵。松山時代、山越の収容所講習会で英語及びスペイン語の講師を務めた。(3142:松山→板東)
- 800) Timme (ティンメ), Wilhelm: 総督府・予備海軍大佐。[青島市防衛指揮官及び国民軍並びに消防隊指揮官]。日独開戦に備えての食料・物資の調達責任者になった。ウラジオストックに豚やセメント等を運ぶあるアメリカ商人の船の積み荷を、相場価格でまるごと買い取ったりして、防備・籠城に備えた。糧食は半年分を確保したと言われる。(1590:福岡→習志野)
- 801) Tittel (ティッテル), Hans: 海軍歩兵第3大隊第7中隊・副曹長。東アジアの数ヶ国語に通じ、バルト (Barth) の中国古典の師であった。板東時代、収容所内印刷所から『相撲図説・日本の格闘技』を出し、またグロスマン (Grossmann) と共著で『尋常小学校読本独文解説』の本を出した。下士官室の専用机の脇には、常にウイスキーのビンが置いてあった。戦後バタビアのオランダ財務部に就職し、中国人商会で会計帳簿等の税務調査の仕事をした。中国語、マレー語の知識が存分に発揮されたが、数年後に死亡した。噂では、竹の繊維に含まれる微細な毒の入ったカクテルが原因とも言われた。【《Als deutscher Kaufmann in Fernost》56頁】(2095:丸亀→板東)
- 802) Tostmann (トストマン), Heinrich: 海軍歩兵第3大隊・中主計 (中尉相当)。[総督府主計長]。(770:久留米)

- 803) Traut (トラウト), Hans : 海軍歩兵第3大隊・予備副曹長。〔第5歩兵堡壘〕。9月29日の夜海泊河の河口近くで、トラウト率いる20名は日本軍と不意に遭遇し、銃床での殴り合いになった。かろうじて第5歩兵堡壘に逃れた。(3749 : 熊本→久留米→青野原)
- 804) Trautmann (トラウトマン), Franz : 海軍膠州派遣砲兵大隊第5中隊・予備1等信号兵。〔食肉加工所旋毛虫検査官〕。9月28日、浮山近くの巫山で日本軍に投降して俘虜となり、久留米収容所に送られた。(787 : 久留米)
- 805) Trendel (トレンデル), Anton : 海軍膠州派遣砲兵大隊・予備海軍少尉。〔第1砲台指揮官〕。〔ホテル経営者〕。木製の擬砲を造ってその周囲を火薬で爆破させ、あたかも砲台が破壊されたように見せかけた。福岡時代、5名の将校の逃亡事件で調べられるが、無罪判決を受けた。大戦終結後青島に戻ったが、戦争中のホテルの維持困難から負債が嵩み売却せざるを得なかった。(1591 : 福岡→習志野)
- 806) Trendelburg (トレンデルブルク), Franz : 海軍歩兵第3大隊第5中隊・陸軍中尉。〔新沙子口派遣隊指揮官〕。後に第3歩兵堡壘救援に向かった。板東時代、収容所のスポーツ委員会の委員長を務めた。(3141 : 松山→板東)
- 807) Treuke (トロイケ), Richard : 国民軍・卒。〔イルチス砲台〕。当時43歳でベルリン生まれ。18歳の時スイスを経てアルゼンチン、ブラジルへ行き、数年を経て中国に渡り、上海、天津を経て青島に住んだ。最後は青島の貿易商社「ヴィンクラー」の簿記係となった。青島在住は14年に及んだ。〈その〉という名の日本人女性と暮らしていたが、〈その〉は青島のドイツ人家庭に保母として雇われていた。同棲6年になり、子供が三人いた。1915年9月20日、青島から大阪俘虜収容所に送られると日本への帰化を申請したが却下された。板東ではやがて、ドイツ人俘虜達とじっくりしなかったポーランド、ロシア、オランダ、アルザス地方出身者とともに、収容所から離れた成就院分置所に収容された。トロイケはドイツ人であったが、帰化申請が反感を買っていたからであった。解放まじかに自殺未遂を企てた。(4705 : 大阪→丸亀→板東)
- 808) Trittel (トリッテル), Walther : 総督府通訳・予備陸軍少尉。〔暗号将校〕。妻と子は大战終結まで上海で暮らした。(3757 : 熊本→久留米)
- 809) Trost (トロスト), Hermann : 海軍歩兵第3大隊・階級不明。〔巡查〕。妻と子は大战終結まで青島に留まった。(3147 : 松山→板東)
- 810) Tschentscher (チェンチャー), Waldemar : 海軍東亜分遣隊第1中隊・陸軍中尉。ヘルツベルク大尉の戦死後、第1中隊の指揮を執ったが、後バーケ中尉と替わった。(4610 : 大阪→似島)
- 811) Tucher (トゥーハー), Christof Frhr. v. : 海軍歩兵第3大隊第5中隊・1年志願兵(男爵)。9月27日、李村で俘虜となり久留米収容所に送られたが、負傷のため当初は久留米衛戍病院に収容された。(786 : 久留米→板東)
- 812) Ueberschaar (ユーバーシャール), Dr. Johannes (1885-1965) : 海軍歩兵第3大隊参謀本部通訳・予備陸軍中尉。法学博士。〔大阪高等医学校外国人教師〕。マイセンに生まれた。ライプチヒ大学で(1906-1911)法律を学ぶ。1911年、日本国憲法の研究で学位取得、大阪高等医学校のドイツ語及びラテン語教師として来日した。10月12日の戦死者埋葬、負傷者救出のための一時休戦には、カイザー少佐の通訳として派遣された。また11月7日午後4時からモルトケ兵営で行われた青島開城交渉にも通訳として参加した。習志野時代の1917年10月31日、ミーリエス(Milies)と共同で「宗教改革400年記念の夕べ」を主催した。二部構成の音楽会と言えるものであるが、合間に「1517年から1917年のドイツ人」の題で講演した。1919年3月5日に開催された「朗読の夕べ」では、レッシング作の『賢人ナータン』から第3幕7場の有名な「3

- つの指輪」の場面を朗読した。大戦終結後も日本に留まり、1919年から1930年まで再び大阪高等医学校に在職し、この間日独交換学生制度及びゲーテ協会設立に参加した。1932年から1937年ライプツィヒ大学日本学教授、日本文化研究所を設立し、初代所長となった。1937年再度来日し、天理外国語学校、甲南高等学校を経て、第二次大戦後は甲南大学教授に就いた。1965年1月21日、神戸市の海星病院で没した。『天皇の地位』、『プロイセン憲法と日本憲法』、『芭蕉と「奥の細道」』、『日本における学生運動』等の著書がある。(276：東京→習志野)
- 813) Uhlenhuth (ウーレンフート), Walter : 海軍東亜分遣隊第2中隊・後備副曹長。久留米収容所では絵を描いた。1917年5月19日、朝香宮鳩彦王にリーデルシュタイン、シュタイツ等の絵とともに供覧に呈する。その『日記』の中で青島の攻防について論評している。また1976年4月15日付けで、グライクスナー (Gleixner) から手紙が届いた。(3762：熊本→久留米)
- 814) Uhlig (ウーリヒ), Alfred : 海軍歩兵第3大隊第2中隊・後備上等歩兵。9月28日、浮山近くの巫山で日本軍に投降して俘虜となり、久留米収容所に送られた。(795：久留米)
- 815) Ulbrich (ウルブリヒ), Robert : 海軍東亜分遣隊第5中隊・2等兵曹。板東時代、松江所長の斡旋により、他の3名の俘虜と一緒に撫養中学校において、板野郡長や郡内の小中学校校長および体操教師を集めて、体操の講話並びに実技を行った。やがて彼等は巡回体操教師として各小中学校を回って実技を行った。【『日本人とドイツ人』271頁より】また無料水泳教室の教官も務めた。(4312：大阪→徳島→板東)
- 816) Umbscheiden (ウムブシャイデン), Ernst : 海軍膠州派遣砲兵大隊第1中隊・1等砲兵。習志野時代の1919年1月8日、9日、収容所で演じられたハウスライターとライマン作の3幕の茶番劇『電話の秘密』に衛生顧問官役で出演した。(1611：福岡→習志野)
- 817) Unkel (ウンケル), Heinrich : 海軍歩兵第3大隊第7中隊・2等歩兵。1916年3月18日、静岡収容所を脱走した。当時40歳だった。カナダ・ライフル隊アンダーウッド大尉と称するアメリカの偽造旅券で上海に逃げ、更に上海から逃走した。(1796：静岡)
- 818) Unverzagt (ウンフェアツァークト), Friedrich : 海軍砲兵中隊・1等焚火兵。久留米時代の1917年1月28日、W.アンドレーアを仲間18人で殴打し、傷害罪で1月の懲役刑に処せられた。(3763：熊本→久留米)
- 819) Violet (ヴィオレット), Frederic : 海軍歩兵第3大隊第7中隊・予備副曹長。板東時代、公会堂での工芸品展に拡大写真を出品した。また、板東ホッケー協会のチームのメンバーだった。(2104：丸亀→板東)
- 820) Vissering (フィッセリング), Carl : 海軍歩兵第3大隊第6中隊・2等歩兵。[商人]。松山時代、公会堂の収容所講習会で中国語の講師を務めた。板東では1917年7月16日、「中国の夕べ」で講演をした。また、新板東テニス協会の記録係及び競技係を務めた。(3151：松山→板東)
- 821) Vitas (ヴィータス), Janos (-1916) : カイゼリン・エリーザベト乗員・2等水兵。1916年5月25日青野原で死亡、姫路軍人墓地に埋葬された。(2442：姫路→青野原)
- 822) Vockerodt (フォックロート), Eduard : 海軍歩兵第3大隊予備榴弾砲兵隊・予備上等砲兵。板東時代の1919年、収容所内の印刷所から『工場設計』(Fablikanlagen)の本を出した。(3771：熊本→久留米→板東)
- 823) Vogelfänger (フォージェルフェンガー), Christian : ヤーグアル乗員・2等水兵。東京に列車で着いた時に市民、生徒を含む人々から歓迎の挨拶を受けたが、一人の和服を着た若い女性から、「親切にしてくれたあるドイツ人夫妻への感謝に応じて、の紙片が折りたたまれた花籠を受け取った」【『The German Prisoners-Of-War in Japan, 1914-1920』8頁】東京収容所時

代、あるドイツ人夫妻から貰った愛犬シュトロロヒ (Strolch) を連れていた。彼は東京収容所の図面一葉と習志野収容所の詳細な地図数葉を書き残した。習志野時代は将校用厨房で炊事係を務めた。また、彼の「日記」の表紙には、苗字を漢字に当てはめた「風〇〇寶賀」(〇〇の部分判読不能)とカタカナによる「フウクルフィンガー」と「フ(オ)ーゲルフィンガー」の文字が見られる。大戦終結して豊福丸で帰還し、ヴィルヘルムスハーフェン港に入港する際には安全に入港すべく水先案内をした。愛犬シュトロロヒと写した写真など、フォーゲルフェンガーが写った写真は、今日いくつもの資料で多数紹介されている。【『ドイツ兵士の見たNARASHINO』41頁等より】(281:東京→習志野)

824) Vogt (フォークト), Dr. Karl (1878-): 海軍東亜分遣隊第2中隊・予備陸軍少尉。[弁護士及び弁理士]。日独戦争前、横浜市山下町75番地で法律特許事務所を開いていた。10月10日、フォークト法律特許事務所から俘虜情報局へ、俘虜氏名照会手続きについての問い合わせがあった。11月7日午後4時からモルトケ兵営で行われた青島開城交渉に、通訳として参加した。また11月10日にモルトケ兵営で行われた神尾青島攻囲軍司令官とヴァルデック総督の会見では、通訳の任に当たった。久留米時代の1915年11月5日、真崎甚三郎所長によるペーゼ、フローリアン両将校殴打事件が発生した際、日本通であることからスクリーバ予備少尉とともに真崎所長とアンデルス少佐の会談に列席し、事件打開に骨を折った。フォークトは真崎と幾度も面談協議し、また俘虜将校達に対しても日本の習慣等について説明した。1916年12月から収容所内の「交響楽団」の指揮を執り、更にヘルトリング (Hertling) やツァイス (Zeiss) とともに収容所の音楽教育にも携わった。1917年3月4日、収容所のオーケストラ・コンサート「ベートーヴェンの夕べ」では、「交響曲第5番〈運命〉」の指揮をした。また1918年7月9日には、ベートーヴェンの「第九」を第3楽章までではあるが演奏指揮した。【インターネットによる『第九』事始め(中)より】「カール・フォークトの四つの歌」(1919年)を作曲し、演奏指導等も行い、また自身が作曲した歌曲を歌うなど、久留米の音楽活動ではレーマン (Lehmann) とともに大活躍した。大戦前から日本の民法、商法を独訳・紹介した本を数冊自費出版した。大戦終結後は東京のドイツ大使館の法律顧問をするなど、法律家として日本におけるドイツ人の権利擁護、またドイツにおける日本の権利仲介にも重要な役割を果たした。【ある日本在住ドイツ人の人生記録から】(《Aus der Lebenschronik eines Japandeutschen》, Tokyo, 1962)の著書もある。(3772:熊本→久留米)

825) Voigtländer (フォイクトレンダー), Hermann: 海軍歩兵第3大隊参謀本部・予備少尉。[連絡将校]。(2744:名古屋)

826) Vollerthun (フォラートウン), Waldemar: 総督府参謀本部・海軍大佐。[情報部長]。[海軍省膠州課長]。7月ドイツ本国から、膠州湾租借地視察のために出張で青島にきた。暫く滞在して帰国の途に就いたところで大戦が勃発し、本省の命を受けて青島に引き返した。8月3日青島に戻り、総督府情報部長に就任した。8月4日、イギリスが参戦後ただちに上海、芝罘等でドイツの電信網の切断を開始すると、フォラートウンは中国当局と接触して、通信網確保に奔走した。伝書鳩の利用も指示した。8月14日、日本の参戦がありうるか探るべく総督の命令を受けて、東京に情報収集に出かける直前、済南まで赴いたところで総督から日本の参戦間じかとの電報を受けた。済南で待機するか青島に戻るか判断中の16日、日本の最後通牒が発せられたことを知って青島に戻った。俘虜として収容中に少将に昇任し、また後に海軍次官になった。著書に『青島攻防戦』(《Der Kampf um Tsingtau》, Leipzig, 1920.)がある。前述の書は習志野収容所で執筆されたものと思われる。序文には「1919年10月1日習志野にて」と記されている。『青島戦史』もこの書物に多くを依拠している。また、プリューショウ中尉に関する

記述には多くの頁を割いている。「ブリューショウ中尉はその有名な書物（私は未見だが）でその辺を既に語っていて、周知のことを繰り返すことになるが、読者に再度紹介せねばならない」【『青島攻防戦』75頁】との記述も見られる。(1619：福岡→習志野)

- 827) Vollweiler (フォルヴァイラー), Adolf: 海軍歩兵第3大隊第4中隊・予備伍長。久留米時代の1918年6月スイス公使から情報局へ、シベリア・ハバロフスクのスイス赤十字社の依頼によるフォルヴァイラー宛葉書1葉交付依頼があり、検閲の上13日に転送された。(3765：熊本→久留米)
- 828) Voskamp (フォスカンプ), Joachim: 海軍歩兵第3大隊第6中隊・2等歩兵。青島ベルリン福音教会の教区監督フォスカンプの長男。弟の1年志願兵ゲルハルトは11月4日、独中大学付近で背中に砲弾を受けて死亡した。久留米時代は演劇活動で、ケルナー作の悲劇『トニー』等3演目に出演した。(3768：熊本→久留米)
- 829) Wagner (ワグナー), Georg: 海軍歩兵第3大隊第2中隊・伍長。9月28日、浮山近くの巫山で日本軍に投降して俘虜となり、久留米収容所に送られた。(816：久留米)
- 830) Wagner (ワグナー), Jacob: 海軍歩兵第3大隊第6中隊・2等歩兵。板東時代、板東義勇消防隊の第2小隊長を務めた。(3166：松山→板東)
- 831) Waldeck (ヴァルデック), Alfred Meyer- (1864-1928): 膠州総督・海軍大佐。1864年11月27日、ロシアのサンクトペテルブルクに生まれた。父クレメンス・フリードリヒ・マイアー・フォン・ヴァルデック (Clemens Friedrich Meyer von Waldeck) はサンクトペテルブルク大学のドイツ文学教授であった。10歳の時父親は退職し、一家はハイデルベルクに移り住んだ。大学で1年間歴史学を学んだ後海軍に入った。1908年に青島に赴任して1911年まで総督府参謀長を務めた。1898年にはヨハンナ・ナイと結婚し、1男2女をもうけた。1911年8月19日、トゥルッペル総督の後任として第4代膠州総督に就任、植民地加俸、交際費等を含めた年俸は5万マルクであった。身長190センチの長躯で胸幅厚く、白髪まじりの山羊髭をたくわえた風貌はロシアの將軍を思わせた。水泳と馬術がめっぽう好きであった。【《The Japanese Siege of Tsingtau》18頁より】1914年11月10日、モルトケ兵営において青島攻囲軍司令官神尾光臣中将と会見した。その折り神尾中将は、日本陸軍がドイツ陸軍からこれまでに受けた指導に感謝の意を表し、日本の政策上不本意ながら青島を攻撃したこと、また日本軍に多大の損失が出るほどドイツ軍の防備の優れたことを語った。これに対してヴァルデック総督は、日本軍の武勇を称えたとされる。妻子は開戦後に北京に逃れた。11月14日、俘虜となるべく日本に向かった。それは奇しくも17年前に、ドイツ東洋艦隊が青島を占領した日と同じ日付であった。11月17日午前9時20分、御用船薩摩丸で門司港に到着した。服装は、黒の海軍帽、紺地にダブルの金釦を付け、四線の太い金線のある正服を着用。黒のネクタイを結び、同じ紺地のズボンに茶褐色の革の脚絆を着け、長靴を穿いていた。出迎えに来た旧知の山本茂中尉と面談した。今回で来日4度目、3年前の3度目の来日時に奈良で雷雨にあったと語った。【参照：総督の談話『東京朝日新聞』1914年11月18日付】福岡での収容宿舎は、福岡赤十字社支部であった。この建物は旧福岡藩時代の台場跡のあった洲崎海岸に在り、瀟洒にして広壯、眺望絶佳で玄海灘を望み、眼下に西公園、向かいは物産館、市塵を離れた所に在った。日本の大佐の月給に相当する280円を月俸として支給された。1915年1月29日、支給された給与から150円を大分収容所の俘虜のために寄付した。1918年3月25日、習志野に移送された。収容中に少将に昇任した。1920年3月25日、ヴァルデック元総督等に乗せた帰還船南海丸は、残留していた最後の家族(150人)を乗せるため青島に寄港した。『青島の武装と包囲』(Bericht über die Armierung und Belagerung)の報告書を残した。(1635：福岡→習志野)



- 832) Walder (ヴェルダー), Alfons : 海軍東亜分遣隊第1中隊・2等歩兵。元音楽指揮者。習志野時代、60人編成の習志野男声合唱団の指揮者を務めた。1915年5月24日、主宰する合唱協会の「歌曲の夕べ」で指揮を執り、同年12月25日の習志野収容所でのクリスマスコンサートでは、P.ローデの作品10「エア・ヴァリエ」及びヘンデルの「ブルー」をテーン(Theen) 伍長のヴァイオリンに合わせてピアノ演奏するなどの活躍をした。1919年10月15日、「アルフォンス・ヴェルダー氏のための謝恩コンサート」が収容所で開催され、最初の演奏曲目は自ら作曲した「俘虜の歌」であった。(288 : 東京→習志野)
- 833) Walter (ヴァルター), Heinrich : 海軍歩兵第3大隊第6中隊・予備伍長。〔湛山堡壘〕。(3165 : 松山→板東)
- 834) Walter (ヴァルター), Hugo : 国民軍・中尉補。〔第1国民軍小隊長〕。大戦終結後は、青島居住を希望した。(4462 : 熊本→大分→習志野)
- 835) Walter (ヴァルター), Hugo : 国民軍・卒。1915年9月下旬に青島収容所に収容され、1916年10月下旬青島から大阪に移送された。(4709 : 青島→大阪→似島)
- 836) Waluschewski (ヴァルシェフスキー), Theophil : 海軍砲兵中隊・2等焚火兵。ポーランド人。18歳でアルゼンチンに渡り、アメリカ、オーストラリア等を放浪する。軍艦エムデンに乗船3ヶ月後に青島守備軍に配属された。板東では同じポーランド人のベルトン(不明)と絶えず行動をとるにして、「ベルトンの腰巾着」の仇名が付いた。また、ドイツ人俘虜達から隔離されて成就院分置所に収容された。【林 啓介：『「第九」の里ドイツ村』、133頁】(3811 : 熊本→久留米→丸亀→板東)
- 837) Wannags (ヴァナクス), Martin : 海軍歩兵第3大隊第7中隊・上等歩兵。〔第2歩兵堡壘〕。〔宣教師〕。リトアニアの出身で、元胸甲騎兵であった。広東のベルリン福音教会から、シュヴァルム(Schwarm)とともに青島守備軍に馳せ参じた。板東では1918年3月21日と28日の「中国の夕べ」で、「広東地方の住民」と題して講演した。(2122 : 丸亀→板東)
- 838) Waschkewitz (ヴァシュケヴィッツ), Wilhelm : 海軍東亜分遣隊第3中隊・2等歩兵。久留米時代は演劇活動で、笑劇『ベルリンっ子』に出演した。(1682 : 福岡→久留米)
- 839) Wasmeier (ヴァスマイヤー), Robert : 海軍歩兵第3大隊第3中隊・上等歩兵。久留米の演劇活動で、シェーンヘル作の悲劇『信仰と故郷』に出演した。宣誓解放された。(818 : 久留米)
- 840) Weber (ヴェーバー), Josef : 海軍膠州派遣砲兵大隊第6(?)中隊・2等砲兵。大阪市難波の野村彦太郎(洋食製品業)から、ウイスキー、ブランデーの製法指導を要請された。(4321 : 大阪→徳島→板東)
- 841) Weber (ヴェーバー), Karl : 海軍歩兵第3大隊第3中隊・上等歩兵。久留米の演劇活動では、シェーンヘル作の悲劇『信仰と故郷』に女役で出演した。宣誓解放された。(820 : 久留米)
- 842) Weber (ヴェーバー), Otto : 海軍歩兵第3大隊第3中隊・2等歩兵。9月28日、浮山近くの巫山で日本軍に投降して俘虜となり、久留米収容所に送られた。(823 : 久留米)
- 843) Weckmann (ヴェックマン), Georg : 海軍歩兵第3大隊第1中隊長・陸軍歩兵大尉。〔第1歩兵堡壘(湛山堡壘)指揮官〕。1918年8月6日習志野に移送された。(803 : 久留米→習志野)
- 844) Wedekind (ヴェーデキント), Heinrich : 海軍砲兵中隊・2等機関兵曹。久留米時代は収容所で数学の学習をした。その折りのドイツ語の教科書が残されている。また演劇活動では、シェンタン作の笑劇『無分別』に出演した。大戦終結後の1918年11月10日、久留米の「つちやたび合名会社」(後に日華ゴム株式会社となり、1962年には月星ゴム株式会社となる)に入社し、50年余勤務してゴム産業の発展に貢献した。社内では後年、上田金蔵の日本人名を用いた。【『月星ゴム90年史』等より】(3807 : 熊本→久留米)

- 845) Wedel (ヴェーデル), Hasso von : 海軍歩兵第3大隊第3中隊長・陸軍少佐。〔第5歩兵堡壘指揮官〕。前記指揮官は後にゾーダン大尉に替わった。大分時代は収容所の俘虜代表を務めた。習志野時代の1919年3月9日、「ハンス・ミーリエス・コンサート」ではサラサーテの「チゴインエルワイゼン」及びシューマンの「トロイメライ」をピアノ演奏し、また同年7月3日の文化・体育祭では第1部の収容所楽団の指揮をした。さらに同年10月5日、マルフケのために開催された「謝恩の夕べ」では、終了の音楽としてヴェーデル作曲の「大分行進曲」がヴォストマン (Wostmann) 指揮の収容所楽団によって演奏された。(4451 : 熊本→大分→習志野)
- 846) Wedemeyer (ヴェーデマイヤー), Max : 海軍東亜分遣隊第1中隊・予備伍長。習志野時代の1919年1月8日と9日、収容所で演じられたハウスライターとライマン作の3幕の茶番劇『電話の秘密』にオルガン奏者役で出演した。(286 : 東京→習志野)
- 847) Weegmann (ヴェークマン), Dr. Oskar C. v. (1879-1960) : 海軍砲兵中隊・予備海軍中尉。1879年1月15日ケルンに生まれた。ミュンヘン大学とハイデルベルク大学で美術文化史を学ぶ。1914年日本美術研究のため3ヶ月日本に滞在したところで第1次大戦が勃発した。森鷗外と面識があった。習志野収容所ではフリッツ・ルンプ及びスクリーバと一緒に、三人が写った写真が残されている。大戦終結後、松山高等学校でドイツ語を教え、この地の女性と結婚した。東京に戻ってからは陸軍大学校、陸軍士官学校のドイツ語教官となり、OAGの理事も務めた。その後日本医科大学、成蹊大学等の教壇に立った。『おあん物語』、『お菊物語』をドイツ語に翻訳し、また『日本の歴史』、『日本の教育』等の著書も遺した。1959年勲4等旭日章を受賞。1960年5月9日、OAG事務所のデスクに向かったままで死去し、多磨霊園に埋葬された。ポツダム市の参事官を勤めていた兄がルンプ家の近くに住んでいたことから、フリッツ・ルンプとは旧知の間柄であった。(299 : 東京→習志野)
- 848) Wegener (ヴェーゲナー), Georg : 総督府参謀本部。〔海軍法務官・総督府法務長〕。福岡時代、5名の逃亡事件で調べられるが、無罪判決を受けた。(1636 : 福岡→習志野)
- 849) Wegener (ヴェーゲナー), Hermann : 海軍歩兵第3大隊第6中隊・2等歩兵。板東時代の1918年6月1日、軍楽曹長ハンゼン (Hansen) によってベートーヴェンの「第九交響曲」が板東収容所内で本邦初演された。その折り、ヴェーゲナー、シュテッパン (Steppan) 2等歩兵、フリッシュ (Frisch) 2等歩兵、コッホ (Koch) 伍長の四人は第4楽章の「合唱」でソロを受け持った。(3169 : 松山→板東)
- 850) Wegner (ヴェークナー), Ferdinand : キール第9連隊第85小隊・伍長。【『俘虜名簿』(外交資料館所蔵版)に追加された人物で、日独戦争に関わったかは不明】(4714 : 青野原)
- 851) Wehrhahn (ヴェーアハーン), Ernst R.A. : 海軍歩兵第3大隊重野戦榴弾砲兵隊・後備伍長。静岡時代に、「両名ハ頗ル傲慢不遜ノ態度ニシテ写真撮影セラレ敵国ノ新聞雑誌等ニ掲載セラルルガ如キ事アラバ軍人ノ体面上恥辱ナリト主張シ如何ニ訓諭スルモ之ニ服従セズ遂ニ同人等ノ撮影ヲ中止スルノ已ムナキニ至レリ「ヴェーアハーン」ハ収容所俘虜中富裕者ニシテ金銭ヲ浪費シ行状不脩ノ者ナリ」とされて、ケルクホーフ (Kerkhof) とともに重営倉25日に処せられた。【『日独戦書』】(1806 : 静岡→習志野)
- 852) Weigele (ヴァイゲレ), Eugen : 海軍歩兵第3大隊参謀本部・後備陸軍少尉。〔郵便局長〕。〔連絡将校〕。(1686 : 福岡→習志野)
- 853) Weinholz (ヴァインホルツ), Dr. Fritz : 海軍歩兵第3大隊第2中隊・上等歩兵。板東時代、新板東テニス協会のテニス小屋管理係を務めた。(2109 : 丸亀→板東)
- 854) Weis (ヴァイス), Karl : 海軍歩兵第3大隊第1中隊・後備伍長。久留米時代の1915年3月16日、三井郡役所の黒岩書記が赤岩筑後川架橋設計図を持参して、架橋技師のカール・ヴァイ

スに意見を求めに来て、翌日一緒に視察に出掛けた。1917年5月1日名古屋収容所より情報局へ、ヴァイスが名古屋市熱田服部商店の機械工場で、労役に服するため収容替えとなった旨の報告がなされた。(804:久留米→名古屋)

- 855) Weissenborn (ヴァイセンボルン), Hermann: 海軍歩兵第3大隊第1中隊・2等歩兵。久留米収容所の音楽活動では歌曲を作曲した。(809:久留米)
- 856) Welter (ヴェルター), Heinrich (-1915): 海軍膠州派遣砲兵大隊第4中隊・1等砲兵。1915年1月15日チフスにより福岡で死亡、軍人墓地に埋葬された。(1645:福岡)
- 857) Welzel (ヴェルツェル), Albrecht: 海軍歩兵第3大隊参謀本部・予備陸軍大尉。[青島警察署長]。游内岬の対岸にあたる膠州湾口のイエシュケ(Jaeshcke)半島北庄猟区779ヘクタールを、6年間(1914年1月15日まで)39ドル(約60万円)で借りていた。【『青島経営ニ関スル獨国ノ諸法令』612頁より】(4452:大分→習志野)
- 858) Welzel (ヴェルツェル), Reinhold: 海軍膠州派遣砲兵大隊第5中隊・2等焚火兵。ロシア国籍のポーランド人。1917年11月10日、ヴェルツェルから長崎ロシア領事館及びロシア陸軍大臣宛に解放請願の信書が送られ、検閲の上情報局へ転送された。後に宣誓解放された。(1656:福岡→久留米)
- 859) Wenckstern (ヴェンクシュテルン), Gerhardt von: 海軍砲兵中隊・海軍少尉。[第1b砲台指揮官]。当時26歳だった。モラー少尉指揮の河用砲艦チンタオ(213トン)の乗員。8月3日、停泊していた広東の英仏共同租界沙面島を脱出する際病気のため一人10日ほど留まり、8月12日河船、三板(平底の河船)、鉄道、馬、徒歩等で650キロの離れた青島に向かい、3週間程かけてたどり着いた。青島到着後は数週間衛戍病院に入院し、10月上旬に退院した。1915年11月19日福岡収容所から逃亡した。アメリカに渡り、ニューオーリンズ近くのオーストリア人農場主からはその娘との結婚話を持ち掛けられたりした。オランダのカリフォルニヤ号にオランダ人船員として乗り組みアメリカを脱出したが、イギリス海軍軍艦の臨検により逮捕された。ロンドン近郊のメイドウンヘッドの将校収容所に容れられたが、神経衰弱症を偽装して治療のためスイスに送られ、大戦終結までその地で過ごした。(1638:福岡)
- 860) Wendt (ヴェント), Paul: 海軍東亜分遣隊・陸軍中尉。大分時代、小さい荷物の横パネルに秘密の指令文書を隠し、北京にいる友人と連絡し合って脱走するための綿密な計画を練った。しかし、脱走はしないという宣誓をしていたことから、その計画は実行されずに頓挫した。【『The German Prisoners-Of-War in Japan, 1914-1920』68頁】(4459:熊本→大分→習志野)
- 861) Wenslawski (ヴェンスラフスキー), Karl: 海軍膠州派遣砲兵大隊第5中隊・2等砲兵。習志野時代、俘虜博覧会に自作の写真額を出品した。(1652:福岡→習志野)
- 862) Werkmeister (ヴェルクマイスター), Karl: 海軍歩兵第3大隊第2中隊・2等歩兵。9月28日、浮山近くの巫山で日本軍に投降して俘虜となり、久留米収容所に送られた。(817:久留米)
- 863) Werner (ヴェルナー), Albert: 海軍歩兵第3大隊工兵中隊・2等工兵。板東時代は俘虜収容所医務室の通訳を務めた。やがて戦争終結まで病院の一室にバルトと一緒に住んだ。バルトが日本の内外貿易に就職する際には通訳をした。(3170:松山→板東)
- 864) Werner (ヴェルナー), Alfred (-1918): 海軍歩兵第3大隊機関銃隊・2等焚火兵。1918年5月8日久留米で死亡。(3804:熊本→久留米)
- 865) Werner (ヴェルナー), Wilhelm: 海軍東亜分遣隊・後備副曹長。[第8a砲台]。フィードリヒ(Fydrich)砲兵曹長から引き継いで第8a砲台の指揮を執った。(4322:大阪→徳島→板東)
- 866) Wesemann (ヴェーゼマン), Walter: 海軍東亜分遣隊第3中隊・後備上等歩兵。ロシアのウ

- ラジオストックから青島に馳せ参じた。(1681: 福岡→名古屋)
- 867) Wex (ヴェックス), Friedrich: 海軍東亜分遣隊第2中隊・後備伍長。[製薬会社社員]。応召前は横浜のバイエル合名合資会社薬品部に勤めていた。1918年8月に習志野に移送され、ルンブと知り合いになる。かつての日本人同僚が習志野に面会に来た時、これまでの労苦が失われたことを悲しがって涙を流したと言われる。大戦終結後の1920年に再び日本に戻り、バイエル製薬会社の東京支社支配人となった。(1880: 静岡→習志野)
- 868) Weyhe (ヴァイエ), Curt v.: 海軍野戦砲兵隊・予備陸軍少尉。10月5日、前線の方に移された繋留気球に乗り込んだ。日本軍の榴散弾が気球に当たり地面に落下したが、負傷はしなかった。1919年8月、ウラジオストックのスイス赤十字社に宛てて、私有物品取り寄せ依頼の信書を出し、検閲の上18日情報局に転送された。(837: 久留米)
- 869) Wichelhaus (ヴィッヒェルハウス), Hermann: 海軍歩兵第3大隊第5中隊・上等歩兵。板東公会堂での絵画と工芸品展覧会に、丹念な模写「ノルウェーの女」等を出品したが、松山で完成していたものを放置していたため紙が黄ばんでしまっていた。(3158: 松山→板東)
- 870) Wieder (ヴィーダー), Josef: 海軍東亜分遣隊第1中隊・2等歩兵。習志野時代の1919年5月24日、習志野合唱協会の「歌曲の夕べ」ではエンスレン、ハイメンダール及びベヒトルスハイムの4人でシュヴァーベン民謡の「選ばれし者」を四重唱した。(292: 東京→習志野)
- 871) Wiegand (ヴィーガント), Leopold: 国民軍・陸軍中尉。[動員国民軍指揮官]。(2449: 姫路→青野原)
- 872) Wiesendt (ヴィーゼント), Hermann: 海軍歩兵第3大隊第6中隊・後備副曹長。1917年4月17日、上海の露亜銀行に預金している500円の払い戻しを請求し、在東京のロシア大使館から許可があれば払い戻すと回答が届いた。(836: 久留米→名古屋)
- 873) Wieser (ヴィーザー), Rudolf: 海軍歩兵第3大隊第6中隊・予備2等歩兵。板東時代、ホッケー協会の会計係を務めた。(4323: 大阪→徳島→板東)
- 874) Wiest (ヴィースト), Richard: 海軍砲兵中隊・1等焚火兵。久留米の演劇活動では、リンダウ作『もうひとりの男』に出演した。(3809: 熊本→久留米)
- 875) Wilde (ヴィルデ), Carl: 国民軍・卒。1915年9月20日、青島から大阪収容所に移送された。(4706: 大阪→似島)
- 876) Will (ヴィル), Eduard: 海軍歩兵第3大隊第5中隊・予備陸軍少尉。[弁護士]。久留米時代、収容所の音楽活動では主として室内楽の演奏で指揮を執った。1919年7月、在北京オランダ公使宛に妻子救出に関する信書を出し、検閲の上11日に情報局に転送された。(3790: 熊本→久留米)
- 877) Will (ヴィル), Heinrich: 海軍東亜分遣隊第2中隊・2等歩兵。久留米時代、1915年9月13日から1919年12月12日まで合計10回、室内楽団を指揮した。(1679: 福岡→久留米)
- 878) Willerbach (ヴィラーバツハ), Ernst: 海軍歩兵第3大隊第4中隊・2等歩兵。久留米時代の1916年4月10日、シュトレンベルと逃亡したが、17日に長崎で捕まった。禁固10ヶ月の刑を受けて福岡監獄に収監され、1917年2月27日出獄した。久留米時代は演劇活動で、喜劇・笑劇に出演した。(3788: 熊本→久留米)
- 879) Willers (ヴィラーズ), Ernst: 海軍歩兵第3大隊第4中隊・予備上等歩兵。久留米時代に演劇活動で、トーマ作の喜劇『放蕩娘』に出演した。(3783: 熊本→久留米)
- 880) Willuda (ヴィルダ), August: 所属部隊不明・後備伍長。[帽子仕立て職人]。青島時代は軍御用達商として広く知られていた。大戦終結が近づいた頃、『似島収容所新聞』に軍装品やシルクハット、背広の広告を出した。(4619: 大阪→似島)

- 881) Wilucki (ヴィールキ), Günther von : 海軍東亜分遣隊・陸軍大尉。〔外方陣地左翼陣地副官〕。  
(284 : 東京→習志野)
- 882) Wimmer (ヴィンマー), Ludwig : 海軍歩兵第3大隊第1中隊・2等歩兵。久留米の演劇活動では、ブルーメンタールとガーデルベルク合作の笑劇『私が戻った時』に出演した。(466 : 久留米)
- 883) Winkler (ヴィンクラー), Albrecht : 国民軍・卒。1915年9月20日、青島から大阪収容所に移送された。(4707 : 大阪→似島)
- 884) Winkler (ヴィンクラー), Johann : 海軍東亜分遣隊第1中隊・上等歩兵。10月2日、四房山で俘虜となり、久留米収容所に送られた。(838 : 久留米)
- 885) Winterscheidt (ヴィンターシャイト), Paul : 海軍歩兵第3大隊第4中隊・2等歩兵。9月28日、浮山近くの巫山で日本軍に投降して俘虜となり、久留米収容所に送られた。(834 : 久留米)
- 886) Witte (ヴィッテ), Georg : 海軍歩兵第3大隊第7中隊・上等歩兵。板東時代、収容所内のタバタオで肉屋を営んだ。(2123 : 丸亀→板東)
- 887) Wittmann (ヴィットマン), Hans : 海軍膠州派遣砲兵大隊第4中隊長(?)・海軍大尉。〔陸上砲兵隊指揮官〕。(1637 : 福岡→習志野)
- 888) Wolf (ヴォルフ), Gustav : 海軍東亜分遣隊第3中隊・2等歩兵。習志野時代、東京京橋の「カフェ・パウリスタ」に洋菓子製造の指導に出向いた。(295 : 東京→習志野)
- 889) Wölk (ヴェルク), Max : 海軍歩兵第3大隊第6中隊・予備伍長。〔湛山堡壘〕。11月2日の未明4時10分頃、ヴェルクは第6中隊の湛山兵営から電話で、湛山堡壘に第2小堡壘の電信状態についての調査依頼をした。ラーン(Laan)が進んでその任務に赴いた。(3164 : 松山→板東)
- 890) Wollschke (ヴォルシュケ), Hermann : 海軍膠州派遣砲兵大隊第2中隊・2等砲兵。〔食肉加工職人〕。似島時代、広島物産陳列館での俘虜作品展示即売会にバウムクーヘンを出品するようユーハイムを励まし、自身はソーセージを出品した。大戦終結後は、銀座に新規開店した明治屋経営の「カフェ・ユーロップ」のソーセージ製造主任になった。後に軽井沢に自分の店「ヘルマン」を創業した。(4099 : 大阪→似島)
- 891) Woserau (ヴォーゼラウ), Arthur : 国民軍・卒。1915年9月20日、青島から大阪収容所に移送された。(4708 : 大阪→似島)
- 892) Wostmann (ヴォストマン), Hermann : ヤーグアル乗員・1等軍楽兵曹。習志野時代、収容所における1915年12月25日のクリスマス・コンサートではクーロ中佐のピアノとベーロー予備少尉のチェロに合わせて、メンデルスゾーンの「ピアノ三重奏曲第一番」からのアレグロとアンダンテを、さらに「ジョスランの子守唄」はゼーバッハ、ハイメンダール両少尉のピアノに合わせてヴァイオリン演奏した。1919年10月1日、第2回「芸術家コンサート」がヴォストマン氏のためにと銘打たれて開催された。また同年10月5日、マルフケのために開催された「謝恩の夕べ」では終了の音楽として、ヴェーデル(Wedel)少佐作曲の「大分行進曲」を指揮・演奏した。(303 : 東京→習志野)
- 893) Wunderlich (ヴンダーリヒ), Alexander : 海軍東亜分遣隊・後備副曹長。松山時代、大林寺の収容所講習会で英語の講師を務めた。また板東では、収容所内のタバタオでローデ(Rode)と共同で薬局を営んだ。1918年10月23日には、マイアー＝フェルスター作の戯曲『アルト・ハイデルベルク』上演に際して演出を担当し、1919年3月5日には「ラジウムと放射能」の題で講演した。(3175 : 松山→板東)

- 894) Zach (ツァッハ), Georg (1893-) : 軍艦グナイゼナウ乗員・2等焚火兵。病気のため残留していた東カロリン群島のボナベ島で逮捕され、リュールズ (Luhrs) とともに東京収容所に送られた。(87 : 東京→習志野)
- 895) Zeffler (ツェフラー), Albert : 海軍膠州派遣砲兵大隊第2中隊・砲兵軍曹長。似島で死亡(年月日不明)。(1692 : 福岡→大阪→似島)
- 896) Zeiss (ツァイス), Eduard : 海軍野戦砲兵隊・予備副曹長。熊本収容所時代の1915年2月6日、禁固1年の刑を受けたが、12月22日に恩赦によって出獄した。久留米時代、1918年1月6日の収容所コンサート「リヒャルト・ワーグナーの夕べ」等で指揮者として活躍した。またヘルトリング及びフォークトとともに収容所の音楽教育にも携わった。演劇活動では、1919年12月17日から18日にかけて、久留米収容所最後の芝居となったイプセン作の『国民の敵』等の演出をするとともに、5演目に出演した。(3826 : 熊本→久留米)
- 897) Zenkert (ツェンケルト), Stefan : 海軍歩兵第3大隊第3中隊・2等歩兵。9月28日、浮山近くの巫山で日本軍に投降して俘虜となり、久留米収容所に送られた。(850 : 久留米)
- 898) Zieger (ツイーガー), Albert : 海軍歩兵第3大隊第2中隊・2等歩兵。9月28日、浮山近くの巫山で日本軍に投降して俘虜となり、久留米収容所に送られた。(841 : 久留米)
- 899) Zientek (ツイーンテク), Hipolit : 海軍歩兵第3大隊工兵中隊・2等工兵。9月28日、浮山近くの巫山で日本軍に投降して俘虜となり、久留米収容所に送られた。(851 : 久留米→板東)
- 900) Ziesel (ツイーゼル), Wilhelm : 海軍膠州派遣砲兵大隊第5中隊・予備副兵曹。久留米時代には演劇活動で、ドレディ作の喜劇『お似合いの燕尾服』に出演した。(3830 : 熊本→久留米→名古屋)
- 901) Zimmer (ツインマー), Karl : 海軍歩兵第3大隊第6中隊・2等歩兵。[湛山堡壘]。戦争の当初はラーン (Laan) とともにビスマルク兵営で、本部警備隊に食事やコーヒーを運ぶ任務に就いていた。その後湛山堡壘に移った。(3180 : 松山→板東)
- 902) Zimmermann (ツインマーマン), Joseph : 海軍歩兵第3大隊第3中隊・2等歩兵。1917年5月24日、情報局から各収容所への製針業に従事していて労役希望の照会に際して、久留米ではツインマーマン他3名を届け出た。(845 : 久留米)
- 903) Zimmermann (ツインマーマン), Max : 海軍歩兵第3大隊第6中隊・2等歩兵。本名はヤン・パホルチックでポーランド人。「ロシア領ポーランドのガリチアの出身。22歳の時スターコンチノクの歩兵第45連隊に入隊するが1ヶ月後に脱走する。その後フランスのバリで約一年間指物師の修業をする。再びロシアに戻り、シベリア、トルキスタン、満州を経て中国を放浪する。1914年夏、青島に來た。病気と貧困に耐えられず、ちょうど募集中の青島守備軍に国籍、居住地を偽って入隊する。病気のため衛戍病院送りとなり後方勤務となるが、青島陥落で俘虜となり日本に送られた」【『第九』の里 ドイツ村』134頁より】板東では後に、成就院分置所に隔離収容された。(4116 : 大阪→丸亀→板東)
- 904) Zoellner (ツェルナー), Hermann : 海軍歩兵第3大隊第2中隊・予備上等歩兵。9月28日、浮山近くの巫山で日本軍に投降して俘虜となり、久留米収容所に送られた。1915年10月2日、ルント、アール、ジンの4名で脱走したが、3名は同日捕まり、ジンも5日に捕まった。(840 : 久留米)
- 905) Zorn (ツォルン), Franz : 海軍砲兵中隊・2等砲兵。1919年8月29日付けの『東京日々新聞』によれば、千葉県安房郡勝山町の房総練乳勝山工場へ毎週火曜と木曜の週二回出張して、コンデンスミルクの製造を指導した。【『ドイツ兵士の見たNARASHINO』33頁より】(1691 : 福岡→習志野)

906) Zwanck（ツヴァンク）、Otto：海軍東亜分遣隊第3中隊・予備伍長。習志野時代、1919年3月5日に開催された「朗読の夕べ」で、ロマン派の詩人シャミッソーの詩「太陽が一日をもたらす」を朗読した。（310：東京→習志野）

### 日独戦争時の青島独軍参謀本部並びに部隊編成・配置とその指揮官

#### 参謀本部

膠州総督：A.Meyer-Waldeck（マイアー＝ヴァルデック）海軍大佐  
 参謀長：L.Saxer（ザクサー）海軍大佐  
 副官：G.v.Kayser（カイザー）陸軍少佐  
 参謀：W.Freiherr v.Mauchenheim（マウヘンハイム）海軍大尉  
 情報部長：W.Vollerthun（フォラートウン）海軍大佐（海軍省膠州課長）  
 砲兵部長：P.Boethke（ベートケ）海軍中佐  
 工兵部長：C.Siebel（ジーベル）陸軍少佐  
 通信兼信号将校：K.Coupette（クーペッテ）陸軍中尉  
 飛行将校：G.Plüschow（プリューショウ）海軍中尉  
 暗号将校：P.Kempe（ケンペ）陸軍中尉  
 同 上：W.Trittel（トリッテル）予備陸軍少尉  
 軍医長：Dr.Foerster（フェルスター）海軍軍医大佐  
 法務長：G.Wegener（ヴェーゲナー）海軍法務官  
 民政長：O.v.Günther（ギュンター）青島民政長官  
 財政長：C.Knüppel（クニユッペル）海軍財政官  
 情報部通訳：J.Überschaar（ユーパーシャル）予備陸軍中尉  
 同 上：F.Hack（ハック）予備陸軍中尉

海軍歩兵第3大隊長：Fr.von Kessinger（ケッシンガー）陸軍中佐

副官：W.Bringmann（ブリングマン）陸軍中尉  
 第1中隊長：G.Weckmann（ヴェックマン）陸軍大尉：右地区（第1歩兵堡壘＝湛山堡壘）  
 第2中隊長：W.Lancelle（ランツェレ）陸軍大尉：中央地区（第4歩兵堡壘＝台東鎮東堡壘）  
 第3中隊長：H.v.Wedel（ヴェーデル）陸軍少佐：左地区（第5歩兵堡壘＝海岸堡壘）  
 第4中隊長：E.Perschmann（ペルシュマン）陸軍大尉：右地区（第1・第2歩兵堡壘中間陣地）  
 第5中隊長：E.Kleemann（クレーマン）陸軍騎兵少佐：中央地区（第3・第4歩兵堡壘中間陣地）  
 第6中隊長：C.Buttersack（ブッターザック）陸軍中尉：右地区（湛山堡壘）  
 第7中隊長：H.Schulz（シュルツ）陸軍大尉：右地区（第2歩兵堡壘＝湛山北堡壘）と中央地区（第3歩兵堡壘＝中央堡壘）  
 砲兵中隊長：S.v.Saldern（ザルデルン）海軍大尉：左地区  
 工兵中隊長：E.A.Sodan（ゾーダン）陸軍大尉：中央地区の第2・4歩兵堡壘中間陣地  
 野戦砲兵隊長：W.Stecher（シュテッヒャー）陸軍大尉：中間掃射4砲兵陣地（鉄道列車上）  
 重野戦榴弾砲隊長：R.Boese（ベーゼ）陸軍中尉  
 自働短銃隊長：G.Charrière（シャリエール）陸軍中尉（後日、C.Krull（クルル中尉）  
 機関銃隊長：Fr.F.v.Schlick（シュリック）陸軍中尉

海軍膠州派遣砲兵大隊長：G.Hass (ハス) 海軍中佐

海正面司令官：H.Wittmann (ヴィットマン) 海軍大尉

第1中隊長：？

第2中隊長：H.Kux (ククス) 海軍大尉

第3中隊長：R.Duemmler (デュムラー) 海軍大尉

第4中隊長：H.Wittmann (ヴィットマン) 海軍大尉… (？)

第5中隊長：G.Griebel (グリーベル) 海軍中尉

海軍東亜分遣隊長：P.Kuhlo (クーロ) 陸軍中佐

第1中隊長：Graf v.Hertzberg (ヘルツベルク) 陸軍大尉：左地区 (第4・第5歩兵堡壘中間陣地)

第2中隊長：O.Schaumburg (シャウムブルク) 陸軍大尉：左地区 (第6歩兵堡壘)

第3中隊長：H.v.Strantz (シュトランツ) 陸軍大尉：第1中隊と同じ陣地

動員国民軍指揮官：L.Wiegand (ヴィーガント) 陸軍中尉

第1国民軍小隊長：H.Walter (ヴァルター) 中尉補

第2国民軍小隊長：E.Lehmann (レーマン) 中尉補

## 注

- 1) 青島収容所：「開城実施手續規定」の中に、「俘虜委員ハ海泊河以北の諸村落ニ俘虜ヲ収容スヘシ」(『日獨戦史』上巻、1013頁)の記述があるが、具体的な場所、建物等は不明。四方周辺に点在した独軍のバラックを指すかとも推測される。しかし、俘虜移送完了後は若鶴兵營(旧モルトケ兵營)に青島収容所が設けられて、国民軍等の新たな俘虜が一時期収容された。→本文59頁)
- 2) 宣誓解放：1907年(明治40年)にオランダのハーグで調印され、1912年に公布された「陸戦ノ法規慣例ニ関スル規則」の第2章俘虜の第10条には、「俘虜ハ其ノ本国カ之ヲ許ストキハ宣誓ノ後解放セラルルコトアルヘシ此ノ場合ニ於テハ本国政府及之ヲ捕エタル政府ニ對シ一身ノ名譽ヲ賭シテ其ノ誓約ヲ厳密ニ履行スルノ義務ヲ有ス」とある。【『俘虜ニ関スル法令及例規』(俘虜情報局発行「日獨戦争ノ際俘虜情報局設置並独国俘虜関係雜纂」)より】→本文59頁)
- 3) スペイン風邪：1918年から1919年にかけて世界的に大流行したインフルエンザ。アメリカの兵營に発したとも、中国から発生したともされるが、地球上の人間の約半数が罹患したといわれる。フランスからイギリスに伝播してから、「スペイン風邪」の名で知られるようになった。死者は2500万人を数え、第1次大戦の死者数を上回った。日本でも2500万の罹患者を出し、38万人余が死亡したとされている。【『平凡社 百科事典』より】→6)
- 4) 高木繁(1886-1953)：陸軍大尉。後出の徳島及び板東収容所長松江中佐の副官。香川県丸亀市に生まれた。陸軍士官学校卒。松江所長とともに徳島収容所に赴任した。ドイツ語を始めとして、英語、ロシア語、中国語等7ヶ国語に通じていたと言われる。板東収容所閉鎖後は福山連隊等を経て、1929年に陸軍中佐で退役した。退役後は兵庫県外事課、ドイツ系のバイエル薬品勤務を経て、1935年満州のハルビンに渡った。外資系の百貨店秋林洋行に勤務し、日中ソ間の情報戦に従事したとも言われる。終戦後、ソ連軍によってシベリアのバイカル湖東方のチタに抑留され、最後はスベシドロフクス州アザンの病院で病没したとされている。1965年厚生省から、1953年4月30日に死亡したとの公式通知が遺族に届いた。ヴァイオリンをたしなみ、音楽好きであった。【『「第九の里 ドイツ村」』及び『「歓喜」によせて 板東俘虜収容所物語』(読売新聞社徳島支局編集)より】→11)
- 5) 堀内文次郎：第23旅団長・陸軍少将。幼年学校在学中から日記をつけ始める。号は信水、健筆多弁の人で



- あったと言われている。オーストリア＝ハンガリー帝国のレルヒ陸軍少佐（Theodor Edler von Lerch;1869-1945）が日本に初めてスキーの技術を伝えたのは1910年の冬、新潟県高田の第13師団第56連隊の営庭内であったが、その時の連隊長が堀内であった。その後堀内は官民へのスキー術伝播に力を尽くした。青島攻囲戦では、日本軍の主力の一つである左翼隊を指揮して湛山方面攻撃に当たった。青島陥落後は青島開城交渉委員に任ぜられ、11月9日の開城規約調印後は危険物除去委員長となった。11月11日、台東鎮の村落で露営し、黒パンで凌いでいる独軍將兵に梨を贈った。この日の夕刻、地雷除去に当たっていた日本軍の工兵少尉が油断して地雷に触れ4名が即死し、40数名が負傷した。11月14日に挙行された招魂祭では委員長を務めた。12月7日長崎に凱旋し、翌8日上陸して市内を行進する。出島には凱旋門が設けられていた。
- 【注20のプレージュの項を参照】『青島攻囲陣中記』を著した。後に陸軍中將、陸軍次官になり、1919年11月14日、俘虜送還委員会委員長に任ぜられた。→13)
- 6) 真崎甚三郎 (1876-1956) : 陸軍中佐。陸軍士官学校9期卒。1923年陸士本部長、1926年同校長となり、尊皇絶対の日本主義による教育につとめ、後の2.26事件の首謀者に影響力を与えた。1932年参謀次長になり皇道派の首領と仰がれた。1933年大将、次いで教育総監になったが、1935年林銑十郎陸相により罷免された。このことが2.26事件の誘因となった。1936年の2.26事件では、反乱幫助の容疑で軍法会議に付されたが無罪となった。【『平凡社 百科事典』より】→13)
- 7) Crusen (クルーゼン), Dr.Georg (1867-) : 5月15日、ハノーファー近郊に生まれた。1886年までハノーファーの学校に通い、ベルリン、ライプチヒ、マールブルクの大学で学ぶ。1895-99年までプロイセンの裁判官試補、1899年フランクフルトの区裁判所裁判官となり、同時に2年半の休暇を認められ日本に赴く。1902年まで東京で内務省及び法務省の顧問及び警察学校ならびに刑務学校の講師を勤める。1902年から1914年まで膠州地区の高等裁判所判事兼独中大学講師を勤めた。1909年結婚し、一男一女をもうけた。
- 【『Degeners Wer ist's ? 』より】日独戦争勃発で戦時応召したが、終結前に家族とともに上海に逃れた。植民地加俸を含めての年俸は約1万4000マルクで、総督を別格として除くと、青島の官吏で最高額の年俸を受けていた。ビスマルク街（日本時代の万年町19番地）の自宅は3238㎡（約970坪）の広大な敷地にあり、家屋を含めたその評価額は、1917年8月時点で3万円と評価された。【『青島経済事情』24頁】『ベルツの日記』上巻（岩波文庫）316頁には、1903年7月15日から27日までベルツが投宿したとの記述がある。また同書下巻79頁（1904年5月21日の項）には、「青島の判事長クルーゼン博士が来訪中である。自分は去年の夏、同氏のもとで客となった。…優れたピアニストである」と記されている。「今日の日本の監獄制度」（『東亜文化協会』、報告集9巻、17-56頁）の論文を発表している。→13)
- 8) Hertzberg (ヘルツベルク), Graf von (-1914) : 海軍東亜分遣隊第1中隊長・陸軍歩兵大尉（伯爵）。〔外方陣地右翼陣地指揮官〕。神出鬼没の働きをして日本軍を攪乱した。10月2日、四房山附近54高地にて戦死。この日の独軍は計25名が戦死した。10月12日の戦死者埋葬、負傷者救出のための一時休戦で、日本軍の手により四房山頂に埋葬された。→23)
- 9) 当時の200円は今日の約160万円（約8000倍）に相当する。なお、当時の為替レートで1円は約2マルク、1ドルは約2円、1ポンドは約10円であった。→32)
- 10) 青島歐人墓地：ビスマルク通りを登り詰めた場所の山道沿いあった。青島で没した第2代総督イエシユケ（Paul Jaeschke, 1851-1901）及び禮賢書院の設立者で、植物学者でもあったファーバー（Ernst Faber, 1839-1899）の墓碑がある。→35)
- 11) 「タバタオ」：大鮑島（ターバオタオ）という地名は、古くから住んでいた中国人が名づけたことに由来する。そもそもは、小港北西の小さな島の名で、その対岸地区も大鮑島と呼ばれるようになった。青島村の名称由来と同様であった。「鮑」とは日本で言えば〈くさやの干物〉のように、一種独特な臭みがある発酵した魚のことを言う。場合によっては独特の漬け汁に浸して置いたものもそう呼ばれた。「アワビ」のことを指すものではない。中国人の商店が多く建ち並び、青島で最も活気のある一画であった。日独戦争後、ドイツ人俘虜が日本各地の収容所に送られたが、その内の一つ板東俘虜収容所では、俘虜達が種々の店を収容所内の一画に開いた。その地区は〈Tapautau〉（ターバオタオ）と呼ばれた。日本人が「大鮑島」をどのように発音していたのか、残念ながら多くの事例を承知していない。しかし、「ターバオタオ」の音は日本人にとっては発音上困難な面を持っていると思われる。山根楽庵は『寶庫の青島』の中で、「タボ（ボ？）タウ」と記している。多分「…トー」となる発音をしていたと考えられる。参謀本部編集になる『日獨戦史』下巻の「挿図22」では、大鮑島に「タバトウ」とルビが振られている。また、板東俘虜収容所関連の多くの

- 文献では従来「タバト」<sup>11)</sup>と記されている。こうした背景から中庸的ではあるが、「タバタオ」とする表記でもよいのではないだろうか。「タイホート」<sup>12)</sup>の呼び方も知られているが【東京朝日新聞、大正3年8月11日付け記事「膠州溝概観」を参照】、これは公的色彩のある場合の発音と考えられる。青島(チンタオ)も「チント」<sup>13)</sup>と発音する人も多かったが、公的な場合には「セイト」<sup>14)</sup>と発音した。→37)
- 12) Fries (フリース), Wolfgang von (-1914): 海軍歩兵第3大隊第5中隊・予備陸軍少尉。9月28日ヴァルダーゼー高地攻防で戦死し、日本軍によりヴァルダーゼー山頂に埋葬された。認識票番号は第157であった。朝日新聞従軍記者の美土路春泥(美土路昌一、1886-1973;後に同社社長、さらに全日空会長を務めた)によるフリースにまつわる感動的に、かつ感傷的な戦況記事がある。【拙稿「青島(チンタオ)をめぐるドイツと日本(2)」、110-113頁を参照】なお、春泥は検閲を逃れて記事を発信したことから、時事新報の室伏高信とともに青島退去を命じられた。【『欧受大日記』(大正3年12月)より]→47)
- 13) Drenckhahn (ドレンクハーン), Hans: ジーメンス社東京支社長。日独開戦後、東京、横浜、神戸にドイツの救援委員会が設立されたが、その内の東京の救援委員会の責任者であった。当時、東京市牛込区田町3-21に住んでいた。1914年10月、最初の俘虜が久留米に到着するとすぐに収容所を訪問した。やがて各地の収容所を訪れ、義捐金、慰問品、新聞雑誌書籍等、更には楽器などを俘虜に届けた。またそうした収容所訪問の折り、各収容所での待遇等を俘虜と対面して聞き取り調査も行い、調査の結果をドイツ本国に報告した。→55)
- 14) Wilhelm (ヴィルヘルム), Richard (1873-1930): 中国文学者。1891年テュービンゲンの福音派上級神学校を経て、パーゼル伝導派教会に入った。1899年1月19日、クリストフ・ブルームハルトの娘ザロメと結婚した。1899年青島に赴き、中国の古典研究に打ちこむとともに禮賢書院で中国人の教育に携わった。また日独戦争後の一時期には青島在留ドイツ人の代表を務めた。→70)
- 15) 山田耕三: 独立第18師団司令部附・陸軍歩兵大尉。10月13日の一時休戦の会談の折り、かつての僚友シュテッチャー(Stecher)大尉に宛てて、「毎日無事であるか案じている」との葉書をドイツ側のカイザー少佐に託した。二日後の15日、ドイツ人婦女子等を乗せたマウヘンハイム海軍大尉指揮の船に乗船して膠州に行き、更に山東鉄道に乗り換えて済南まで同道した。また10月27日の李村ポンプ所付近での戦闘時には、絵葉書を折ってドイツ側前線に投げた。深夜、ベヒトルスハイム(=マウヘンハイム)大尉がその葉書をピスマルク兵營の参謀本部に持ち帰った。「我々が思いもよらなかった戦闘の中より、心からの挨拶を送る。我が友に神のご加護のあらんことを! 山田大尉」と記されており、総督のテーブルの周囲でどっと笑いが生じた。【Otto von Gottberg《Die Helden von Tsingtau》140頁を参照】11月9日に行われた開城交渉の一員で、神尾司令官とヴァルデック総督との会見では日本側通訳の任に当たり、開城規約調印後は俘虜委員となった。→75)
- 16) Voskamp (フォスカンプ), C.J. (1859-): ベルギーのアントウェルペン(Antwerpen)に生まれ、13歳までそこで過ごした。父も宣教師であった。やがてドゥイスブルクのギムナジウムで学んだ。ドイツが膠州租借地を獲得した1898年、青島に伝道の地を移し、中国での伝道は通算30年に及んだ。ベルリン福音教会の山東地区教区監督として、多くの福音派宣教師を指導した。ヒルデブランド(Hildebrandt)、シュヴァルム(Schwarm)、ヴァナクス(Wannags)の三人は応召兵となり、クンツェとシュラムは衛戍病院で看護人として負傷兵の看護に当たった。またエンマ夫人も臨時衛戍病院となった水兵館で看護に当たった。ヨアヒム、ゲルハルト、ハンス、マルティーンの四人の息子がいた。戦争終結前に妻とハンス、マルティーンを伴い上海に逃れた。日記をもとにした『包圍された青島から』(Aus dem belagerten Tsingtau.)の他に、『孔子と今日の中国』等の著作がある。→91)
- 17) 『陣営の火』(Lagerfeuer): 松山俘虜収容所で1916年1月から翌1917年まで、週刊の形で第1巻50号、第2巻13号の計61回(合冊号があったことによる)発行された。編集委員はマルティーン中尉、ゾルゲル予備少尉、ゴルトシュミット予備副曹長であった。二冊合本の形で鳴門市ドイツ館に所蔵されている。→96)
- 18) 山本茂: 陸軍歩兵中尉。陸軍士官学校20期卒。ベルリン効外ポツダムのドイツ陸軍士官学校に留学した。1913年12月14日山本中尉が青島訪問を終えるにあたって、ヴァルデック総督は特に総督官邸で送別の宴を開いた。1914年10月2日久留米俘虜収容所所員に任命される。当初は京町梅林寺収容所勤務であったが、11月2日、新設の香霞園収容所勤務に移る。11月17日、ヴァルデック総督が薩摩丸で門司港に到着した際は久留米から出張して、旧知の総督としばし歓談の後【『東京朝日新聞』、大正3年11月18日付記事「ワ総督来る」を参照】、福岡収容所長久山中佐、熊本収容所長松木中佐の通訳に当たった。福岡に向かう列車にも久山中

佐とともに同乗、通訳の任に当たった。1915年1月26日、久留米俘虜収容所所員を免ぜられる。高良内及び久留米俘虜郵便には検閲官としての山本茂印が使われ、今日三種類が判明している。1916年5月12日から1918年4月30日まで士官学校教官を勤め、かつ臨時軍事調査委員（大正4年9月11日軍令乙第12号により設立された）を兼任し、大尉に昇進して1921年10月14日から1922年2月8日までは調査委員（第1課所属）となる。ドイツ陸軍士官学校留学時代には、当時少年だったフリッツ・ルンプに日本語を教えた。森鷗外の要請もあって習志野収容所にルンプを訪ねた折は大尉に昇任していた。【鷗外の日記：大正8年5月19日の項「19日。月。晴。…山本茂、…至。…山本言 Oskar Karl Weegmann 與 Fritz Rumpf 之事。」（『鷗外全集』、第35巻、775頁、岩波書店）を参照】→122）

19) 松江豊寿（1873-1955）：旧会津藩士松江久平と妻ノブの長男として会津に生まれる。1889年、16歳で仙台の陸軍幼年学校入学。1892年陸軍士官学校へ進学し、1894年陸軍歩兵少尉に任官された。1904年大尉となり、韓国駐劄軍司令官長谷川好道大将の副官に任ぜられる。1907年浜松の第67連隊附少佐に昇任。1908年7月第67連隊大隊長、1911年11月第7師団副官。1914年1月中佐に昇進、徳島歩兵第62連隊附經理委員首座。1914年12月3日徳島俘虜収容所長、後板東俘虜収容所長。1920年4月1日第21連隊（島根浜田）連隊長。1922年2月8日陸軍少将に昇進、5月1日予備役に編入された。12月27日、第9代若松市長になった。1926年5月末、東京世田谷の狹江に敷地2000坪を購入し、屋敷を建てた。1955年5月21日死去。→149）

20) Pluschow（プリューショウ）、Gunther（1886-1931）：海軍膠州派遣砲兵大隊附・海軍中尉。メクレンブルク州のシュペーリン出身。青島の中国人からは「青島の鳥人」とも「青島の鳥王」とも呼ばれた。左腕には「竜」の刺青をしていた。1913年8月、それまでの騎兵中隊所属から飛行部隊に異動となり、青島勤務となる。その後3ヶ月余をキールで過ごし、1914年1月1日にベルリンに赴く。翌2日にヨハニスタール（ドイツ最初の飛行場）に出かける。2月1日からは毎日練習に励み、2月末、高度5500メートルの当時の世界最高記録を樹立した。1914年3月上旬に6年振りで青島に赴任する。オーストリア海軍飛行大尉クロブツァーと水上飛行機の組み立てを行ったが、プロペラが湿気の多い青島に合わず、各種プロペラ11種を製作した。ドイツ軍唯一の飛行機で日本軍陣地を偵察し、時に空中戦を行った。総督の命を受けて11月6日午前6時、日の出とともに上海へ向けて飛行機で青島を脱出した。最後に握手をした人物は親友のアイエ海軍中尉（※1）であった。給油で着陸した江蘇省海州近郊で、中国官憲により機体没収の通告を受け機体を破壊・炎上させ、陸路上海へ向かった。上海からさらに南京に赴いた際には駅頭に、S90号艦長ブルンナー大尉（※2）を始めとして、乗組員が出迎えた。12月5日上海発サンフランシスコ行きの汽船モンゴリア号に乗船し、12月8日長崎港に寄港、検査・検閲を受けるが食中毒を装い逃れた。「余が以前から知っている長崎の陸地を船内から眺めた。…青島からの凱旋軍を迎える満艦飾で港も町も飾られていた。船内には青島を退去させられたドイツ人も大勢いた」【若林欽・広政幸助訳『青島から飛び出して』170頁】更に神戸、横浜に寄港してホノルルを経由してアメリカ本土に着いた。ホノルル港には南洋から来たドイツの巡洋艦ガイエルが抑留されて停泊していた。1915年1月2日サンフランシスコを去り、2月8日ジブラルタルに到着するが、露見して俘虜となる。イギリスのプリマスに着き、そこからさらに汽船でドチェスター（Dochester）に行き上陸。ロンドン近郊のメイドゥンヘッド（Maidenhead）、更にはホーリーポート（Holyport）の収容所を経て5月1日、ダービーに近いロングイートンにあるドニングトン・ホール（Donington Hall）の将校俘虜収容所に入れられる。月給として120マルク（約60円）を支給された。1915年7月4日逃亡し、熟知していたロンドンを数日彷徨して、オランダの貨物船プリンツェス・ユリアナ号の救難用ボートに忍び込み、オランダの港に着く。7月13日ベルリンに帰還して、ドイツ皇帝から「鉄十字章功1級」が贈られた。上記著作は70万部のベストセラーとなり、プリューショウ中尉は英雄として称えられた。1919年に軍籍から離れ、民間飛行家、映画のアナウンサー等の仕事をしつつ、幾つかの著作を執筆した。1931年1月28日アルゼンチンで、複葉二人乗りの「チンタオ」号を操縦中に墜落事故を起こして死亡した。妻のイゾト（Isot）に亡夫を偲んだ『ドイツ海軍軍人にして飛行家グンター・プリューショウ』の回想記がある。

※1：Aye（アイエ）、Julius（-1914）：海軍膠州派遣砲兵大隊第3中隊・海軍中尉。[ビスマルク山頂砲台指揮官]。11月7日未明、山頂砲台自爆後、観測所に派遣された同中尉は、日本軍工兵隊の襲撃に対して抜剣して応戦したが、無数の切り傷を負って戦死。青島歐人墓地に埋葬された。プリューショウ海軍中尉の親友であった。

※2：Brunner（ブルンナー）、Helmut von：駆逐艦S90艦長・海軍大尉。10月17日総督より上海ないしは中立港へ脱出して、石炭及び糧食を調達すべく出動命令を受ける。午後7時青島港を出港し、11時3

- 0分日本の艦船を発見して魚雷を発射、高千穂を沈没させ、翌午前5時ごろ青島南方海岸に接岸、自爆させ、中国官憲に逮捕された。やがて南京に送られるが、拘禁中の待遇は決して悪くはなかった。11月11日、飛行機で脱出してきたプリューショウ中尉を南京停車場に他の乗組員とともに出迎えた。→192)
- 21) 神尾光臣 (1855-1927) : 青島攻囲軍司令官・陸軍中將。信州諏訪郡岡谷郷に生まれた。幼名信次郎。1874年10月3日陸軍教導團に入って武学生となり、1877年の西南戦争には曹長として従軍した。1879年2月1日陸軍少尉に任ぜられる。以後、清国公使館附武官、近衛歩兵第3連隊長、第1及第10師団参謀長、歩兵第22旅団長、遼東守備軍参謀長、清国(天津)駐屯軍司令官、関東都督府参謀長、第9及第18師団長を歴任して、独立第18師団長(青島攻囲軍司令官)となる。陸軍内で、三本指にはいる中国通と言われた。1914年11月26日付けで、上記の職を解かれ、青島守備軍司令官に就任。1914年12月18日青島から東京駅に凱旋した。その日がちょうど東京駅開業式の日であった。1915年3月24日付けで東京衛戍総督に転出、1915年6月24日大將に昇任、7月14日男爵に叙せられ、8月退役した。次女安子は1909年3月有島武郎に嫁ぎ三男をもうけたものの、1917年12月2日27歳で病死した。有島武郎の『死其前後』は妻安子の病状・病中等を題材にした戯曲である。→233)
- 22) プリンツ・ハインリヒ・ホテル (Hotel Prinz Heinrich) : 青島のヴィルヘルム皇帝海岸通りに1899年に建設された。同ホテルは青島と格別にゆかりのある皇弟ハインリヒ(※)に因む、青島随一の豪華なホテルであった。花崗岩を用いた3階建ての白亜のホテルは、その豪華さで東京の帝国ホテル、横浜のグランドホテルに遜色ないとも言われた。部屋数40室で、他にヴェランダ、テラス、婦人室、倶楽部室、読書室、控室、舞台を備えたホールがあった。1ヶ月の滞在費100ドル(約160万円)から150ドル(240万円)であった。パーティー、舞踏会が繰り広げられ、演奏会や演劇が開催されることもあった。日独戦争中は仮設野戦病院に充てられた。なお、アウグステ・ヴィクトリア湾に臨む海岸ホテルもその経営になり、そこでも歩兵第3大隊や膠州砲兵大隊の軍楽隊によるクラシック、ポピュラーの演奏会が、冬期には週に2回開催された。
- ※プリンツ・ハインリヒ (Prinz Heinrich von Preussen, 1862-1929) : ドイツ帝国皇弟。1898年5月5日、巡洋艦隊を率いて膠州湾入港、青島の衙門に宿泊、滞在した。9月28日、青島築港のC.フェーリング建設会社の工事事務所で、山東鉄道の起工式の鋳入れを行った。1879年(明治12年)5月末来日、6月1日には上野精養軒で在京ドイツ人(ベルツ、ナウマン、バイル、ネットー、シエルツェ)の名で歓迎の小宴が開かれた。当時親王は16歳と6ヶ月であった。【『ベルツの日記』岩波文庫(上)81頁を参照】同年11月17日には京都を訪れた。1899年6月30日、東洋艦隊司令官として軍艦ゲフィオン(Gefion)を従えて旗艦ドイッチェラントで横浜に来航、ドイツ公使、領事、神奈川県知事は御乗艦まで出迎え、皇居附属邸の玄関では閑院宮戴仁が出迎えた。青島を度々訪問し、1912年の訪問終了に際しては、「『もし日本人が来て、持ち堪えるように』との陽気な言葉を残したが、やがてそれは現実となった」【Laan, Heinz van der: Erinnerung an Tsingatu. 12頁】→318)
- 23) 西郷寅太郎 (1866-1919) : 歩兵第1連隊附歩兵中佐から東京収容所長を経て、習志野収容所長となる。西郷隆盛の嫡男。明治天皇の思召して1885年(明治18年)18歳の時、ボンタムのドイツ陸軍士官学校に留学し、在独期間は13年に及んだ。1902年(明治35年)に父隆盛の名誉回復なり、侯爵に列せられた。なお、俘虜の待遇に関しての西郷所長の談話が残っている。西郷中佐の談「俘虜の月給はクロー中佐の183円を筆頭として中尉47円、少尉40円、準士官40円、下士以下は日給30銭の規定なるが、右はいずれも我国軍人の各官等に準拠せるものにて、佐官尉官等は当該官等中の第三等級を以て標準となしたるなり。之は日露戦争の当時露国俘虜待遇法と何等異なる所なくいずれも俘虜を遇するにあくまで武人の面目を保たしむるを目的とせる俘虜取扱規定に拠れるものなり。尚右月給中將校以上の者は該月給の範囲内に衣食住其の他一切の費用を自弁するの義務を有し下士以下は各給料の範囲内を以て当方にて一切の賄いをなし与え、衣食以外の間食又は嗜好品たるみかん、ビスケット、コーヒー、煙草等は希望により適宜現品にて支給する規定なり。以上の如き俘虜収容待遇に要する一切の費用は平和克復後即ち欧州戦乱終息の後において独逸政府之が賠償の義務を有する事勿論にして償金還付時期の戦後一年の後なりや将二年の後なりや不明なるも戦敗の結果疲弊せる独逸が一時に償金還付をなし能はざる節は一定の期間を約して漸次に賠償の義務を果たすこととなるべし」。【1914年11月26日付け『東京朝日新聞』の記事「俘虜待遇の規定」による】1919年1月1日午後4時、スペイン風邪で死去。習志野収容所での二人目のスペイン風邪による犠牲者であった。→325)
- 24) Ullrich (ウルリヒ), Friedrich (-1914) : 海軍野戦砲兵隊・軍曹。〔給養係長〕。1914年11月7日、軍使カイザー少佐の馬丁として台東鎮の日本軍部隊に赴く途中、流弾を受けて死亡し、青島歐人墓地に埋葬され

- た。当時一部ではドイツ軍降伏による戦争終結を知らずに、まだ銃撃戦が行われていた。→358)
- 25) Charrière (シャリエール), Georg (-1914): 海軍歩兵第3大隊工兵中隊・陸軍工兵中尉。11月6日夕刻、第2歩兵堡壘攻防で重傷を負い、2日後の8日死亡。青島歐人墓地に埋葬された。フライブルク出身。→426)
- 26) Behr (ベアー), E.: 神戸のドイツ人商人。友人達を訪問するために頻りに板東収容所を訪れた。戦争でドイツの子ども用図書が入手困難になり、自分の子どものために童話を書いた。それが収容所印刷所から出版された。収容所の内外で好評となり、初版400部はたちまち売り切れ、第2版は1150部刷られた。→517)
- 27) 高橋写真館: ドイツ時代から海岸通に近い山東路で営業していた。高橋店主は、その高度な撮影技量、ウィットに富んだ話術、誰の心にもすぐに伝わる善意で、青島在住ドイツ人に親しまれていた。旅行で青島を訪れるドイツ人は必ず立ち寄って記念写真を撮り、青島や周辺を写した絵葉書を購入したという。青島の風景・建造物や軍人・兵士の写真を多く写したことからドイツでは、高橋店主は日本軍のスパイとして働いたとの推測もされている。→540)
- 28) 福島安正 (1852-1919): 陸軍大将。陸軍きっての情報将校。信州に生まれた。慶応元年江戸に出て講武所に入り、オランダ兵士を学んだ後大学南校で苦学勉強した。1869年(明治2年)司法省に翻訳官として勤務、1874年語学力を買われて陸軍省文官になり、ついで武官に転じて1881年陸軍中尉になった。参謀本部勤務と外国派遣(中央アジア、トルコ、ペルシャ、アラビア、インド等)を繰り返した。1887年陸軍少佐の時駐在武官としてベルリンに赴任、帰国の際(92~93年)シベリアを単騎横断して勇名を馳せた。義和団事件では臨時派遣隊司令官となり、太沽城塞攻撃の混成大隊司令官を務めた。1889年から1906年迄の長期に亘って参謀本部情報部長、日露戦争時は満州軍参謀、戦後の1906年参謀次長、1907年男爵となり、1912年関東都督、1913年大将になった。中尉から少将までの30年間を情報将校一筋で通した。【『大日本人名辞書』等より】1914年8月1日マイヤー=ヴァルデック総督を訪問し帰途に着くや、翌2日ドイツ総督府は青島に戒厳令を敷き、3日には予備・後備を召集する動員令を發布した。→575)
- 29) Riedesel (リーデゼール) zu Eisenbach, Gottfried Frhr. von (-1914): 海軍歩兵第3大隊第5中隊・予備少尉(男爵)。[北京駐在外交官]。元近衛第3槍騎兵隊所属。9月18日李村郊外白沙河畔の戦場で、日本軍騎兵隊に突撃して壮絶な死を遂げ、青島歐人墓地に埋葬された。ドイツ軍にとつての最初の痛ましき損失といわれた。【W. Vollerthun: Der Kampf um Tsingtau. 98頁以下を参照】なおこの戦闘では、日本軍の騎兵第22連隊第3中隊長佐久間善次大尉も戦死した。【拙稿『青島(チンタオ)をめぐるドイツと日本(2)』, 109-110頁を参照】→664)
- 30) Rollke (ロールケ), Eduard: 青島船渠技手。プリュエーション中尉のために水上複葉機の製作に当たった。戦争終結前に上海に逃れた。→778)
- 31) Moller (モラー), Erich von (-1914): 河用砲艦チンタオ(213トン)艦長・海軍少尉。8月3日、チンタオの乗組員に対して、「この小さな艦で敵と戦うことは及びもつかない。諸君はなんとしても青島に辿りつくように」との言葉を贈って、自身は5人の部下と小さな船でドイツに向かった。インド洋を渡り、アラビア半島の海岸に着き、コンスタンチノーブルまであと200マイルのところまでドゥインに襲撃されて、部下達とともに死亡した。【The Japanese Siege of Tsingtau. 39頁より】→859)

## 参考文献(概ね発行年代順に掲げた)

- 1) Behme, Dr. F. and Krieger, Dr. M.: Guide to Tsingtau and its Surroundings. IV. Edition with 9 Maps a plan of the town and 86 Illustrations. Wolfenbuttel, 1910.
- 2) Mohr, Friedrich Wilhelm: Die Pachtgebiete in China. Die Organisation ihrer Verwaltung und Rechtspflege. Inaugural-Dissertation zur Erlangung der juristischen Doktorwürde der hohen Juristischen Fakultät der Königlichen Universität zu Marburg., Robert Neske, Leipzig, 1913.
- 3) 『新刊詳密 膠州灣附近地圖』、大和石印局出版部編纂、大正3年9月。
- 4) 『山東省鉱業資料』、南満州鉄道株式会社鉱業部鉱務課、大正3年11月8日。
- 5) 山根楽庵『寶庫の青島』、玉樹香文堂出版部、大正3年12月1日。
- 6) 『山東及膠州灣』、東亜同文会調査編纂部、大正3年12月23日。
- 7) 『青島戦記』、朝日新聞合資会社、大正4年1月15日。

- 8) Gottberg, Otto von: Die Helden von Tsingtau. Verlag Ullstein, Berlin, 1915.
- 9) 『山東概観』、通信局長田中次郎(発行者)、大正4年7月23日。
- 10) 『俘虜名簿』、俘虜情報局、大正4年10月調(久留米市文書館所蔵)。
- 11) 『南洋新占領地視察報告』、文部省専門学務局、大正5年3月31日。
- 12) 『大正三年 日獨戦史』、上下二巻、付図及び写真帳、参謀本部編纂、偕行社、大正5年12月20日。
- 13) 『獨逸及澳洪国 俘虜名簿』、日本帝国俘虜情報局、大正6年6月改訂(防衛研究所図書館所蔵)。
- 14) 『獨逸及澳洪国 俘虜名簿』、日本帝国俘虜情報局、大正6年6月改訂(外務省外交資料館所蔵)。
- 15) 『青島経済事情』、野村徳七商店調査部、大正6年9月5日。
- 16) 『大正三年乃至九年戦役俘虜ニ関スル書類』(防衛研究所図書館所蔵)
- 17) 『自大正三年至大正九年戦時書類』(同上)
- 18) 『陸軍省 歐受大日記』(同上)
- 19) 「獨逸陸軍官階表」、「獨逸海軍官階表」、「澳洪國海軍官階表」(同上)
- 20) 『日獨戦争ノ際俘虜情報局設置並獨逸俘虜關係雜纂』21冊(外務省外交資料館所蔵)
- 21) Plüschow, Gunther: Die Abenteuer des Fliegers von Tsingtau. Meine Erlebnisse in drei Erdteilen. Im Deutschen Verlag, Berlin, 1938 (cp.1916).
- 22) Voskamp, C. J. : Aus dem belagerten Tsingtau. 9. Auflage, Buchhandlung der Berliner evang. Missionsgesellschaft, Berlin, 1917.
- 23) グンテル・ブリッショー著、若林 欽/広政幸助訳『青島から飛び出して』、洛陽堂、大正7年1月25日。
- 24) 堀内文次郎『青島攻囲陣中記』、目白書院、大正7年4月23日。
- 25) 《Fremdenführer durch das Kriegsgefangenenlager Bando, Japan》, Hrsg. von der Lagerdruckrei Bando, August 1918.
- 26) 『青島経営ニ関スル獨逸ノ諸法令』、青島守備軍民政部編、第3版。大正7年10月30日。
- 27) 『青島港』、一万分の一、原田汽船株式会社青島支店刊行(青島所沢町1番地)、大正8年6月。
- 28) 「獨逸人北海道移住ニ関スル趣意書」、名古屋俘虜収容所、大正8年。
- 29) 『青島新市街圖』、青島博文堂書店、大正10年訂正版。
- 30) Vollerthun, Waldemar: Der Kampf um Tsingtau. Eine Episode aus dem Weltkrieg 1914/1918 nach Tagebuchblättern. Verlag von S. Hirzel in Leipzig, 1920.
- 31) Schmiedel, Otto (Professor am Gymnasium zu Eisenach): Die Deutschen in Japan, Leipzig, 1920.
- 32) 『大日本人名辭書』、大日本人名辭書刊行會、大正15年3月20日。
- 33) Vogt, Karl: Handlungsgesetzbuch für Japan. 2. Aufl. Carl Heymanns Verlag, Berlin, 1927.
- 34) Der Krieg zur See 1914-1918. Die Kämpfe der kaiserlichen Marine in den Deutschen Kolonien. Hrsg. vom Marine-Archiv, Verlag von G. Mittler & Sohn, Berlin, 1935.
- 35) 《Degeners Wer ist's?》, Verlag Hermann Degener, 1935.
- 36) 『青島戦史』—獨逸海軍本部編纂1914年乃至1918年海戦史、海軍省教育局、東京・双文社印刷、昭和10年12月25日。
- 37) 『通商破壊戦記』、フランツ・ヨーゼフ著、今村 甫訳、財団法人日本機動艇協会「舵」発行所、昭和17年5月。
- 38) 『デモ 私立ッテマス』、株式会社ユーハイム、昭和39年。
- 39) 『月星ゴム90年史』、月星ゴム株式会社、昭和42年。
- 40) 才神時雄『松山収容所』、中公新書、中央公論社、昭和44年。
- 41) 頼田島一二郎『カール・ユーハイム物語 一葉子は神さま』、新泉社、1973年。
- 42) 八木浩『H.・ボーンネルと今日の日本学の課題』、所載:『日本語・日本文化』第4号(大阪外国語大学)、1975。
- 43) Burdick, Charles B.: The Japanese Siege of Tsingtau. Archon Books, 1976.
- 44) Schmidt, Vera: Die deutsche Eisenbahnpolitik in Shantung 1898-1914., Otto Harrassowitz, Wiesbaden, 1976.
- 45) Korth, Georg: Wandervogel, 1896-1906. dipa-Verlag, Frankfurt/M., 2. Aufl. 1978.

- 46) 『ベルツの日記』(上)及び(下)、トク・ベルツ編・菅沼竜太郎訳、岩波文庫、1979年改訂第1刷。
- 47) Schrecker, John E.: Imperialism and Chinese Nationalism. Germany in Shantung. Harvard University Press, Second Printing, 1980.
- 48) 富田弘『ドレンクハーン報告書 一日独戦争と在日俘虜』、豊橋科学技術大学人文・社会工学系紀要『雲雀野』第3号、1981年。
- 49) 坂本夏男『久留米俘虜収容所の一側面』(上)、(下)、久留米工業高等専門学校研究報告第31号及び32号、昭和54年。
- 50) Burdick, Charles/Moessner, Urusula: The German Prisoners-Of-War in Japan, 1914-1920. University Press of America, 1984.
- 51) C.バーディック/U.メスナー/林啓介『板東ドイツ人捕虜物語』、海鳴社、1982年(昭和56年)4月30日。
- 52) 『ドイツ俘虜の郵便』—日本にあった収容所の生活、吉田景保訳注、日本風景社、昭和57年5月20日。
- 53) 『日本郵趣百科年鑑』1984年、財団法人日本郵趣協会、1984年4月20日。
- 54) Barth, Johannes: Als deutscher Kaufmann in Fernost. Bremen-Tsingtau-Tokyo 1891-1981. Erich Schmidt Verlag, 1984.
- 55) 一: Tsingtau Tagebuch, OAG aktuell, 1985.
- 56) 『平凡社 大百科事典』、平凡社、1984年11月2日。
- 57) 山下肇『鳴門板東のドイツ村』(1)～(3)、所載: 『ノイエ・インフォーマ (Neue Informa)』、第9巻10-12号、株式会社サンポスト、1985年10-12月。
- 58) 『大正ニュース事典』、毎日コミュニケーションズ、1986年。
- 59) 《Du verstehst unsere Herzen gut》-Fritz Rumpf (1888-1949) im Spannungsfeld der deutsch-japanischen Kulturbeziehungen. Japanisch-Deutsches Zentrum Berlin, 1989.
- 60) Plüschow, Gunther: Silberkondor über Feuerland. Hans Georg Prager Verlag, 1989.
- 61) 『朝日新聞〈復刻版〉』、日本図書センター、1989年11月25日。
- 62) Hoevermann, Otto: Ostasienfahrt. Hrsg. v. Kurt Jürgen. Husum, 1990.
- 63) 田村一郎『「ヒューマニスト所長」を可能にしたもの: 「背景」からみた「板東俘虜収容所」』、鳴門教育大学社会系教育講座・芸術系教育講座、1990年3月。
- 64) 『バウムクーヘンに咲く花 —ユーハイム70年の発展と軌跡』、株式会社ユーハイム、平成3年10月1日。
- 65) 富田弘『板東俘虜収容所 一日独戦争と在日ドイツ俘虜』、法政大学出版局、1991年12月18日。
- 66) 『鷄肋一大和啓祐教授退官記念随筆集』(高知大学人文学部独文研究室編)、1992年。
- 67) 横田新『板東俘虜収容所長 松江豊寿』、歴史春秋社、1993年4月15日。
- 68) 林啓介『「第九」の里ドイツ村』—『板東俘虜収容所』改訂版、井上書房、平成5年12月。
- 69) 中村彰彦『二つの山河』: 『別冊 文藝春秋』207号所載、平成6年4月1日。
- 70) 上山安敏『世紀末ドイツの若者』、講談社学術文庫、1994年8月10日。
- 71) 新田義之『リヒアルト・ヴィルヘルム伝』、筑摩書房、1994年12月1日。
- 72) 『ドイッチュラント』、Societäts-Verlag, NO. 1 2/95 J1.1995.
- 73) 志村章子『ガリ版文化を歩く』—謄写版の百年、新宿書房、1995年1月30日。
- 74) 『来日西洋人名事典』増補改訂普及版、武内 博編著、日外アソシエーツ、1995年1月31日。
- 75) 瀬戸武彦『青島(チンタオ)をめぐるドイツと日本(1)—膠州湾占拠から青島の建設まで—』、高知大学学術研究報告 第44巻、1995年12月25日。
- 76) Leutner, Mechthild (Hrsg.): Musterkolonie Kiautschou. Akademie Verlag 1997.
- 77) 棟田博『日本人とドイツ人』—人間マツエと板東俘虜誌、光人社NF文庫、1997年10月10日。(『桜とアザミ』(光人社、昭和49年5月)の改題)
- 78) 『第7回企画展 ドイツ人俘虜と久留米』(久留米市教育委員会・平成9年11月1日～11月15日。会場: 久留米市役所2階 くるみホール)。
- 79) 山田理恵『俘虜生活とスポーツ —第一次大戦下の日本におけるドイツ兵俘虜の場合—』、不昧堂出版、平成10年1月22日。
- 80) 《Die Baracke. Zeitung für das Kriegsgefangenenlager Bando, Japan.》, Band 1. Neu transkribierte Jubiläumsausgabe zum 50 jährigen Bestehen der Stadt NARUTO. 鳴門市、平成10

- 年3月31日。
- 81) 『デイ・バラック』第1巻、「板東俘虜収容所新聞」、鳴門ドイツ館資料研究会訳、平成10年3月31日。
- 82) 松尾展成『来日したザクセン関係者』、所載：『岡山大学経済学会雑誌』第30巻第1号、1998年6月。
- 83) Hinz, Hans-Martin und Lind, Christoph: Tsingtau. Ein Kapitel deutscher Kolonial-geschichte in China 1897-1914, (Deutsches Historisches Museum, Ausstellungskatalog), Berlin 1998.
- 84) Krebs, Gerhard: Der Chor der Gefangenen: Die Verteidiger von Tsingtau in japanischen Lagern. In: Ein Kapitel deutscher Kolonialgeschichte in China 1897-1914, (Deutsches Historisches Ausstellungskatalog), Berlin 1998.
- 85) 『久留米俘虜収容所 1914~1920』: 「久留米市文化財調査報告書第153集」(久留米市教育委員会)、平成11年3月31日。
- 86) Laan, Heiz (Heinrich) van der: Erinnerungen an Tsingtau. Die Erlebnisse eines deutschen Freiwilligen aus dem Krieg in Ostasien 1914. Hrsg. Rolf-Harald Wippich, OAG Tokyo, 1999.
- 87) 『特別史料展 ドイツ兵の見た NARASHINO 1915-1920 習志野俘虜収容所』、習志野市教育委員会生涯学習部社会教育課、平成11年12月25日。
- 88) 瀬戸武彦『青島(チンタオ)をめぐるドイツと日本(2) 日独戦争とドイツ人俘虜』、高知大学学術研究報告 第48巻、1999年12月27日。
- 89) 『特別資料展 ドイツ兵の見た NARASHINO —習志野俘虜収容所/1915—1920』(「パンフレット」): 主催: 習志野教育委員会; 平成12年1月15日~1月30日; 会場: ザ・クレストホテル津田沼。
- 90) 『どこにしようよ、そこがドイツだ』、鳴門市ドイツ館、平成12年3月。
- 91) 『「歓喜」によせて 板東俘虜収容所物語』、読売新聞徳島版(2000年5月16~26日)掲載記事の集成パンフレット。読売新聞社徳島支局、2000年6月。
- 92) 津村正樹『久留米俘虜収容所における演劇活動(1)』、九州大学言語文化研究院 言語文化論究 No.12. 平成12年8月。
- 93) Bauer, Wolfgang: Tsingtau 1914 bis 1931. Indicum Verlag, München, 2000.
- 94) 瀬戸武彦『青島(チンタオ)をめぐるドイツと日本(3) ドイツによる青島経営』、高知大学学術研究報告 第49巻、2000年12月25日。
- 95) 斎藤聖二『日独青島戦争 秘 大正三年日独戦史』別巻2, ゆまに書房、2001年3月25日。

## あとがき

ここ二、三年の間に久留米、習志野、板東の俘虜収容所関連の重要な文献が相次いで出版された。本資料でもそれを努めて活かしたが、今後も俘虜収容所関連の文献、資料が久留米市教育委員会、習志野市教育委員会及び鳴門市ドイツ館等から出るものと思われる。インターネットによって国内外からもいくつかの情報を入手することが出来た。本資料では青野原、大分、大阪、熊本、静岡、徳島、名古屋、丸亀の各収容所での俘虜の事績、足跡等については触れることが出来なかった。このことから明らかなように、筆者による探索・調査は決して十分ではない、というよりそのスタートに着いたばかりである。しかし、どこかの時点で一端区切りをつけることもやむを得ないと考えた。一度このような形を提示することにも、多少の意味があるのではないかと愚考する。ドイツにおいても近年各地で、青島及び日本の俘虜収容所関連の大小の展示会が開催され、いくつかの大学では関連する講座も開かれている。今後さらに俘虜の事績・足跡等の調査が進めば、他日、追加・修正することも考えている。誤りや記載漏れの事柄も多いと思われるので、各位からのご指摘、ご教示を頂ければ幸甚である。

なお、本資料作成に際しては、防衛庁防衛研究所図書館、外務省外交資料館、ドイツ東洋文化研究協会(OAG)、株式会社ユーハイム本部企画室、財団法人日本郵趣協会、久留米市教育委員会文化財保護課堤論吉氏、習志野市教育委員会生涯学習部社会教育課米沢弘実氏、坂本永氏及び星昌幸



氏、鳴門市ドイツ館館長田村一郎氏、岡山大学名誉教授松尾展成氏、徳島大名譽教授後藤健次氏、藤田保健衛生大学非常勤講師重岡宣明氏、内野健一氏の諸機関・諸氏から資料・情報の提供、教示等でお世話になったことを記して感謝申し上げる。

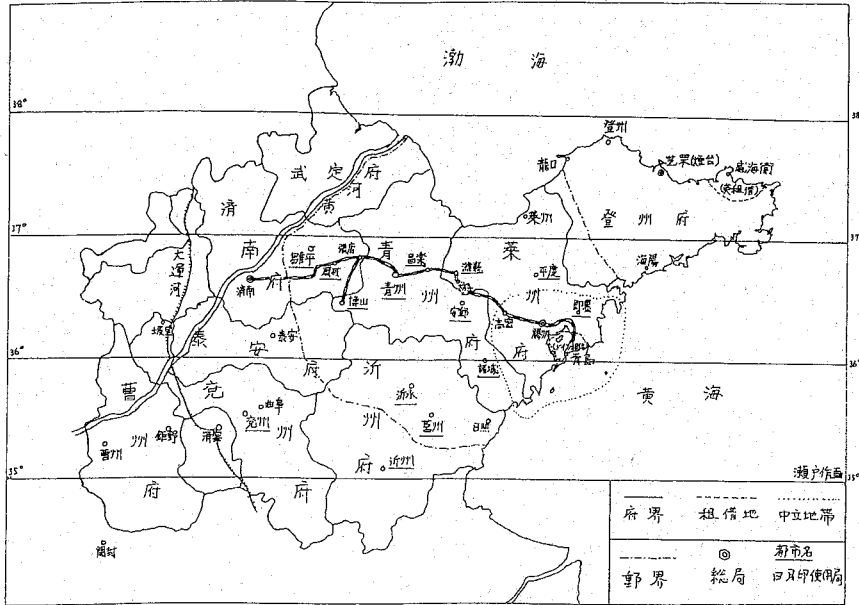


図1 山東省略図（1905年時）

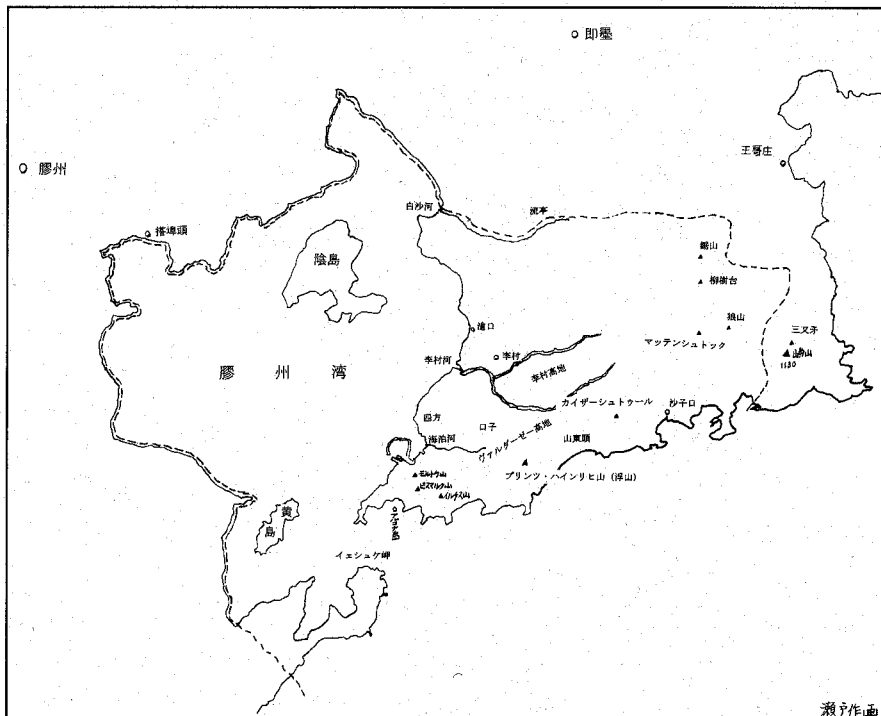


図2 膠州湾ドイツ租借地略図

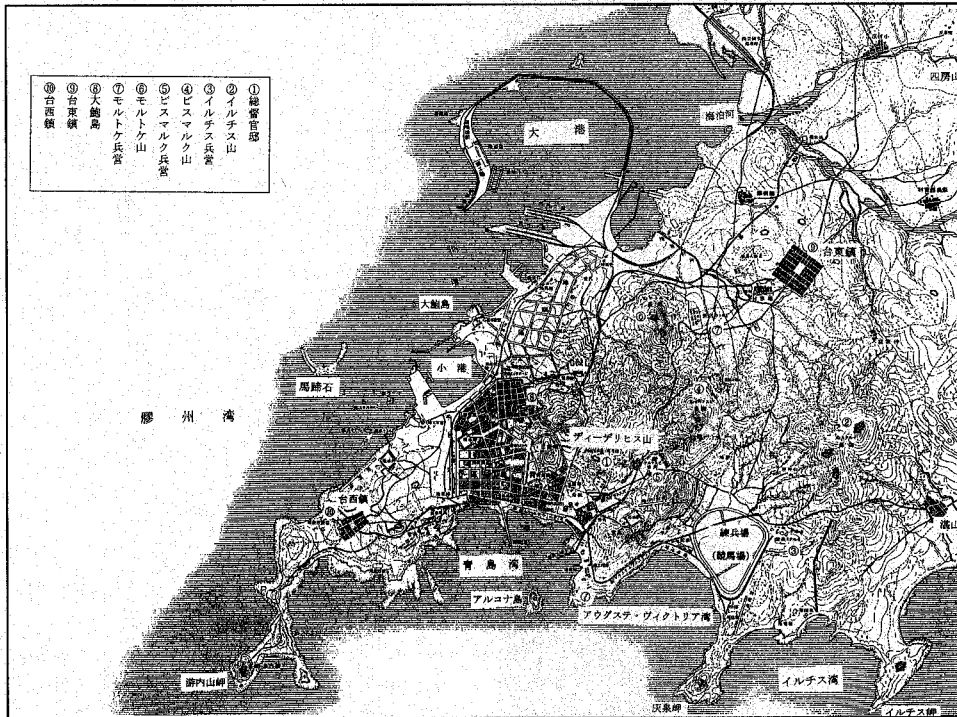


図3 青島附近一覽図『山東及膠州湾』より；縮尺4万分の1)

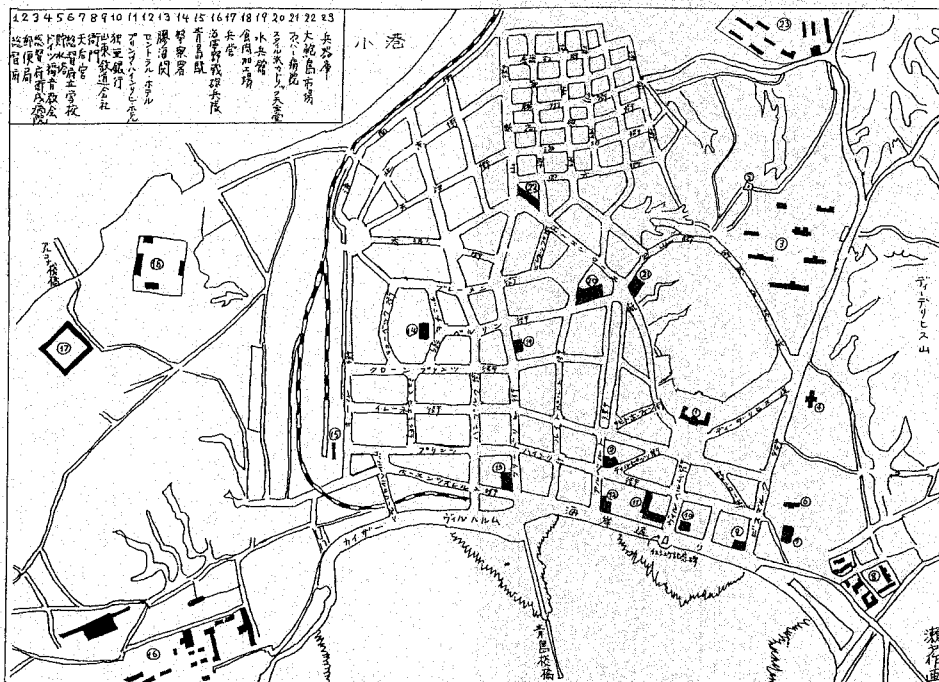


図4 青島市街図 (1908年頃)

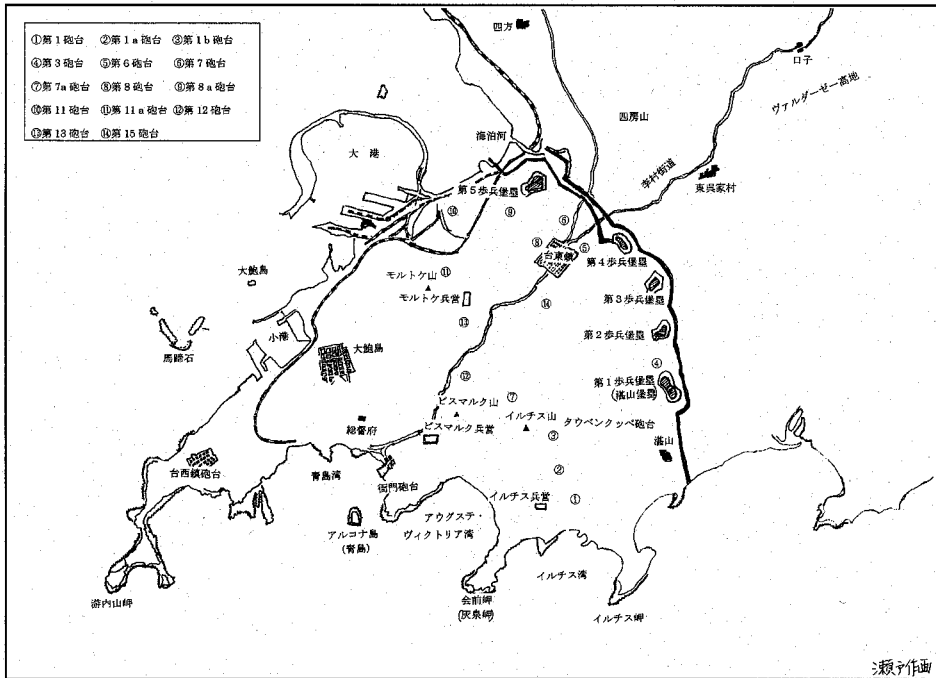


図5 青島防備圏帯図  
“Die Kämpfe der Kaiserlichen Marine in den deutschen Kolonien” より

平成13年（2001）10月3日受理  
平成13年（2001）12月25日発行

